
とある幻想の能力写し(スキルジャンパー)

らんらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある幻想の能力写し（スキルジャンパー）

【Nコード】

N0949S

【作者名】

らんらん

【あらすじ】

科学と学生の町「学園都市」で暮らすレベル5第三位の超電磁砲こと御坂美琴は、とある不思議な少女と出会う。

謎の力を持つ少女は過去に流行った映画のタイトルになぞらえられて『スキルジャンパー』と呼ばれた。

謎の少女の存在が学園都市の魔物達を呼び覚ます。学園都市を巻き込むレベル5達の抗争。

スキルジャンパーとレベル5が交差する時、物語が始まる。

上条当麻が一方通行に勝ち、御使墮し事件のために学園都市を離れるまでの五日間を描いたオリジナルサイドストーリーです。

基本的にオリジナル能力はありきたりだと思いますがお許しください。

また旧約・新約ともに原作ネタバレありますので注意。

【2011/5/25・追記】第五位バレ襲来。ですが外見・能力・性格すべて修正するつもりはありません。この作品は僕のイメージ第五位で完結させます。

では、長いのでお暇な時にでもご覧ください。

0（前書き）

ごゆるりとお楽しみください。

僕は入魂して執筆しておりますが稚拙な部分があるかもしれません。どうか寛大な心でご覧くださいませ。

あとルビ調整のために縦書き形式で読むの推奨します。横書き形式や携帯で読むと不自然なルビや改行状態になるのでご注意ください。

極東の島国、日本。

すべての製品はアメリカが開発し、ドイツが改良、日本が小型化する。そう喩えられるほど、日本の技術力というものは繊細で変態じみでいて、世界のなかでも優れていた。地道な努力が功を奏したとか、日本人の手先の器用さがキーだとか、いろいろと意見があったりする。

日本という国は、こと技術力——とりわけ科学力というものに力を注ぐようになっていた。

日本の首都、東京。その西部には、人口二三〇万の八割が学生という、学生の町？学園都市？が存在する。その町には最先端の科学技術が揃っており、外界の科学と比べると、実に数十年以上先を行っているらしい。

日本旅行に來た外国人が学園都市を見ては「ワンダホー」と眩き、自国でその技術を応用しようと躍起しているのだが、叶わずにいる。それもそうだろう。学園都市の高度な科学技術は学園都市の高度な科学技術によって補われている。ようするに、学園都市クラスの科学技術を機能させるには学園都市クラスの科学技術が必要になってくるといふのだ。永久機関のようなもの、と学園都市統括理事会は他国に説明していて、どうやってこのシステムを生み出したのかについては触れていない。

学園都市は学園都市として、完結している。

そして学園都市では、これまた奇妙な——提唱当時は日本人の考えそうな奇特なことだと海外メディアに揶揄されまくったらしい——

―教育カリキュラムを打ち立てている。それこそが本題、科学技術の粋を集めた？力？。科学の行き着いてしまったところ。

いわゆる、？超能力？である。

超能力、というと胡散臭いことこの上ないが、その実態は科学によっておおまかな解明はされているのだ。簡潔に説明すると、個人のなかにだけ存在する常識が超能力の源である。学説やカリキュラム上では、これをパーソナル・リアリティと呼んでいて、とくに子供たち（成年に達していない者を指す）が得やすいものなのだという。

世界を覆っているのは？そんなことがあるはずがない？という大人の世界の常識だ。子供の常識というものは、そんな大人の常識と相反することがある。それがすなわち？超能力？となる。

燃えるはずがない。消えるはずがない。勝手に移動するはずがない。そういった大人が信じないものを、子供は信じることができる。子供のなかにだけ存在する常識、信念というものが、大人の常識、世界の常識を打ち破る。

まったく論理性を欠いているようなこの現象に、学園都市は目を付けた。人口の八割が学生という異常な世界で、？超能力？の開発と研究が進められている。そしてその成果は驚くべきほどのもので、まざまざと世界に対し？超能力？を見せつけているのだ。

超能力のレベルは0から5の六段階で表現されている。

レベル0は無能力者、超能力が使えない普通の生徒。これが全学生の六割だという情報が発表されている。

続いてレベル1とレベル2。両者の違いは外見上はつきりしない。

ただ数値と可能性で1か2を振り当てられる。レベル2であることは、希望があると言えるだろう。レベル1は、ちよつと惨めでもある。どちらも低能力者と区分されるので、大差はないのだが。

レベル3。これは、実生活でも利用できる程度の能力者だ。害を加えないもの、被害を避けるもの、あるいは手を触れずに物体を移動させるもの。そういったことが可能な人々は、だいたいレベル3だ。レベル3になると立派な能力者と言える。

レベル4。このクラスになると、凄まじい。カリキュラム上で、
というか事実上、レベル4が？軍事利用を見出せる力？とされている。軍隊の一兵卒として動けば、相当な成果を期待できるというわけだ。学園都市でも大勢いるわけではない。レベル4にもなると、
ジャッジメント
スペシャルフォース
風紀委員や特殊部隊などの治安維持部隊に組み込まれたりすることが多い。

そして、レベル5。学園都市でも七人しかいない、文字通りの超能力者である。レベル5の七人のなかでさらに順位付けされており、その力は軍隊そのものに立ち向かえる強さなのだという。一個人が軍隊に匹敵する。聞いただけで、震えあがりそうなものだが、事実だった。

超能力者。

先進国ではどこにいても眉をしかめられる胡散臭い力。
今まさに、その力を揮おうとしている少年と少女がいた。

第三学区。外部の人間を招き寄せる学園都市の外交担当地区。高

級ホテルが立ち並ぶ様は、学生の町学園都市には不似合いで、一般の学生は近寄ることもない場所だ。警備体制も学園都市最高レベルで、異変を察知すれば地上では警備員が迅速に固め、上空では？六枚羽？と呼ばれる軍用無人ヘリがたちまち包囲する。

それに加えて各ホテルの地下にはだっ広いシエルターがあり、核が何発来ても防ぎきる強度を誇るといふ。要人を守るためには手段を選ばない体制が整っているのだ。たとえステルス迷彩の核搭載爆撃機でもこの施設群を破壊することはできないだろう。

その完全防備の区画にあるホテルの一室が吹き飛ばされた。

高層ビルの三〇階辺りが壮絶な爆音を放ち、丸ごと吹き飛んだ。割れたガラスが広範囲に渡り、地上に降り注ぐ。各ビルに備えられた耐震装置が反応し、自動で防弾繊維を応用した合成布が夜の第三学区を覆い尽くした。ガラスどころか瓦礫の破片だろうと受け止める頑丈な布である。

消防車のサイレンがけたたましく鳴り響く。報せを受けた警備員もぞくぞくと駆け付けビルを包囲した。まだ爆音は続いている。物騒な重火器を両手で抱えて、警備員はビルに突入していく。

これはテロではない。ただの喧嘩である。

騒ぎのあった階層に警備員は辿り着いた。人影がいくつか蠢いていた。

塵のなかに佇む二人は睨み合っているようである。そのうちの片方が揺れたと思うと姿を消してしまった。影が消滅したように、警備員の男には思えた。

塵が晴れてくる。

学生服を着た少年が額に青筋を浮かべて立ち尽くしていた。金髪を靡かせる少年を、男は知っている。彼は学園都市で二番目に有名な？超能力者？なのだ。

「くそつたれが。テメエらのせいで興が殺がれちゃった」

少年の殺意が自分に向いていると男は初めて気が付いた。なぜここにこの少年が。そう思うと同時に、少年はこちらに身体を向け、歩き始めていた。

殺される。

殺人犯やテロリストをも純粋な格闘のみで組み伏せる屈強な警備員^{アンチス}が、震えていた。敵うはずがない。手に握っているのは十ミリの弾丸を連続で吐き出すサブマシンガンという名のガラクタだ。傷ひとつつけることはできないだろう。

男は迫りくる少年に対し、銃を構えることもできない。他の隊員も同じらしく、震えているだけだった。

「なるほど、撃つてこねえか。そりゃ、そうだ。俺の力を知ってりや撃ちたくないよな」

金髪の少年は愉しそうに笑う。そのまま男の隣を、素通りした。

「このフロアは俺のお気に入りの隠れ家だったんだ。それを、こう吹き飛ばされちゃあな。ようするに、ヤツは俺に宣戦布告したってことだし、捨てておくなんて間抜けなことできねえ」

男には少年がなにを言っているかわからない。ただ、後ろに回った少年から殺意が消えていないことだけはたしかだった。

「テメエでいいや。悪いな」

ぞわり、と。背筋が嫌な感覚に襲われた。そしてそれがなにかに薙ぎ払われた感覚だと男は理解する。それから骨の折れる不気味な音が、体内を伝って直接響いた。

男は視界を失った。気付けば夜空に放り出されていたからだ。声も出ない。少年が自分を窓ごと突き飛ばした。男の目が砕け散ったガラスの破片を見ながら、そう判断した。

だが、違う。少年は一步もその場を動いていない。

「俺はご機嫌ナメだ。逃がしただけのツケは、払ってもらうぜ」

違和感がある。少年の言葉に対してではない。その背にある、白い翼のようなものが、どうしても男には理解できなかった。そこで思い出す。少年の異名を。

「大丈夫さ。下に対落下物傘が展開されてる。死にやしねえ」

少年は笑っていた。残虐で、愉快なものを見るような笑みを。男は内臓が浮かび上がる独特の落下感を覚え、意識を手放した。少年の言葉通りに対落下物傘が自分を受け止めてくれると信じて、意識の混沌に還ろうとする。

最後まで、少年の笑い声が耳に入っていた。

学園都市レベル5の第二位。

ダークマター
？未元物質？

そして瓦礫の塵のなかに佇んでいたもうひとりの人物とは。

それ以上は、考えられなかった。

0（後書き）

冒頭の導入部分です。いかがでしたでしょうか。
原作の雰囲気を尊重しているつもりです。こんな文章で進んでいきますのでどうかよろしくお願いします。

1（前書き）

本編のはじまりはじまり。あいかわらず縦書き形式推奨。

雨が降っていた。ずぶ濡れている。ショーツまで透けてしまっていた。

天気予報では、夕方には晴れると言っていた。傘は持ってきていないし濡れて帰るのも嫌だから、ゲームセンターに寄って帰ろうと思った。それが間違いだったのだ。

「よう、嬢ちゃん。お兄さんたちと遊ばねえ？」

しまった。すっかり取り囲まれていた。見るからに不良っぽい男三名。ゲームセンターを出たところで捕まえられた。そのまま押されるように路地裏へ。通行人は見て見ぬふりだった。それも仕方ないのだろうか。

「あ、あのう。もしかして、普通にナンパってやつですか？」

「わかってんじゃん。なら一緒に遊ぼうや」

それならタバコの煙を顔に当てないでくれ、と思った。下衆な笑い声。ナンパというより暴姦のように思えるのは気のせいではないだろう。さり気なく手も腿や尻のあたりに回ってきているし、視線がやらしい。鼻の下を伸ばした男は不細工がすぎる。不快感が募っていた。

「普通にやめてもらえませんか」

「へへ、やめてって言われてやめるバカがどこにいる？」

ああ、そう。そういつつもりなのね。上等じゃない。怒りがふつふつと腹の底から競り上がってくる。

「僕は、雨に濡れたくないんですよ。そんなに押さないでくれませんか」

「僕、だあ？ おまえ男だったのかよ」

どこの世界にスカートを履く男がいるのか。いや、待て。冷静に考えるといえるかもしれない。あまり見たくはないが。

「僕は普通に女です。ちょっと、迷惑ですから。叫びますよう」

「ホントかよ。よく見りゃ胸もねえし、マジモンの野郎じゃねえの
お？」

男のひとりが言った。

ぷつん。なにかがきれた。たぶん怒りだろう。

怒りが少女のなかで、大きなものになっていく。考えるのが面倒だった。ここは路地裏。全力を出したところで、誰にも見られない。

「残念です。普通にナンパの相手は、選ぶべきでしたね。僕の全力がそんなに見たいなら——見せてさしあげます！」

力の開放。

少女の身体が、淡く光り始める。男たちがひいと声をあげた。かまうものか。少女の怒りは、エネルギーに変わる。

パーソナルリアリティ
自分だけの現実、その力、超能力を解き放つ。

刹那。

轟音が響き、男たちが横飛びに吹っ飛んだ。少女はまだ力を使っていない。

啞然として、攻撃の主を見る。煤焦げる壁、アスファルト。摩^{なび}く短めの髪。少女が、眉間に皺^{しわ}を寄せて佇んでいた。

「——ったく、これだから野郎どもは」

右のこめかみ辺りに挿したピンを一度手で押さえた。それからこちらを見て、大丈夫だったと声をかけてくる。

^{ときわだい}常盤台中学の制服。凜々しい顔。少女には覚えがあった。

「まだちょっと明るいのに、こいつらときたら、呆れるわね。間に合って良かった。気を付けて帰るのよ」

そう言って、背を向けるその少女。放電の痕。後ろ姿も、よく覚えてる。

「レベル5——^{レールガン}超電磁砲の御坂美琴^{みさかみこと}」

呟いていた。御坂は驚いたように振り返り、ほほ笑む。

「知ってたんだ。そ、私が^{さくがわ}レールガン、御坂美琴よ。私も有名になったものね。あなた、^{さくがわ}柵川中学校の生徒でしょ？ 友だちが柵川中

学にいるのよ」

エレクトロマスター

電撃使い御坂といえば、それ相応の能力者なら知っておかなければならない人物だった。

レベル3以上になると、能力者同士で争うこともある。その時、うっかりレベル5などと喧嘩になれば、生きて帰れる保証はないのだ。レベルはその人物の危険性を指し示す指標でもある。

少女は、雨が上がったのを見やり、一步步み出した。御坂は、真っ直ぐと少女を見つめている。その少女の異様さ、というべきなのか、違和感のようなものを感じていた。

少女は笑い、頭を軽く下げた。

「助けていただき、ありがとうございました。僕は、普通にラッキ―でしたね。御坂さんに助けてもらえたのですから」

御坂は声を発することができなかった。

少女の足は、すでに宙を離れている。浮いていた。

御坂は息を飲むことしかできない。

雨雲の切れ間から射す光が、後光のようなのだ。

——天使？ 翼が生えている。

まさか、そんなはずはない。

御坂は冷静になるよう自分を叱咤した。よくよく目をこらすと、光のいたずらだったことに気付く。光の加減で、翼を錯覚させられただけだ。

「では、また、いずれ」

少女は丁寧にお辞儀をし、次の瞬間、消えた。なにも言えなかった。取り残された御坂が、頭に手を当てる。今見たものはなんだ。

「^{テレポーター}空間移動だったの？ でも、宙に浮いていたし・・・」

よくわからなかった。

親友に^{テレポート}空間移動を使う者がいるが、宙に浮くことはできなかった。そもそも^{テレポート}空間移動は一次元から絶対座標を割り出し、そこに割り込むことで成立している。宙に浮くというのはまた別の能力が必要だった。それも、空気中の素粒子や分子を固定するような、^{テレポ}空間移動系能力とはまったく異なる能力が。

今の少女は、なんだったのか。ほんとうに、天使だったのか。科学的じゃないことばかり思い浮かぶ自分を、御坂は軽く嘲笑した。

1（後書き）

短いオープニング。御坂は主人公ではありません。
備忘録：僕っ子かわいい

2（前書き）

ずっと美琴のターン！縦書き形式推奨！

昨日見たあれは、なんだったのだろう。

御坂は珍しく難しい顔をして、歩いていた。後輩たちが黄色い声をあげても、気付かない。向かいのパン屋でゲコ太（カエルのキャラクターで御坂が溺愛している）キャンペーンがあっても、見向きもしなかった。

思い悩んだ表情。考え事をしていても、足は勝手に目的地を目指して動く。

風紀委員の第一七七支部は集合場所のようなものだった。

御坂が扉を開けると、いつも通りの連中が、いつも通りに日常を過ごしている。白井黒子は「お姉様」と叫んで飛び付いてくるし、初春飾利はずらりと並んだパソコンたちと向かい合い、固法美偉は書類整理に励んでいる。奥では、佐天涙子がコーヒーを淹れていた。いつも通り。それが、今の御坂には嬉しかった。

「どうしたんですのお姉様！　もしかしてわたくしに会いに来てくださったんですのね〜！」

白井が、嬉し涙を流しながら、擦り寄ってくる。離せと引き剥がしても、予想以上の怪力でしがみ付いてくる。だから、ちょっと感電させてやった。筋肉が予想外の刺激に過敏に反応して、白井の手は反射のようにはたと花開く。その隙をついて、御坂は一気に振り解いた。

「ああん、いけずう」

「うるさいわよ、黒子！ いきなり飛びかかるほうが悪い！」

初春と佐天が、くすくすと笑っている。固法は、もう呆れてなにも注意しなかった。

この白井黒子という少女、御坂の後輩で常盤台中学の一年生、レベル4の能力者である。「ジャッジメント」ですの「が口癖。風紀委員である彼女は、必然的にその言葉を使用する回数が多いので、定着してしまったのだらう。レベル4だけあって、かなりの実力者だ。

「どうしたんですか、御坂さん。とても急いでいらっしゃったようですけど」

おっとりした口調で、そう尋ねたのは初春飾利。頭に花飾りを付けている、柔和な少女だった。柵川中学の一年生で、白井とコンピを組んでいる。コンピューターのような機械系操作が得意らしく、よく白井のバックアップを担当している。可愛い顔をしているが、その気になれば町中の監視カメラをハックしたりできるので、怒らせたくない相手でもある。

「ん、ああ、たいした用じゃないんだけどね」

「なにか面白いネタでもゲットしたんですかあ？」

そう横からにやりと笑って出てきたのは、佐天涙子。初春の親友で、風紀委員ではないが、この一七七支部によく顔を出している。御坂と同じく、迷惑というものをあまり鑑みない人間だった。明るく、奔放なところも、二人は似ている。

「佐天さんには、私がネタ集めするような人間に見えるの？」

「いやあ、見えませんけどね」

佐天が手を頭の後ろに回して、笑ってみせた。リアクションが大きいのも、彼女の特徴のひとつだった。

「それで、いつも通りにだべりに来たの？」

固法美偉。白井と初春の先輩であり、御坂よりも年上だった。眼鏡をかけた、美人と呼べる分類の彼女は、カップのコーヒーを啜りながら、ほほ笑んでいる。

彼女が寛大であるから御坂や佐天は気軽に訪れるだけであって、本来、ジャッジメント風紀委員の支部に人は寄りつかない。注意されるだけだからだ。

「それがですね。昨日、ちょっと気になるところに出くわしてしまつて」

「気になるところ？」

食いついたのは、白井。話自体に興味があるのではなく、また御坂が好き放題暴れたのではないかと疑っているのだ。

御坂は自身のレベル5？超電磁砲レールガン？の力を恃たのんで、正義のヒーローごっこをすることが多々あった。白井が何度、それは風紀委員・アンチスキル警備員の仕事だから首を突っ込むなと釘を刺しても、御坂は結局電撃を使って解決に乗り出してしまふ。当然、悪意はない。

御坂とは、そういう人間だったのだ。白井も、そういう御坂が嫌いではなかったが、尊敬するからこそ心配するものだ。

「うーん。なにを話せばいいのか。あ、ありがとう」

いつの間にか淹れていたコーヒーを佐天に手渡され、御坂はソファに腰かけた。

御坂の発言が気になったのか、固法も向かいに座す。初春も、手を止めて話を聞こうとしていた。

昨日の光景。思い出す。天使に見えた、不思議な少女。恐れというよりも、畏れ。ほんとうにどこから話せばいいのか、困っていた。

「黒子。アンタの能力、テレポート空間移動。あれって、宙に浮くこともできるの？」

問われた白井は、一瞬呆氣に取られていた。すぐに腕を組んで、首を横に振る。ジャッジメント風紀委員の腕章が、御坂の目に入った。

「宙に空間移動テレポートした後、落下するまでの若干の時間なら宙に浮いていると言えますでしょうけど……こう、ふわりと浮き上がるのは、無理ですわ」

白井は身振り手振りで、説明する。初春も固法も肯いていた。

「そもそも空間移動は浮遊能力ではありませんの。座標を決定し、自分をその座標に割り込ませる、というべきですよ。少なくとも黒子の空間移動能力は、その類ですわ」
テレポート

「書庫にある情報を見ても、テレポート空間移動系能力の説明は、それで筋が

通ると思いますよ」

初春がパソコンを弄りながら、甘ったるい声で続けた。

「例の？[↑]座標移動？も同じ原理だと思います。白井さんより優秀と
^{テレポーター}噂の空間移動」

初春は、時々黒いことをさらつと言う。佐天が白井と初春の間に割って入り、両者を宥める。御坂は、すでに違うことに意識を傾けていた。

やはり、あれは^{テレポート}空間移動の能力ではない。しかし、一瞬で消えたのは間違いなく^{テレポート}空間移動。いったいどうなっているのだろうか。

「黒子。初春さんと固法さん、佐天さんも、落ち着いて聞いて。私、昨日、出くわしたのよ」

「出くわしたって、誰にですか？」

「^{テレポーター}空間移動」

「それで、なにが問題なんですかあ？」

佐天の目が輝いている。御坂はコーヒを啜った。そして、告げる。

「^{.....}宙に浮かんだ空間移動よ」

今までの御坂の質問と挙動を察した白井たちが、息を飲んだ。佐

天だけは、にこやかな笑みで、首を傾げる。理解できていないのだろう。

「ちょ、ちょ、ちょっと、お姉様？ それは見間違いではありませんのんの？」

上擦った白井の声。御坂は頭を振る。

「あり得ないわ。宙に浮くということは空風使い系か分子操作系のはず」

「一応、重力操作の可能性もありますわ。空気より自分の身体を軽くすることも不可能ではないですの。磁場を操る電撃使いの可能性もあります。それは、お姉様がわからないはずがないでしょうし」

御坂はレベル5の電撃使いである。磁場を操り身体を宙に浮かせることは不可能ではないが、かなりの磁力や砂鉄などを必要とする上に、一瞬で消えた理由が説明できない。電撃使いの可能性は皆無と言っている。

奥から、花畑が覗いてくる。初春だ。

「あと、光学操作系も考えましょう。宙に浮いているように？ 錯覚した？ のかもしれませんし」

初春の言葉。錯覚。その響きに、御坂は目を大きく開く。

「それだ、それよ、初春さん。私は、錯覚したのかもしれない」

「ど、どういことですか、お姉様？」

「私は、その子を天使と見間違えたのよ。光の錯覚かと思ったの。今思えば、消えたように光学操作クリアコントロールしたのかもしれない！」

御坂の言葉を聞き終える前に、初春の指は動いていた。学園都市二三〇万人のデータを洗っているのだ。初春は、自他ともに認めるスーパーハッカーである。仲間内では守護神ゴールキーパーと呼ばれていた。事件解決のためには、許可を得ていないのに許可外のデータを平気で持つてくる問題児であるが、こういう時は頼りになるものだ。そして、初春は息を吐いた。

「なにかわかった、初春さん？」

「御坂さん。さきほどの話ですが、結論から言って可能です。宙に浮き、天使のように錯覚させ、一瞬で消える。そういう風に見せられる光学操作系クリアコントロールが、何名も該当しました」

佐天が指を弾いて音を出した。やった、という合図である。御坂は立ち上がり、初春のパソコンの前まで歩んで行った。

「レベル4光学操作系能力者。四名がその行為を可能です。これが、その一覧ですが」

御坂は目を細め、全員の顔を目で追っていた。ない。昨日の少女の顔は、どこにもなかった。

「ない。ないわ、昨日の子の顔。どうなっているの」

「まさか、書庫バンクに漏れがあるんですの？」

「それはないです、白井さん。書庫^{バンク}は学園都市が誇る最高精度かつ超膨大な情報センターなんです。漏れがあれば補完しようとする、生きたデータバンクなんですよ」

「それは、わかっていますけど・・・」

白井が低い声で言う。初春も悪気があって言うのではない。

書庫^{バンク}は、学園都市が学園都市たるために欠かせない機能なのだ。防衛機能も生産機能も、なにもかも書庫^{バンク}なくして機能することはできない。不法滞在者はもちろん、偽造パスをも一瞬で感知する精度を有している。その書庫^{バンク}の目を欺くことは、非常に難しいと言わざるを得なかった。

「お姉様、なにかヒントのようなものはございませんの？」

ヒント。呆然としていた御坂に、白井は問いかけた。

昨日見た謎の少女。顔を、よく思い返す。可愛らしい顔立ちで、淡い赤色の髪をしていた。いやそれではヒントにならない。もっと、違うなにか。なんだ。なにか、見落としている。

姿。声。言葉。それだ。

「柵川中学！ 柵川中学の制服を着ていた！」

「え、ええ？」

佐天が、驚きの声をあげる。初春と佐天は柵川中学の一年生だったのだ。

「柵川中学のレベル4光学^{クリア}コントローラー操作系？ なら、村叢^{むらぐさ}先輩しかないですね」

初春はしれつとした顔で、コーヒーをあちちと啜りながら飲み下している。

「村叢先輩はたしかにレベル4だけど・・・あの人が天使？」

「あら、ずいぶん綺麗な人じゃない」

佐天は苦笑いしている。隣で、固法がパソコンを見てみなさいと指した。それを受け、御坂がパソコンの画面を見る。黒の長髪を携える、相当美しい女性がそこに映っていた。女である御坂が、一瞬ぼっとするような、美しい人だった。

「天使っていうか、大和撫子ですよ。村叢先輩、柵川じゃ有名人ですよ」

「え？ そうなの？ こんだけ美人なら、わかるような」

「うーん、それもありますけどお、どっちかというとレベル4つてのが大きいかな」

うんうんと佐天が何度も肯く。初春も、同意しているようだった。

「うちの中学、常盤台とかとちがつて、レベル0から1、2が多い普通の中学校ですから。レベル4なんかになると、もう超有名人ですよ。全校生徒に名前を覚えられるくらいです」

「それは・・・大変そうですね」

白井がじとつとした目でディスプレイを見る。常盤台中学では、

レベル4以上は結構な数があるのだ。レベル5である御坂ならともかくレベル4の、しかも村叢のような光学系能力という地味な能力者は、おそらく名前を知られないだろう。エリート中学と、普通の中学の差、というところか。

「でも、この人じゃないわ。全然違う」

「もう少し、ヒントはないんですか、御坂さん」

「うーん。たしか、赤色っぽい髪の色をして、自分のことを僕って言うてたわね」

「わわ！ 僕っ子ですか！」

食いついたのは、案の定佐天だ。目は、きらきらと光っている。

「ロマンですね、僕っ子！ それでなおかつ可愛いなら、最高ですよ！」

「佐天さん、けっこう変態なんですね」

初春の言葉に、佐天は声にならない声を出している。そして、攻撃しに行った。そんな二人を横目に、白井は困ったように唸る。

「僕、だけではなんのヒントにもなりませんわね。しかし光学操作系クリアコントロールでないとする、ということですか？ やっぱり書庫漏れの線バンクが……」

「白井さん！ それは、ないです！」

初春が睨む。白井は溜息を吐き、目を伏せた。

初春は少し頑固なところがある。とくに自分が信じているものを否定されるとひどく傷ついて、反発する子だった。

皆が頭を抱えている横で、佐天がはいと手を挙げる。全員の視線が、佐天に集まった。

「ただ単に、宙に浮く能力を持っていて、空間移動能力も持ってただけじゃないんですか？」
テレポート

白井の大きな溜息が、聞こえた。佐天は目をぱちくりさせている。

「佐天さん。学校で、習わなかった？ 超能力はひとりにつきひとつまで」

「複数所有すると、脳に負担がかかり過ぎてしまっんですよ。だから、超能力を何個も持つことはできない。理論上不可能とされています」

「それに、レベル分けされてるのも超能力がひとつであることが前提なのよ。複数持ってたなら、レベル分けなんてできないでしょう？」

佐天は、集中砲火を浴びせられる。佐天はレベル0で、レベル云々の話にコンプレックスは抱けど、その仕組みには詳しくなかった。超能力を複数所有する危険性が、佐天にはわからない。無論、脳にかかる負担も。

「ひとりの人間が、いくつもの超能力を所有する。そういう映画は、

何度も流行りましたけど、残念ながら現実には存在しないんですよ、佐天さん」

「学術的には、？多重能力？と呼ばれているけどね。どの論文でも、実験報告でも、実現は不可能。その一言だったらしいわ」

固法が戸棚の書類のなかから、一冊のスクラップ帳を取り出す。
ジャッジメント
風紀委員は、その仕事柄、ある特定の話題について調べることがよくある。新聞の切り抜きなど、日常茶飯事だった。
デュアルスキル
そこに多重能力の研究成果が掲載された新聞の切り抜きがいくつかあった。佐天は、それを見つめていた。

「あつたあつた。これですよね」

初春が苦笑いして、皆に画面を見せた。

去年大ヒットしたSF映画。多重能力の主人公が仮面を付け、悪の組織をばったばったと斬り倒す、勧善懲悪お涙ちょうだいストーリーの映画だった。

その、タイトル。初春が、甘い声で、囁くように呟く。

「——スキルジャンパー」

ありとあらゆる能力を、跳び越え、自由に使役する、まるで神のような存在。それがスキルジャンパー。佐天の鼓動が、高鳴った気がした。

「現実こんな人間が存在すれば、それこそレベル5どころの騒ぎじゃありませんの。都市伝説。いえ、学園都市の目指す最高最強の・

・
」

「レベル6」

「そうそう、レベル6と呼べる・・・って、はい？」

白井が肩透かしを食らう。顔を覗き込むと、御坂がなんとも言い難い表情で拳を握り締めていた。

スキルジャンパー。

それからしばらく、誰も言葉を発しなかった。

2（後書き）

備忘録：超能力はひとりにつきひとつ
↑脳に負担がかかるから
春かわいい 佐天さんかわいい 初

3 (前書き)

ついに我らが主人公が登場しますよー。縦書き形式推奨中。

八月二十三日。

外気温、三十四度。間違いなく今年一番の猛暑日だ。

猛暑日だというのに、柵川さくがわ中学校からは登校しなさいという指令が下っている。世にも珍しい夏休み登校日である。前時代的な制度に全校生徒は不満を漏もらしているが、今のところ効果がないようだった。

二十三日という微妙な時期に登校する理由も、よくわからない。キリ良く二十日ならわかるのだが、夏休み前に配られた日程表には二十三日と太字で記されている。

登校日を指定するのは三年生の担任陣営であるので、二十三日がちょうど良かったのかもしれない。教員旅行に行くので二十日は都合が悪い、という噂が終業式の前に広まっていたのを思い出した。大人の都合に従う子供は憐れと言えるだろう。溜息が溢れる。

午前中は全校集会。それから課題の提出。それだけのために登校しなければならないのだから、生徒が不満なのも当然だった。

暑さのあまり、机に突っ伏している普通の少女。声をかける、三人の少女は、友達と呼べる者たちだった。

「こらあ、鏡かがみちゃん。しっかりしなさい」

「そうだが、そろそろ昼休みも終わるつてのに。次は、体育の時間だろ？」

体育。このくそ暑いなか、体育をしなければならない。

それもプールではない。持久走。地獄以外のなにものでもないと

思う。

そもそも、本来体育授業はとくに終わっていたのだが、プール授業にだけ参加していたら、体育教師の逆鱗に触れてしまったという悲しい理由がある。

話しかけられていた薄い赤髪の少女は、ゆっくりと頭を上げ、静かに涙を溢す。

「・・・普通に不可抗力だよ。あんまり暑いものだから、普通にプールばかり出たくなっちゃっただけなんだよ」

「いや、涼しい時からアンタ体育サボりまくりじゃん」

「うっ」

ひとりに咎められて、もう一度机に突っ伏せる。

体育は、嫌いな科目だった。その次に嫌いなのは演算の授業。ほかが得意というわけでもないが、とくにこの二つは超が付くほど嫌いな科目だった。

「ま、がんばりなさいじゃん。あたいらは帰るけど」

「ええ！ 普通にほんとうなの、早瀬^{はやせ}さん？」

「普通にほんとうじゃん。知らなかったのか、鏡。今日はアンタ以外、午前日程なんじゃん。ていうか、登校日ってそういうもんだろ」

衝撃の事実。

早瀬という少女に言われ、ばつと辺りを見渡した。ほかに、誰もいない。狭くも広くもない教室にいるのは、たった四人だった。

たしかにおかしいと思ったのだ。前日に担任から体操着を持参す

るようメールで指示されていた。持ってこなかったら説教地獄ですよと脅しも入っていた。登校日に体育？ 疑問に思っても人を疑うのは良くないと思い、黙って持ってきた。

すでに担任教師には持参したと伝えている。体育の教員にも、伝わっているはずだ。言い逃れはできない。最悪だ。

目の前に視線を戻すと、早瀬と賀古^{かこ}がほほ笑んでいた。憐れみ、と呼べるものだ。

「私達は帰りにどこか寄って行くから、鏡ちゃんも体育終わったら来なさいな」

「ああ、それがいいじゃん。あたいら、待ってるし」

早瀬が鏡と呼ぶ少女の頭をぽんぽんと叩く。部外者の乾いた笑いをしている。それが腹立たしいような、虚しいような。複雑な心境に駆られていた。

「・・・早瀬、それよりその警備員女^{アンチスキル}みたいな口調、なんですか。じゃんじゃん言われても、困るわ」

鏡の隣で寡黙にサンドイッチを頬張っていた黒髪の少女が、じとりとした目で、早瀬のことを詰問した。早瀬は、困ったように苦笑いしている。

「あ、と、その。やっぱ警備員^{アンチスキル}にもなると、憧れるじゃん？」

「憧れますわよねえ。あの勇猛果断に突撃する様、それでいて冷静な状況判断、人々を守る正義の心・・・」

「そう！ 賀古はわかってるじゃん！ あたいの目標は警備員^{アンチスキル}なわ

けよ！」

早瀬は、目を輝かせていた。

「だから、最近なにかと一年の？風紀委員？と交友しようとして
いるんですか？」

「へ？ ああ、初春のことか。ま、それも半分てところかな」

柵川中学には風紀委員が六人いた。一年生の風紀委員が初春だけ
なので、先輩権限で接触しやすい初春に早瀬は狙いを定めたという
わけだ。二年の風紀委員は全員男なので、接近しにくいというもの
もある。

黒髪の少女には、早瀬の情熱が理解できないらしい。

「風紀委員と警備員は根本的に違うと思います。部署も統括する組
織も違いますし、学園の風紀を正すだけの風紀委員と違って、警備
員は大人しかねないものですよ。学生の安全を守るための組織で
すから」

「わかってる。だから、学生のうちは風紀委員で腕を磨こうと初春
に接近しててだな・・・」

「あなたが風紀委員に参加できるんですか？ だって、あなた無能
力者ですし」

「う、うつさいな！ 風紀委員やってる初春だってレベル低いじゃ
ん！ しかも、あたいには人一倍の正義感と熱血がある！」

早瀬は突然立ち上がり、燃え滾る情熱を告げた。賀古の穏やかな

笑みを受けて、早瀬ははつと我に返り、再び着席する。

「たしかにあたいはレベル0で、運動神経がいいわけでもないよ。でも、懂れるんだよ、ああいう人を守る仕事ってやつがさ……」

「優希^{ゆき}ちゃんは、優しいですもんねえ」

賀古は市販の缶飲料を飲みながら、笑う。早瀬は顔を真つ赤にして、違う違うと否定している。

黒髪の少女はしばらく早瀬を見つめていたが、小さく肯いた。

「……目標にするのはいいことです。けど、無茶をしないで欲しい。早瀬に怪我でもされたら、悲しいですよ」

早瀬と賀古が顔を見合わせ、ふふと笑い合った。

「ああ。肝に銘じておくじゃん。村叢^{むらぐさ}」

黒髪の少女の名は、村叢影夜。柵川中学が誇る、レベル4の少女だ。

そしてその隣で暑さに昏倒している淡い赤髪の少女の名は、東雲鏡。村叢と違う意味で、有名な少女だった。その異名は、サボリ魔^{バグシミ}。加えて演算の試験で毎回赤点という伝説を達成しているので？^{バグシミ}演算^{コレーター}欠陥？とも教師の間では呼ばれている。

「いやだ、いやだよう、体育。普通に代わってください、影夜様」

「あなたがサボり続けるからでしょう。自業自得という奴です」

「そんなご無体な……」

とりわけ東雲と村叢は仲が良かった。中学校に上がる前から親友で、このなんとも言えない関係は続いているのだ。

「あ、そういえばさ、賀古は聞いた？」

「なにをですか？」

「ほら、去年流行った映画、なんて言っただけ。デュアルスクリーン多重能力者の映画じゃん」

賀古がくるくるの髪を指で弄りながら、ああ、と思いだして手を叩く。

「スキルジャンパー」

「そう！ それじゃんよ！ 最近、ネットで有名なんだぜ、そのスキルジャンパー！」

村叢の目が鋭くなる。隣の東雲は、相変わらず机に突っ伏したままだ。

「そうなんですか？ 私、あまりアメリカンヒーローものは好きじゃないんですけど。それに、ブームはとうに過ぎ去ったような気がしますわ」

「映画それ自体じゃないんじゃない？ 最近、見かけたって言う書き込みが増えてるんだよ。というかスキルジャンパーって何年も前から存在していて、映画もそのネット情報をインスパイアする形で作られたって話じゃん？」

「まさか。あれはただの空想の産物でしょう？ 科学的、論理的に不可能だって学者が大々的に非難していたのは、よく覚えておりますわ。ネット得意のゴシップではなくて？」

「そうなんだけど、面白いのはそこだけじゃない。風紀委員と警備員。ジャッジメント アンチスキル両方が、スキルジャンパーについて調べ回っているってのが異様じゃん？」

「風紀委員だけでなく、警備員まで？ たしかに、異様ですわね」
ジャッジメント アンチスキル

この柵川中学がある地区にも、警備員の姿は増えていた。スキルジャンパーの報告がこの周辺で多いからだ、という理由らしい。詳しいことは機密なので、まだなにもわからない。

だが、風紀委員と違い警備員はまったくの確証なく動く集団ではない。アンチスキル警備員が動くということは、なにかしら有力な情報を掴んでいるということなのだ。

「でも、ほんとうにいるのかねえ、スキルジャンパー」

「私、あまり信用しませんわ。ネット情報っていうのもさながら、科学の町学園都市で非論理生物が蠢うごめいているのは、困ります」

「たしかに。それも、そうじゃん？」

早瀬と賀古が笑い合う。村叢はサンドイッチの最後の一切れを口に放り込んだ。

「おっと、そろそろ着替ええないといけないじゃん？」

「そうですね。がんばってくださいな、鏡ちゃん」

「あう、普通に薄情だ……がんばるよう」

二人は、先に席を立ち、教室の出口を目指して歩いて行く。村叢はごみをまとめながら、じとつとした目で、東雲を睨んだ。

「消………さなかつたの、記憶」

「もう隠す必要はないんだ。？計画？が始動するらしいからね」

「……そう。それで、大人しく従うのね、あなたは」

東雲がむくりと起き上がり、答えないまま席を立った。

村叢も立ち上がり、出口を目指して歩き出す。三人が、またねと言って手を振り、扉を閉めた。ひとり残された東雲は、がくりと項^{うで}なだ垂れた。

「普通に、不幸だ……」

呟きは、誰にも聞かれなかった。洪々と、体育着を取り出し、着替えを始めた。

「不幸だ……」

缶ジュースを買おうとしてお札を自販機の投入口に突っ込んだところ、見事に吞まれてしまった。

文明の力を前になすすべもなく立ち尽くしているツンツン頭の青

年は、名前を上条当麻かみじょうたつまという。学園都市不幸ランキングで堂々一位を名乗れるであろうと自負している上条は、今まさに不幸に直面していた。

貧乏学生のなけなしの金を呑み込む欠陥自販機ボンコッを造ったのは、どこの馬鹿だ。学園都市か。なにが都市内外の科学技術の差は数十年分だ。

これなら、外の自販機の方がよっぽど親切だ。外の自販機は金を呑み込むことはあっても、蹴れば缶ジュースをプレゼントしていくらか還元してくれるものだ。

ところがこの学園都市製自販機は、防犯対策も完璧で、一度金を呑み込んだら銀行強盗が来たって金を吐き出さない。蹴ったところで、防衛機能が最大限に発揮されて警備員様アンチスキルのお世話になるのが関の山である。

「あーもう！ 不幸だあ！」

二度目。今のは、魂の叫びだった。

つい六時間前は病院のベッドにいた。学園都市が生み出した魔物と戦い、怪我を負ったのだ。今朝退院するなり「上条ちゃん、二日に休んでた分の補習です」と幼女にしか見えない担任から携帯電話に連絡が入った。二二日で補習が終わる予定だったのが二三日に繰り越されたというわけだ。サボると泣かれるので、上条は病み上がりにも関わらず、渋々登校した。

それだけでも不幸なのに、金まで呑まれてしまった。不幸すぎる。夕方から行き付けのスーパーでタイムセールがあるというのに、その資金をそっくり丸ごと呑み込まれてしまったのだ。一週間の栄養のほとんどをこのタイムセールにかけている上条にとっては、死活問題である。

吐き出せと言わんばかりに返却レバーを連打する。それでも、吐き出される気配はまったくない。上条は力なく頭垂れ、息を吐いた。

右手を見つめる。上条の右腕には、不思議な力が宿っている。

上条自身はレベル0の無能力者である。無能力者というよりも、まったく能力がゼロなのだ。能力開発カリキュラムを受けても、いまだに才能が発揮される気配がない。

学園都市にある学校に入学する際、誰もが能力診断検査を受けるのだが、たいてい自分の能力はその段階で知ることができる。レベルを決定するのはその時であり、あとは定期的に行われる能力試験でレベルが変動するだけだった。

しかし上条は違う。能力測定すらできなかった。能力が微弱なのではなく、ゼロなのだ。そういう者はまずいない。学園都市創設以来初の人間。

分類上レベル0に組み込まれたが、その実は？学園都市でも想定できない存在？なのである。

右腕。なんの変哲もない、男の腕だ。運動部に入っているわけではないが、それなりに鍛えているので、筋肉は多少ある。特別な細工をしたこともない。幼い頃に怪我を負って右腕がサイボーグになった過去も残念ながら持ち合わせていない。それでも、この右腕は特別だった。

学園都市で、上条だけが持つ、特異な能力。

「ああ、またひもじい生活が始まるのか」

上条は自販機の前で、膝をついた。神や天使に祈るように、金が吐き出されることを願った。しかし、ここは学園都市である。そういう宗教的なものからは、最も離れた場所だった。願いも虚しく、自販機は返答すらしない。

「ふざけんなよ、人の金呑み込みやがって！　ならせめてジュースの一本くらい吐き出せ！」

自販機に向かって叫んでみる。無機物に対して怒鳴り散らす男。傍から見れば、たいそう頭の痛い人に見えただろう。上条は恥ずかしさよりも虚無感と切なさに襲われて、諦めた。もう、返って来ないのだ。理解すると、涙が毀れそうになる。

地獄の特訓からようやく解放された。

炎天下での持久走。あくまで補習授業なので途中途中で水分補給が許されていた。倒れるようなことはなかったが、体力と精神力のほとんどを持って行かれた。今残っているものは、気だるさだけである。

「あー、暑い。だるい、やばい」

喉が渴いている。甘いものを飲みたい。スポーツドリンクでない、甘い飲み物。

近くに自販機はないだろうか。東雲は蜃気楼が浮かびそうな景色を、必死の思いで見渡す。見つけた。公園の自販機だ。あそこで、なにか買おう。村叢達と合流するのは、ジュースを飲んでからでもいいだろう。

思い立ったら吉日。東雲は元気を取り戻し、自販機を目指して歩き始めた。

絶望する上条を無視し、汗だくの東雲は歩いて行く。

淡い赤色の髪が、上条の眼に映った。小柄で、小学生にも見えるが、制服は中学校のものだ。そして流れるような動作で自販機の前に立ち、硬貨を投入しようとする。

上条は、思わず叫んだ。硬貨を投入されると、吞まれた金が完全に自分の物でなくなってしまう。いや、それよりも悪夢が再来し、

目の前の可憐な少女を襲うかもしれない。上条は叫んで、待てと制した。

東雲がゆっくりと振り返る。めちゃくちゃに、不機嫌な表情をしていた。

「・・・なんですか、お兄さん。僕、喉が渴いて仕方ないんですよ」

「え、僕？　女の子なのにな？」

東雲は、この手の言葉が一番嫌いだった。男だから、女だからと区分されることが心外なのだ。女の子が自分のことを僕と呼んで、なにが悪い。

「とにかく、この自販機にお金を入れるな」

「なんでですか」

「え。そりゃ俺の金が、じゃなくて、べつにここじゃなくてもいいだろ。悪いことは言わないから、ほかの場所の自販機で買いなよ」

上条はなぜお金が吞まれるかもしれないと説明しないのか。まだ亡くなったお札に未練を抱いているからである。もしかしたら、返ってくるかもしれない。そんな奇蹟を、幻想を、抱いていたのだ。東雲の硬貨投入によって、現実に戻れたくない。あれは、食費だったのだ。タイムセールで活躍するはずだった、戦友なのだ。当然、東雲にはその事情がわからない。ただ上条が自分をからかっているようにしか、思えなかった。怒りは、高まっていく。

「・・・炎天下で、延々と走らされて。それから解放されたと思っ

たら、見ず知らずのお兄さんに普通にナンパされて。拳げ句にはジュースを諦めると言う」

「ナンパ？ え、どういうこと？」

「僕は、怒っていますよう。普通に尻尾を巻いて逃げた方がいいです」

上条はぎよつとする。目の前の少女の身体から、ぴりぴりと弾けるものが見えていたからだ。すぐにわかった。電撃使用^{エレクトロマスター}。東雲は帯電している。

「待て！ たかがジューズ一本だろうが！」

「たかが！ たかがと言いましたね、あなた！僕は普通に喉が渴いているというのに、それを邪魔した！お兄さんは、僕の敵ということに他なりません！」

「なんだよそれ！ とんでも理論過ぎるぞ！電撃使いは皆こうか！」

上条は右腕を眼前に突き出し、来たるであろう衝撃に備える。青白い電流の竜巻、その中心で赤髪の東雲がにやりと笑った。

だが、急に東雲の様子が変わる。目を見開き、わなわなと震え始めたのだ。

（どういうことだ？なぜ攻撃してこない？）

上条が動きを止めた東雲を見つめる。善良な心が残っていて、攻撃してこないのだろうか。いや、さきほどの怒りは本気だった。脅

すだけならこれほどの帯電はしないだろう。

東雲が、目を細め、睨む。

「……心理系能力者ですか？」
メンタルコントローラー

「はあ？　ちげーよ。俺は、レベル0だつっの！」

上条の言葉に、東雲はきよんとする。少しして、帯電状態を解き、小さく息を吐いた。

次に上条を見る目は、敵意というよりも、もつと神聖ななにかがあった。上条の特異さに気付いている者の笑みだった。

「うへえ、なんか知らんが助かった」

「お兄さんに撃つだけ、無駄ですからね」

東雲は髪を振り、傍にあったベンチに腰を下ろした。上条はその場を動かず、見つめ続ける。この右腕の力を、知っているのか？

「心が読めなくても、わかります。『この右腕の能力を知っているのか？』と、お兄さんは僕に疑いを抱いた。せっかくなので答えて差し上げますよう」

冷静になった上条は、状況を理解しようと必死だった。目の前で不敵にほほ笑むこの少女は、何者なのか。

「幻想殺し。イマジンプレイカー その右腕に宿る、異能を打ち払う力」

喉を鳴らす。汗が滴したたっているのがわかる。これは、暑いからではない。

「心理系能力持ちであつても、防ぐのは普通に難しいんですよ。こういう特殊系は目に見えない分、効果がわかりにくい。裏を返すと抵抗力も得にくいんです。間違つてもレベル0には防げない。それなのに、お兄さんは防いだ。その右腕の力で」

なにを、言っている？ こいつは電撃使用ではなかったのか。なに、まるで心理系能力者や読心能力者のようなことを喋っていた。さきほどの不意の静止。攻撃を中断した理由。そして突然浴びせられた問い。

白昼堂々と外を出歩くこの少女は、実はとんでもない存在なのではないか。上条はそう直感していた。

「さつき、心が読めなくても、つて言つたよな？ それ、比喻でもなんでもないんじゃないやねえの、おまえ」

問いながら、わかっていた。

心を読まれたのだ。おそらく心理系能力を使つて。

東雲は、帯電しながら心を読み取ろうとした。？二つの超能力？を用いたのだ。

「どうやって、二つの超能力を・・・？」

上条は、自分の声が震えていることに、気付かなかった。

超能力はひとりにつき、ひとつ。

上条でも知っている学園都市の常識。超能力者の常識。

そういう風に、能力者はできているはずだ。脳にかかる負担が大きいから、あり得るはずがないのだ。

デュアルスキナー
多重能力者など。

東雲は、目を伏せて、またにやりと笑った。

「どうやってでしょうね。でも、たぶん、普通に人はこう呼ぶんじやないですか」

東雲が大きく腕を払った。風が巻き起こる。それが東雲と上条の間で小さな竜巻になっていく。

今度は風力使い。エアロマスター三つ目の、超能力。これはいったいどうなっている？

「——奇蹟と」

どういう意味だ。上条は東雲の言葉の意味を汲み取れない。

瞬き。ブラックアウトする視界。一秒にも満たない、その一瞬。次に上条が目を開いた時には、東雲の姿はなかった。先ほどまでベンチには、たしかに彼女がいたはずだ。忽然と姿を消していた。

「テレポーター空間移動・・・？　どうなってんだよ、こりゃ」

上条が呟く。呆然としたまま、立ち尽くしていた。

エレクトロ電撃・風力使いで心理系能力を持つ空間移動。テレポーターそんな多重能力、デュアルスキルありなのか。あり得ていいものなのか。

ぼんやりと、ベンチを眺めながら、上条は考えていた。

3（後書き）

備忘録：僕っ子が僕という呼び方を気にしてるのがイイ

4 (前書き)

むぎのんきたー！ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね！縦書
き形式推奨！

第七学区は様々な学校や寮が集まっている、学園都市の居住区のような区域だった。

学生向けのファミリーストランやコンビニエンスストア、ゲームセンターが所狭しと並んでいて、学校帰りの学生達が寄り道したがるような造りをしている。

そういったなかに、死角と言うべきか、時々ぎよつとするほどの人物がごく普通に集まり、重要な案件を話していることがある。黒服の男が胸ポケットの辺りを膨らませて傍らに立っていたり、見るからに嚴重なロックのある入口ならば、なにも知らない一般人は災厄を忌避して逃げ出せただろう。

だが、不幸なことに、そこは平凡なファミレスだった。それなのに闇の部分が見えている。一般人からすればたまったものではない。

町の外れでもない、大きな通りに面した普通のファミレス。正面にはコンビニがある、どこにでもあるような店だ。その店内のひとつのテーブルに、少女が四人座っていた。

お嬢様らしい振る舞いの少女もいれば、ジャージ姿でぼんやりしている少女もいる。四人が手にしているのはそれぞれまったく関連性がないものだが、なぜか会話は繋がっている。

「んで、結局なにが言いたい訳？ サバ缶は最高だけどさ」

言ったのは金髪碧眼のフレンド。サバの缶詰めについてこだわりがあるらしい。なんでもサバ缶は大分産関サバ缶詰め？サバ三昧？がブランドとかで、一缶八〇〇円もする？サバ三昧？を箱買いした

と嬉しそうに語っている。しかしフレンドが口に行っているのはカレーだった。わけがわからないが、気にすると負けらしい。

「サバ缶の話なんて超してないんですよ。てかどっからそんなお金手に入れたんですか？」

噛み付いたのはフレンドより四、五歳若い絹旗最愛^{きぬはたさいあい}。手にしたのは映画通でも持っていないようなコアな映画を特集した雑誌で、テーブルの上にはすでに読み通した？ムービーライナップ？とタイトル付けされた週刊誌があった。

「もしかして身体売^{からだうり}っちゃいました？ 超事件の臭いがしますね」

「ぶふっ！ カレー噴き出すところだったし！」

フレンドがおしぼりで口元を押さえる。絹旗はいつしつしと雑誌から目を離さず笑った。

「誰がこんな幼児体型を買うのよ。そもそもサバの話なんてしてないんだから、掘り返さなくていいの。私が持ってきた話はスキルジヤンパーのことよ」

呆れたようにシャケ弁当を箸でつつくお嬢様風の少女は麦野沈利^{むぎのしずり}。目の前のコンビニで購入したシャケ弁当を堂々とファミレスのなかで食べる彼女だが、店員は注意する様子がない。一般客とは違って、店員はこの四人組の危険性を理解しているからである。

このファミレスは、四人の集会場だった。

「ふれんだでも・・・買う人はいるよ。元気だして」

「なんなのその間！ 結局私は幼児体型ってか！」

カレーを掬っていたスプーンを噛み締めるフレンダをぼんやりと見つめる黒髪の少女は、たきつぱりこう滝壺理后。ジャージ姿の少女だ。手にはなにも握られていないが、ソファに手足を投げ出し大の字になっている。無気力や脱力、というのが傍から見ていただけでわかった。

「だあかあ。話を脱線させないで。まとめて吹き飛ばしてやるうか」

麦野が箸の先をフレンダに突き付け、それから順に絹旗や滝壺に突き付けた。それを見ていたのはフレンダだけだが、テーブルは水を打ったように静まり返った。

「スキルジャンパーについて、？上？から指令が来たのよね。私個人にだけどさ」

「スキルジャンパーって映画のタイトルじゃないですか。あの超B級C級臭が凄かったくせに大ヒットしやがった映画」

食いついたのは映画通である絹旗。麦野は箸でシャケを突きながら、絹旗を見た。

「なんでもスキルジャンパーってのは実在するらしいのよ。映画はそれをパクったというか、モチーフにしたらしいのよね。だからスキルジャンパーが公式の呼称？」

「そういうものですか。ま、どうでもいいんですけど」

聞いたのはおまえだろ、と麦野は内心いらっとするが、シャケを

口に含むと和んだ。

「指令って、具体的には？」

「突き詰めたら、抹殺。いや、正確には抹消かな？」

フレンドの問いにすんなり答える麦野。フレンドの方もたいして気に留めていない。向かい合っている二人に関しては、話を聞いているのかもあやしい。

「結局、いつも通りのお仕事って訳じゃないか。しかも麦野個人の仕事に、私達が手を出す必要あるの？」

「抹消っていうのが、超引っかかりますけどね」

週刊誌を見ているはずの絹旗が、ぼつりと呟く。フレンドが目を向けると同時に目を星にして、鼻息荒く記事に食い付いていた。「このC級っぱさがたまりませんねどう思いますか滝壺さん！」と隣の大字になっっている少女に話しかけるが、その滝壺もトリップの最中か、うんうんとしてしか答えなかった。絹旗も返答を期待していたわけではないらしく、また記事とにらめっこを始めている。

「そう。抹消なのよ。抹殺ならわかるけど、抹消。そんなの、特殊ルフォースアンチスキル部隊とか警備員上層部とか、椅子にぼーっと座ってるだけで給料が入る馬鹿どもの仕事じゃない？それに、私に抹消を依頼したって駄目よ。穏便に済ませられると思わないし」

たしかに、と三人は肯く。満場一致という奴だ。

「それで、今回皆に集まってもらったのは、スキルジャンパーにつ

いて情報を集めたいからなのよ。そもそも二、三日前には名前も知られていなかった奴なんて、実在するかどうかもあやしいじゃない。実在するにしても、居場所は掴まないと。逃げる鼠ねずみを追うなんてごめんだからね」

「それで私達に応援要請ですか。超ださいですね」

「ださくたつて構わないわよ。時間と労力の無駄遣い防止。協力してくれるわよね？」

「ええ」

絹旗はさも面倒そうに麦野を見る。フレンダもじっとした目で麦野を見ている。滝壺は焦点の定まらない目で、宙空を眺めているだけだった。

「あのね。私はリーダーなの。電話の向こうとやりとりするのも私。あんたらの面倒見るのも私。それなのに個人的にお願いしたら嫌だつて？ ふざけてるわね。消し炭になりたい？」

滝壺の表情が変わる。能力者が力を発揮しようとすると、AIM拡散力場に影響が出る。滝壺はAIM拡散力場の流れを読む能力を持つていたから、いち早く反応したのだ。

ようするに、麦野は本気だ。店もろとも少女達を吹き飛ばす。そのために能力を使おうとしている。滝壺に続いて事態を飲み込んだ二人も、声を失くした。

「それで、協力するの？ それともしないの？」

協力すると言ったのは滝壺だった。二人もやれやれと追従する。

ようやく麦野は笑みを取り戻し、シャケ弁当に手を付け始める。

「でも、別に大したことじゃないわ。？スキルジャンパー？に関する情報をかき集める。居場所や能力、過去、場合によっちゃ弱点となる情報も幅広く募集する」

「抹消に関して本人に殴り込みは？」

「したければしてもいいけど、？上？から怒られそうだしなー。あくまでも私にソイツを殺させたがつてるっぽいし。それにもし実在すれば、そう簡単に倒せないでしょうよ。なんせ？あらゆる能力を扱う多重能力者？なんて呼ばれてるんだから」

「？デュアルスキラー多重能力者？ですか。超胡散臭いですけど」

「私だって信じちゃいないわ。レベル6でもあるまいし。むしろ私の能力が使えるのか試してやりたいところよ」

麦野はつまらなさそうにシャケ弁当の漬物を口に放り込む。途端に、顔色が変わる。

「ぐあーッ！しまった！レンジで温めたから漬物が温かい・・・」

「そんなこと、最初から超わかるでしょ。というか毎度のことなんで私は突っ込みませんが」

「きぬはた、それ、突っ込んでる」

「へっ？ 私なんか突っ込んでます？ 昨晚は激しかったですから」

ね」

そう言って短すぎるスカートをたくし上げ、下着越しに下腹部を摩る。そうじゃない、と滝壺はぼんやりとしながら付け加えた。女子だけの空間ならではの会話とノリだった。

「下品ねー。ま、どうでも良いけど。下着見せるなら脱いでストリップでもしなさいよ。その方が青春真っ盛りな男どもは食い付いてくる。そうね、あっちの集団にチップでもせがんでみれば？ 幼児体型でも、買ってくれるかもしれない」

麦野の言葉に、フレンダがびくつと震える。わなわなとスプーンを握り締めるフレンダは、横目で声の発信主を睨んだ。一番お嬢様っぽい格好なのに、一番性質が悪いのは麦野であることをフレンダは理解した。

麦野がにやりと笑って、胸を強調するようにテーブルに肘を置いているからだ。フレンダの目測では、少なくともD以上はある胸。幼児体型ではない。むしろ巨乳の分類にリーチをかけているではないか。おまけに、麦野はスレンダーである。出るべきところは出て、それでいて細いという理想的な体型をしている。フレンダは、完全に敗北した。

「わかった！ 結局脱げばいいんだろ！ 脱ぐさ！ 脱ぐともさ！」

「おお！ フレンダさんがなにやらやる気ですよ！」

「あはは。やれやれー」

真っ赤な顔で上着を脱ごうとするフレンダが店員に取り押さえられる様を、二人は笑いながら眺めていた。残った滝壺はコップの水

を口を含むと、ごくりと喉を鳴らし、恍惚とした表情を浮かべている。

彼女らは？アイテム？。

学園都市の表に出せない問題を陰で解決する、暗部組織だった。つまり、スキルジャンパーは表沙汰にできない問題事ということなのだ。

だが、この指令は？アイテム？に送られたわけではなく、麦野沈利個人に送られたもの。それがどういう意味を示しているのか、麦野は薄々勘付いていた。

これは、学園都市の新たな実験かもしれない。
アクセラレータ

一方通行に与えられた？絶対能力進化計画？と同程度の規模の、秘密実験。それはつまり、それだけの恩恵が麦野にあるということになる。

ターゲット
目標は？レベル6？に限りなく近い存在。

どうやってそんな奇特な存在が生まれたのかわからないが、おそらく上層部はスキルジャンパーを見限った。見捨てていなければ、手元に置きこすれど抹消などと命じたりしないだろう。抹消という言い方をする辺り、実験の失敗作か、脱走した実験体のどちらか麦野沈利に抹消を依頼した。アンデスキル警備員や他の軍装備を搭載した荒事担当の暗部部隊ではなく、麦野沈利個人に。それが意味することを考えると、狙いは絞られてくる。

？アイテム？を利用するのは労力削減などではない。目標のもとへ真っ直ぐ行って真っ直ぐぶっ飛ばしていればそれで済む話なのだ。むしろ、より面倒な道を歩もうとしている。

今回の指令は、少し気になることが多すぎる。裏を探りたくなるのも仕方ないのではないか。

？上？は麦野に事情を教えないのではない。問うたが、突っ返され

た。つまり隠している。

影響がない人物には情報を隠す必要がない。隠すということは、なにかしら悪影響があるということだ。？アイテム？は統括理事会直属の集団で、機密レベルは低くない。その暗部組織に伝えられないとなると、？絶対能力進化計画？よりもとんでもない実験ことなのかもしれない。

（そのとんでもない計画を支えているのは、？樹形図ツリーダイアグラムの設計者？かしら。裏を取るのは、まずそこからかね）

麦野はフрендаと店員が揉め、絹旗が野次を飛ばす喧騒のなかで、小さくほくそ笑んだ。実験だろうがなんだろうが、仲間が多いに越したことはない。？アイテム？も利用させてもらう。

自分に返ってくる？恩恵？の正体。ぼんやりとだが、見えている。

レベル6への一歩。

そうでなければ、抹消する役が麦野である必要がない。

（さて、とんとん拍子に情報整理できて我ながら恐ろしい。どう動くべきか、もつと頭を捻ひねらないとね。どうせ、私だけに指令が来たわけじゃないでしょうし。あの忌々しい奴らも、暗闇で動き始める・ふふっ、楽しくなってきた）

握っていた割り箸が、音を立ててへし折れた。力がこもったのだ。これほど胸が高鳴ったのは、いつぶりだろう。麦野は楽しくて仕方なかった。

麦野沈利つしり。学園都市暗部組織？アイテム？のリーダーにしてレベ

ル5 第四位。

人は彼女のことを、
？^{メルトダウン}原子崩し？と呼ぶ。

4 (後書き)

備忘録：ゴメン麦野より絹旗派なんだ・・・

5 (前書き)

御坂は主人公じゃないです。うそじゃないっす。縦書き形式推奨っす。

御坂はどうしても天使を忘れられなかった。
みさか

風紀委員である親友の白井と初春に頼み込む形で、風紀委員一七
ジャッジメント
七支部に顔を出しては調べてもらっていた。

これは事件ではない。当然、なんの許可も下りない件だ。御坂の個人的な人探しに風紀委員の権力を行使することはできない。だから固法には内緒で、初春に書庫をハックさせ、柵川中学全校生徒のデータを用意してもらった。
このり
バンク
さくがわ

ヒントと言えるのは、柵川中学の制服と、御坂が見た赤髪と、その顔立ちだ。ならば書庫にある柵川中学全員の顔を確認していけば、いずれ見つかるはずだ。新たなスキルジャンパーの情報がない今、御坂の胸のもやもやを晴らす方法は、これしかなかった。

だが、被疑者でもない一般人の個人情報を露呈するのは、風紀委員として失格である。御坂が目の下に隈をつくり、頭を下げる姿を見るまでは、白井も初春も認めなかった。
ジャッジメント

初春の指の動きが、いつもより少し遅い。躊躇の色があるのは、明らかだった。事件であるなら、簡単に晒しただろう。だが事件ではないのだ。存在するのかわからないスキルジャンパーのためにいち中学校の情報を開示するのは、気が引ける。初春が正義感強い少女だからである。白井も渋い表情をしていた。

「ほんとうに、いいんですね、白井さん」

「……かまいませんの。このままでは、お姉様が倒れてしまいますの」

スキルジャンパーに興味がないわけではない。

存在すればレベル6に最も近い存在と呼べるのだ。

書庫を騙し、学園都市の目を欺いて生き延びているということになる。

前代未聞どころか学園都市の技術力が疑われかねない事態。風紀委員としてではなく、学園都市在住の学生として、解明したい話題に違いなかった。

そのために初春や佐天を含め、六〇〇名を超える生徒の情報を提供する。

初春には、腑に落ちない条件だった。六〇〇名のほとんどが無能力者や低能力者。そういう情報を知られたくないと思う人物も多いはずだ。初春自身が低能力者であるからこそ、わかる。

情報を不正に開示されれば、町を歩いているだけで「あいつは低能力者だぞ」と笑われるかもしれない。それは、悪夢だ。もちろん御坂を信用していないわけではない。だが、御坂の要求を飲めば、これからも公開する必要が出てくる。友達だからと御坂のわがままを受け入れ、大多数の低能力者達の気持を無視するのは、初春にはできなかった。

レベル5が大多数のレベル0やレベル1の情報を得る。顔と名前を知る。それは、やはり初春にとって望みたくない状況だった。低能力者のコンプレックスだろうか。

「白井さん。やっぱり、やめましょう」

「ここまで開いたんですのよ。あとワンクリックじゃありませんの」

「背徳感が……いけないと、思ってしまいます。胸が締め付けられて苦しいんですよ」

白井が初春の顔を覗き込む。汗が額から滴っている。思い詰めた表情。この情報を開けば、初春は背徳に押し潰されるかもしれない。データハッカーとしての矜持や責務がある。データハッカーでなければ、初春は風紀委員でいられないのだ。初春は所詮レベル1の低能力者である。

白井は思った。初春は、このままでは心にしこりを残す。そんなことをするために風紀委員になったのではない、という思いを抱き続ける。己の正義に疑問を抱く。それは致命的だった。特に、初春のような正義感が強く、正義感を抛り所に行っている子には。

白井は断ろうと思った。目を御坂に向ける。

御坂は、少しやつれていた。頬が削げて、目下には隈がある。

白井と御坂は常盤台学生寮の同室者であった。白井は、御坂がいかに夜を徹してスキルジャンパーを追っていたのか、知っている。暗闇のなかでパソコンにかじりつく御坂を、庇ってやりたい。素直に、そう思っていた。

それに御坂も情報を開示させる罪悪を理解していた。それによってどれだけ白井や初春が傷ついてしまうのかも、理解していた。

それでもなお、知りたい。彼女が御坂美琴であるから。

白井はどうするべきか、悩んだ。初春も御坂も大切な友人で、どちらかを傷つけてどちらかを救う真似はしたくないのだ。しかし、どうすれば。白井は、悶絶した。

「こんにちはあ！ 初春いますかあ！」

元気な声がした。佐天涙子。部屋の空気を、一新した。

白井はしめたと身を乗り出し、佐天を奥に誘った。佐天の登場に

際しても、御坂と初春はそれほど反応しなかった。

「なんか暗いですねえ。あ、御坂さん。こんにちは！」

「佐天さん……」

「わ！ 隈できちゃってる！ なにか悩みごとですかあ？」

佐天は定位置にバッグを置き、御坂や初春の方に駆け寄った。ディスプレイ上にある、柵川中学校全校生徒資料の文字。佐天はへえと覗き込んでいた。

「もしかして、例のスキルジャンパーの件ですか？」

「ええ、そうよ。私が気になって、初春さんに頼んでみたんだけど……駄目だったみたい」

初春は、泣きそうな顔をしていた。

初春の正義感を貶めてまで自分の意見を貫くつもりは、御坂にはない。

隈を指で撫でながら、また別の方法を考えるわと御坂は呟く。

その仕草が、初春には涙を拭っているように見えたらしい。静かに、初春は涙を流し始めた。

初春は優しい。意固地になる御坂を追及することもせず、己を責めるだけなのだ。腑に落ちないと言っても、御坂を無下にしたくないと、涙を溢す少女だ。

御坂がどうしてあり得るのかもわからないスキルジャンパーに固執するのか。その理由を誰も知らない。白井ですら知らなかった。知る必要のないこと、と言えばそれまでだが。

あの夜の実験を知っているのは御坂と上条当麻、一方通行の三人だけ。

統括理事会含め、学園都市上層部はレベル6に執着している。学園都市の目的そのものがレベル6なのだ。

そして、恐ろしい実験が行われた。

？絶対能力者進化計画？と呼ばれる、残虐極まりない実験である。

御坂はその才能を見込まれ？量産型能力者計画？の被験体となっていた。ようするに、御坂美琴の細胞からクローンを生み出し、レベル5を量産しようとした実験のことである。

ところが完成間近になって？樹形図の設計者？の予測演算により、クローンが本体の御坂美琴のスペックのパーセントにも満たない欠陥体ということが判明。計画は凍結した。

そして実験が凍結したにも関わらず御坂のクローンたちが大量生産され、御坂の知らないところで？絶対能力者進化計画？が実行されたのだ。

計画の概要は、学園都市レベル5序列第一位の超能力者である一方通行が設定された状況下で二万体を超える御坂クローンを殺害することで、レベル6に覚醒する、というものだった。その演算をこなしたのも？樹形図の設計者？である。

結末は、一方通行が御坂クローンを一万体以上殺害したところで上条当麻という少年が実験に介入し、一方通行を打ちのめすことで？樹形図の設計者？の演算ミスということにさせ、計画を頓挫させた。つい一昨日のことである。

一万ものクローンたちは救われた。しかし、一万はすでに殺害されているのである。御坂にとって、それは許せないことだった。騙されるような形であれ、その妹達を生み出した自分は、絶対に許してはならない。

だから、レベル6という言葉を、御坂は見過ごすことができない。もし、あの恐ろしい計画が再び行われていたら。

もし、自分と同じように騙されて、悲劇が起こっているとしたら。

——止めるしか、ない。

御坂が思うのはそれだけだった。上条に救われた時、そう誓ったのだ。

「あーもう、泣かないの、初春！ 御坂さんも、これ飲んで落ち着いて！」

そうやって、またいつの間にか淹れていたコーヒーを、二人に手渡す。

佐天は気が利くのか利かないのか、よくわからない娘だった。ただ元気があって、周りの人間を明るくする不思議な力がある。それが佐天涙子の良いところだった。

「事情は全然わかりませんが、この前言ってた？ スキルジャンパー？ の件。私もちょっと調べてたんですよ。それで、見つけました」

ほんとうか、という三人の驚愕の声を受け、佐天は得意げに笑う。

「御坂さんが言ってたじゃないですか。一人称が？ 僕？ だって。それを我が佐天コミュニティを通して情報収集したんですよ」

「佐天コミュニティ？」

「ああ、井戸端会議みたいなもんですよ、御坂さん」

「うーいーはーるー！」

佐天コミュニティ、という情報網があるらしい。

佐天いわく、女子は人数が増えると派閥を生む悲しい生き物である。佐天はあえてその派閥に身を置かず、イオンのように初春とふらふらすることで、パイプ役になっているのだ。

そして派閥というものは横よりもむしろ上下で強く結びついていて、各派閥を上手に用いると、学年の壁を取り払ってくれるため、情報収集が格段にやりやすくなる。

佐天を中心にそういうパイプ役のイオンが集まったもの、それが佐天コミュニティ。とりわけ今回のような人探しなどには有効である。

佐天はコミュニティを使って、一人称が「僕」である女の子を柵川中学全体で調べ尽くしたようだ。二年生と三年生にまで情報の手は伸び、該当者を見つけ出したのである。

「柵川中学二年生、東雲鏡^{しのめがみ}。この人は淡い赤髪で、僕っ子らしいです」

「赤髪で僕・・・間違いないわ！ 東雲、鏡・・・！」

御坂の目付きが変わった。

個人を特定する情報を仕入れるのは同じ学校でも苦勞する。しかも個人を特定しようとすると、たいてい庇う人が出てきて、特定を阻むのだ。

白井が佐天によくやってくれましたわ、と感謝する。初春も、佐天のがんばりを聞き、一度だけ肯いた。

全校生徒の情報ではない。ひとりだけだ。個人の情報に変わりはないが、御坂の思いを裏切りたくない。そして佐天の努力を無駄にしたくない。佐天は初春の罪を軽減するために、がんばってくれた

のだ。

・・・佐天がそこまで考えて行動したかはわからないが、結果的に初春の罪は軽減された。初春には、それが嬉しかったのだ。

初春の指が動き、エンターのキーを、打った。

「——出ました。東雲鏡。その能力は・・・っ」

初春が言葉を失う。ディスプレイを覗き込んだ三人も、言葉を発することができなかった。

そこに映っていたのは、たしかに御坂が見た少女だった。淡い赤髪で、大きな瞳、誰が見ても愛らしいと思える顔立ち。しかし、その能力レベルは・・・。

「まさか、そんなわけあるはずないじゃない！　だって、こいつは宙に浮いたのよ！　一瞬で姿を消したのよ！　それなのに・・・ッ！」

御坂が叫んでいた。空想と言われたレベル6の手がかり。

初春は目を泳がせ、面を上げようとしない。白井は、腕を組んだ。腕章。額から、汗が滴る。佐天も眉を顰^{ひそ}めて、ディスプレイを凝視していた。

誰もが、この状況を理解できていないのだ。

【柵川中学二年　東雲　鏡　能力レベル0　無能力者】

5 (後書き)

備忘録・ういはるぺろぺろ

6（前書き）

この俺一方通行が満を持しての登場だ。縦書き形式推奨だッてよオ、くっだらねエ。

病院の診察室。

淡い赤色の髪をした少女、東雲^{しのめ}は椅子から立ち上がる。目の前のカエルに似た顔をした医師が、お疲れ様と一言入れた。

「最近、調子が良いみたいだね。噂を耳にしているよ。けど、あれはあまり他人に見せて良いものじゃないね」

「・・・ははは、でしょうね」

東雲は定期的に診察を受ける必要があった。それは東雲の能力と大いに関係がある。

「しかし、今でも驚きが隠せないね。君の脳、その筋の人からすれば垂涎^{すいぜん}ものの逸品だろうね」

「うう、普通に恐いこと言わないでくださいよう」

「わかってると思うけど、これは忠告でもあるからね。君の秘密がばれると、イコール君のピンチだ。もっと言えば、脳が危険な立場に置かれるね」

東雲は苦笑しながら、医師に頭を下げ、帰りますと告げる。立ち上がり、出口に向かって歩き出す。その間もカエル面の医師は、手を腰に当てたままだった。

「東雲君。もしかして？上？から指令でも下りてきたのかね」

「・・・どうしてそう思うんですか、冥土ヘウンキャンセラー歸し」

「君は焦っているね。この数年間、能力を秘密にし続けることができていた君が、最近になって能力の露呈を許している。君は心理掌握メンタルアウトの能力も使えるはずだ。今まで露呈しなかったのは、心理掌握の力の一部を使って記憶を改竄かいざんし続けていたからだろうね？」

「普通に驚きました。そんなこと、口走ったことはないはずなんですけど」

「僕は医者だよ。患者の素性、行動、思惑。すべて把握しておかなければ、適切な治療はできないね」

「あはっ、さすが冥土ヘウンキャンセラー歸しです。普通に隠し事はできないというわけですね」

東雲は、振り返り、ほほ笑む。はかな儚げで、普通の少女となんら変わらない、可愛らしい笑み。冥土ヘウンキャンセラー歸しは、口角を下げる。

「東雲君。君はわざと能力をレベル5達に見せびらかしているね。その奇蹟の力を。未元物質ダークマターにも超電磁砲にも存在を明かしている。それで、君がやりたいことは一体なんなのかね。統括理事会の人間は、なにを企たくらんでいるのか」

「冥土ヘウンキャンセラー歸し。あなたは、医者です。僕とは役割が違うのです。だから、詮索せんさくはやめてくださいませんか」

「その脳は貴重だ。偶然に偶然が重なって生まれた産物。君という存在自体が奇蹟だと僕は思うね。たしかに僕は医者だ。けどね、君

の担当医師でもある。知る権利があると思うがね」

ヘウンキャンセラ
冥土帰しは、机の上の書類をまとめている。出口の扉にかけた手。
東雲は、背を向けたまま黙っていた。

「君の存在を隠蔽^{いんぺい}してきたのは君の特異な能力であり、口を閉ざしてきた僕であり、統括理事会や諸部署でもある。君の存在を隠蔽しておくべきだと判断したからだ。その統括理事会から指令が下っている。そして君は自らを隠蔽^{いんぺい}することを止めた。これでは、僕だけが宙ぶらりになるね。ぜひ、知りたいものだよ」

「先生には普通にお世話になっていきます。そしてもう少しの間だけ、お世話になると思います」

「・・・もう、少し？」

ヘウンキャンセラ
冥土帰しは椅子に深く腰掛ける。東雲が、少し柔らかい口調で告げた。

「理論上にもみ存在するレベル6へのヒントは僕にあると、学園都市統括理事会は判断しました。研究所での実験だけでは発展を見せなかった僕に普通に見切りを付けたのかもしれないね。とにかく、統括理事会は僕にひとつの指令を下しました」

東雲は、首だけを回し、医師の方を見た。その両眼から、光る滴が垂れる。

「学園都市のために死ねと——」

診察室の扉が開く音はしなかった。東雲の姿は、もうそこにはない。

レポート
空間移動。

ヘウンキャンセラ
冥土帰しは、まとめた書類を眺めながら、深く息を吐いた。

「まったく、統括理事会も残酷な決定をするね。けれど、なんとなく話は呑み込めた。よく、話してくれた。また、僕に助けて欲しいんだね、東雲君」

ヘウンキャンセラ
冥土帰しは立ち上がり、歩き始める。携帯電話を、懷から取り出して。

アクセラレータ
一方通行。その名を聞けば、子供も裸足で逃げ出す。

人口二三〇万の学園都市にたった七人しかないレベル5の超能力者。その七人のなかでも順位付けがなされている。

アクセラレータ
一方通行は、序列第一位のレベル5。ようするに、学園都市最強の超能力者ということである。

・・・正しくは、最強だった、と言うべきか。

「クソが。面白くねエ」

愚痴を洩らしながら、アクセラレータ一方通行は第四学区の通りを歩いていた。

食事くらい、普段なら寮のある第七学区のファミレスで済ませるのだが、どうにもこの白髪赤眼は目立つのか、町の不良どもが襲撃してくる。おちおち食事もしていられないのだ。それが煩わしくて、わざわざイタリアンとか、フレンチとか、金持ちや外国人の喜びそうなレストランが並ぶ第四学区まで足を延ばしている。雑魚を

相手にするのは、徒勞でしかない。

学園都市最強の一方通行に喧嘩をふっかける者は、数日前まではいなかった。それが、ツンツン頭のクソ野郎に負けてから、喧嘩を売られるようになった。まるで腕試しの感覚で、前を塞いでくる。最初こそ面白いと思って叩きつぶしていたが、そのどれもがレベル0か1くらいのカスみたいな連中ばかりで、とうとう一方通行も嫌気がさしたのである。

雑魚に使う物理演算が、もったいない。

どうしようもなくイライラしたまま、一方通行は手近にあったレストランに入った。目を閉じていたから、こういう店かも確認せずに。

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

呼吸を、忘れた。

一方通行の眼前に現れたのは、フリルのついた丈の短いスカートを履いて、縞模様のニーソックスを強調し、いかにもその手の男が喜びそうなメイド服を着たウェイトレスだった。ほんの一瞬だが、思考が止まった。演算能力も失っていたのではないか、と思う。

「・・・ああ？ ナメてんのか、てめエ」

一方通行が赤い目を細め、眉間に思い切り皺を寄せる。目の前のゴスロリメイドは少し怯えたのか、両手を胸の辺りで構え、瞳を潤ませた。

「う、ごめんね、お兄ちゃん。あたし、なにか気に障った？」

メイドウエイトレスがもじもじと謝罪する。アクセラレータ一方通行には、それがどういう意味を示すのか、理解できない。

（お兄ちゃんだア？ 殺されてエのかこいつ）

アクセラレータ状況を飲み込めない一方通行の目が、なにか状況を判断するに足る情報を求め、動き回った。どうにも、店内全体がそういう雰囲気である。他の客に対しても、お兄ちゃんと声をかけ、生意気に馴れ馴れしく話しかけているようだ。

そして、決定的な言葉を見つける。

「メイドレストラン・・・？ なんだよ、それ」

アクセラレータ一方通行の言葉を聞いて、なるほどと妹系ゴスロリメイドはぱつと明るく笑う。

「そっか！ お兄ちゃんこういうお店はじめてなんだね」 じゃああたしが説明してあげるっ」

女の猫撫で声は、嫌いだ。ベクトル調整をしていても、背筋がぞぞつとするのだ。そういう感覚に慣れていないからかはわからないが、とにかく嫌いだった。

「いらねエよ。レストランと言うくらいだから飯は出るンだろオナ」

「え、あ、うん」 今オススメなのはオムライスで」

「なら、それ持ってこい」

「はい」 ランチタイムなので、もれなくサービスが」

「さっさと行け！」

半ば怒鳴りつける形で、メイドを奥に下がらせた。その怒声が本気のものであったため、店内がしーんと静まりかえる。視線が自分に集まっているのを感じ、一方通行は睨み散らすように辺りを見た。それで、視線を合わせたくないからか、自分に向いていた視線は消えた。

アクセラレータ
一方通行は一番奥の窓際に近いテーブル席に、勢いよく腰を下ろした。

クソつまらねエ。

喉の奥で、呟いた。外に漏れているかどうかはわからない呟き。ひそひそと自分を見て話をする高校生くらいの野郎どもがいて、一方通行がそちらに目を向けると、慌てて視線を外した。

アクセラレータ
うざったい。度胸もないくせに、他人をとやかく言うンじゃねエよ。一方通行は今すぐにでもその男たちの前に行って、叫んで、潰してやりたかった。こういう奴らを見ていると、むしろくしゃしてくるのだ。

昼間ということもあって、面倒は避けた。そもそもこの学区に来た理由は面倒を避けるためなのだ。自分で面倒を起こしていれば、苦労しない。

また、さっきの男どもの視線を感じる。ほんとうにうざったい。生き物の視線というものはベクトル調整でどうにもならない。波や粒子という実体を持ったものではないからだ。音だけは反射できるので、せめてそいつらの内緒話が耳に入らないように調整した。

アクセラレータ
学園都市最強の能力者、一方通行。その能力は？ベクトル操作？。世に存在するすべての運動する物体にはベクトルが存在する。さ

らに言えば光や音、紫外線、宇宙線など触れることができない波、粒子を素にする物にも、ベクトルが存在する。アクセラレータ一方通行はそのベクトルを操ることができるのだ。

たとえば、高温の炎やレーザー光線。熱のベクトルを外側に向けることで、効かなくなる。弾丸などは言うまでもなく、スナイパー狙撃手がトリガーを引いた次の瞬間には狙撃銃が跳ね返った自らの弾で爆発する。反射とは厳密に言うとは異なるが、簡単に説明すると、あらゆる攻撃を反射することができるという能力だった。

また、攻撃に際しても絶大な威力を持つ。たとえば小石を蹴りあげる。本来小石は空気との摩擦などで減速しようとするのだが、その減速に働く力のベクトルを標的に向けてやれば、ただの小石は弾丸並の速度と威力を持った兵器になる。おまけに正確に演算されたベクトル調整は、一介のスナイパー狙撃手が青さめるような精度を誇るのだ。

そして触れるだけで相手の血流のベクトルを反転させ、内部で爆発させることもできる。

まさに無敵と呼んでいい能力。学園都市最強を謳っていられるのも、その絶対無敵の盾があるからなのだ。

「・・・だが、最強ではなかった。無敵ですらなかったってのかよ、クソが」

アクセラレータ

一方通行は、悪態を吐く。

？絶対能力者進化計画？に乱入した、あのツンツン頭で、熱弁を垂れる男。

シスターズ

クローンである御坂達に、命の価値やらを語っていた。一方通行アクセラレータには、その意味がわからない。わかりたいとも思わなかった。

詭弁だ。妄想だ。漫画の読み過ぎだ。率直な感想としては、それだけだった。

学園都市最強である自分に立ち向かうと言う。なんの能力も持たず、挑んできた。

だから、叩き潰そうとした。勝った方が、正義だ。喧嘩は、争いは、そういうものだ。アクセラレータ一方通行はツンツン頭をなぶ蹴り殺すつもりだった。

その男は、ベクトル操作しているアクセラレータ一方通行を殴り飛ばした。演算機能に狂いがあったわけではない。ただ、その右手で、力の限り殴られた。

気付けば、自分はベッドの上だった。負けたのだと、誰に言われずともわかった。

視界の端に映る、オムライス。はし心配そうにこちらを見る妹メイド。目を潤ませているのは店のサービスだろうか。さきほどとは別の奴だが、しきりになにか呟いている。

(おっと、ベクトル操作・・・と)

アクセラレータ一方通行はベクトル操作し、音の反射を解除した。

「だいじょうぶ、お兄ちゃん？ 考え事してるの？ ね、僕がわかる？」

どうやらこいつはくだらないことを延々と呟いていたようだ。

しかも女のくせに僕と呼んでいる。どうやら特殊なお客様に対応しているらしい。

アクセラレータ一方通行は奇妙な生き物を見るような、どこかで蔑んだ目をウェイトレスに向ける。

「お兄ちゃん、今ならなんとふゝふゝサービスがあるんだようふゝふゝする？」

脳の血管がいくつか切れたような気がした。怒りを通り越して、呆れる。

この白髪で赤眼の、口調が汚く人相の悪い男が、肉親でもない偽の妹ゴスロリメイド女にふくふくしてもらいたいように見えるのか、理解の範疇を超えている。そういうサービスがあるからとはいえ、客を選べよと言いたくなつた。むしろそのサービス精神は、評価するべきなのだろうか。

「いらねエ」

「あーん、そう言わずにふくふくしようよ」

「いらねエつつつてンだろオが！」

アクセラレータ
一方通行はテーブルを力強く叩く。ドンという音はするが、ベクトル操作はしていないから、砂場の城のようにテーブルが崩壊することはなかった。

そこそこ、本気でキレた。全力でキレたわけではないが、これ以上馴れてくるのは我慢ならなかった。こっちは謎のツンツン頭のことを真面目に考えているのだ。

アクセラレータ
一方通行は顔を上げず、早くメイドウェイトレスがどこかへ行くのを待った。店内の客は、静まりかえっている。それも当然だろう。

「・・・ふ、ふふっ」

静かな、笑い声。

声は、さっきのゴスロリメイド女のものだ。ただ、冷たい。

この冷たさは、よく知っていた。

「——ッ、上等オ！」

アクセラレータ

一方通行は叫びながら、勢いよくウェイトレスの顔をわし掴もうとした。

この冷たさは、？殺気？だ。

（どこのクソ女だか知らねエが、愉快に顔面爆発させてやンよオ！）

アクセラレータ

一方通行は喜んでいた。敵が現れたのだ。昼飯は台なしだが、その欲を満たす奴が現れたと思えば、安いものだ。

時間にしても数秒だったと思う。腕が伸びきったところで、女の顔を掴み、ベクトル操作をして、トマトみたいに頭が弾けていたはずなのだ。

それが、なんの手応えもない。店内に喧騒もない。どうなっている？

アクセラレータ

一方通行は伸ばした右腕に隠れて見えない死角——脇腹の方に殺気を感じた。

「相変わらず短気だね、お兄ちゃん？」

向かい合った席に、そいつはいた。

いつの間に座ったのか。いや、座る動作などしていなかった。それに座ろうとしていれば、この右手が捕まえていたはずだ。それなのに、けろっとした顔で、そこに座している。

少女は力チューシャを外し、光に当たって淡く赤色に染まる髪がふわりと舞った。

「こんな風に出会っちゃうと、もう普通にどうしようもないよね。お兄ちゃん、ごめん」

殺気は薄れている。友達に話しかけるように、そいつは一方通行アクセラレータにほほ笑みかけていた。哀しみがちらちらと姿を見せている。それが、挑発や憐情に見えて、たまらなく腹が立つのだ。

「なんだ、てめエ。テレポーター空間移動か？俺が誰だかわかってンのか」

「学園都市レベル5第一位、一方通行アクセラレータ」

事務的に告げる少女にまた怒りが募る。一方通行は正面の得体の知れない少女を睨んだ。アクセラレータ

「もしてめエがただの雑魚で、俺にかまって欲しくてこんなナメた真似したってんなら、死んでも死にきれない殺し方をしてやる」

「あはつ。それは恐い。じゃあ、普通に用件を伝えましょうか」

「そオしろ。なんの用件だが知らねエが、手を煩わせるだけ、苦しんで死ぬことになる」

アクセラレータ一方通行はテーブルに肘をつき、目を見開いて笑っていた。狂気と呼んでいい、化物の表情。

その時、あの冷たい感覚が戻ってくる。殺気だ。

しかし少女はぴくりとも動いていない。アクセラレータどこからどうくるのか。一方通行は愉しむように、その時を待った。

そして、少女は、にっこりほほ笑む。

アクセラレータ「一方通行。僕と一緒に死んでください」

少女は言い終えるなり、懷から銃を取り出した。
対する一方通行には、アクセラレータ 逡巡しゅんじゅんもない。自らを守る無敵ベクトルの盾がある。
一方通行は腕を振り上げようとした。
アクセラレータ

「——ッ！」

肘ひじから先が動かない。視線を一瞬テーブルに落とした。
テーブルの表面が變形して、一方通行の肘から先にまとわりついていた。

「じゃらくせエ！」

ベクトル操作で、テーブルを強引に引き剥がす。どがしゃと大きな音がした。

目を少女に戻す。アクセラレータ 一方通行の目には、信じられない光景があった。

少女は銃口を自分のこめかみに向けている——。

（こいつ、なんのつもりだ？）

その行為が、一瞬だけ一方通行アクセラレータの思考を狂わせた。

そして響く、火薬の爆発する音。少女はたしかに、自分のこめかみに向けて発砲した。
アクセラレータ

だが、一方通行には見えていた。少女のこめかみを貫き、脳をふっ飛ばすはずだった銃弾は、真っ直ぐと自分に向かつてきている。
どつという原理かは、考える必要もない。特に一方通行アクセラレータは、おそらく学園都市のなかで最もこの状況を説明するのが上手いだろう。

（やべエよ、こいつ、ベクトル操作してやがる）

そう思った時には、弾丸が眉間の位置にあった。

普通の弾丸ならば、アクセラレータ一方通行に届く前にベクトルを操作され、相手に跳ね返っていくだろう。だが、この弾丸は普通の弾丸ではない。一度、少女の身体に当たってベクトル操作された弾なのだ。

すでにベクトル操作された弾を再びベクトル操作できるのか、アクセラレータ一方通行には確証がない。理論的には跳ね返せるはずなのだ。すべてのベクトルが自分に向いていたとしても、ベクトル操作者の手から離れてしまえば、それはただのクソ速い弾丸に過ぎない。音速をはるかに超える速度で向かってくる、ただの弾丸だ。

しかし、それはあくまで理論である。アクセラレータ試したことは、当然ない。ベクトル操作ができる者は学園都市で、一方通行だけのはずなのだ。

（跳ね返すしかねエだろ、学園最強オオオオオオ！）

言葉に出しても間に合わない。脳内で、叫んだ。力の限り吼えた。

弾丸がアクセラレータ一方通行の脳を貫通した、その感覚はない。

だが、違う。跳ね返したわけではない。アクセラレータ一方通行の肌に粟が立った。

アクセラレータ

一方通行の額に、金属の感触がある。銃弾の先端の、固い感触が。そしてそれは皮膚が焼けるほどの高熱を発生して、静止している。

「——熱いかい？ アクセラレータ学園最強」

今になって気付く。ベクトル操作能力に気を取られ、視界が狭まっていたのだ。すぐそこに、少女の腕が見えた。自分の額に、指が触れている感覚がある。

「・・・なんだよ、この手はよオ・・・ッ！」

一瞬の間に、いろいろなことが起こり過ぎている。アクセラレータ一方通行の脳は、現状把握で精いっぱいだった。

なぜ、反射が働かない？ ベクトル操作は正常に行われていたはずだ。それなのに、眉間で静止しているのは、いったいなにが作用した？

そこまで考え、少女の手を見て、絶句する。

（俺がベクトル変換した弾に触れて、ベクトルを修正したのか・・・？）

アクセラレータ一方通行の額と少女の掌がベクトルを修正し合い、やがてベクトルは行き場をなくし、両者に触れ合った状態で静止した。ベクトルの、消滅。

そうとしか考えられない。実際に、自分の額には高熱の弾丸が突き付けられているのだ。

・・・高熱？ アクセラレータ一方通行の喉の奥がひりつく。まさか。

（ベクトルが消滅したわけじゃない！ 弾丸は静止したように見えて動いてやがるんだ！ この高温は——！！）

得体の知れない少女は、刹那、はてしないほど、悲しい表情をする。それが意味することを考えるほど、アクセラレータ一方通行に余裕はなかった。弾丸が、さらに高温になっている。これは細かなベクトル運動に

よって高速回転しているからだろつ。

視界に弾丸がないアクセラレータ一方通行には、弾丸が爆発したようにしか見えなかった。

皮膚の焦げる臭いとはじけ飛ぶ自分の額の肉塊。
赤い鮮血とわずかな煙で視界は染まった。

その向こうで、少女は席から動くこともなく、こちらを見つめていた。

（席すら立たせられずに――）

アクセラレータ
一方通行の意識が混濁する。

実際には弾丸が高熱とベクトル運動に耐え切れず、金属が分解されたのである。そして弾丸が直接触れていた部分と、少女が触れている部分のベクトルは、両者の力が打ち消し合って素面の状態になっていた。

その高熱の破片が脳に近い部分を焼き、皮膚を切り裂き――吹き飛ばしたのだ。

まともな思考をできる方が、異常。

しかし、アクセラレータ一方通行はその異常者である。

「クソ、やりやがったなア！ 俺の額が綺麗に吹っ飛ンじまったぜ
エ！」

少女は一瞬焦るが、素早く後ろに飛び退く。その赤い髪をなび靡かせ、ようやく席を離れた。

店内はすでに騒然としている。少年の額が、吹き飛んだのだから。血も、かなり広範囲に広がっていた。

アクセラレータ 一方通行はタガが外れたような狂喜の笑みを浮かべる。テーブルの残骸に足をかけて、額の傷口を押さえることもなく叫んでいた。

「最高だねエ！ 俺の血で踊れよ空間移動テレポーターアアアアア！」

アクセラレータ 今の一方通行には冷静な状況解析ができていない。ベクトル操作をする空間移動者など存在するはずがないのだ。

アクセラレータ だが、一方通行は笑い続ける。状況など、どうでも良かった。

少女は眉間に皺を寄せるなり、静かに人差し指を立て、自分のメイド服を焼き切った。

よく見れば、手から血が滴っている。少女も、一方通行の力で、額に当てていた手が素面の状態になっていた。アクセラレータ 一方通行ほどでないにしろ破片を受けていたのだろう。

そして、勢いよくメイド服を脱ぎ去る。その下は、ほとんど下着コスチュームといつていいような露出度の高い戦闘服があり、両脇のホルダーに二丁の拳銃が挿さっていた。そしてどこからか出したグローブを手アクセラレータに装着する。

その姿を見て、一方通行はげらげらと笑った。

「なんだア？ 誘ってんのかてめエ！ いいぜエ、殺したら存分に××してやつからかかってこいつてんだ！」

「・・・あいにく、普通にお断りだよ」

少女はにっと笑い、脱いだメイド服を、アクセラレータ 一方通行の視界を覆うように広げ投げた。

「僕の処女^{はじめ}をあげる相手は決まってるから！」

アクセラレータ

一方通行は、直感的に思った。

こいつはここで殺しておくべきだ。

そんな本能に近い指令が、脳から発信され神経を突っ切り諸器官に通達される前に、テーブルの残骸を掴み、投げていた。

ベクトル変換によって、普通ならあり得ない速度で、それは突き進む。

空中に浮いたメイド服を見るも無残に引き裂き、奥にいるであろう少女を狙った。

ドドンという鈍く重い音がする。人体に当たった音ではなかった。少女はベクトル反射を使える。だが、残骸にその気配はない。跳ね返らなかった。

それが指すことは、ひとつしかない。

アクセラレータ

一方通行は獣のような唸り声をあげる。叫びのようでもあり、人間の言葉ではないようでもあった。

力の限り腕をテーブルの残骸に叩きつける。ベクトル操作によって、その残骸は粉々に砕け、床も同じようにひしゃげていた。

アクセラレータ

それから再び、一方通行の言葉でない雄叫びが騒然とする店内に響き渡った。

床に舞い降りるメイド服の切れ端。

奥の壁が残骸によって抉^{えぐ}れているだけで、奴の姿は、どこにもなかった。

6（後書き）

備忘録：打ち止めに会う前のやさぐれ一方通行はむずかしい

7（前書き）

カッコーだろ。勝利宣言をしに来たぜ。ちなみに縦書き形式推奨だつてよ。

御坂は耳を疑った。

「どうにも、きな臭いのですの」

白井黒子が納得できないと眉を顰めている。初春飾利も、口を噤んでいた。

警備員からスキルジャンパーに対する一切の行動を制限・禁止するとの通達が今しがた届いたのである。

第七学区柵川中学周辺に配置された警備員の行動・警備目的の詳細を求め、風紀委員一七七支部から警備員へ伝達を送った直後のことだった。

「どうして狙い撃ちでスキルジャンパーを規制してきたの？」

「掴まれたくないってことなんでしょうけど・・・」

「嫌な予感がするわ、黒子」

「待つて、お姉様。警備員が止めてくるということは、それなりにヤバイ事件ですの。一般人のお姉様が首を突っ込むなんて、この黒子が許しませんわ」

「じゃあ、ここで待つてるだけで事態は進展するの？」

白井は言い籠る。御坂の異様なまでの執念の原動力を、彼女は知らない。知らないが、そんな御坂を否定することもしなかった。御

坂を信頼し、尊敬しているからである。

「・・・ごめん。心配してくれてありがとう。それでも、私は行くわ」

御坂が背を向け、走り出そうとした時だった。

手を掴まれる。どきっとした。白井が、強い眼差しで御坂を見つめている。

「わたくしもともに参ります」

「ちょ、黒子・・・駄目よ。どんなのが現れるのかもわからないのに。それに、ジャッジメント風紀委員が・・・」

「お姉様！」

白井が、強く手を握り締める。

「黒子がなぜジャッジメント風紀委員になったのか！ それは悪から皆を守り、誰かを救いたかったからですの！ 今目の前にいる人を救えずしてなジャッジメントにが風紀委員なのですか！」

白井も、覚悟を決めているようだっただ。

御坂がこれから手を出すのは、スキルジャンパーだ。すでに通達を受けている一七七支部の白井は、アンチスキル警備員から上層部に通達されれば、ジャッジメント風紀委員を罷免されるかもしれない。アンチスキル警備員が通達すること、上からの圧力がかかっていることが多いのだ。

「お姉様。ジャッジメント黒子は風紀委員だから人を救い、悪を討っていると思うのですか？ ならばそれは間違っておりますの！ 黒子は人を救い、悪を討ちたいと思うから風紀委員になったのです！ たとえ風紀委ジャッジメント

員を辞めさせられても、今までと同じように黒子は誰かのために町を駆け回りますの」

白井の熱い決意を聞いて、初春がほほ笑む。

「・・・黒子。ちょっと、見直した。じゃあ、付いて来てくれるのね？」

「当然ですの。ときわだい常盤台コンビの力、スキルジャンパーに見せてやりましょう」

「ありがと、元気出たわ。やったるわよ！」

御坂は、白井の手に自分の手を重ねる。温かいものが、手を通じて伝わってくる。

「柵川中学は警備員アンチスキルの配置が多いので行かない方がいいですね。それにおそらくですが目標はいません」

「初春？　じゃあ、どこに行けば良いんですの？」

「もっと注目するべき場所があります。第四学区、レストラン街」

第四学区は、学園都市の食堂のような区画だった。レストランなどが集中していて、第四学区だけで世界の食べ物を制覇できるほどである。多少値を張る場所もあるので、中学生などはあまり見かけない場所のはずだ。

初春がモニターを見ながら、目を光らせる。

「第四学区になにがありますの？」

「・・・戦闘みたいです。メイドレストランに警備員が突入していますね」

監視カメラをハックしているところだった。御坂と白井もディスプレイを覗き込む。

「この、白髪は・・・!」

御坂が息を詰まらせながら言った。警備員の手を払うようにして白い髪の少年がレストランから出てくる。その赤い瞳に、御坂は怒りを覚えた。

「? 一方通行?・・・ツ!」

そして、画面が暗転する。回線を切られたらしい。切ったのは警備員か上層部かはわからないが、騒ぎを起こした一方通行を庇うためだろう。

レベル5にもなると様々な実験や計画に組み込まれる。人を殺しても警備員に咎められることはないし、かなりの範囲を上層部に庇ってもらえるのだ。実験と計画には莫大な費用がかかる上に、上層部の利権争いもある。たった七人しかいないレベル5を失うと、いるいと厄介なことが起こるのだろう。だからレベル5は法より優先されるものだった。

一方通行を守るために、第四学区のあらゆるメディアは遮断され、緘口令が敷かれるはず。

「黒子! 一方通行に接近するわよ!」

「ちょっと、お姉様! 奴は学園都市第一位ですよ! それにま

だなんにも証拠もないのに・・・」

「私を誰だと思ってるのよ！ それに証拠は奴から聞き出せば済む話！ 空間移動テレポート任せたッ！」

御坂はにっと笑った。

「待つてなさいアクセラレータ！超電磁砲が会いに行つてやるわ！」

白井が頭を抱え、すぐに立ち直った。

「くっつ、元気出過ぎですわ・・・仕方ありませんの。初春！ 回線が復活したら連絡を！ 固法先輩このりには上手く誤魔化してくださいな！」

「はい！ 二人とも気を付けて！」

初春が言つなり、御坂と白井は消えた。空間移動テレポートしたのだ。

「ふふ、忙しい人たちです。そういえば、佐天さんさてんどこだろう？」

ひとりきりになった一七七支部で、初春は首を傾げていた。

佐天涙子とはある寮の前で佇んでいた。

例のスキルジャンパーである少女はこの寮に暮らしているらしい。赤髪少女と仲の良い早瀬優希はやせゆきという先輩に教えてもらったのだ。――

ジャッジメント

年風紀委員の初春飾利の友人ですと言うと、あっさりと教えてもらえた。

しのめがみ

東雲鏡。書庫上ではレベル0。けれど、御坂の証言によれば、レ

バンク

ベル6に最も近い人物。

なぜひとりで会いに来たのか。佐天は、別に深い考えがあるわけではなかった。興味があつたというか、もし仮にそんな力を持つていれば、どう感じるのか。学園都市を、どんな風に受け止めるのか。レベル0の佐天は、聞いてみたかった。

バンク

書庫通りのレベル0であつたら、これを機に仲良くなつてもいい。そんな気軽な気持ちで寮の前に来た。寮の入り口にはオートロツクがかかっているらしく、教えられた部屋番号にコールしても返事がなかった。外出中、ということだろう。

昼も少し過ぎている。早瀬に電話してみると、朝病院に行つて、そのまま昼食を買いに行つたとのこと。気を遣つてくれた早瀬は東雲本人に電話して聞いてくれたらしい。ついでに、佐天の存在も伝えたので、今頃東雲は急いで帰宅しているようだ。

『しかし、物好きじゃん。』

バグシミュレータ

？演算欠陥？と仲良くなりたいたなんて

「あはは、私も物理演算授業苦手なんですよ」

『あいつは苦手ってレベルじゃないけどな。ま、そろそろ来るんじゃないか？』

「あ、ありがとうございます。めっちゃ助かりましたよ。今度一緒に遊びましょうね」

あいよ、と元気の良い声を最後に、携帯電話の通信が途絶えた。早瀬とはまだ知りあつて間もないが、人が良くて後輩から慕われやすそうな印象がある。佐天も、早瀬と仲良くなりたいと素直に思っ

ていた。

「しかし、東雲鏡さんか。どんな人なんだろう・・・」

淡い赤髪（といつても光に翳^{かざ}すと赤く見える程度の、黒に近い髪の色だそうだ）の僕っ子。書庫^{バンク}にあった顔写真は、美人というより可愛かった。固法先輩ではなく初春、という感じた。

早瀬は見た目通りの奴だよ、としか教えてくれなかった。ということは、おっとりしているのだろうか。妄想が広がる反面、不安も募る。

いきなり家に押しかけて怒られないだろうか。佐天は縮こまって、東雲の帰宅を待った。

それから十分ほど経った頃に、小走りで駆けて来る小柄な少女が見えて、佐天は顔を上げた。

「う、う、ごめんよう！」

開口一番に頭を下げる人物。目を潤ませているこの少女が、噂の東雲だ。

髪は黒っぱいが日なたにいと赤く見え、さらさらと流れていた。肩にかかる程度の髪は汗の滴で濡れていて、息を切らしている様は回し車を駆け抜けた後のハムスターのようでもある。

「あ、あ、あな、あなたがっ」

「お、落ち着いて、東雲さん。まず息を整えましょう、ね？」

過呼吸でも起こしそうな東雲の肩を取り、宥める。東雲は深呼吸を何度かして、しばらく黙って突っ立っていた。そして、涙目のまま、佐天に向き直る。

「・・・ごめんね。ええと、僕は東雲鏡って言って、あなたが佐天さん？」

「はい。突然押し掛けて、ごめんなさい。私、どうしても会いたくて」

佐天は申し訳なさそうに視線を外す。東雲は軽く首を傾げ、まーまーと笑う。

「普通に全然いいよう。んーと、寄ってく？ 立ち話もなんだから」

「あ、いいんですか？」

「なーんもないけどね。決まればレッツゴーだ」

楽しそうな口調で手を振り上げ、佐天より頭一つ分小さい少女がオートロックを開く。どう見ても年上には見えない。むしろ小学生に見える幼さだ。

東雲の部屋は寮の三階にあった。お昼ご飯だろうか、右手に提げる大きな買物袋が小さな身体とは似つかわしくない。開けごまーと笑顔で叫んでから、鍵穴に鍵を挿し込んでいる。だが、その動作はもどかしいほどもたついていた。

「あ、あれ、難しい・・・」

二分弱悪戦苦闘して、ようやく開く。佐天は苦笑するしかなかった。

部屋はかなり綺麗にまとまっていた。そこそこ大きい部屋だ。壁紙は白を基調にしたお洒落なもので、右手にキッチンがある。黒い

ソファがあつて、その正面にガラス造りのテーブル、その奥に横に長いテレビ。テーブルの上にはノートパソコンが置いてあつた。

「わあ……羨ましいくらい良い部屋ですね」

「普通だよ」

お世辞と取られたのか、東雲は頬に手を当てて「いやーね奥さん」みたいなジェスチャーをする。普通ではない。十二分に良い部屋だ。家賃も高そうだなと佐天が部屋中隈なく見回していると、東雲はキッチンの方へ歩きながら「適当に楽にしてて」と告げる。

「佐天さん、お昼はもう食べた？」

「あ、軽く」

「ん、ん、じゃあちよつと食べていく？」

良いんですか、と佐天が振り返ると、顔を真っ赤にする。

いつの間にかエプロンになっていた東雲が、にこやかにこちらを見つめていたのだ。同性だというのに、破壊力は絶大だった。佐天は鼻血を堪えながら、ばくばくと音を鳴らす心臓を必死に抑えつけた。

（や、やばい。可愛い。先輩だけど可愛い。初春以来の逸材かも）

佐天が息を整える。振り返り、満面の笑みでお願いしますと言った。

「少し待っててね。僕も普通にお腹減ったし、ぱぱっと作っちゃう

から」

東雲は顔立ち通りの可愛い声を持っていた。この顔とこの声で僕と言っただから、奇蹟としか言いようがない。人類に感謝する佐天を、東雲は首を傾げて見つめていた。

料理が並ぶ。パスタだったが、見た目がまず一流レストランで出てくるようなお洒落っぷりである。皿やフォークなども中学生のひとり暮らしに不釣り合いな高級さを醸し、手を付けるのが勿体ないように思った。

「いったただつきまーす」

東雲は嬉しそうに言って、フォークにパスタを巻き付け、口に運ぶ。佐天も慌てて同じように口に運ぶ。見た目と同じく、味も最高級。佐天の頬が落ちそうになる。

「美味しい！ 料理上手なんですね、東雲さん！」

「や、やめてよう。普通に恥ずかしい」

そう言って顔を赤らめる東雲を見て、佐天が悶絶する。

（ま、まさか初春を超える・・・？ 馬鹿な、そんなことは、ぐぐっ）

ひとりの女がいけない方向に覚醒しようとしている。東雲はまた首を傾げて、フォークを咥えたまま佐天を見つめた。佐天が再び、身を振（よ）じらせる。

食後、東雲がティーセットを運んで来て、紅茶を淹れた。店ではなく誰かの家で紅茶を飲むのは久しぶりな気がする。常盤台女子寮

で出されたのが最後だったな、と佐天は紅茶を口に含みながら思い出していた。

「ん、これはジャムですか？」

「うん、そう。嫌いだった？」

いえいえと佐天は首を振る。珍しいな、と思ったただけだ。たしかジャムを溶かして飲むのはロシアンティーだったか。

「ああ、ジャムを溶かすんじゃないよう。スプーンでジャムを掬って、そのまま普通に口でぱくつとしちゃうの。それから紅茶を少しずつと、ね」

「へー。今まで溶かすものだと思ってました」

「溶かしてもかまわないけど、後から調整できないから。こうすればジャムが多すぎたら次は減らせばいいし」

本場ロシアでは紅茶に直接ジャムを溶かさない。佐天はなににもかもお洒落だなーと思いながら言われた通りに紅茶を楽しむ。自分もお洒落になった気がした。初春が抱くお嬢様への憧れとは、こういうものなのかもしれないと、ぼんやりと思った。

待て。よく考えれば、同じ中学の先輩だ。つい常盤台クラスのお嬢様と勘違いしたが、普通の中学生だった。一年の差がここまであるのか、と佐天は腕を組んで唸る。

「それで、佐天さんはどうして僕に会いたかったの？」

突然、核心を突くような問いが飛んでくる。佐天は、どきつとし

た。

「えっと、その、ちょっと気になることがありますて」

「気になること？」

ティーカップをテーブルに置いて、不思議そうに東雲が尋ねる。

佐天は恐る恐る、言う。

「スキルジャンパーって、ご存知ですか？」

「ああ、去年流行った映画？ 普通に見たよう。そんなに面白いと思わなかったけど」

東雲の表情にほとんど変化はなかった。

「だって？ 多重能力？^{デュアルスキル}なんか題材にするから、主人公が一昔前のヒーローみたいなださい仮面してたよね。普通じゃないわーって思ったよう」

仮面で顔を隠して、いろいろな能力者がシーンに合わせて主人公の役をする。そういう方法で映画が撮影されたらしい。機材やCGでは限界があるし、より自然さを出すために実際に能力者が力を揮ったようだ。その産物が、一昔前のヒーロー仮面。正直、佐天もださいと思った。

「そのスキルジャンパーが出現した、という話は？」

「ネットで噂されてるんだっけ。早瀬達が普通に騒いでたね」

「私の知り合いも見たんですよ、スキルジャンパーを」

「ほえー、そうなんだ」

佐天の言葉に、東雲は大きな反応を示さない。不気味なほど、静かだった。

意を決し、佐天は東雲を見つめた。

「知り合いはあなたをスキルジャンパーだと言っています。学園都市第三位のレベル5、御坂美琴です。宙に浮き、一瞬で姿を消した。それは紛れもなく能力による現象だったそうです。でも、書庫ではあなたはレベル0でした。こういうことか、説明してくれませんか？」

静寂。

東雲は佐天を見つめ返して、小さく笑った。

「普通に面白い話ね。書庫まで手を出しちゃったのか。いや、それより超電磁砲の知り合い、と」

佐天はぞっとした。話を肯定したわけではない。だが、否定もしないのだ。

「それで、どうしてひとりで僕のところに？ ほんとうにスキルジャンパーなら、普通に危ないと思わなかったの？」

「危ないと思いました。けど、知りたかったんです。いろんな能力を使えるって、どんな感じなのかなって」

東雲の表情が、少し変わる。どういう意味、と暗に聞いていた。

「私は、レベル0なんです。いくつも使えるところか、ひとつも使えない無能力者。だから、スキルジャンパーがどんな毎日過ごし、どんな風に能力を使って、どんな風に・・・」

佐天の言葉が詰まる。

「——どんな風にレベル0を見ているんだろう、って」

小さい声だった。佐天の顔色は、前髪に隠れて見えない。

東雲はなにも言わなかった。

両者の沈黙が続く。永久に続くのではないか、と佐天は思った。

「普通だよ」

声。可愛らしい、彼女の声だった。佐天は目を上げる。東雲は紅茶を飲んでいた。

「普通に毎日暮らして、学校に通って、友達と遊んで。普通の人になにも変わらないんじゃないかな、と僕は思うけど」

東雲の声は、どこか寂しい。

スキルジャンパーであることを肯定していると思しき発言よりも、その寂しい響きの方に、佐天は集中していた。普通の人と変わらないなら、どうしてそんなに寂しそうなのだろうか。

「・・・東雲さん」

そう、佐天が呟いた瞬間だった。

東雲が手をこちらに突き出していた。その表情は、切羽詰まっている。

なにかと思う前に、東雲に頭を押さえつけられて、ソファに貼りつく形になった。東雲はその上に覆い被さっているようだった。

次の瞬間、轟音が響く。佐天の背後にあった窓のガラスが割れ、爆風がお洒落な部屋をめちやくちやにかき乱した。

佐天には状況が把握できなかった。耳にはまだキーンという音が残っている。

「ごめん、佐天さん。少しの間だけ、眠っていて」

頭の上からあの可愛らしい声がしたと思ったら、意識が遠退いていくのがわかった。目を開いていたのに、自然と閉じていく。眠りに誘われるように、堕ちていった。

東雲さん、と最後に声をかけたが、届いているかどうかはわからなかった。

部屋のほとんどが吹き飛んだ。

身体の下で眠りに落ちた佐天を庇うように、東雲は眼前を睨んでいた。

窓の外にいた男が、ゆっくりと部屋に入り、ガラスを踏み砕いて降り立つ。

金髪で高身長少年。その目は半月型に歪んでいる。

「捜したぜ、くそつたれ」

ありったけの憎悪を込めた、それでいて嬉しそうな、愉しそうな

声をぶつける。背後にある白い六枚の翼が一度羽ばたく。それだけで爆音が響き、部屋の中のものすべて吹き飛ばされた。

しかし、佐天を守るように被さっていた東雲もまた無傷である。

「普通にタイミングが最悪だよ、^{ダークマター}未元物質さん？」

少年はにいと笑う。狙っていたとでも言いたげな笑みだった。

「おいおい、他人の隠れ家丸ごと吹き飛ばしたヤツが楽しくお茶するなよ。しかしまあ、あの時と丸つきり逆の立場だな。俺の時はお荷物なんざいなかったが」

「お荷物を狙わないと普通に勝てないですもんね」

「なるほど、そんなに苦しんで死にてえのか。上等だ、マゾヒストが」

^{ダークマター}未元物質は両手を開く。六枚の翼が、それぞれが意思を持ったような複雑な動きを始める。

「自己紹介がまだだったな。俺は垣根帝督^{かきねていとく}つてんだ。能力は？^{ダーク}未元物質^{マター}？。レベル5の第二位だ、よろしく死んでくれ」

逆襲、といったところか。東雲はいたって冷静に目の前の化物を見つめていた。

（ベクトル反射で防げるものと防げないものがあるね。普通に厄介な能力・・・だけど）

東雲は立ち上がり、佐天の方を見た。そして、手を向ける。
そこに眠っていた佐天が、姿を消した。

「チツ、まさか？座標移動？^{↑ポイント}まで使えるとは。しかし心優しいねえ、くそつたれ。巻き込まないように逃がしてやるか」

白井のような空間移動^{レポート}と違い、手を触れなくても物体を移動させることができる、八つ目のレベル5能力と期待された座標移動^{↑ポイント}。苦もなく、東雲はやってのけた。

垣根に向き合った東雲は、にっと可愛らしく笑った。

「どうせこの家も引き払う予定だったし、普通にちようどいいか。実験はここから始動する——」

東雲が服を脱ぎ捨て、露出度の高い戦闘服^{コスチューム}をあらわにした。

「自己紹介がまだだったね。僕は東雲鏡って言います。能力は？能力^{スキ}写し？。学園都市で最もレベル6に近い存在ですよ」

東雲の身体からバチバチと放電され始める。発電能力^{エレクトロマスター}。面白い、と垣根は翼のひとつで薙ぎ払おうと腕を引く。

「ナメてつと実験はここ^{……}で始まってここ^{……}で終わるぞコラ」

垣根は腕を勢いよく開いた。その動きにあわせ、翼がすべてを薙ぎ払う。

帯電していた東雲は、翼が直撃し、なすすべもなく別の窓から外へ飛び出した。

「馬鹿が。俺の未元物質ダークマターがそう簡単に反射できると思ったのかよ」

未元物質ダークマター。この世に存在しない新物質を生み出すことで、既存の常識や法則をぶち壊す能力。それはベクトル反射だろうがなんだろうが、理論を超越して打ち破る力。

垣根はこれで終わったと思っていない。翼をためかせ、再び大空へ飛び出す。

東雲はけろつとした顔で、宙に浮かんでいた。服が汚れているだけで、傷はない。

彼女の纏う風の壁を睨み、垣根はせせら笑う。

「なるほど、？空風障壁エアブロック？で防いだか。いや、受け流したつてのが正しいか？」

風の壁で体表に膜を作り、攻撃を防ぐ。ベクトル反射よりも防御に劣るが、この防御の利点はそのまま後方に逃げられることだった。あらゆる衝撃を風の膜で受け流し、同時にその力を利用して大きく後退する。着地時にも風の膜が身体を守るので、安全に距離を取ることができるのだ。だが、ベクトル反射のように光線や音波のようなものは跳ね返せない。

「芸がねえな、テメエ。そりゃ前も見たぜ。俺の未元物質ダークマターにびびつてやがんのか？」

未元物質ダークマターに既存の常識は通じない。どの攻撃がベクトル反射を通過してくるか、わかったものではない。あの翼は、一撃受ければ致命傷になりかねないものだ。ビルの一階層を丸ごと吹き飛ばすような威力がある。生身の人間が受ければ、ミンチどころではない。

「よう、知ってるんだぜ。テメエ、見捨てられたらしいな」

垣根は愉快なものを見るような、しかし侮蔑した目で、言った。

「レベル5すべてに通達があった。指令はスキルジャンパーの抹消だ」

東雲は宙に浮かんだまま、じっと垣根を睨んでいた。

垣根はひどく愉しそだった。翼が、揺れ動いている。

「そのうちに他のレベル5も駆け付けて、テメエを殺そうとする。だから、さっさと死んでくれ。俺に殺されてくれよ、スキルジャンパー！」

六枚の翼が、一斉に動き出す。すべてが眼の前の少女に照準を定めていた。

「テメエを殺して俺はレベル6になるんだからなあ！」

計画の概要は、実に単純明快である。

スキルジャンパーこと東雲鏡を抹消した者はレベル6に覚醒する。
ツリーダイアグラム
樹形図の設計者が弾き出した演算結果ひとつで、東雲は殺されるのだ。

7（後書き）

備忘録：垣根帝督を書けて幸せ

8（前書き）

本格的な戦闘の始まり。縦書き形式推奨ですの。

アクセラレータ

一方通行は第五学区を歩いていた。

第四学区と寮のある第七学区を繋ぐ位置にある第五学区は、大学生向けの居住区である。居酒屋といった未成年が利用できない施設が多く、第四学区よりさらに中高生の姿はなくなる。その分、全体が落ち着いた雰囲気を持っていた。

コンビ二で買ったサンドイッチを乱暴に^{むし}食いながら、一方通行は歩き続けた。^{イタ}頭には包帯を巻いている。コンビ二で買ったもので、病院に行く気はなかった。

昼、襲撃してきたあのふざけた女。頭の血が抜けて冷静になったのか、彼は不可解な現象の数々を思い返しては自問自答していた。

テレポート

（空間移動を使ったのは間違いないエ。ベクトル操作をしたのも、間違いないエ。どうなってんだ？）

まず、自分以外にベクトル操作ができているところが理解できない。一朝一夕で体得できるような単純な能力でもないし、発火能力や発電能力のように発現しやすい能力でもない。発現しやすいなら、一方通行は学園都市第一位などと呼ばれていないはずだ。

アクセラレータ

テレポート

クリアコントロール

そして複数の能力を使ったこと。空間移動は光学操作で誤魔化せるとしても、ベクトル操作は確実に行われていた。でなければ、奴は自分が撃った弾丸で脳を床にぶちまけていたはずだし、彼の額を吹き飛ばすことなどできなかったはずだ。

解^げせない。能力の不可解さもさることながら、一方通行に宣戦布

アクセラレータ

告したという状況が理解できないのだ。闇討ちにしては昼のレストランと人目につくところであった。おまけに一方通行の額を切り裂

ただで、呆気なく退散した。

（殺^やりあう気がなかったとしか思えねエな・・・）

考えるだけ無駄なのか。だが、奴は再び^{アクセラレータ}一方通行を襲撃するだろう。そんな予感がする。そのための挨拶だとすれば、早々に退散したのも納得がいく。なんの得があるのかは別として、だ。

ブブブ、とポケットのなかの携帯電話が振動する。取り出して、応答した。

『元氣かしらねえ、^{アクセラレータ}一方通行くん』

電話の向こうにいるのは女だった。誰かは知らないし、興味もない。いつも知らない人間が電話をかけてきて、素性を明かさずに用件を伝えてくるのだ。

『用件があるのですけれど、よろしいですわね？』

「・・・誰を始末すりゃいい？」

『スキルジャンパーと言えば、わかるかしら』

「知らねエ」

大通りを歩きながら、白髪の少年はざっくり言い切る。昼だといふのに人が少ない。この辺りは夜の方が人が多いのだろう。おかげで声を抑えなくても裏の話ができる。

『おかしいですわねえ。さっき戦ったと思つのですけれど』

「・・・あア？ あの意味不明な女のことか。スキルジャンパーってのは」

『そうですわ。アレが今回の実験の目標ターゲット。しっかり殺しなさいな』

実験。その響きに、一方通行は思わず立ち止まる。嫌な汗が滲んでくるのがわかった。

「実験てなんのことだ」

『？上？が一方通行アクセラレータくんの不手際を挽回するために投入した実験ですわ。レベル6への方法。わかりました？』

「レベル6？ 不手際？ いったいどオいうことだ！」

はー、という溜息が携帯電話越しに聞こえた。

『？量産能力者計画？の妹達レディオノイズ二万体を殺し切れなかったのはどのどいつです？ 莫大な費用をかけた計画をレベル0に阻止そしされたのはどのどいつなのでしょ。忘れたとは言わせないわ。今回の実験はその代用案。スキルジャンパーをたった一体殺害することで同じ程度の効果を得られるらしいのです。にわかには信じがたいですけど、樹形図ツリーダイアグラムの設計者の予測演算ですし、やってみる価値はありそうですわね』

言葉を失った、という表現が相応しい。

一万人の御坂妹を殺したのは、一方通行アクセラレータだ。レベル6になるためならと心を鬼にして、殺戮を続けてきた。だがあの悪夢はツンツン頭の介入で終わりを遂げたはずではないか。一方通行アクセラレータにとっての悪

夢ではない。御坂本人と御坂妹にとっての、悪夢だ。

その実験は終わっていないかった。電話の女の言葉を聞いて、最初に思ったことはそれだった。

携帯電話を握っていない方の手が、拳をつくる。ぎりぎりと、音がした。

「？上？としても出したくない素材だったらいいですわ、スキルジャンパー。なんでも脳学研究素材としては右に出る者がいないくらい貴重らしいので。脳学研究チームの反対を押し切って？上？が指令を出したところを見ると、よほど一方通行くんの不手際が許せなかったんですね」

「・・・なんだよ、それ」

声が震える。自分でも間抜けだと思える、弱々しい声だった。

一方通行の心中は荒れていた。ようするにスキルジャンパーという少女は、自分のせいで死ぬのか。シスターズ妹達と同じように、一方通行のために死ぬ。レベル6とかいう、得体の知れないもののために。

（ふざけんじゃねエよ。そんなやり方で強くなって、どうすんだ・・・？）

また、誰かを犠牲にしなければならない。ツンツン頭はそれが嫌で、一方通行を止めに来た。たったひとつの拳で、すべてを食い止めた。悪夢を断ち切ったのだ。一方通行は、ツンツン頭に負けた時に、諦めた。この悪夢は終わった。負けてまで続ける必要はない、と。

一方通行も妹達を虐殺することで力を得たいと本心から思ったことは、一度もない。もっと別の方法があるなら、そちらを選んだだろう。たとえ自分の身体を傷つけ、自分を殺すような結末が待って

いようと、選んだ。誰かを傷つけることで力を得ようとは考えなかったはずだ。

力とはそういうものではないか。誰かを傷つけることで得られるものではない。己のなかに存在する特別ななにかを開花させることで、それが力として顕現するのだ。少なくとも、一方通行はそう思っている。

一万人の妹達を殺した。事実だ。妹達が可哀想だとか、実は嫌々だったとか、そんなふざけたことを言うつもりはない。当然、忘れるつもりもない。

だが、その道を選ばずに済んだ自信はある。

もし別の道が用意されていたなら、この道を歩まなかった自信が一方通行にはあった。

『わかりましたら、さっさと動きなさいな。他の人達はもう動いていますわ』

「他の人達？」

『ですから、これはレベル6になるための実験。別に一方通行くんじゃなくてもレベル6になれる可能性を秘めているらしいのです』

目を見開く。赤い眼が、剥き出された。

『レベル5全員に通達を出します。スキルジャンパーを殺しなさいという指令を、ね』

実験。指令。その言葉で、皆が殺人を厭わなくなる。まるで数日前の自分のようだ。

『それでは、頑張りなさいな。居場所は第七学区だけど、すでに第

二位が襲撃しましたから、急がないと手柄を取られますよ」

そう言い残し、通話は途切れた。一方通行はそれからしばらく歩み出せなかった。アクセラレータ

今まで、学園都市最強を目指してきた。理由は覚えていない。ただ、学園都市最強になる必要があると思っていた。アクセラレータ

一方通行という人間の根本がソレなのかもしれない。他者より強くないと気が済まない。最強であることで、他者を見下したい。そんなくだらない優越感。意識したことはないが、そういう劣情れつじょうが一方通行には存在しているのだらう。誰かに敗れると、ひどく苛立つもつと力が欲しい、と望む。

ツンツン頭に敗れた時も、悔しさのあまりのたうち回ったものだ。

だからと言って、再び悪夢に戻るつもりはない。力を得たいが、無関係な誰かを傷つけて力を得たくなかった。それにそんなことをすれば、再びあのツンツン頭が眼前に立ち塞がるだらう。

絶対能力者。レベル6。それを目指した理由は、単純だ。学園都市最強であっても駄目なのだ。自分のようなどうしようもない存在は生まれ続ける。選ぶ道がなく、立ち止まることもできない、憐れで惨めでくそつたれな存在が、増えていく。それは闇の組織が、学園都市統括理事会が、満足していないからだった。

この町はレベル6を求めている。最強ではなく、絶対を求めているのだ。ならば、自分になるしかない。最強である自分が絶対となり、この町のどうしようもないすべてを終わらせるしかないのだ。シスターズ

一万人の妹達を殺害した。残りの一万人も殺害するつもりだった。それで絶対となれるからだ。そうすれば、学園都市の闇に沈む者がいなくなると、信じていたのだ。罪を免じてもらう気はない。赦してくれなどと口が裂けても言わない。

この罪も、汚名も、闇も。なにもかも、背負ってやる。一方通行アクセラレータ

には覚悟があつた。

その覚悟を挫いたのは、あのツンツン頭だった。そんな覚悟がなんだ。他人を傷つけてなにが絶対だ。拳ひとつで、それを貫いてきた。そして、自分は敗れた。

自分がツンツン頭なら、一方通行の前に立ちはだかったか。自分アクセラレータに問いかけた時、やるせない感覚に襲われた。学園都市最強の一方アクセラレータ通行が、である。

（思えば、あのツンツン頭が一番理解していたのかもしんねエ）

誰かを傷つけて得る力に、意味などないということ。

一方通行は携帯電話を見つめ、決心したようにそれをポケットに突っ込んだ。

（俺のやるべきことは、他にある。このどオしよオもねエ実験の裏を探ることだ。間違つてもあのム力つくガキを救うンじゃねエ。この実験をぶッ壊すだけだ）

スキルジャンパーを助ける気はない。アレも自分と同じ実験の産物だ。助けなくてもそう簡単に死なないだろう。単純計算でもアレはひとりシスターズで妹達二万体和釣り合うほどの力があるはずだ。それに、一方通行は喧嘩を売られている。それを許すほど彼は寛大な男ではない。出会えば、殺し合う気だった。

実験云々は関係なく、殺す。

だから、殺す前に調べたい。スキルジャンパーについて、気になることがあつた。

（ヤツはどうやってベクトル操作を会得した？ 以前に出会ったことがあンのか？）

どこかで出会ったような素振りがあった。表情や挙動。戦いの癖も、見抜かれていたと思う。鮮やかと思えない動きで一方通行を翻弄し、消えたのだ。

そして、相変わらず、という言葉を使った。どこかで出会ったことがある者しか使わない言葉である。

出会っていたとしたら、どこで？　そしてなぜ自分はそれを覚えていない？

（脳学研究とか言ってたな。しらみつぶしに探すしかねエか）

同じ実験体。研究所になにかしら資料が残っている可能性がある。実験の全貌も明らかにしたいところだ。すべてを明かさないので闇の連中の常套手段である。

（一緒に死んでください、か。あの言葉の意味も、掴みてエ）

一方通行が歩み出そうとする。そこで気付いた。

目の前に二人の少女がいた。明るい色の制服には見覚えがある。中学校のなかでも最も有名な制服だろう。なにせ学園都市に七人しかいないうちの二人が在籍する中学校なのだ。

ときわだい
常盤台中学。片方の少女は、風紀委員の腕章をつけている。

一方通行は二人の顔を比べ見る。片方は、嫌というほど見てきたものだ。もちろん、感慨があるわけではないが。

「……ッたく。今日はどうなってやがんだ？」

一方通行は溜息混じりに肩を落とす。目の前の二人は、警戒心を解いていないように、目を鋭く尖らせている。

「一方通行。アクセラレータ聞きたいことがあるんだけど」

「なんだア超電磁砲。レールガン今になって妹達の仇を取りに来たんですかア？」

「妹達？シスターズともう片方の少女が首を傾げた。それを手で制したのは、学園都市第三位超電磁砲の御坂美琴だ。レールガンみさか みこと」

「オマエ、名前なんてんだ？レールガン超電磁砲のツレなんだ。それなりにやれるんだろ？」

「・・・白井黒子。しらいくろこ一応、レベル4ですの」

「レベル4か。いいねエ、それでこそやりがいがあるッてもんだろオよ」

「一方通行が赤い目を光らせ、睨みつける。アクセラレータ戦う体勢は整っていた。シスターズ御坂とは妹達の件で揉めていたし、御坂ひとりでは一方通行には勝てないと樹形図の設計者は予測した、だからレベル4を援軍として呼んだ。ツリタイアクラム一方通行は勝手にそう解釈している。アクセラレータすると、御坂は首を横に振った。」

「違う。私はアンタと戦う気はない。聞きたいことがあるだけよ」

「あア？ なに言つてやがる？」

「その額の傷。付けたのはスキルジャンパーでしょ？ ベクトル操作で無敵のアンタが傷を負うほどの相手。聞きたいのは、ソイツのこと」

御坂は真剣な眼差しで、アクセラレータ一方通行を見ていた。たしかに、敵意はない。

調子が狂った。アクセラレータ一方通行は頭を掻き、そのまま腕を組んで睨みつける。

「俺だって知らねエ。今しがた襲撃されただけだからな。つかオマエも俺と同じだけの情報は得てンだろオが」

そう言つて、アクセラレータ一方通行は歩き出す。

相手にしないと判断した。敵意がない相手を潰すほど暇ではないし、今はスキルジャンパーについて調べることがあるのだ。

「さつきね、アンチスキル警備員からスキルジャンパーを調べるなど釘を刺されたのよ」

「・・・なに？」

アクセラレータ一方通行は立ち止まる。御坂は、苦い表情をしていた。

「アンチスキル警備員も風紀委員も、ジャッジメント捜査を打ち切りましたの。マスコミにも緘かん口令を敷いて、完全にシャットアウトする気ですわ」

シスターズ妹達の時と同じだ。学園都市そのものが計画に協力する体制を敷いたということである。

というより、先ほどの電話の内容を知っていれば、シスターズ妹達の時と同じクラスの大規模実験になることはわかるはずではないか。レベル5全員が動くのだ。レベル6への布石となる計画なのだ。ジャッジメント風紀委員も警備員もマスコミも、すべて協力しなければ学園都市は大混乱に陥るだろう。おちい

「超電磁砲^{レベルガン}。オマエまさかなにも知らされてねエのか？」

「・・・どういう意味？」

一方通行は眉を顰^{ひそ}める。電話の女はすべてのレベル5に伝えたと
言った。だが、御坂は実験のことを知っているとは思えない。レベ
ル5が動いているとも知らないのだろう。

（情報の程度に差がある？ 未元物質^{ダークマター}が襲撃したツて話だから、お
そらくアイツには俺と同じよオなレベルの情報が与えられたンだろ
オが・・・）

目の前の第三位は、実験の本筋から離されているのか。だとした
ら、なぜ？

（・・・妹達^{シスターズ}の実験の阻止に協力したからか？ ならなぜ俺は本筋
から離されていねエンだ？）

よくわからなくなる。裏がありそうな感じだった。

とにかく、御坂には伝えられていない。実験の概要も、スキルジ
ヤンパーの価値も。

「超電磁砲^{レベルガン}。オマエは家に帰れ。知らされてねエってのがいい証拠
だ。オマエは部外者なンだろ」

「ちょっと、そんなわけにはいかないわよ！ またあんなことが・
」

御坂が噛みつきこうとした時だった。

御坂の携帯電話が鳴る。不細工なキャラクターのストラップが一方通行の目に映った。

「み、御坂さん！」

「初春さん？ どうしたの、いったい」

一方通行にまで聞こえる大きな女の声だった。白井も驚いている。初春がそんなに大声を出すことは、そうそうない。

「さ、佐天さんが！ 佐天さんが？ スキルジャンパー？ に！」

「えっ！ 初春さん、なにがあつたの？」

佐天という人物は知らない。だが、反応を見る限り友達なのだろう。電話の声は泣いていた。

一方通行はどうでも良さそうに歩き始めた。だが、その歩みもすぐに止まる。

「佐天さんが、昏睡状態なんです！ スキルジャンパーにやられたらしいんです！」

一方通行の足が止まり、横目で御坂を見た。

あのスキルジャンパーが実験に関係ない人物に手を出した、ということなのか。

御坂は震えていた。怒りに染まっていると、一方通行にもわかるほどだ。

「・・・初春さん。スキルジャンパーの居場所がわかる？」

『あ、いえ、まだわからないです・・・』

「そつか。じゃあ、悪いけど捜してもらえないかな。私の方でも捜すから」

そう言つて、御坂は通話を切つた。静けさが三人を取り囲む。
少しして、御坂が一方通行の方を向いた。

その表情には怒りと悲しみが混在している。その表情を、彼は知っていた。あの夜、実験を阻止しに来た彼女がしていた表情だった。

「一方通行アクセラレータ。お願い。なんでもいいから、教えて欲しい。友達を救わなくちゃならないのよ」

「友達のために戦うつてか。立派だねエ、オマエも」

御坂の唇から血が滴っているのに気付いて、一方通行アクセラレータはぎよつとする。それから、頭をゆつくりと下げて、呟くように言った。

「お願い・・・教えて、一方通行アクセラレータ」

悔しいのだ。友達を傷つけられて、なにもできない自分が情けない。歯がゆい。

教えを乞う。友達を救うために。憎むべき相手にでも、頭を下げる。

一方通行アクセラレータはしばらく御坂を見つめ、隣の白井を見た。白井も一方通行アクセラレータと目が合うなり、同じように頭を下げる。

（・・・はア。どおしてこオ真つ直ぐなのかねエ、コイツらは）

アクセラレータ

一方通行は呆れたように手を腰に当て、二人を見下ろすように睨む。

こういう酔狂な真似は、今日だけだろうな、と心の中で彼は思う。

「俺は今から研究所を調べに行く。スキルジャンパーについて調べるためだ。付いてくるなら勝手にしやがれ。その途中、答えられることなら答えてやる」

二人が顔を上げる。信じられない、という表情をしていた。

「あいにくだが俺もヤツの居場所は知らねエ。能力の仕組みもわかってねエのが現状だ。お友達を救いてエなら、さっさと調べるしかねエだろ」

アクセラレータ

一方通行は首をコキコキと鳴らして、背を向ける。
御坂はきょんととして、目を丸くしていた。

「い、いいの？」

「あア？ 頼ンできたのはオマエだろオが」

「いや、その、アンタがそんなこと言うとは思わなくて・・・」

「なら付いてくんな。うつとオしい」

吐き捨てるように言った。できるだけ辛辣しつぱんに言っただつもりだが、

一方通行の後ろに二人の少女の影があった。一方通行は、見えない

ように小さく笑った。

今日だけだ。こんな酔狂なことをするのは。

「どこから調べますの？」

「研究所はほとんどが第一〇学区にある。そのなかでもだいたい目星は付いてる」

「なら、僭越ながら助力致しますわよ」

白井がにやりと笑って、アクセラレータ一方通行の腕を取ろうとした。だが、ベクトル反射で弾かれる。

「なんのつもりだ？」

「ベクトル解除してあげて。黒子はテレポート空間移動のレベル4なの」

「この力があれば、たとえ閉鎖になった研究所でも忍びこめますわよ？」

白井は得意げに目配せする。御坂は口元だけで笑った。

（なるほど、テレポート空間移動か。これは一番臭うところに忍びこめそだな）

アクセラレータ一方通行もにいと悪党の笑みを浮かべる。

「いいねエ。愉快的能力だ。ンじゃ、とっとと調べるとしよオゼ」

ベクトルを解除して、白井に腕を掴ませる。第一〇学区は学園都市最南部に位置する。空間移動テレポートを連発すれば、それほど遠くない場所だ。

（コイツらに手エ貸すなんて、どオしちまったのか）

自分を見つめるもうひとりの自分が腹を抱えて笑っているような気がして、胸糞悪かった。

轟き。

爆音と呼ぶのが失礼な音のせめぎ。遅れて巻き起こる衝撃波の渦天を駆ける六枚の翼を持つ少年と、淡い光を身に纏まとう少女。対峙する二人の間に、言葉は存在しなかった。

翼がしなる。少女を狙って複雑な動きを見せ、通過したところは七色の光が浜辺のガラスのように煌めいていた。どういう理屈かを説明する必要はない。それが、少年の能力だからである。

未元物質ダークマター。この世に存在しない新たな物質。たつたひとつの異物が混入することで世界の常識は打ち碎かれ、予想できない事態を招く。研究機関もその特異性を利用しようと考えているが、あまりに特殊すぎて、手を付けられずにいた。

科学の粋が集められた学園都市でも、いや、科学に頼りきった学園都市であるからこそ、未元物質ダークマターに対処できないのだ。

「そらそらそらあー！ どうしたんだよスキルジャンパー！ ちょっとは反撃しろつつつの！」

未元物質ダークマターこと垣根帝督かきねていとくが狂喜の笑みを浮かべ、腕を振る。白い閃光のようなものが真っ直ぐ少女に向かって突き進み、周りのものを

薙ぎ払っていった。

スキルジャンパーこと東雲鏡はその閃光を睨み、不意に身体しのめがみの力を抜いて落下し始めた。空風障壁を解除したのである。それと同時にバチバチと帯電し、左腕を振り抜いた。瞬時に構成された五億ボルトを超える雷撃の槍は、空気中に放散する間もなく垣根を狙って突き進む。生身の人間が直撃すれば、何度死ねるかわからない天然の雷に匹敵する雷撃だった。

垣根は白い翼を自分の目前に配置する。たったそれだけのことで、雷撃は分散され、謎の甲高い音を発して消滅した。垣根はなにこともなかったかのような表情で、そこに浮いている。

東雲はチツと舌打ちし、風の膜を展開、地面に降り立った。

寮が密集しているこの辺りに、なぜか人影がない。よく見回してみると、警備員アンチスキルの護送車があちこちに何台も止まっていて、人払いを行っているようだった。警備員アンチスキルの庇護下で存分に戦え、という統括理事会や上層部の指示だろう。

片道二車線の広い道路に東雲は降り立っていた。車が来る気配はない。垣根もゆっくりと降りてきて、再び相対した。

「便利な能力だな、ソレ。今のは？ 超電磁砲レールガン？ の真似だろ？」

レベル5第三位の超電磁砲レールガン。得意技は最大出力一〇億ボルトを誇る電撃と、電磁力を利用して金属を銃弾のように打ち出す、その名前の由来にもなった超電磁砲レールガン。東雲はやろうと思えば同じことができる。彼女はそういう能力者なのだ。

「テメエひとり相手にしてるだけなのに、学園都市アカデミアそのものを相手にしてる気分だぜ。レベル5だろうがなんだろうが、そっくりそのまま写コピーしちまうんだからよお」

垣根は金色の髪を掻きあげる。相変わらずぐにやりとした笑みを浮かべていた。

「俺の未元物質、真似てみるよ。でなきゃテメエはここで終いだ」
しま

東雲は額から汗を一筋流していた。それを見た垣根はげらげらと笑う。

「やつぱりな。思った通りだ。テメエは真似できねえ能力がある。俺の未元物質はコピーできねえんだろ。コピーできるならとつくにコピーして、挑んでるはずだよな！ この予測演算に支障を来たす異物相手に正攻法を取るのは馬鹿のやることだ」

「べらべらと、普通にうるさい人だ」

「はははははは！ 悪いな、俺は嬉しいんだよ！ 学園都市でも真似できねえことがある！ それは俺だ！ ただ俺に与えられた未元物質マターって能力だけだ！ 嬉しくてたまらねえ！ なにが学園都市第一位だ、一方通行！ あっさりとパクられてんじゃねえっての！」
アクセラレータ

アクセラレータ
一方通行。その名を聞いて、東雲の表情が変わる。

殺気。気付いた垣根が慌てて東雲のいる方を見た。ゆらりと佇む彼女の姿が、ノイズが混じったようにブレた。

「数字にこだわるなんて、普通にお笑いですね、未元物質」
ダークマター

「・・・ふん。数字じゃねえよ。順位なんてどうでもいいことだ。問題は一位を名乗るヤツが俺よりも交渉権に優れていることだ。ヤ

ツは学園都市統括理事会と相対することができる。それだけの権利が与えられている。学園都市最強の恩恵ってところか」

「交渉権を得て、なにを企むんです？」

「デメエには知る必要のねえことだ」

垣根は翼を東雲に向けて放つ。正確に計算された攻撃は、爆音と衝撃波を撒き散らし、背後にあった歩道橋をも吹き飛ばした。人払いしていなければ、数十人単位の死人が出ただろう。

爆煙が晴れていく。東雲は平然とそこに立っていた。

（なんだ？ エアープロック 空風障壁じゃねえ。ベクトル反射でもないだど？）

垣根は警戒心を解かなかった。敵は学園都市そのものだ。どんな特異な力を使ってくるかわからない。すべての理論と常識を破る未知物質に匹敵するとは思わないし、どんな小細工だろうと蹴散らす自信はある。だが、用心するに越したことはない。

「たしかに、僕にはコピーできない能力がいくつか存在します。未知物質をコピーしようと思っても、できないんですよ」

声が、真後ろからした。だが東雲の姿は正面にある。背後には、東雲の姿はなかった。

リモートエコー
（音声操作か？ レベル2程度の地味な能力持ちだしてなんのつもりだ？）

コピー能力の種がわかっていれば恐れることはない。攪乱するつもりだろうが、正面から目を離さなければいい。

翼がぎちぎちと蠢く。殺そうと、狙いを定めたところだった。

震え。垣根は躊躇う。悪寒が背筋を走り抜けたのだ。
普通に考えて、未元物質を前になんの策もなしに向かってくるか？
そして、ノイズ混じりのブレが、大きくなっている。

まさか。

「・・・けどまあ、未元物質なんて元からコピーするまでもない。
これでは普通に一方通行には届きませんよ、第二位さん」

やはり声は真後ろにあった。正面に東雲はいない。いつの間にか、
背後に回っていた。
空間移動？ いや、それなら声のからくりが説明できない。もつ
と別ななにか。

腰に突き付けられているその感触。見えなくてもわかった。垣根
が首を回し、背後を見る。

銃口。少女の華奢な手には似合わない、凶器。
東雲はにっこりと笑っていた。可愛い声で、告げる。

「光学操作って、聞いたことありますか？」

垣根が叫びながら白い翼を少女に叩き付ける前に、何発もの銃声
が響いた。

8 (後書き)

備忘録：垣根帝督がピンチ

9（前書き）

上条さんお久しぶりです。縦書き形式推奨です。

とあるツンツン頭の少年は第七学区の寮にいた。

インデックス

禁書目録と呼ばれる修道服の少女のためにおやつを作ってあげて

いるところだった。手間のかかるものが嫌だったので、余ったじやがいもを薄くスライスし、下処理してから熱した油で揚げる。揚げたものにコンソメを砕いて塗したり、青のりと荒塩をごりごりとすり潰したものを振りかけた。それで自家製ポテトチップスが完成する。油を使うので後処理が面倒だが、簡単かつ高カロリーなので意外と重宝するのだ。

インデックスは揚げたてのポテトチップスを美味しそうに頬張っている。本来ならおやつを作る余裕などまるでないのだが、この少女は不機嫌になると容赦なく噛みついてくる凶暴な生物だった。

かみじょう

上条当麻は冷蔵庫の中身を見つめ、大きな溜息を吐く。

「三日と保たないぞ、これは。マズい、マズすぎる・・・」

戦友は儚くも自販機に呑み込まれ、帰らぬ人となった。やはり金を口座から下ろしてでもタイムセールに行かなければならない。行つて栄養源を確保しなければ、リアルに餓死してしまう。インデックスが。上条の死因はインデックスに噛まれたことによる失血死かショック死だろう。

「インデックス。俺はもう一度出かけるから、大人しく待ってるんだぞ」

「ねー、とうま。冷蔵庫のなかのプリンは食べてもいいの？」

それは俺のだ、おまえは昨日食っただろうが、と怒鳴ろうかと思
ったが、それで待っていることを快諾してくれるなら安いものだ。
上条家の財政状況を知るとインデックスはなにを言い出すかわから
ない。「信じる者は救われるんだよ！」とかわけのわからない理屈
と理論で厄介事を増やすに違いない。たかが一〇〇円（税抜き）の
プリンはまだ買えば済む話だ。今はなるだけ穩便に、インデックス
の機嫌を損ねないようにしよう。

「プリン食べてもいいから、大人しくしててくれ。晩ご飯まで
は帰るから」

「はい」

インデックスはテレビに釘付けになっている。興味を引かれるな
にかの特集でもやっていたのだろう。上条は気にせず、靴を履いて
外に出た。

インデックスという少女について簡潔に説明すると、イギリス清
シスター
教の修道女だが、そのイギリス清教に追われていたところを上条が
救い、そのまま上条が面倒を見るようになったところか。完
全記憶能力の持ち主で一〇万三〇〇〇冊の魔道書の原典を記憶した
オリジン
歩く魔道書図書館という事情もあったりするのだが、別世界の話過
ぎていまいち上条には実感が湧いていない。

そもそも科学の町学園都市で？魔術？がどうか持ち出すのがナ
ンセンスなのだ。上条の右腕にある異能を打ち払う力は科学だけで
なく魔術にも適用されるようだが、着実に迎えつつある飢えを救っ
てくれることはない。だから上条はタイムセールに出陣する。AT
Mで下ろしたなけなしの金を握り締めて。

「・・・不幸だ」

コンビニから出た上条の開口一番。どんよりとした陰が見える。その直後だった。すぐ近くで、ドンという轟音が響く。道行く人々も立ち止まり、ざわめき始めた。それほど遠くない場所で爆発があったのか。轟音は断続的に鳴り続け、人々の悲鳴が聞こえ始める。上条は音のする方を見やり、駆け出した。

（ガス爆発なんて騒ぎじゃない！ テロか能力者の乱闘か？）

この昼間から、しかも人の多い第七学区で暴れるなんて。人が死んでもおかしくない。上条は後先考えず走り出していた。角を曲がったところで、上条は勢いよく倒れ込む。誰かにぶつかったのだ。

「——わ、ぶつ、すいません！ 急いでて！」

上条は自分の下で倒れ込む誰かを見た。十二歳くらいの少女だった。きよとした顔で上条を見つめている。

上条は自分の右手がなにか柔らかいものに触れていることに気付く。もしか、と恐る恐る視線を右手の辺りに落とした。

幼い少女の未発達のを、大胆にわし掴んでいたのだ。偶然触れてしまった、言いわけできるレベルではない。揉みしだくぞと言わんばかりに掴んでいるのだ。

胸がほとんど育っていないので、掴んだという感覚がないのが惜しい。

「ごめんなさい！」

残念がる上条は思い出したように、慌てて飛び退く。少女はなおもぼかんと口を開けて倒れ伏せていた。

（もしかして打ちどころが悪かったとか・・・高校生にして犯罪者に！ この子の親御さんになんて説明すればいい！ 贖罪じやくざいのために生きると言うのかああああ！）

上条が絶望に打ちひしがれていると、少女はようやく起き上がり、服に付いた砂埃を手で払った。

「・・・超汚れてしまいました。私の能力、どうしたんですかね」

少女はふわふわとしたニットのワンピースを整え、腰に手を当てて向き直る。

「私の胸を超掴んだその右手、今すぐ切り落としてやりたいところですけど。今は急いでるので超見逃してあげます。誰かに言いふらしたら右手と言わず大事だいじなところもちょん切ります」

大事なところと言われ、上条は思わず股間を隠した。その少女はふーと一息入れ、背を向ける。少女が向いているのは、まだ爆音のする方向だ。

「ま、待て。まさかおまえ、音のするところへ行く気じゃないだろうな？」

「超行きますよ。私の目標ターゲットはおそらくそこにいると思いますから」

「駄目だ！ 危険過ぎる！ 女の子がひとりで」

上条が言つと、少女は振り返る。にやりと笑っていた。

「ごちゃごちゃと超うるさい人ですね。私が誰だか知りもせずえらそーなことを言うもんじゃないです」

そう言つて、少女は片手で標識を掴むと、力任せにそれを地面から引き抜いた。大人の男でも持てないような三メートルを超える金属の棒を片手で振り回していた。

「私の能力は？オフエンスアーマー窒素装甲？。レベル4なんですよ。そしてお兄さんとは生きている世界が超違う。わかったら、さっさとお家に帰るんですね」

金属の棒を力任せに地面に突き立てた。固いアスファルトが簡単に崩れる。

オフエンスアーマー

窒素装甲は大気中のほとんどを占める窒素を利用し、体表に薄い窒素の膜を張ることで自動防御を可能にし、細身からは想像もつかない怪力を得られるのだ。銃弾だろうがなんだろうが物理攻撃すべてをシャットアウトできる稀有な能力である。

「なぜかお兄さんのタックルは超受けましたけど。さて、もたついてると逃げられてしまいます」

「この先でなにが起こっているのか、おまえは知っているのか？」

「知るために向かうんです」

少女が背を向ける。

「おい、この爆音はなんだよ！ 怪我人もいるんじゃないか？ なんだおまえが知るために危険な場所に向かわなくちゃならない？」

「お兄さん、詮索家は嫌われますよ。今ここで引き返せば、お兄さんは超平和な日常に戻ることができる。でも、ここで一步踏み出せば、お兄さんは二度と陽の目を浴びられなくなるかもしれない」

「どこが平和な日常だ！ あの爆音が平和な日常で聞けるものなのかよ！」

上条は歩いて行く。少女に向かって。

「俺はおまえを止めるぞ。危険な目に遭わせたくないからな。この先にあるなにかを見届けるのは俺だ」

「だから、この^{オフENSEアーマー}室素装甲があれば私は超大丈夫なんですよ」

「万が一があるかもしれないだろ。その時傷つくのはおまえよりは俺の方がいい。誰かがそう言うんじゃない。俺がそうしたいから、そうするんだよ」

「・・・ああ、もう。超面倒臭い人に捕まってしまいました」

少女は呆れたようにもう一度腰に手を当て、苦笑する。

その時、爆音が上空から響いてきた。障害物に遮られなかった、より鮮烈な響きが。

「なんだよ、ありゃ」

上条は呻くような声をひり出していた。少女も上空を見つめごとくりと喉を鳴らす。

白い翼を持つ何者かが、誰かと対峙している。その翼が動いたたびに、轟音が鳴り響いていた。

「未元物質のおでましですか。これは超やばいですね」
ダークマター

「未元物質だつて！ 学園都市第二位がなんでここに！」
ダークマター

上条が轟音に負けないように叫んでいた時だった。

「君達！ ここは危険だ、退避しなさい！」

アンチスキル
警備員が駆け付けた。上条が助かった、と胸を撫でおろそうとする。

しかし、隣にいた少女が一目散に駆け出していた。それはまさに脱兎のごとく。上条は啞然とし、次の瞬間同じく駆け出していた。

「ま、待てつて！ どこに行く気だ、アレに立ち向かう気か！」

「そんな真似しません！ 今は超逃げてるんですよ！ 警備員なんか
アンチスキル
に保護されたら一日行動不能どころじゃ済みませんから」

「なにッ！ おまえいつたいなにやったんだよ！」

「なにもしてません！ それより、お兄さんは気付いていないんですか」

アンチスキル
警備員は後ろを追ってきている。足音がいくつも聞こえていた。

「あいつら、人払いのための警備員ですよ。？上？の圧力が超かか
アンチスキル
つてるんです。捕まったら取り調べ室直行間違いないし！」

るじ うら
路地裏をじぐざぐに逃げ続ける。警備員を振り払うためだ。
アンチスキル

「考えてみればわかります。警備員アンチスキルはあれだけ超近くにいなから、
どうして未元物質ダークマターの戦闘に介入しなかったんですか？」

「つまりなにか。未元物質ダークマターが安心して戦えるように警備員アンチスキルが住民を
退去させてたつてことか？」

「そのついでにうるさい小バ工を洗おうとします。警備員アンチスキルの上層部
がなにを企たくらんでいるか知りませんが、状況が滞りなく終息するよう
に小バ工を軟禁するという方針がとられるでしょう。だから私、超
逃げてます」

「その理屈はわからないこともないが、肝心かんじんのところが解明されて
ないぞ！ なにをすれば未元物質ダークマターなんつー危険人物が出てきて、警
備員アンチスキルがそれを見守るなんて状態になるんだ！」

「だからその理由を私は探ろうとしているんですよ。お兄さん、そ
ろそろ二手に分かれましょう。このままじゃ二人とも捕まりますか
ら」

「待て待て待て。このひ弱な無能力者を見捨てる気か！ 俺はタイ
ムセールに行かなくちゃいけないんだよ！ 取り調べ室になんて行
きたくないぞ！」

「タイムセール・・・超マイペースですね。仕方ない。後で恨まれ
ても嫌ですし、少しでも面倒を見てやりますか」

少女はふと行き止まりの方を見て、そちらに駆けた。上条も慌て
てついて行く。

「ばがん、という音がした。少女の手が行き止まりの横の壁を貫い

て、崩していた。通路を作ったのである。

だが、少女は塀の方を登り始めた。

「あれ、通らないのか？」

「そっちは超フェイクです。ほんとうはこっち。ここから大通りに抜けられます」

少女は身軽に行き止まりの塀を乗り越えた。オフエンスアーマー 室素装甲の力だろうか。上条も壁の亀裂を利用し、懸命に塀を乗り越えた。それを待っていた少女は上条が乗り越えるのを見るなり、再び駆け出す。

すぐに道が開け、割と人通りの多い道に出た。上条が疲労をあらわに、肩で息をする。

「しかし、どうしますかね。ダークマター 未元物質がいるとなると、私ひとりじゃキツイし。かといってなにも成果なしで帰るとむぎの麦野さんがヒステリー起こしそうですし」

ニットのワンピースを着た少女は真夏の運動後だというのに、汗ひとつかいていなかった。それも能力に由来するのだろう。アトモスフィリック 能力者は、よくわからなかった。

「だいたい、おまえはなんなんだ？ なにが狙いでこんなことを」

「お兄さんには超関係ないことです。ここまでくれば大丈夫でしょう。解散ということのひとつ」

「待てよ。おまえはまたあんな危険なところに行く気だろ？ それは駄目だ」

「お兄さん・・・面倒臭いですね。死にますか？」

少女は足で地面を踏んだ。アスファルトがみちみちつと気味の悪い音を立てて、少女の足に合わせてへこんだ。だが、上条は引き下らない。

誰かが傷つくのを見過ごせない男なのだ。たとえ見ず知らずであっても、危険に身を委ねるといふならそれを認めないし、許さない。恨まれても、また別の道を探せるように、助ける。

理屈はいらない。目の前の少女が危険な目に遭わずに済むなら、それが一番のはずだ。だから上条は立ちほだかる。少女を殴つても、止めてみせる。

刹那、二人を静寂が包む。上条の携帯電話が鳴つたのだ。

『やあ、上条当麻君だね？』

この声は。上条は怪訝に眉を顰める。いつも世話になる病院の医師だった。

『急な用件で悪いんだけどね。ちょっとうちまで来てくれないかな』

「病院へ、ですか？　なんでまた」

『急患が運ばれて来てね。外傷はないんだけど、意識が戻らない。それが能力者の仕業らしくてね。君の右腕に活躍してもらいたい、というわけだね』

「俺の・・・わかりました。すぐに向かいます」

自分の右腕が誰かを救う。それだけで上条が行動する理由は十分だった。

『感謝するよ、上条君。患者はどうやらスキルジャンパーにやられたようだからね』

「スキルジャンパー？」

オウム返しに答えた時、少女の目がかっと見開かれる。

『詳しいことはこちらで話すよ。待ってるからね』

そう締めて、通話は切れた。

「今スキルジャンパーって言いました？」

「ああ、そいつにやられたって患者を治すために、俺の力が必要らしい。だから今から行かなくちゃいけなくなった」

上条は少女の方を見る。ぎょつとした。少女は目を輝かせていたのだ。

「私も、お兄さんに超ついていいですか？」

「え？ ええと、どういふこと？」

「ていうか、ついていきます。超ついていきますからね。逃がしませんよ」

そう言って少女は上条の身体に擦り寄る。腕に絡みついて、ほんとうに放す気がなさそうだった。

（ふおおお、む、胸、胸が！　ちっこい胸が当たってるんですよ！）

上条が悶える姿を見て、計画通りなのか少女はにやりと笑っていた。

「私は絹旗最愛きぬはたさいあいです。お兄さんは？」

「か、上条当麻。絹旗さん、その、お胸が」

「ふふん、超当ててるんですよ。おっと、これ以上はNGですからね。料金が発生しますから」

「なんかの店ですか！　ちょっとこれは上条さんの説教が必要っばいな！」

そう言って上条さんの右手が絹旗の頭をむんずと掴み、引き剥がした。

上条と絹旗が行動を共にし、ヘヴンキヤンセラ―冥土帰しの待つ病院へと向かう。

村叢むらぐみはオープンテラスでくつろいでいた。同じようにして賀古かこも紅茶を嗜んでいる。

「優希ゆきちゃんは所定通りに行動したみたいですねえ」

「・・・早瀬はやせは扱いやすいから楽ですね。わかりやすいし」

「それが優希ちゃんの良いところでしょう？」

賀古がほほ笑み、つられて村叢は口元に笑みをつくる。二人は携帯電話の液晶サイズほどのモニターを眺めていた。

「優希ちゃんは怒るでしょうねえ。私達が三人でひとつだと知れば、除け者にされたりすると泣いちゃう子ですから。まして利用されたなどと知ったら世界に雨が降りますわ」

「巻き込まないための一手ですもの。初春に接触したのは予想外だったけど」

「スキルジャンパーに食い付いたのも想定外でしたわ。能力も運動神経もからつきですけど、嗅覚はさすがのものがありませんわねえ」

モニターに映っているのは、航空写真のような鮮明度の低い学園都市地図。リーダーのようなものだった。今は第七学区に焦点が合

わせられている。
リーダー上で、点が複数動いている。そのなかのひとつは、東雲である。

「・・・決着。鏡がさらに移動を開始したみたいです」

「あら。帝督くんが動きませんわ。やられちゃったのかしら？」

「殺してないと思います。あの子はとことん優しいですから」

「そうでしょうねえ。それもまた鏡ちゃんの良いところです」

ふわふわの髪の毛の賀古は、ジャムを口に含み、舌先で転がしてから紅茶を啜る。東雲に紅茶の作法を教えたのは、実は賀古だったりす

る。

「故郷ロシアが恋しい？ ソーニヤ」

「あら、突然なんなのでしょう？」

賀古は微笑を浮かべていた。ソーフィヤというのが本名であると村叢が知ったのはちょうど一年前だ。賀古という名はロシアにいた頃お世話になった日本人の姓らしい。チームで行動している時には、賀古のことをソーニヤと愛称で呼んでいる。

「・・・しかし、ソーニヤは日本語が上手ですね」

「私はクォーターですよ。ネイティブ日本人の祖父に日本語を学びました。

賀古先生にも文化や流儀を教えて頂きましたし。それに、こちらに来てもう四年目ですわ」

「早瀬はたぶんソーニヤが本土人でないと、気付いていません」

「祖父の血が濃いせいか、瞳の色が黒っぽいですからねえ。髪の色だって学園都市には信号機みたいな明るさの髪の人がたくさんいますから、目立ちませんわ。隠す手間が省けるのでありがたいですけど」

賀古が国籍を偽っている理由を、村叢は知らない。同じように賀古も村叢の過去や経歴を知らないだろう。チームを組んだ時に、互いに干渉しないという規約を設けた。

東雲と村叢、賀古はチームを組んでいた。暗部組織のひとつである。

「それで、私達の最後の仕事は鏡ちゃん抹殺の補助なわけですが、皮肉以外のなにものでもないですね。正直どこまで付き合う気なのですか？」

村叢は答えなかった。賀古もそれ以上言及しない。

モニターの点が活発に移動している。第七学区では東雲の他に四つの点が蠢蠢いている。さらに新しい点のひとつ、第七学区に入り込んだ。また別の三つの印が点滅しながら南下を続けている。

リーダー上の止まっていた点が、動き出す。

「・・・垣根帝督が動き出した。やっぱり生かしたんですね」

「これは空を飛んでいるのかしら。予想以上に速い動きですわねえ」

垣根は東雲を追っているわけではない。能力開発関連のトップ校が多い第一八学区に向かっている。隠れ家に引き返すのかもしれない、と村叢は思った。

？アイテム？が第七学区で活発に動いていた。四つの点がばらばらになって探索している。まだ滝壺理后たきつぼりこうの能力は使っていないらしい。一番近い位置にいるのは絹旗最愛という少女。東雲と交戦する可能性もあるが、絹旗の不自然な動きからして東雲を捕捉している様子がない。

「・・・？アイテム？に見つかるかと厄介ですね。滝壺理后の？能力追跡？が発動すると面倒だ」

滝壺理后という暗部組織？アイテム？構成員の少女の能力、能力追跡。一度捕捉したAIM拡散力場の持ち主を特定し、地の果てまで居場所を追跡できる。AIM拡散力場は能力者が無意識のうちに垂たれ流しているもので、ようするに滝壺は出会った者を自由に追跡

できるということなのだ。東雲のAIM情報を知られると、？アイテム？は東雲を追い続けるだろう。

「滝壺理後は中央通りで動いていませんわねえ」

「・・・自身を中心に広範囲検索をかけていますね。より強いAIM拡散力場の持ち主が接近すれば反応できるように」

「蜘蛛の巣というところかしら。絹旗最愛と出くわして交戦、そこに？アイテム？が集結というシナリオが一番面倒ですわねえ」

「いくら鏡でもレベル5を複数相手にするのは厳しい。各個撃破といきたいところですけど」

モニターに触れ、指でスライドさせる。見たいのは南下する三人の情報だ。

「第一位と第三位が共闘するなんて、今でも信じられませんよ」

「会話まで盗聴すれば良かったかしらねえ。面白い話が聞けそうでしたのに。研究所を調べるつもりでしょう。あそこにはヒントを残してありますし」

「・・・今はソーニヤの順番ですね。あなたの頭脳と話術には遠く及びません。第一位と第三位が共闘するよう仕向けるなんて、どうやったのやら。？絶対能力進化計画？も凍結したばかりで禍根が残っていると言っのに」

「その実験が終わったばかりだからこそ、可能なのですわ。それに第三位の方に馬鹿正直に実験の概要を伝えたところで乗って来ませ

んから。この実験はなるだけ盛り上がった方が良いでしょうからねえ」

「そういう頭のキレが、私には足りません。私が活躍するのはもう少し後になりそうだ」

賀古は携帯電話をいくつも持っていた。今見ている小型モニターも賀古が用意したものである。明るい青色の携帯電話を取り出し、賀古は柔らかに笑んだ。

「頭を使う。私にできることは、これくらいですからねえ」

賀古は笑んだまま電話をかける。その相手は、第五位。心理掌握メンタルアウツと呼ばれるお嬢様である。

垣根帝督は白い翼をはためかせ、十階建てくらいのビルの屋上に降り立った。

制服は自分の血に塗れ、お気に入りのワインレッドのシャツには数発の弾痕がある。

「くそつたれが。ナメやがつて」

垣根は唾を吐き捨てる。血ににじ滲んで赤かった。

シャツに弾痕はあるが、肉体そのものは傷ついていない。血も出ていないのだ。

（空砲じゃねえ。ダークマター未元物質で防ぎはしたが、撃たれた感覚はあった）

未元物質をとつさに腰のところに展開したが、すべての弾丸を防
げとは思えなかった。完全に防げるだけの量を生み出す前に、銃
声が響いていた。

数発の銃弾は自分の腰を貫通した。痛みを通り越した熱がしっか
りと記憶に残っている。

銃弾が垣根の身体を貫通し、白い翼をかたどっていた未元物質ダークマターは
砂塵のように風に流されてしまった。垣根が未元物質を制御する力
を失ったからである。銃弾が垣根を襲っていないければ、白い翼は至
近距離にいた東雲しのめを跡形もなく薙ぎ払っていただろう。

撃たれたのは間違いない。だが、目覚めた時には傷はなかった。
時間にして数分の出来事。

誰かに治療された、ということになる。

（誰かなんて考えるまでもねえ。あの場には俺とヤツしかいなかった。
警備員アンチスキルが人払いしていたんだからな）

垣根は悔しそうに拳を握る。

殺しに行ったのに、不様に敗れ、その上生かされたということな
のか。

「光学操作クリアコントロールか。ああいう芸当もできるんだな。下調べが不足してい
たってか？」

馬鹿馬鹿しい、と垣根は嘲る。スキルジャンパーは学園都市その
ものである。下調べというなら、学園都市に住むすべてのものの能
力を理解しておかなければならない。とても現実的なことではな
かった。

それにそれだけの猶予もない。動いているのは垣根だけではない
のだ。

「チツ。次は不覚なんざ取らねえ。油断もしねえ。俺が死ぬかヤツが死ぬかだけだ」

垣根は人が持ち得るありったけの憎悪を込めて、自らを戒めるかのごとく言い放つ。

屋上から見える空。赤焼けに燃えていた。もう日没を始める時間帯である。

学園都市の空はどこまでも澄んでいるようで、工場や自動車から生み出される目に見えない排気ガスで、薄汚れている。どれだけエコやクリーンを謳ったところで、人が利便性を求めれば大気汚染は避けられないことなのだ。

学園都市も同じだ。目に見えないもので薄汚れているのに、誰も気づかない。その排気ガスを知らず知らずのうちに吸い込み、肺を腐らせ、身も心も駄目にしていく。そんな事態に陥っていることに、誰も気づかない。

薄汚れていくのは、闇にいる者だ。今も研究所にいる何百という憐れみも救いも、弔いすら受けられない実験動物以下の存在を、人は知らない。知らないままにのうのうと生きている。その能力開発カリキュラムを確立してやったのが誰かも知らず、その確立のためにどれだけ犠牲が払われたかも知らず、新たな方法の発見のためにこれからどれだけ犠牲になるかわからないということも、知らない。

目に見えないもので、薄汚れている。見た目だけは美しく、魅力的で、心震える景色をつくり出している。それでも、汚れている。それはどうしようもないほどに。

そしてその汚れは、クソみたいな扱いを受ける人間モルモットから吐き出されているのだ。

この空は、学園都市そのものだった。眼前に広がる夕焼けの赤が誰かの血の色だということに、気付いている者がいるだろうか。気

付いていないから、無邪気に笑えるのではないか。

学園都市は腐りきっている。レベル6になればその腐ったシステムをぶち壊すことができるのではないか。この未元物質が既存の理論をぶち壊すように。

携帯電話をポケットから取り出し、どこかへかける。

「・・・俺だ。スキルジャンパーについてもっと情報を寄せせ」

垣根はぐにやりとした笑みを浮かべていた。

彼はレベル6のための足掛かりを許すつもりも見逃すつもりもない。

「スキルジャンパー、俺を殺さなかったことを末代まで恨みやがれボケナス」

9（後書き）

備忘録：垣根帝督カッコイーだろ。勝利宣言フラグ。

0（前書き）

原作にもある行間です。

本編とは離れますが関係ある話を載せます。

縦書き形式の閲覧推奨。

研究所に立ち入るといのは、初めての経験だった。

映画やドラマのなかでしか見たことがなかった。白衣の男の人がたくさんいて、ごちゃごちゃとした機材がいくつも並んでいた。あれひとつ作るのに数億円という費用を要すると言われた時は、卒倒しそうになった。間違っても壊さないようにしよう、と肝に銘じてみる。

今日から当分の間は研究所に所属するみたい。とはいえ学校は普通に通うし、放課後や休日の一部を研究実験に費やされてしまう以外は以前と変わらない生活を送れると言われた。

研究手当として、かなり多額の支援を受けられるらしい。二ヶ月前に父親が病気で倒れてしまって、あと一年分残る学費や生活資金に困っていたから、ありがたすぎる話だった。これで一日二食の生活から抜け出せる、と年甲斐もなくはしゃいでみる。

少し残念なことといえば、ジャッジメント風紀委員として活動できる時間が減ってしまうところか。

「じゃあ、ここに座って。早速始めるよ」

優しそうなお父さんタイプの研究員さんに誘導されて、大きなモニターの前に座らされる。研究所といういかにも悪の組織、というイメージがあるのだけど、この人達は皆優しそうだし、フレンドリーに接してくれる。不安でいっぱいだったのも、すっかり和らいだ。

目の前の巨大モニターには、人体の模型図が映し出されている。

「君に協力してもらいたいのは、がん癌細胞の解明だ」

「癌、ですか？」

「そうだ。癌細胞が人体に存在する正常な細胞が突然変異したもの、
というのは知っているかな。癌のなにが恐いかと言うと、全身に転
移して弊害を引き起こすことなんだ。我々はその転移について研究
している。君の能力を使って、癌細胞の転移をマッピングしたいん
だよ。どこを通過してどう分布するのか。癌が好まない部位にはどん
な物質が含まれているのか。解明すれば癌細胞の転移を防ぐことが
できる。もっと研究を進めれば、癌細胞に打ち勝つこともできるか
もしれない」

ジャケット

風紀委員をしているだけで、特別な能力を持っているわけではな
かった。レベルも2の判定しか受けたことはないし、来年の春には
高校を卒業して学園都市を離れるつもりだった。大学に行くだけの
頭脳もないし能力も持っていない。外の企業に就職し、能力のこと
など忘れて生きていく予定だった。

それなのに、研究の助手をしてもらえないか、とある日突然招集
されたのだ。

「これは画期的なことなんだ。君の能力は多くの癌患者を救うかも
しれない」

「でも、私はレベル2で・・・」

「レベルは関係ない。君の能力で救える人がいる。それも、世界中
にだ。何万、何十万という人が君の能力を待ち望んでいる。研究が
成功したあかつきには、君は世界で最も偉大な人物のひとりに数え
られるんだ。それだけの能力を、君は持ち合わせている」

なんだか、そんな気がしてきた。

昨日まで、何の変哲もない低能力者の女子高校生だった。風紀委員^{セント}になったのも親になにかがんばっている証を見せたかったからで、一三の試験をクリアするだけで三ヶ月かかった。四ヶ月の研修期間では何度挫けそうになったか覚えていない。そんな平凡で地味な高校生だった。

それなのに、今では世界を救えるという気がしていた。凄い人間なんだという気がする。

「わかりました。私、がんばってみます」

安易だった。気がつけばそんなことを口走っていた。

学費の支援がありがたかった。就職する時にも研究所にいた前歴が役立つかもしれない。ここの人達と仲良くなっておけば、それなりに人生にプラスになるだろう。

自分のためだった。自分のために研究に協力しようとした。それが、研究員の言葉で、自分はなにか高尚な人物になった気になっていた。

自分のためではなく、誰かのためだと思いこんでしまった。

「そうか。よかった。では、これを」

手渡された透明なケース。白い錠剤が入っている。

「・・・これは？」

「なに、心を落ち着ける薬だね。人体研究ではどうしても血や臓器を見ることになるから、ショックを起こさないように皆飲んでいるんだ。大丈夫だと思っけていても緊張して手元が狂ったり、能力が上

手く発動しなかったりするから」

不気味なものだと素直に思った。けれど、研究員さんは穏やかに笑んでいて、周りの人も優しい表情をしていたから、疑うことはしなかった。

ケースから錠剤を取り出して、勇気を出して、それを口に含み、水で流し込んだ。

すぐに、脳のなかが洗い流されるような不自然な爽快感に襲われる。トイレで水を流した時に似ているかもしれない。余計なことがぐるぐると掻き混ぜられて、すっきり流される。

頭が冴^さえる、という言葉がぴったりだと思う。

「落ち着いただろう？ それじゃ、始めようか」

モニターに映し出されていた人体の模型図に、臓器や血流が表示される。嫌にリアルだったと思う。人体模型のようなのっぺりした顔で、もちろん生きているわけではないのに、内臓や血管だけは色も動きもまるで生きているようだった。

けれど、不思議と気持ち悪くならない。薬のおかげで落ち着いているからだろう。

脈打つ心臓から運び出される真っ赤な血液がだんだんとくすんだ赤色になるのを目で追いながら、脳がからっぽになる感覚を噛み締めていた。

「それじゃ、始めようか、^{カラーマーカー}色彩追跡。癌細胞を^{・・・}対象と認識して、色を付けてみなさい」

そんなことができる能力ではない。^{カラーマーカー}色彩追跡は、触れたものの色を変色させる程度のものだった。^{ジャッジメント}風紀委員として犯人をマーキングする時くらいしか、使い道のない力だ。

だが、頭のなかが整理されているからか、できるような気がした。血流のなかのものと臓器の一部が不自然な青色を帯び始める。研究員がどよめいた。

カラーマーカー
色彩追跡。私にしかできない、特別な能力。世界中の人を救うための。偉大な。

拍手喝采。それが耳に響いてくる。心地いい。嬉しい。

こめかみの辺りになにかが刺さる感じがした。次に腕。痛くはない。止めて欲しいから動こうとしたのに、全身が金縛りにあつたように動かない。よくわからないもので、縛られている。いつの間だろう。でも、心地いいから、いいか。

人の手がべたべたと触れてくる。学校の科学室のような不思議な匂いがした。モニターから目が離せない。気持ちいい。日光浴でもしているよう。

褒められてる感じ。君は偉大だよ、と言ってくれている。聞こえないけれど、きっと皆私を褒めてくれているだろう。私は世界の人々のために力を尽くしてあげているのだから。

「モニター変えろ。もうダメーはいらん。今ならこいつも状況がわからんだろう」

泥酔とは違うが、一種の快楽状態を刺激されている少女の頭を、研究員のひとりが持ちあげた。意識は混濁していて、今どこにいるかもわからないだろう。

少女に投与されたものは？体晶？と呼ばれているものをさらに化合調整したものだった。

モニターに映し出されたのは、人の脳だった。

カラーマーカー

「色彩追跡。君ならできる。これを飲んで、世界の人々のために力を尽くしなさい」

研究員はそう言ってもうひとつ、錠剤状の体晶を与える。少女はだらしなく舌を出し、口に含むなりそれを噛み砕いた。

途端に、少女が暴れ出す。器具で抑えつけられているにも関わらず、暴れ狂った。叫び声というよりも、金切り声に近い。何名かの研究員は焦っているが、中心にいる男は静かに笑っていた。

能力が発動している。絶叫する少女は、それでも世界の人々のために能力を顕現しているのだ。

「素晴らしい。やはり私の目に狂いはなかった。これで研究は成功するぞ」

脳の一部分が染まっていた。

薬の効果が薄れ、顔面からあらゆる液体を流している少女の横で、男は高らかに笑っていた。

「――？プロデュース？発足以来、最大の功績だ」

少女は、もうよくわからなかった。

なんのために研究に参加したのか。

なんのために能力を使っているのか。

あの薬をもつと飲みたい。このわけのわからない感情を、まとめて洗い流して欲しい。

なにが悪かったのだろう。なにがいけなかったのだろう。

もう、なにもわからない。理解できない。理解したいとも思わなかった。

「色彩・・・友達、で・・・第八・・・共演・・・」

駄目だ。もう自分の思い通りに話せない。意味不明な単語を羅列するしかない。

いや、これは単語の羅列なのか？　そもそもなにを呟きたかったのだろうか。

(・・・明日、学校行けるのかなあ。風紀委員の仕ごとジャッジメント、とッ)

こめかみの辺りにびりびりとした感じが走った。電流？

瞼が落ちてくる。目の前になぜ脳の映像があるのか、わかっていなかった。

自分の思い通りに動かない両手両足を見て、ゆっくりと意識を手放す。

0 (後書き)

備忘録：色彩追跡と研究チーム『プロデュース』の関係

1（前書き）

超ちょっと長いですがどうぞ。 しかし常盤台女子強いですね。あ、
超縦書き形式推奨です。

麦野沈利は第七学区の人混みのなかにいた。

消防車のサイレンが響く。警備員による封鎖を前に、帰ることができなくなった学生達が不満をたらしながら、人だかりをつくっていた。

「なんだっただろうな、さっきの」

「寮でガス爆発があつたって話だぜ」

麦野の前にいる男子学生がそんな会話を続ける。麦野はその者達を睨み、違つと口のなかで呟いた。学生達には届いていないだろう。あの音はガス爆発というよりも爆撃。いや、爆撃ですら説明できない爆音と衝撃だった。火薬を使った爆音とはどこか違う。脳に直接残響がぶつかってくる感覚。口では上手く説明できないが、普通とは違うことだけはたしかである。

普通ではない爆音を生み出す能力者。麦野は、ひとりだけ、心当たりがあつた。

（はいじゃないの、第二位・・・）

人の流れに逆らうように麦野は歩いて行く。戦鬪のあつた場所はまだに警備員が固めているだろうし、そこに間抜け面して突っ立っているような目標なら第二位がとくに殺しているはずだ。警備員の動きを見ても、スキルジャンパーがいるとは思えない。

第二位が目標を始末しているなら、電話が来るだろう。「実験は終了ですわ、遅かつたですわねえ」と。のんびりとした口調でムカ

つく女だが情勢の把握力と連絡の周到さがある。あの女から電話がないということは、第二位は敗れたか、スキルジャンパーを取り逃がしたということ。

（運が巡ってきてる。誰が勝つか、まだわからないってね）

麦野はにやりと笑っていた。足取りも速くなっていく。

アクセラレータ

一方通行達は第一〇学区の西にある研究所に潜入していた。

廃れていて外壁は一部崩れているところもあるが、アンチスキル 厳重な警備態勢が敷かれていて、不正にゲートを通るとたちまち警備員や無人口ボットが駆け付ける。白井黒子の空間移動しびくくろこがなければ後回しにしていた場所である。なかの設備は使われていないが、警備は生きていた。

テレポート

アクセラレータ

白井の空間移動でまんまと研究所に忍び込んだ一方通行は、見当をつけているのか足を止めることなくある場所を目指して歩いて行く。後ろに超電磁砲れーるガンこと御坂美琴みさか みことと白井が続いた。

研究所内はすでに廃墟と化していて、足元を照らす電灯以外に電気は送られていなさそうだった。なぜ足元の電灯だけが点いているのかはわからない。後に施設を再利用する気だったのかもしれないし、取り壊す予定だったがなにかが起こって中止だったのかもしれない。足元の電灯に深い意味はないのだろう、と御坂は思った。

それにしても、薄暗い。足元だけが明るいので、通路の奥が見えないのだ。

「なんか・・・気味悪いところね」

「お化けでも出そうですね」

「や、や、やめなさいよっ、黒子っ!」

御坂の声が上擦る。白井はしたり顔で「抱きついても良いんですの」と腕を差し出す。

「黒子・・・アンタね・・・っ!」

「オイ、うつせエぞ!」

御坂が怒鳴り散らす前に、アクセラレータ一方通行がキレた。

「女同士のヘビミテエなくだらねエ絡み合いなンざ見たくねエンだ。なに放電しよオとしてるンですかア? 警備は生きてるって説明しただろオが。ここで電気なンざ通してみる。俺もオマエも仲良く不法侵入者だ。それ以上続けるってンなら外でやれやクソボケ」

「う、ご、ごめん」

アクセラレータ御坂が謝り、一方通行は歩みを再開する。白井は怯えた様子で、静かになった。

「それで、オマエが見たスキルジャンパーってのは、宙に浮いたんだっただな?」

静けさに包まれる通路を歩きながら、アクセラレータ一方通行は問う。御坂はうんと一度だけ肯いた。

エアロマスター クリアコントロール
「風力使いだとか光学操作だとオマエは思ったワケだ。あるいは多重能力者」と

「でも、実際にそうだったのよ？ 多重能力者ってことじゃないの？」

「馬鹿じゃねエの。多重能力者なソフーモンは存在しねエ」

御坂はむっとした。一方通行は通路の突き当たりにあった扉を片手で押しのけるように開いた。

「厳密に言うと、存在できねエンだよ」

大きな研究室には、様々な器具や書類が放置されていた。さらに奥に小部屋がある。この大きな研究室とガラス越しに繋がっているだけで、入口は別のところにあった。どうやらここは奥の部屋を観察するための場所のようだ。

一方通行は頭を掻き、遠慮することなくずかずかと入っていく。御坂と白井も続いた。

「ここって・・・」

「特例能力者多重調整技術研究所。オマエも名前くらい聞いたことあんだろ」

ぞっとした。ここが悪名高い？ 特力研？ だと言う。
多重能力者の開発を目的として多くの子供達が犠牲になった研究所だ。その犠牲の上に多重能力者は存在しないという結論を導き出した。

「脳に負担がかかり過ぎるつてもここで発覚したことだ。無理やり外から力を加えて二つ以上能力を発動させよオとするとな、拒絶反応が出るんだ。パーソナルリアリティの許容量が関係してるとか、脳波が関係してるとか聞いたが、ほんとうのところは知らねエ」

その辺にあつた書類の山から探り始める一方通行に、御坂は震える声で尋ねた。

「アンタ、なにも思わないの・・・？ この施設は大勢の子供達がッ！」

「あア？ なに怒ってんだ、オマエ」

一方通行は眉を寄せた。さも不思議そうな表情で。

「怒るに決まってる！ この場所に来て、踏み散らして、平然とした顔をして！」

「お姉様・・・」

白井が御坂の肩を持つ。御坂は今までにないくらい哀しい表情をしていた。

一方通行は、一拍置いて、低い声で笑い始めた。

「なんだア？ じゃあ犠牲になった子供達が可哀相、と泣いてやればいいのかなア？」

「アンタ・・・言っていいことと悪いことがあるでしょ」

御坂は静かに怒っている。倫理や道德が決定的な原因ではない。

一方通行と御坂は元から馬が合わないのだ。一方通行の拳動ひとつとっても御坂は腹が立つし、御坂の直情的なところが一方通行にはうっとうしく感じられる。

表面的なことではない。もっと奥の部分で、二人は反発しあっていた。

「特力研の話は聞いておりますの。具体的にどんな実験があったのかは知りませんが、ここでわたくし達が争っても仕方のないことはありませんの？」

間に割って入ったのは白井。御坂は白井の介入で、そっぽを向く。

「実験ねエ。違うンだよなア、ここで行われていたのは実験なんかじゃねエ。虐殺だ」

一方通行の口調は一瞬だけ重かった。目の前の小部屋を睨みつける。

「虐殺・・・ですって？」

「あア。毎日毎日頭ンなか弄られて、どんどんおかしくなっていくんだ。実験だったら少しは希望が持てたさうな。けどアレは実験なんかじゃねエ。わざとぶっ壊れるように仕組ンでたと思えねエ有り様だった。間違いなく、虐殺だった」

御坂は言葉を発せなかった。一方通行が語るたびに、視線の先の小部屋で子供達が泣き叫ぶ姿が浮かび上がってくるからだ。彼の言葉は、でたらめではない。

「オマエらに想像できるか？ 脳に直接電極ぶっ挿して複数の電流

を叩き込む。DJでもやってんのかって思うよオナ手さばきで電流の調節ハンドル回してる。痛みなしてもンじゃねエ。とあるガキなんて脳がショートしてそのままおっ死ンだ。泣いたって許してくれねエ。叫んだって助けてくれねエ。そういうどオしよオもない研究という名の虐殺が起こってた」

アクセラレータ

一方通行は小さな息を洩らし、再び書類の山を探り始めた。

「どうして、そんなこと、知ってるのよ」

御坂の言葉は震えていた。膝も震えているし、泣き出しそうな表情もしている。レベル5第三位と呼ばれても、彼女はまだ一四歳の中学生だった。

アクセラレータ

一方通行は御坂と白井の方を向かなかった。

「俺もこの研究所に入れられてたからに決まってンだろ」

なんでもないことのように一方通行は言う。

御坂は声を出せなかった。彼に対して、謝ることもできなかった。腰を抜かして座り込むことしかできない。白井も絶句しているようだ。

「つつても九歳までだ。それに可哀想なガキ共と境遇も違った。研究の分野が違ったからなア」

軽い調子でそう続け、なにかを見つけたのか表情を変えた。

「オイ、超電磁砲。見てみろ」

そう言って閉じられていたクリアファイルごと投げる。腰が抜けている御坂の前まで滑ってきたそれを手に取り、見た。

そこに載っている顔写真。赤色に近い黒髪の少女。紛れもなくあの少女だった。

「やっぱビンゴだったな。スキルジャンパーだよ。ヤツはこの研究所に所属していた」

「じゃ、じゃあ、このファイルになにかヒントが・・・」

「そこに載ってる情報は当てにできねエよ。俺なんて女で登録された。研究所のヤツらにとっちゃ、ガキはモルモットに過ぎねエ。いい加減なんだよ」

御坂は言いごもる。辺りを見て回っていた白井が、そのやりとりを聞いて渋い顔になった。

平和な日常とはかけ離れている。闇の部分突き付けられた感じがして、すつきりしない。黒く^{よど}澱んだものが腹の底に沈んでいく感覚が、ひどく不快だった。

アクセラレータ

一方通行はこういう世界で生きてきたのか。御坂は改めて気付く。逆にレベル5にもなればこういう世界で生きて当然なところがあった。第三位でありながら平穩で生きてこられた御坂が特別なのかもしれない。努力のみで第三位に登り詰めた御坂と違い、一方通行^{アクセラレータ}のように身体を弄られて能力を成長させた者の方が多いだろう。

アクセラレータ

一方通行はさて、と言った。

「ここに所属してたつてのがわかりやいい。伝手がある。そこから探りを入れられるだろ。それにこれ以上の機密を野ざらしにしとく

とは思えねエ」

首を鳴らしながら、アクセラレータ一方通行は歩き出す。御坂も同意見だった。この廃墟同然の場所で得る物はもうないと思う。

そんな二人の見解を裏切ったのは、なんとなく辺りを見回していた白井だった。

白井が機材の間に挟まれている小さな紙を引っ張り出した。

「これって……どういうことですか……？」

白井の言葉を聞いたアクセラレータ一方通行が怪訝けげんがる。近寄って、白井の手元を見た。

そこにあっただのは殴り書きのアクセラレータ一方通行という文字と、スキルジャンパーの写真。

アクセラレータ一方通行が、息を飲んだ。まったく身に覚えのない単語に、全身の鳥肌が立った。

「——？ツインエンジェル恵まれた双子計画？……？」

アクセラレータ一方通行とスキルジャンパー。

無関係だったはずの二つの点が、ここで繋がった。

スキルジャンパー。

そう呼ばれ始めたのはこんな身体になってからだった。

本名は覚えていない。人体実験を繰り返す^しぎて、記憶があやふやなのだ。平凡な名前だったような気はする。東雲鏡^{しのめがみ}という名は研究員に名付けられたものだ。

日が暮れてきた。時刻では七時過ぎというところか。

東雲は戦闘服のまま空間移動を繰り返^{コスチューム}し、ようやく学舎の園に辿^{テレポート}り着いた。^{まなびや}
^{その}

学舎の園とは常盤台中学を始めとするお嬢様学校が集まる公用区域で、レベル3以上しか存在しない常盤台中学の影響からかAIM拡散力場の濃度が他の学区と比べて濃かった。高位の能力者が多いほど無意識に発するAIM拡散力場が大きくなるのだろう。

東雲のAIM拡散力場も多少は誤魔化せる。木を隠すなら森のなか、というやつだ。？アイテム？の滝壺^{たきつぼ}理^り后^ごの能力追跡をかわす唯一の方法だと東雲は思っている。まだ検索される恐れはないと思うが、念のためだ。

それに第七学区はすでに末元物質との騒ぎによって警備員^{アンチスキル}の数が増えていて、動きづらい。一方で学舎の園は入門ゲート^{ダークマター}が設置されるなど第七学区から独立した区域となっているため、警備員の手がまわっていないかった。

（第二位以外に動きがない・・・一方通行は？）
^{アクセラレータ}

学園都市第一位はこれでもかと逆撫でしておいた。殺しに來ないのがおかしい。

（ソーニヤ、ちゃんと普通に通達したんでしょうね・・・？）

ふわふわとした少女の顔が思い浮かんで、表情が綻^{ほころ}んでしまう。

東雲が常盤台中学の傍を通り過ぎた時だった。

ドゴオ！ というブロック塀が崩壊する音が背後で聞こえた。なにかと思い振り返ると、常盤台中学を区切る塀を能力で吹っ飛ばした数人の生徒が、こちらを睨んでいるのだ。

生気のない表情で、少女達はゆらゆらと揺れていた。

「なに、この人達・・・常盤台の生徒？」

東雲に事態を確認させる暇など与えなかった。常盤台の生徒が動き出していたのである。数は全部で六。だがこの程度なら蹴散らせる。

死んだ目で、六人が一斉に攻勢に出た。東雲は空間移動テレポートを使ってゆうつと一歩退いた。

（常盤台、レベル4が・・・ひとり。残りはレベル3ですか）

相手のAIM拡散力場から大まかな能力レベルを読み取った。学園都市屈指の名門校・常盤台だけあってただのレベル3ではない。レベル4認定されていないのが不思議なレベル3が二人いる。能力テレキネシス系統は念動能力バイロキネシスと発火能力バイオキネシス。ただひとりいるブラウンの髪の少女はレベル4のアトモスフィア大気能力を有している。

「レベル4の大気能力者アトモスフィックとはすごいですね。普通に学園都市でもそういませんよう？ そんな優秀なあなたたちが、どうして僕に敵意バリバリなんですか？」

答えない。それもそうだ、六人は死人のようなものだった。意識がないと東雲にもわかる。

それでも、六人は攻撃してくる。ひとつの意思で操られているか

のように、同時に動くのだ。

手から放たれた火球が飛ぶ。それをかわすと、ショートヘアの少女が蹴り出してくる。東雲が防ごうとするが、そのつま先から刃が飛びだしているのを見てとつさに後ずさった。

そこにさきほど倒壊したブロック塀の残骸がいくつも飛んできて、東雲は目を見開いてベクトル反射する。跳ね返された直後に残骸は磁力を宿し、街灯の金属ポールに突っ走った。

（磁場を形成する能力者——普通にレベル3超えてるんじゃないですかあなた！）

考えさせない。ショートヘアの娘が、素早い蹴りを何度も繰り出してくる。回転しながら、蹴りだけで東雲を追いやっていく。避けようとしたところに小さな火の玉が飛んできて、ぎりぎりでかわさざるを得なくなっていた。そこにもうひとりが格闘戦に加わってくる。格闘技に疎い東雲でもわかる。彼女の型は空手だろう。ショートヘアの少女は、カポエイラというやつだろうか。

二人は息を合わせて攻撃してくる。拳を繰り出し、蹴りを浴びせ、東雲を追い込んでいた。ショートヘアの能力はよくわからないが、動体視力や身体能力を底上げしているようだ。そして空手の方はレベル4の^{アトモスフィリック}大気能力者だ。ブラウンの髪の毛、いかにもお嬢様らしい風貌をしている。

東雲が間一髪のところでは拳を避けると、その背後にあつた壁を容赦なく砕いた。

（拳を大気で特殊コーティングしているね・・・オートじゃない分、不意打ちには対処できないけど普通に使い勝手が良い。空手にはもってこいの能力ってことですか）

避けながら、東雲は状況を分析していた。六人は互いに連携して戦っている。格闘が可能な二人を前に、援護が三人。そして傍観者がひとり、だ。

「しかし、仕組みがわかってしまうと普通につまらないですね」

東雲がにっと笑った。その傍観者が他の五人を操っている。精神^デ感応能力^{レバ}の応用だろう。

東雲は帯電し始める。バチバチと、青白い龍のようなものが身体に纏わりつく。即興で生み出した電撃の渦に、ショートヘアは攻撃を躊躇う。

「危ないですよ、近寄ると身も心も感電^{ショ}しちゃいますからね！」

そして東雲は左腕を額の前に構え、傍観している少女に向かって雷撃の槍を放った。

しかし雷撃はあらぬ方向に逸れ、霧散した。狙いは正確だったはずだ。

「なるほど、そういうこともできるんですね」

レベル4の^{アトモスフィリック}大気能力者と磁力を操る少女。雷撃に手を加えて逸らし、力を逃がした。二人が阿吽^{あうん}の呼吸でなしたからこそ、神がかり的な業。東雲は思わず感嘆の声を洩らす。そのブラウンヘアの横に並び立ったのは、^{バイロキネシスト}発火能力者だ。死人のような無機質な目をしたブラウンヘアは、小さく口を動かす。

死ね。

閃光が迸った。ほとばし

辺り一帯を業火が埋め尽くす。大気能力と発火能力を上手く操ればこんなことも可能になる。アトモスファイア

六人の常盤台の少女達はその燃え盛る炎を、なにを言うでもなく見つめていた。この業火のなかでいったい誰が生き残れるのだろうか。完膚無きまでに、焼き尽くす。すべてを焼き尽くすまでこの炎は消えないだろう。

屍体も出るまい。六人の少女達は静かに、校舎に戻ろうとした。

「――呆気ないかと思ってんじゃないですよ、子猫ちゃん達？」

声。次の瞬間には六人が配置に立って構えていた。その動きの速さは評価に値するだろう。

だが、それでも遅い。遅すぎる。

ショットヘアの少女が突然肩から血を噴き出して勢いよく後方に吹っ飛んだ。パイロキネシスト

発火能力者も磁力を操る少女も、皆叫び声もなく倒れた。血を、盛大に噴き出して。

一番幼い傍観者であつた精神感應能力を守るように、ブラウンヘアが立つ。その表情には怯えがなかった。おび死人同様であるから。だが、その精神感應能力は恐怖に顔を引きつらせている。テレパス

業火のなかからのそりと出てくる少女が、悪魔や鬼にしか見えなかったのだ。

「あはつ。いいですね、その表情。思わずそそれちゃうじゃないですか」

東雲は瞳孔の開き切った目で、笑っていた。自分のこめかみに当たっているのは、拳銃。

二発の銃声が響いて、その場は再び静けさを取り戻した。

夕方に、かみじちゅうじん上条当麻は病院に到着した。

その腕にきめはたさいあい絹旗最愛という余計なオプションがしがみ付いているが（本人いわくマスコットキャラクター）無事に患者が深刻な状態になる前に着けたらしく、その右手をおでこに乗せると、患者は目を覚ました。

患者は長い黒髪をしていた。名前はさてんるこ佐天涙子。

「あの、助けていただいてありがとうございます」

「あー、いいっていいって。俺、こんなことしかできねえし」

上条は珍しくまともな女性の感謝の言葉に照れながら、手をひらひらと振った。佐天は昏睡状態から復帰したばかりだからか、ぼんやりとした目をしていた。

そんな佐天を気にも留めず、ちっこいオプションは図々しく迫る。

「スキルジャンパーにやられたってホントですか？」

「へっ？ あの、あなた誰ですか・・・？」

「私が誰とか超関係ないです。いいからさっさと情報むぐっ」

上条が頭をわし掴み、佐天にがつく絹旗を引き離した。そのまま首を絞めるような姿勢で、絹旗と一緒に椅子に腰かける。

「ご、ごめん。こいつちょっとおかしいんだ」

「おかしいってなんですか！ 超心外でむぐっ」

「スキルジャンパーにやられたって聞いた。別に今無理にスキルジャンパーのことを言わなくてもいいと思う。でも警備員とか、その情報を知りたい人がいると思うから、思い出せたら教えてやってくれ」

「だから知りたい人はここにむぐっ」

「俺達はすぐ出て行くから。気持ちが落ち着いたら、家に帰れるらしいし、元気出してくれよな」

上条はそう言って、椅子から立ち上がって絹旗を引きずり出そうとする。絹旗の方は額に青筋をいくつも浮かべていて、なぜか展開できない窒素装甲にもどかしさを爆発させていた。

「スキルジャンパーのこと、覚えてますよ」

佐天はぼんやりとした表情のまま、呟くように言った。

「なにも忘れていませんし、スキルジャンパーに攻撃されたわけでもないです」

忘れていないと言いながら、佐天は思い返すようなゆっくりとした口調だった。

「でも、スキルジャンパーにやられたんだろ?」

「誰かを昏睡状態にできる能力者なんてそうそういません。スキルジャンパーでしょう」

上条と絹旗は首を傾げていた。

「違うんです。スキルジャンパーは、あの人は、普通の人」

上条達には理解に苦しむ言葉だった。現実には佐天は昏倒していた。ヘウンキャンセラー冥土帰しはその脳波の乱れなどを計測して、能力者の仕業だと断定した。そして佐天の倒れていた場所の近くでは、スキルジャンパーがダークマター未元物質と交戦していた。

スキルジャンパーしか佐天を無傷のまま意識不明状態になどできないだろう。

「私、助けてもらってたんです」

「助けてもらった?」

「・・・お兄さん、こいつ超頭おかしくなってますよ」

絹旗は佐天を睨みつける。襲われたのに助けられたと主張しているのだ。

「よくあるんですよ。突発的な事故とか、レイプとか。被害者なのに自分が悪いかも、なんていう自虐症状が出る。あそこであんな行動を取らなければ、と自分を戒めることで被害者である自分と心の距離を超取ろうとする。加害者に都合良くなるパターンであっても

それを認めようとする。認めて、さつさと起こったことを忘れたい。過去にしたいってゆー願望の表れですね」

「自虐症状・・・」

上条は苦虫を噛み潰した表情になる。佐天の心中を察したのだ。しかし、当の佐天は絹旗の言葉に対して、首を振る。

忘れたいと訴える目ではない。しっかりと強い眼差しをしていた。

「全部、覚えてます。スキルジャンパーは私を救ってくれたんです。あの爆発は、自然なものじゃない。私を守るために、誰かと戦ったんです」

想いがこもった言葉だった。佐天の目から、少しばかりの涙が溢れ出している。

「普通の人なんです。いえ、普通でありたかった人。あの人は悪い人じゃない。今日押しかけた初対面の私を守ってくれるくらい、良い人です。私はそう思います」

上条にはよくわからなかった。当時の状況もわからないし、スキルジャンパーなどという得体の知れない者についても詳しくない。だが、この少女の言葉を信じてもいい、と思っている。

それが上条当麻である。

1 (後書き)

備忘録：むぎのんかわいい

常盤台女子ばねえ

佐天さんかわいい

2（前書き）

お待ちかねのあの人達が登場ですよーん。縦書き形式推奨中。

第一八学区。

第七学区の東に位置し、かつ隣接している第一八学区には能力開発関連のトップ校が集まっている。中学校と大学、高校と研究施設がそれぞれ一体となっていて、専攻されている分野については常に最新・最先端の技術を取り入れられる仕組みになっていた。

長点上機学園もそういった形態を取っている学校のひとつである。ながてんじょうき仮想敵は常盤台中学。ときわだい常盤台中学が能力レベル3以上でないと入学できないのに対し、長点上機学園はたとえ無能力者だろうが受け入れている。ただし、能力レベルが未熟な場合は、他になにか長所が必要となる。音楽や絵画のような芸術、スポーツなど、才能がなければ入学できない名門校なのは間違いない。

長点上機学園が大学の研究機関と協力している一方で、常盤台中学は学舎の園まなびやという能力開発連携携体制区域を形成していた。しのぎを削るライバルというやつだ。

漆黒の天空を舞っていたのは、純白の翼を携える金髪の青年。大空から堂々と長点上機学園の敷地内に侵入し、奥へ進み続ける。左右対称な中庭、長方形ばかりで組み立てられた窓、廊下、教室。なにもかもが黄金比でつくられていて、つまらない風景が学園の奥まで延々と続いている。

幾何学的な構造をした学園を、垣根かきね帝督は冷めた表情で見送っていた。素人につまらないと思われる時点でこの学園の美術センスは終わっている。なにが名門だ。垣根は嘲笑した。

奥の奥。長点上機学園はご丁寧に正方形の造りをしていた。その中心が、学園の？最深部？と呼ばれる立ち入り禁止エリアである。

垣根はその一点を目指して突き進んでいた。

長点上機学園は学園都市のなかで一、二を争う名門校だ。能力開発研究も他の学校より一〇歩も二〇歩も先を進んでいる。この学園に入学することができれば将来は安泰、エリートの道を約束されると人々は思っているかもしれない。

だが、実態はそんな生易しいものではない。

この学園に入学する数と卒業する数を見れば嫌というほどソレが浮き出てくる。

それだけとんでもないことをしている、という話だ。能力開発は研究所でやっていることも大学でやっていることも大差ない。詰まるところ、人の脳を弄って喜ぶということなのだから。

常盤台中学もどす黒いことはやっているだろう。だが長点上機学園ほどではない。闇の部分で言えば霧ヶ丘^{きりがおか}女学院にも追いついていない程度だ。それだけ平和な学校だということである。

垣根帝督は？最深部？に到達した。

校舎の窓をひとつ吹き飛ばす。そこから楽に侵入した。科学的な防犯装置は働いているが、科学の通用しない^{ダークマター}未元物質を操る垣根にとって、それは涼風同然である。

？檻？と研究者達は呼んでいる。AIMジャマーという特殊な電磁波を用いてAIM拡散力場に干渉する代物を備えた能力者用のゲージだ。AIM拡散力場を乱反射させることで能力者が自身の能力による影響を受けやすくなる、その結果能力を制御せざるを得なくなるという理論らしい。ようするに能力者を弱体化させる電磁波を発生する機械だ。

その能力者封じの？檻？が所狭しと並んでいる。普通は少年院や重装備の警備員アンチスキルに用いられる技術だが、数えるだけで八つはあった。垣根は？檻？の影響を受けない。未元物質ダークマターという異物を展開するだけで、AIMジャマーはその効力を失うようだった。

とある？檻？の前まで歩んで行って、立ち止まった。

「よう。聞こえてるか。俺だよ、未元物質ダークマターだ」

垣根の問いかけに、？檻？のなかのなにかが反応した。暗闇のなかで、二つの目が動いていた。

「・・・うそ。あの、かきね？」

響いたのは幼い子供の声だった。驚くほど澄んでいて、あどけない声。

垣根はしゃがむ形で？檻？と向き合う。

「お前、変わってねえな。なあんにも変わってねえ」

「なにしにきたの、かきね」

「決まってるだろーが」

垣根帝督は笑っていた。あのぐにやりとした笑みではない。もっと、違う笑い方だった。

「お前を殺しにきてやったんだよ」

「檻？のなかの幼い声は、笑っているようだった。えへへと、可愛らしく。」

「そつかあ、かきねも、おそとでじゅーになったんだね」

「そーだな。自由過ぎてつまんねえぞ。全部ぶっ潰したくなるくらいに」

「ぶつつぶすまえに、ころしにきてくれたんだ」

「そついうことだ。離れてろ。怪我すんぞ」

垣根は白い翼のひとつをゆつくりと振った。それで？檻？の入り口が切り取られる。

そこからゆつくりと這い出てきたのは、五、六歳の子供だった。長点上機学園所属能力開発第五研究所、汎用能力及び特殊能力強化を促す最終型強化個体。
ブースター
オーバークロック

通称は？乗っ取り？。

長点上機学園が生み出した、どうしようもない化物だった。

「どんなふうにくろしてくれる？」

「痛い方がいいか？ はらわたをほじくり返して殺してやってもいいぜ」

「どーせなら、のーみそもぐちゃぐちゃにしてよ」

「変わってねえなー。趣味が悪いつての」

垣根は乗っ取りの手を取り、軽い身体を持ち上げた。ちょうどお姫様抱つこのように。

「かきねー？」

「はいはいあとで殺してやるから。ちょっと付いて来い」

「どこにいくの？」

「愉快でくそつたれな化物のところさ」

垣根は白い翼を生み出し、羽ばたかせた。その場にあつた？ 檻？ もろとも、すべてを吹き飛ばす。天井を失った？ 最深部？ に、月光が射し込んでいる。

乗っ取りを抱いたまま、垣根はゆっくりと宙に浮いた。

「ばけものかー。かきねとおなじだね」

「お前に言われたくねえよ。学園都市で一番の化物め」

「みんなばけものだね。そのこはどうするの？ ばらばらとか？」

「バラバラか。それも悪かねえが、華がねえよ。どうせなら活造りにしてやるうぜ」

「わー。それはとってもおいしそーだね」

乗っ取りは真正正銘の化物だった。人の心も、人の身体も持ち合わせていない、化物。

それでも、垣根はこいつがそれほど嫌いではない。

常盤台中学校。学園都市屈指の名門校に、スキルジャンパーは足を踏み入れていた。

校舎は清楚で格調高く、いたるところに等身大の鏡を置いてあるのは身嗜みを整えるためだろう。柵さくがわ川中学とはなにもかもレベルが違うな、と。そんなことを思いながら歩んで行く。

東雲は拳銃のマガジンに弾を詰めながら、ゆっくりと忍び足で校舎内を進んだ。

時刻は一九時を過ぎている。空はすでに暗くなっていて、外の惨状を見つけた救急車や消防車がやかましい音を鳴らしている。学舎の園はさぞかし大混乱だろう。学舎の園の自治管理問題にも発展するかもしれないが、そんなことは東雲にとってどうでもいい話だ。

東雲が拳銃をチェックし終え、脇のホルダーにセットする。下着コスチュームや水着同然の戦闘服に身を包む彼女は、拳銃以外にも腰の後ろに軍用ナイフミを携えていた。その廊下を進む姿は、迷彩服を着ていれば立派な軍人に見えるだろう。だが彼女は薄い布で局部を隠すだけだ。軍人とはほど遠い格好である。

夜になっている。完全下校時刻はとうに過ぎていて、人の気配はない。

とある教室の前で、東雲は立ち止まり、目を伏せた。ゆっくりと扉を開く。

「遅かったですわね」

カーテンの締めきった暗い部屋。ただひとつある椅子に腰を下ろ

す少女が、不気味にほほ笑んでいた。常盤台中学が誇る、レベル5のひとり。

「？心理掌握メンタルアウト？。やはり、あなたの仕業だったんですね」

東雲が苦しそうに言うのを見て、心理掌握メンタルアウトはほほ笑みを崩さずに閉まっているカーテンの方を見つめた。ここまで、外のサイレンの音は響いている。

「さすがに私の能力を写すだけのことはあります、スキルジャンパー。タネに気付くのがはやすぎてつまらないですね。あの子は私のお気に入りでしたのに」

心理掌握メンタルアウトは淡々と抑揚のない声で告げた。それが少し小馬鹿にしているようでもあり、寂しがっているようにも思わせる。

傍観者の少女は心理掌握メンタルアウトのアンテナ役だった。他の五人に心理掌握メンタルアウトの念波が届きやすくするための存在。

「あの子も研究所から出てきましたのよ。もちろん失敗個体として処分以外に行く着く先がないところを私の権力を使って譲り受けましたの」

「長点上機の負の遺産ですか」

「敵対している学校なので骨は折れましたけれど」

「失敗個体なのに普通にレベル3になっているのは凄じやないですか。本来なら欠陥電気と同じくレベル2が精いっぱいでしょう。どんな魔法を使ったんですか？」

「ほんとうに聞きたいんですか？」

メンタルアウト

心理掌握はいかにもお嬢様な風貌をしていた。端正な顔立ちをしており、座っていれば洋風人形のように見える。常盤台中学で最大派閥を形成しているらしい。

お嬢様揃いの常盤台で派閥をつくることは、その交友関係に影響してくるため、外交ステータスにもなるという噂がある。両親の立ち位置も子供の派閥によって変わるというのだ。それだけ常盤台の派閥には力があつた。

ちなみに常盤台のもうひとりのレベル5超電磁砲レベルガンの御坂美琴みさか みことは派閥に一切関与していない。一大派閥を形成する心理掌握とは正反対

である。

メンタルアウト

心理掌握の笑みに、薄ら寒いものを東雲は感じていた。

「怯えなくとも、別になにもしていませんわ。？体晶きりがあか？みたいな危ないものも使っていませんし。私は能力の特性柄、霧ヶ丘女学院とも太いパイプがありまして、その筋の方に協力していただいただけですよ」

「常盤台にいなながら長点上機、霧ヶ丘と繋がってるんですか。どーりで腹黒いと思った」

「人聞きの悪いことを言わないでくださいます？ 遠い世界へ旅立つてもらいますよ？」

メンタルアウト

心理掌握はほほ笑みしか浮かべない。感情の起伏がないのだ。それが自身の能力に由来しているのか、ただの本性なのか、東雲は知らなかった。

霧ヶ丘女学院は能力開発において学園都市屈指の学校のひとつで

ある。学力レベルでは常盤台中学や長点上機学園にも劣っていない。ただ、その特性が地味で、表に出にくい学校だった。

学校の特色は？視覚化されない特殊系能力の開発・応用？で、^パ発イロキネシス火力能力や発電能力のように目に見える能力ではなく、^{テレポート}空間移動や心^{メンタルアウト}理操作といった特殊系の能力開発に長じている。心理^{メンタル}掌握が太いパイプを持っているのはしごく当たり前のことなのだ。

「あの子を殺しましたの？」

「いいや。他の五人も治したから、普通に死ぬことはないだろうね。まったく、ベクトル反射を使わされるとは思わなかつですよ」

「それはよかつた。特にあの子は代えがきかないですから。他の五人も常盤台警備隊^{パトロール}ですからね。手強かつたでしょう？」

「普通にあなたが操作してたんじゃないんですか？」

「まさか。私にあんな戦闘を操れるはずがないでしょう。あれは元々あの五人が潜在的に持っていた信頼関係、連携ですよ。少しだけ、私の力で引き出しましたけれど」

東雲は苦笑する。とんでもない奴らが常盤台中学にはいるものだ。あの五人の巧みな動きはレベル5に届きそうだ、とも思う。自分ではなければ何度死んでいたかわからない。

「私が手を出したのは感情の移植と増幅。あなたを殺したいと思う気持ち^{……}を強めただけですわ」

相変わらず起伏のない声だ。機械音声に似ていて、^{メンタル}気味が悪い。十徳ナイフに喩えられる学園都市最強の精神系能力者、心理^{メンタル}掌握^{アウト}。

常盤台中学で最大派閥を築いているのも、重要人物に能力を使って好意を植えつけているのだろうと東雲は思った。御坂に対しても、やろつと思えば派閥に加わるよう意思操作できるのだろうが、していない。その理由は詳しくわからないが、長点上機や霧ヶ丘、あるいは学園都市上層部など外部の圧力が少なからずあるのだろう。

学園都市全体で七人しかいないレベル5は、存在そのものが外交素材である。

「しかし、常盤台警備隊バトリールでも勝てませんでしたか。ベクトル反射はするくなくて？」

「よく言いますね。学園都市第一位に余裕で勝てるくせに」

「それは、彼が私の舞台に立ってくれたら、ですよ。彼の舞台上がらされたら、私は一秒と保たずに殺されてしまいますわ」

「だから、普通に自分の舞台にさせられるくせに、なにを言ってるんですかあなたは」

メンタルアウト心理掌握は精神系能力という特性上、表立って行動することは少ない。そのため外部の圧力や？上？からの要求は陰険なところが多い。抹殺するよりも黒いことを依頼されたりするのだ。

アクセその過程でこの少女の心は壊れてしまったのかもしれない。一方ラレタ通行のような目に見える最強ではないが、力の使いようによってはその一方通行すら瞬殺できる心理掌握こそ最恐なのかもしれないと東雲は思った。

「誰が最恐ですか、人聞きの悪い。私の心理掌握メンタルアウトを苦もなく操るあなたに言われたくないですわ」

「普通に、それもそうかもね」

東雲は苦笑する。メンタルアウト心理掌握が能力操作でなにかしてきても、対抗できる。精神攻撃を跳ね返す能力を練り上げているのだ。彼女もそれを理解しているので、面と向かってもなにも行動を起こさない。

メンタルアウト心理掌握が溜息を吐いた、ように東雲には思えた。

「どちらにしろ、もう私はあなたを殺せませんのよ。せつかくのレベル6への手がかりでしたのに、残念」

「ひどいお嬢様がいたもんですなあ」

東雲が笑うと、彼女もほほ笑んだ。最初からほほ笑んでいたのだが、口角がほんの少し上がっている。

「私はこの実験から降りようと思います」

「どうして？」

「私は自分自身であなたを殺せませんから。誰かを操って殺させる、という手を取るしかない。それを続けると、無関係な人が何人も傷つくでしょう？」

「・・・へえ、意外と」

「？心優しいですか？ 勘違いしてもらっては困りますわね。私は心理掌握メンタルアウトの名を貶めたくないのです。別に誰が何人死のうが知ったことではありませんが、せつかく築いた派閥を崩したくもなければ、順位を上げることに興味はありません。レベル6になれるならまだしも、相手があなたでは勝ち目もないでしょう。なら実験に

参加する意味はありませんわ」

彼女は淡々と続ける。

「第一位も第二位も殺せと？上？から命令されれば殺しましょう。ですがそれは勝てる見込みがあるからです。あなたにはそれがありません。おわかりかしら？」

「わかったわかった」

「適当な返事ですわね」

「隠さなくても誰にもばらさないのに。普通に『私のために誰かが傷つくのは嫌』って泣きつけばいいものを、可愛い人ですね」

メンタルアウト
サイコメトリー
心理掌握は黙り込んだ。こいつも読心能力を使えましたわね、という目をしている。東雲はにやにやと心理掌握を見つめていた。

「私はあなたの命を狙いません。ですから、教えていただけませんか？ その能力の秘密を」

「能力の秘密かー。教えてもいいんですけど、ばらされると困るんですよ」

「ばらしませんわ。そういう裏事情に対しては口が堅いですよ」

「なら、なんで知りたいの？ 厄介な問題抱え込むことになるんですよう？」

「それもまた一興、でしょう？ それに上手く使えば？上？とかけ

あえるかもしれませんわ」

「ばらされるとまずい情報を使うのか。さすが常盤台の腹黒女王様は考えることが違いますね」

東雲は指を突き出し、にやりと笑った。

「残念だけど、そんな暇はないみたい」

言い終わると同時に、東雲は空間移動して姿を消した。
テレポート

メンタルアウト心理掌握はしばらく彼女のいた場所を見つめていたが、不意に立ち上がり、閉めていたカーテンを勢いよく開いた。

メンタルアウト眼下に佇む謎の人物。心理掌握の方を見て、得意げに笑っていた。

「第六位・・・」

東雲は第六位の存在を察知し、逃げたということか。
メンタルアウト心理掌握は目を伏せ、携帯電話を取り出した。

「秘密を知る手がかりは、まだありますのよ」

電話をかけた相手は、自分に抹殺の通達をしてきたおっとり口調の女。

実験からは降いる。だが、？上？とかけあえるだけの情報は見逃さない。
メンタルアウト心理掌握は電話のコール音を聞きながら、ふと眼下を見やる。

第六位は、忽然と姿を消していた。

2 (後書き)

備忘録・乗っ取り登場 第五位登場 強化個体登場 第六位がちら
りずむ かなり重要キャラが目白押し

3（前書き）

ついにあの男が登場だにゃー。縦書き形式推奨中だぜい。

上条当麻^{かみじょうとうま}はただいま料理の真っ最中である。

タイムセールには当然間に合わず、泣く泣く安物を選び抜いて帰ってきたと思ったら、インデックスさんのフライング噛みつきを食らってしまう有り様だった。腹が減り過ぎて見境がなくなっているのだろう。そばにいる三毛猫も一緒になって攻撃してくる。上条は提げていたスーパ―の袋からすき焼きの用意をインデックスの鼻先に突き付けて「どーだ腹が減ったろう飯があるぞ俺よりも上手い飯がここにな！」と言うとインデックスの涎^{よだれ}をせき止めるダムが崩壊し、上条の服がどつろどろのべったべたになってしまった。

頭を噛み砕かれるという最悪の結末は避けられたが、インデックスの唾液塗れの服を見て、上条は溜息^{ためいき}を吐いてしまうのである。不幸だ。

「とうま、まだー？」

「今作ってるから待ちなさい」

「お腹減って死にそうなんだよー。急いでくれると嬉しいかもー」

上条は泣きたくなかった。悲しいからではない。決して悔しいからでもない。青髪の謎の少女にいいようにこき使われ、料理を催促^{さいそく}される飯炊きババアならぬ飯炊きジジイ状態の自分が情けないわけではない。タマネギのエキスが目に染みただけだ。全部タマネギのせいだ。

そういえば、タマネギはすき焼きに入れるかどうか、という議論を隣に住んでいる土御門元春^{つちみかど もとはる}のアホと討論したことがある。

土御門というのは上条の高校の同級生で、金髪を逆立てサンングラスを着用し制服の下にアロハシャツを着るといって、もはやなにを目標しているのかわからない奴だが、妙に食通だったり、妙にマイナ―知識に長けているという変わった一面を持っていた。上条と土御門、あと青髪ピアスの変な奴と三人合わせてクラスデルタフォースの三バカと呼ばれているのだが、まあそれは、今は置いておこう。

あれは補習の帰りだった。土御門と学校の近くのすき焼きに食べに行ったのだ。昼飯だったのでインデックスに怒られることもない。土御門と行くのは気が進まなかったが、たまには息抜きもいいだろうと店に入る。

すき焼きに長ネギが入っていた。ここまでは上条も土御門も納得していた。しかし上条が「タマネギ入ってないんだな」と何気なく言うのと、ちよつと待てと土御門が制する。関東風すき焼きに入っているわけないだろ、お前普段タマネギを入れているのか。上条は答える。入れているけど、そもそもすき焼きに関東風とかあるのかよ。土御門がキレる。すき焼きの神を馬鹿にするな。それからなぜか取っ組み合いに発展した。

今思い出しても自分に非があるとは思えない。食通の土御門いわく、関東風すき焼きにタマネギを入れるのは邪道じやどうとのこと。関西風なら入れてもいいのと言う。その細かな違いはよくわからないが、関東と関西では味付けが根本から違う。うどんの濃口と薄口で異なるように。関東風ではタマネギの味を殺してしまつらしい。なぜ味を殺すのかと聞いたら、すき焼きの神がお怒りになるからとどや顔で言ったので、上条はそれ以上取り合わなかった。

そもそも地域によって味付けは変わるだろうが、その前に家庭によって味付けは異なるものだ。上条家ではすき焼きにタマネギが入っていた。だから上条当麻はタマネギを入れる。おふくろの味というやつだ。面倒くさいから、そういうことでもいい。とにかくタマネ

ギは入れる。

土御門のアホには悪いが、タマネギをすき焼きに投入した。こちらには餓死^{がし}寸前のインデックスさんがいる。その飢えたライオンに噛み殺される寸前の上条もいる。味付けよりも命だ。

しばらくして、ぐつぐつと音を立て、美味^{おい}しそうな匂^{にお}いを放つすき焼きをテーブルに置く。インデックスの目がダイヤモンドのように輝いた。上条も腹が減っている。二人は仲良く揃^{そろ}っていたきますと手を合わせた。

インデックスさんも相変わらず箸^{はし}の使い方がなっていないけど、いただきますとごちそうさまの習慣は覚えてくれたんだなー、上条さんは嬉しいですと子の成長を見守る親のような眼差しで上条が卵をといっていると、隣の部屋がばたばたと騒ぎだした。

なんだなんだと上条が驚く。一方で、インデックスはすき焼きに夢中になっていた。

「上やーん！ またすき焼きにタマネギ入れよったにやー！」

「つ、土御門！ 壁の向こうからなんだよ！ つかなんでわかった！」

「関東風にタマネギは邪道って言ったはずべくへっ」

隣の部屋で大きな音がした。土御門の短い悲鳴も聞こえた。

「上条当麻ー。関東風は煮^にるんだけど関西風は焼くって感じで調理法自体違うんだぞー。あと糸コンニャクとか麩^ぶも入れるー。それで水気吸って調整できるから試してみなー」

壁の向こうから聞こえる声は少女のもの。変態^{ロリコン}である土御門のア

水の部屋に転がり込む少女は、ひとりしかない。

「つちみかど まいか
土御門舞夏？」

「おー。兄貴のところに遊びに来てたんだー。兄貴は事情あって気絶してるけどなー」

土御門舞夏。土御門元春の義理の妹でメイド学校に通っている。なので、料理が上手く知識も精通している。メイド学校には寮があるのだが、その寮が嫌になると兄のところへ転がり込んでくるので、あまり優等生とは呼べない。メイドに対するプライドは人一倍あるのだが。

兄のところに泊まりに来た時は料理を作ったり肩を揉もんだりと献身精神旺盛おっせいなようで、上条の家にいる、食べて寝るだけのインデックスさんとは大違いである。

「気絶つて、うるさかったからかー？」

「そーそー。せっかくイイところだったのにいきなり『上やんセンサーが反応してるにやー！ すき焼きの神がお怒りだぜい！』とか叫んで壁に張りついちゃったんだぞー。どう責任取ってくれるんだ上条当麻ー」

「俺のせいだよ！ 土御門のなんとかセンサーもついでにぶっ壊してくれ」

上条はやれやれと息を吐く。まだ卵をといているところだった。待て。上条当麻は思い出す。今、土御門舞夏はなんて言った。

「・・・あのー、つかぬことをお伺いしますが、舞夏さんはいった

いなにをしているんでせうか」

上条のぎこちない声。壁の向こうからの返事は、ない。
恥ずかしさで言うのを渋るような、そんな間が空いていた。

「・・・上条当麻、教えなきゃ駄目かー？」

・・・待て。

待つて欲しい。

冷静に落ち着いて判断しよう。そう、ちょっとこうだったら面白
いなーという人間誰しもが持つ禁忌^{タブー}への欲望補正がかかりすぎてい
るだけだ。きつとそうだ。そうに違いない。そうであれ。

（なんですかあああああ今のエロティックな口調はああああああ
あああ！）

上条当麻は悶絶^{もんぜつ}する。嫌な汗がぼとぼと垂れてくる。目の前にい
るインデックスは変なとうま、という感じで見逃してくれているが、
今の上条はがたがた震えていた。

（え、えええええええ・・・土御門アイツ妹相手になにしたんだ・・・
・？　なにが起こってるのか知りたいようで知りたくない！　そん
な昼ドラみたいな展開が隣室で起こっているなんて・・・はわわわ
わわわ）

壁の向こうなので顔は見えないが、舞夏は頬^ほを赤らめているだろ
う。

（ということはなんだ。土御門は近親相・・・いや、義理の妹だから・・・ん？ 義理の妹は結婚できるんだったよな。土御門お前まさか・・・）

どんどんと上条のなかで展開が進んで行く。インデックスは腹が満たされたのか、満足げな表情でのほほんとしていた。

上条はごくりと生唾を飲み、壁に耳を押し当てる。このオンボロアパートの壁はさほど厚くないのだ。向こう側のやり取りが薄らと聞こえてくる。

「いてて・・・いきなりドロップキックはひどいぜよ」

「うるさいなー。なんのためにメイド服来てやったと思ってるんだー。続きやるぞ続きー」

「しゃーなーにゃー。ホント俺は義妹いもつと想いだぜい」

「それはおあいこだろー。いつも飯作ってんのは誰だー？ ほら、だから、続き」

そこまで聞いて、上条は壁から耳を離れた。もう、なにも言いうまいい。

「とうま、どうしたの？ 顔赤いよ？」

無垢むくな笑みを浮かべるインデックスが、輝いて見えた。たった今見せられた（厳密には聞かされた）昼ドラ展開によって荒すさんだ少年の心を洗い流してくれる、聖女のように思えた。

卵をとき終わり、さあ食うぞと鍋に箸を延ばした時、上条当麻は絶句する。

鍋のなかにはなにひとつ残っていなかった。肉や野菜どころか、汁もない。

上条は啞然^{あぜん}として、眼の前のほほ笑みを浮かべる修道女^{シスター}を見た。彼女は手を合わせ、行儀^{ぎょうぎ}よくごちそうさまと告げ、また満面の笑みを浮かべるのである。

一仕事終わったぜとでも言いたげな彼女を見つめる上条の目から、滴^{しずく}が流れ落ちた。

不幸だ。これはあまりにも、不幸すぎる。

隣の部屋で大きな声がした。不幸だーという、いつもの台詞^{せりふ}である。

土御門兄妹はその声の方を一瞬だけ見て、再び自分達の世界に戻った。

「兄貴ー。これとかどうだー？」

「んー、いいと思うぜい。しかしメイド学校つてのはこんなのまで必要なんだにやー」

そう言つて元春が手に取つて見た書類。レポートのようなものだ。

「メイドに夏休みはないんだけどなー。実家に数日帰るくらいの猶^ゆ予^{うよ}は与えられてるんだー。その時に身内への献身態度を自己報告しなくちゃならなくてなー。でも実家に帰るのもめんどろだし兄貴に任せた方がはやいだろー？」

「そーだにやー。んでオレが書くのはこの欄^{らん}だけかー？」

今、舞夏はリボンを選んでいいる。メイドたる者身嗜みは整える必要があり、派手過ぎない慎ましい格好をしなければならない。なので、お洒落はほとんどできないらしい。リボンやアクセサリーでしか自分らしさを出せないため、舞夏はいつもリボン選びに兄である元春を同伴させている。元春がいいと言ったものしか、舞夏は身に着けないのだ。

「しっかし嘛ー、この歳になって義妹と風呂に入るとはにやー。なっはっは！」

「思い出させるな、クソ兄貴・・・」

舞夏は照れているようだったが、土御門は大笑いしていたせいで気付いていない。

献身の具体例として飯を作り部屋を掃除する。それだけではあまりにもいつも通りすぎるので背中でも流してくれと元春が言っと、舞夏はなぜか一緒に風呂に入ると勘違いし、実行した。

そんななんでもない一日。土御門兄妹は今日も平和に暮らしているようだ。

御坂美琴と白井黒子は連絡を受けて第七学区の病院に立ち寄っていた。

二人は息を切らしながら、病院を走り抜ける。すれ違う医者や看護師達には目も暮れない。

「佐天さん！」

御坂は叫びながら戸を開いた。

ベットでぼんやりとしている佐天^{るいこ}涙子。その傍には初春^{ついはる}飾利^{かざり}がいる。

「あ、御坂さん・・・」

「意識が戻ったのね・・・よかった」

御坂は佐天の傍まで歩いて行き、その手を握った。安堵^{あんど}したのかへたり込んでいる初春の肩を白井が支え、ほほ笑みかけた。

「佐天さん。いったいなにがあつたの？ スキルジャンパーにやられたって、どういう・・・」

御坂が問いかけると、佐天は視線を落とした。

外傷はひとつもないが、脳や身体を検査^{スキャン}されたのだろう。緑色の患者服に身を包む佐天は、横から見ていると不安になるほど呆^{ほう}けていた。スキルジャンパーにやられた能力の後遺症^{こういしょう}があるのでは、と皆が思った。

「東雲^{とうのう}さん」

「えっ？」

「私、東雲さんに、助けてもらいました」

佐天は静かな口調で続ける。その光の加減で青く見える双眸^{そごほう}は、虚空^{こくう}を見つめていた。

「でも、スキルジャンパーに眠らされたんですよね？ やっぱリスキルジャンパーが佐天さんをそんな風にしたんじゃないですか！」

初春は怒っている。大切ななにかを傷つけられると、許せない少女だった。

親友の初春の言葉にも、佐天はあまり反応しない。ただ初春の方を見てほほ笑むのだ。

「なにがあつたの佐天さん・・・？」

「東雲さんに助けてもらつたんです」

「佐天さん！」

初春が怒鳴る。涙を目に溜めて、力の限り叫ぶ。普段甘つたるいで声のんびりとした話し方をする彼女とは思えない、鬼気迫る口調だった。

「皆さんが心配してくれたんですよ！　こんなに必死で駆け付けてくれたんですよ！　なのになんですかその態度は！　私達はその程度の仲間だったんですか！　どうしてもひとりでスキルジャンパーのところに行つたんですか！　どうしてもっと頼ってくれないんですか！」

白井が止めても、初春は泣き叫んでいた。尊敬する人に止められても、叫ぶのを止めなかった。

佐天を一番心配したのは、他でもない初春だった。親友が傷つけられて、悔しい。悲しい。許せない。

無能力者で一般人の佐天が、なぜ危険な目に遭わなければならぬのか。

なぜ風紀委員である自分ではなく佐天が傷ついているのか。
ジャッジメント

「どうして・・・ひとりで引っちゃうんですか・・・どうして・・・」

言葉を詰まらせた。涙が言葉を勝ったのである。

初春は佐天を責めているわけではなかった。佐天を危険な目に遭わせた自分を責めている。どうして佐天の行動を把握はあくしていなかったのか。なぜ佐天の性格をよく知っているはずなのに、自分はオフイスで待機し続けていたのか。

佐天が風紀委員ジャッジメントの支部に顔を出さなかった時に気付けなかった。自分のせいだ。

御坂達は初春のせいじゃないと言うだろう。佐天自身も初春のせいじゃないと笑ってくれるかもしれない。けれど、初春は誰よりも佐天の親友のつもりだった。佐天と常に行動をとにし、服の趣味から好物までなにもかも理解している唯一無二のパートナーのつもりだった。それはちょうど御坂と白井のように。その自分が気付けなかった。初春は、悔しい。誰が責めなくても、悔しくてたまらない。

「・・・初春」

初春に、佐天は語りかける。泣きじゃくる初春は、佐天の方を見た。

そこには、いつもの佐天の笑みがあつた。

活発で、明朗で、見るだけで元気を分けてくれる、素敵な笑顔。

「ごめん、初春。心配かけちゃったね。でも、大丈夫だよ。私は、佐天涙子は、ずっと初春の傍にいるからね」

その言葉で、初春には十分だった。自分には過ぎた言葉だとも思った。

怒っていたはずなのに、無性に安心してしまう自分がいる。膝から力が抜けて、どうにもならないくらい喜んでいる自分がいる。

初春は、佐天が無事で嬉しかった。その想いが一気に溢れだしてきて、言葉にならなかった。

再び泣きだす初春を白井が宥める横で、御坂もほほ笑んでいた。

「御坂さんも白井さんも、すいません、迷惑かけちゃって。でももう大丈夫ですから」

「よかった。その言葉聞けただけでもここに來た意味あったわ」

御坂もほっと胸を撫で下ろし、しかしすぐに腕を組む。

「その東雲ってヤツがスキルジャンパーなのは間違いないと」

「否定はしませんでしたね。たぶん、そういうことだと思います」

「心理掌握メンタルアウトばりの精神攻撃を仕掛けてくるから確定でしょうね」

むむむと御坂は眉を顰める。
心理掌握メンタルアウトとは顔見知りだった。

同じ常盤台中学の生徒で派閥はくわつを形成しているいけ好かない女王様だが、レベル5に数えられるだけあって精神能力は尋常でないものがある。能力者であろうがなかろうが問答無用で昏倒させるだけの力を持っているのだ。

そこまで考え、御坂は首を傾げる。ならばその心理掌握メンタルアウトの能力を解除したのは誰？

「佐天さんはどうやって目を覚ましたのかしら。心理掌握メンタルアウトの能力が

病院でなんとかなるとは思えないんだけど・・・」

「よくわからないんですけど、男の人が駆け付けてくれたみたいで」

「男の人・・・？」

御坂の脳裏に真っ先に浮かんだのは、ツンツン頭の青年。

レベル5第三位の御坂美琴をあしらうだけの隠れた能力者である。その能力の秘密はわかっていないが、右腕を出されると電撃がすべてシャットアウトされるのだ。

その右腕を使えば、心理掌握メンタルアウトの能力を解除できるのかもしれない。佐天のために主人公のように駆け付け、その能力を打ち消し、名乗らずに颯爽さうそうと立ち去る。あのツンツン頭がやりそうなことだ。そしてそうだったらいいな、と思う自分に気付いて御坂は小さく笑う。

「お姉様・・・またあの殿方のことですか・・・？」

「へっ？ いや、その、あははー、違うわよなに言ってるのよ黒子！」

白井がやれやれと息を吐く。自称御坂美琴の露払いつゆはらいをしている白井は、ツンツン頭の青年を警戒しているのだ。片や名門常盤台のなかでもひと際輝くレベル5、御坂美琴。片やどこの馬の骨かもわからないがさつでウニみたいな頭だけが特徴の無能力者。白井が警戒するのももつともだ。

「失礼するよ」

そう言って部屋に入ってきたのは白衣に身を包んだ医者だった。

（り、り、リアルゲコ太の人！）

御坂が目を猫みたいに尖らせる一方で、白井や佐天が軽く頭を下げた。

その医者はゆっくり佐天に歩み寄り、ベッドの頭のところにある精密機械を見て肯く。

「だいぶよくなったみたいだね。心拍数、脈拍、脳波データ、他も諸々正常値に戻っているね」

「先生のおかげです。ありがとうございます」

「僕はなにもしていないよ。感謝するならあの青年にするべきだね。第五位レベルの能力にあてられたら、普通の器材じゃどうにもならないからね。いちおう念のために明日まで様子を見ようか。問題なしならその日のうちに退院だね」

普通でなければなんとかなる、と言っているようで御坂はちょっと怖くもあり、頼もしくもあった。

「面会時間はとくに過ぎているんだけどね。君達は帰らなくていいのかい？」

時刻は二〇時を軽く過ぎていた。四人とも寮には連絡を入れているので問題はないが、夜も遅いので警備員アンチスキルに見つかるかと咎められるだろう。交通機関も一八時三〇分に完全停止するので、今はもうバスも電車も使えない。交通機関を麻痺させることで学生の早期帰宅うながを促す狙いらしい。

「もし帰るといふなら、僕が家まで送ってあげてもいいけどね。あ

まり長居されても困るからね」

「す、すいません、長く居座っちゃって」

「それだけお友達が心配ということだね。いいさ、どうせもうちに残っているのは僕と助手数人だけだからね」

カエル面の医者優しい笑みを浮かべて、傍にあった見舞客用の椅子に腰を下ろした。その目が不敵に光ったと、御坂は感じた。

「君達を知りたいのは、スキルジャンパーについてだろう？」

一気に空気が凍りついた。

御坂や白井だけでなく、佐天と初春も息を飲んでいる。はいという肯定の言葉も出せない。

カエル面の医者、もとい冥土^{ヘウンキャンセラー}帰しは目を伏せ、語る。
スキルジャンパーの秘密と、その正体を。

「あの娘はね、学園都市が生み出した奇蹟^{マジック}の存在——その名もパーソナルリアリティブレイン」

^{しのめ}東雲は空間移動を繰り返していた。

第六位の超能力者から逃げるためである。

いくら東雲といえど第五位と第六位を同時に相手にするのは厳しい。レベル5が二人以上になると瞬殺^{じゆんぱつ}される可能性もある。樹形^{ツリー}図の設計者による予測演算では第一位・第二位と同時に戦えば五一手で殺されるとあり、第三位・第四位と同時に戦えば二〇三手で殺さ

れるとされている。そのなかでも第五位が絡んだ瞬間に、たとえレベル5であれば誰だろうと東雲は第一手で殺されると結果が出ていた。第五位はそれだけ厄介な存在だということである。

学区を跨いだ。幼稚園や小学校が軒を連ねている。

（第一三学区か。この時間になると誰もいないから、逆にいいのかもしれないね）

第一三学区。学園都市の西の端にあり、幼稚園や小学校など年齢層の低い施設が集まる区域だ。学園都市を宣伝するパンフレットが作られる際に撮影される区域でもある。低年齢層の子供達が多いため、警備員の目は常に光っている。保護者側からの強い要望もあるのだろう。警備員以外にもこの学区だけは教職員警備隊があるらしいが、詳しくは知らない。なににせよ施設に侵入するならともかく、素通りするだけで警報が鳴ったりすることはないだろう。

時刻は二一時を過ぎ、生徒は当然職員もほとんどが寮に帰っている。もし戦闘が起こったとしても、被害は少ない。第七学区と比べれば、だが。

「・・・第六位は撤きましたか」

東雲は公園のベンチに腰かける。一日で能力を使い過ぎているから、頭が重い。今朝冥土帰しに調整してもらったばかりなのに、と東雲は苦笑う。

深呼吸する。この三日間で何度死線をくぐり抜けただろう。第二位に宣戦布告し、不意の形ではあったが第三位と接触、第一位にも宣戦布告した。第二位の襲撃と、第五位との闘争。これだけ数多くのレベル5と交戦したのは自分が初めてだろう。名誉なのか不名誉なのか、よくわからない状況だ。

空は真っ暗。雲は少ない。夏というだけあって夜になってもじめついているし、これだけ露出ろしゅつの大きい戦闘服コスチュームでも汗が滲にじんだりする。

「あー、お風呂入りたいな・・・」

そんな願望を口に出してみる。第二位に襲撃された時に、部屋が吹き飛ばされたのだ。入るべきお風呂は当然ない。銭湯せんとうに行きたい気分ではあるが、あいにくと第一三学区に銭湯はなかった。銭湯に入りたければ最寄りの第七学区まで戻るべきなのだが、せっかく一般人の被害を避けるために第七学区から離れた意味がなくなってしまう。つまり、お風呂には入れないということだ。

「夏場でお風呂入れないとキツイなー。思えば昼間っから走ったし汗かきまくってる。うわー臭いかもしれない。やだなー」

腕をあげて、こっそりと脇わきの匂いなんかを嗅かいでみる。夏場はそれなりに匂いに気を遣つかっているのだが、ハリウッド映画顔負けの壮絶げつな火炎に巻き込まれたりといういろいろあったので、その努力も水泡すいほうに帰きしている可能性が高い。

よかった。それほど臭ってない。自分の臭いなので樂觀することはできないが、東雲は気にしないことにする。手足を投げ出し、ベンチにもたれかかった。

学園都市では星空が見えない。空気が汚れているからだと言われている。

世界で最も清浄クリーンな科学都市と銘打めいっているが、結局頼っているエネルギーの大半は可燃料をごうごうと燃やして得られる熱エネルギーである。風力発電のための風車が町中ではいくつも並んでいるが、あれは意図的に風を起こすためのもので、電力供給に貢献こうけんしているかといえばたしかにしているのだろうが、可燃料の燃焼にはやはり

勝てない。企業は環境と清浄を訴えなければ生き残れないが、第二学区の地下施設をフロアごと買い占めてやっていることは可燃料の燃焼活動である。もちろん化石燃料よりもバイオエタノールを応用したものが多いらしいが、ほんとうのところはわからない。誰も調べないのだ。暗黙の了解なのだろう。

それに学園都市は光源が多すぎる。地上からの光で微弱な星の明かりを消してしまうのだ。学生の町なので眠らない町というわけではないが、航空管理塔、無人工場など、一日中眠らない施設も少ない。

星空は見たことがない。記憶にないのだ。

生まれた場所はおそらく学園都市。物心ついた時には学園都市の施設にいた。たび重なる実験のせいかただ単に幼かったからか、記憶があやふやなのだが、幼稚園に通っていた覚えがある。幼稚園と保育施設が合体したような場所で、身寄りのない子供達が集められていた、と思う。そこで五歳くらいまで過ごして、なぜか自分だけが引越させられた。その後は研究所をたらい回しにされ、よくわからないうちにこんな身体になってしまったというわけだ。

悲壮感はない。そういうもののなのだろうと、漠然と思っている。夏の夜、たったひとりで死に臨んでいるのも、そういうものだと思う。っているからだ。

星空は見えない。学園都市の外、もっと田舎の方に行けば、一面に広がる星屑の空を見られるのだと言う。見たかったような気がする。普通の人生であれば見られたのかな、と思う。

「……計画はつつがなく終了させなくちゃね」

迷いを断ち切るように言った。

この実験には様々な人達が関わっている。レベル5達、学園都市

とつかつりじかい アンチスキル
統括理事会、警備員上層部。他にも多くの人達が実験の成功を望んでいる。実験費用も莫大ばくだいなものだろう。

東雲は、目を閉じる。

学園都市に生まれ、学園都市に育てられた。研究に参加したことを後悔したことはない。学園都市のためになると思って、役に立てると思つて、今日まで生きてきた。

？学園都市のために死ぬ？——そう言われた時に、覚悟は決まつた。学園都市のために死ぬことこそが自分に与えられた最後の使命なのだと直感した。

だから東雲は死に臨む。学園都市にとって最高の状況になつて、殺されよう。自分の想いを受け継いで学園都市のために生きてくれれば、それだけで東雲は笑つて死ぬる。

学園都市がすべてだった。学園都市が存在しなければ、自分も存在しなかった。学園都市のためならこの命を懸かけるくらい簡単だった。自分と同じような学園都市に育てられる者のためになれば、それで満足なのだ。

それが悲しいことだと東雲は思わない。自分の命の価値など、どうでもよかった。

「あー。お風呂入りたいよう」

ベンチに座る少女の何気ない一言は、星明かりのない宵闇よいやみに吸い込まれるように消えた。

3 (後書き)

備忘録：土御門爆発しろ

4 (前書き)

結局私の出番でこんなところなのよね。 ようするに縦書き形式推奨
な訳よ。

フレンドは暗闇のなかでキーボードを叩いていた。

コンピュータの操作はそこそこできる方だ。？アイテム？の中では一番精密機械の操作に慣れていると断言できる。フレンドの得物は爆薬である。扱いが繊細で、一歩使い方を間違えば月の裏までぶっ飛んでしまうようなものだ。自作することもあるし、手入れもしなければならぬ。そういう時には電子工学に頼らざるを得ない。なので、コンピュータ操作には疎くなかった。

フレンドは麦野^{むの}に命令されたからスキルジャンパーを洗っているつもりはない。ただ単に暇つぶしだった。絹旗^{きぬはた}も滝壺^{たきつぼ}も手を貸すというなら、フレンドも手を貸した方がいいだろう。後で面倒なことを言われても困る。

「ふーん、結局警備員^{アンチスキル}が主導権握ってるって訳ね。ハッカー対策も万全と。私の力じゃこれ以上は無理っぽいなー」

フレンドはむーんと唇を尖らせる。調べようとしていたのはスキルジャンパーの情報。どの経路を辿っても最終的に警備員^{アンチスキル}のところに繋がって、それ以上情報が得られない、という行き詰まりを見せていた。そもそもハッカーの類はフレンドの専門ではない。フレンドは絹旗と同じく前線で戦う戦闘員だ。

サバ缶に手をつけ、フォークで突き刺して口に放り込んだ。フレンドは嬉しそうに表情を崩す。

（ハッ！ インスピレーションが来た！ サバ缶の神様ありがとう！）

フレンドは？サバ三昧^{さんまい}？に深々とお辞儀したと思ったら、またキ

ーボードを叩き始める。

「結局目標を捜すにはレーダーが一番な訳よね。なんかあるでしょ、ヒントとかさ」

スキルジャンパーの居所を掴んだところで移動されればそれまでだ。罠を張って待つ、という選択もあるが、麦野沈利はそんな悠長な性格をしていない。「我慢できなーい」とか叫んで周辺一帯を焦土に変える危険性がある。

情報といっても一番手に入れたいのは今どこにいてなにをしているか、だ。それには衛星クラスのレーダーが最も有効的だろう。GPSの応用利用だと考えればわかりやすい。

ただし警備員アンチスキルの監視衛星となるとやはり最大級の警備員防衛アンチスキルウォールが待ち構えていて手が出せないに違いない。

フレンドが狙っているのはレーダーそのものではない。レーダーが探知しようとしている指標マークである。

通常レーダーとは電磁波、音波などを感知してマップ上に表示する。戦闘機や潜水艦などはそれで十分だが、ひとりの人間などを識別するのは不可能だ。その対象にマイクロチップでも仕込まれているなら話は別だが。

フレンドは学園都市におけるレーダーの指標マークがなんなのか、見当をつけていた。電磁波や音波などではない、もっとわかりやすいものだ。

AIM拡散力場……しもん。それは指紋と同じでひとりひとり違うものである。

「おおっと、面白いものが出てきた。軍用回線かな、これは」

フレンドが目をキラキラと光らせてディスプレイを凝視した。とある組織が使っているリーダーの内訳である。ハックしているとはいえ、いとも簡単に現れたソレ。機密なので暗号がふんだんに使われているが、その目標が誰かということ、そして現在の絶対座標がどこかということを端的に示している。これを手元の地図と照合させればすぐに場所が割り出せるだろう。

「やったやった！ さっさと麦野達に連絡ね！」

フレンドは小躍りしながら電話をかける。会議通話という形で？アイテム？と回線をリンクした。

「フレンド？ なんか見つかった？」

麦野が真っ先に応答した。続いて絹旗が、滝壺も遅れて参加する。

「ふふ、このフレンド様をあが崇めたてまつれー！ スキルジャンパーの居場所をゲットした訳！」

「ホントですか！ 超お手柄じゃないですか幼児体型さん！」

「誰が幼児体型じゃコラー！」

絹旗の軽口に唾を飛ばしながら怒る。滝壺は通話に参加しているのに言葉を発していないので、電話の前にいるのかどうかもわからない。

「やるじゃないフレンド。どうやって割り出したの？」

「結局のところネットを介してソースを見つけた訳！」

『・・・ソレ、釣りじゃないでしょうねー。スキルジャンパーって一級機密っぽいのにネットで見れると思えないんだけど』

麦野は半信半疑だ。フレンダも少しそう思ったが、リーダーソースにはスキルジャンパー以外にも示されているのである。
七人のレベル5とその他数名だ。

「麦野、第七学区西部にいるでしょ。絹旗は南部で東へ移動中。滝壺は中央通りから動かず。どう、あつてるでしょ？」

通話が切れたように、静まり返った。正解なのだろう。

『・・・おかしいわね。なんで？アイテム？が監視されてるの？』

『フレンダさん。超急いでそこから離れた方がいいですね』

「それくらいわかってる。手に馴染なじんだパソコンだけどこでお別れする覚悟もできてるし」

フレンダの居場所もAIMリーダーで特定されているのだ。そしてハックしているのがフレンダだと特定された瞬間、その組織がフレンダを拘束しに来ることも考えられる。

「回線が生きてる今しか接触のチャンスはない訳よ。だから麦野と滝壺はすぐに第一三学区に向かつて。目標は南にある？はなばたけ公園？にいる。動いてないところを見ると休憩中っぽいね。レベル5は誰も第一三学区にいない！これって絶好の機会な訳！」

『りょーかい。滝壺、さっさと動けよー』

『わかった』

『私も超マッハで向かいます』

フレンドは会議通話を終了した。外の足音が近づいているからだ。複数ではない。

（特定されるのはいって訳ね。とつとつとずらかるとしますか）

フレンドはセーフティを外そうとする。時限式の爆弾だ。これで愛用のパソコンは世界の果てまでぶっ飛ぶ。なにも証拠は残らない。すべて吹き飛ばす量の爆薬をセットしてあるのだ。

「すぐに逃げ腰。たいした根性無しがいるもんだ」

フレンドの血の気がさつと引いた。手が止まる。逃げ出そうと立ち上がったところに、男の声が聞こえてきたのだ。画面上のリーダーソース。フレンドの点と重なるソイツの点。

「ここに来いと言われたから来てみれば・・・こんな根性無しを見せるためだっけ？」

一度だけ見たことがある。真っ白い特攻服の下に旧日本軍の国旗のような模様のシャツを着ているなにかもめちゃくちゃな男。フレンドは震えながらその男を見た。

「おい根性無し。スキルジャンパーってヤツの場所、教えてくんね

えか」

学園都市に七人しかいないレベル5のひとり。

「こんなでかい祭りに参加しねえのは？ナンバーセブン？の名が廃るだろうよ」

そぎいたくんは削板軍覇。能力も原理も不明な超能力者。怯えるフレンダを見て、ニツと笑いかけた。

アクセラレータ 一方通行は御坂達と分かれ、単独で第七学区、まなびや 学舎の園に足を踏み入れていた。

男子禁制のそのエリアは常盤台中学を含む五つの学校から構成されており、街並みは学園都市のものとまったく違う。中世ヨーロッパを思わせる建物、道路、アンティークのオブジェクト。お嬢様学校の共用エリアと言われて誰もが納得する街並みが広がっている。
アクセラレータ 一方通行はくだらなさそうに辺りを見回しながら歩いて行く。

彼が目指しているのは場所ではない。とある人物である。

消防車の音はないが、火災があったのだろうという痕跡は見つかった。そこにだけまだ人だかりができている。アクセラレータ 一方通行は建物の陰に身を隠しながら様子を窺う。

（常盤台の傍・・・スキルジャンパーの仕業か？）

今学園都市で起こる事故は間違いなくスキルジャンパーが関わっている。この火災にしても自然発生するものではない。火種もない路上でいきなり火災が発生するものか。周りにあるポールがひん曲がり、常盤台中学を隔てるブロック塀が崩れている。どう見ても戦

闘があつたとしか思えない。

アンチスキル
警備員が野次馬を帰らせている。あくまで事故として処理する気だろう。これ以上長居したところで情報は得られない。見つかつて面倒になるだけだ。

アクセラレータ
一方通行が背を向け歩き出そうとした時、女の声がした。直接聞こえたわけではない。念波で言葉を送っているのだ。

『ここまで来た理由は、わかっていますわ』

「そおかい、なら話ははえエ。さつさと姿見せろや」

アクセラレータ
一方通行は歩きながら言う。女の声は平淡だった。

『その間道を行けば、常盤台の裏門に着きますの。案内人^{ナビ}を置きますので。殺さないでくださいね』

「殺してなんの得があるのか聞きたいねエ」

声の正体はわかっている。ソイツに会うために学舎の園まで来たのだ。

学舎の園では一般的なビルを中世風に塗装している。建物は石積み造りなどではなく、しっかりとしたアスファルト製だ。見た目だけ塗装などで誤魔化しているので、近くで見ればがっかりする出来栄えだった。

間道を進む。右手に常盤台中学、左手になにかの店が建っている。それほど長くない道だった。

幼い少女が立っていた。常盤台中学の制服を着ているから中学生なのだろうが、私服であつたら小学生に間違われるような幼さがある。

「オマエが案内人か？」

少女は小さく肯くだけで、門を開いて先に進んでしまった。一方アクセ通行は頭を掻き、その小さな背中を追った。ラレタ

常盤台中学はお嬢様学校だけあって、内装も優雅で美しい雰囲気がある。一方通行にはよくわからない感覚だった。思ったのとはにかく階段の高さが低いこと、天井が低いこと、机が小さいこと。女子の身体に合わせるためだろうが、一方通行にとっては小さかったり低かったりする。

きゅくつ窮屈そうな学校だ。一方通行は最終的にそう判断して、考えるのを止めた。アクセラレータ

少女は教室の扉を開け、駆け込んだ。小動物が逃げる様のような。それならば自分は狩人か。アクセラレータ一方通行はそんなことを考えて、馬鹿馬鹿しいと嘲笑った。

教室のなかにソイツはいた。いかにもお嬢様という外見で、感情を失ったまるでロボットのような表情をしている女。メンタルアウト

心理掌握。学園都市に七人しかいないレベル5のひとり。序列は第五位。アクセラレータ

東雲に一方通行を瞬殺できる能力者と言われた少女である。アクセラレータ彼女は幼い少女の頭を撫でながら、一方通行を見つめていた。

「どうですか。男子禁制の花園。興奮しますか？」

「ワケわかんねエこと言ってンじゃねエよ」

アクセラレータ一方通行は教壇の机にとび乗った。ポケットに手をつ突っ込んだまま脚を組み、メンタルアウト心理掌握を睨みつける。

「そのガキ、普通じゃあねエな」

「おや、わかりますの？」

「よくねエ目をしてやがる。俺やオマエと同じ目だ。この世のすべてが憎い。もうなにも信じられねエって目だ。ソイツも実験動物か？」

「ながてんじょうつき長点上機学園から譲り受けましたの。廃棄処分前でしたから」

「ハッ！ 心優しいご主人様に救われてハッピーエンドってか？」

第五位。オマエはそんな人間じゃねエだろオが」

「アクセラレータ一方通行の声は低かった。嫌悪感がにじ滲み出た声に、幼い少女は怯える。

「メンタルアウト心理掌握は眉ひとつ動かなさい。ただ薄ら寒い笑みを浮かべ続けている。

「アクセラレータ一方通行はこの女が嫌いだった。どうやったらこんな感情のない仮面の笑みを浮かべられるのか。かつて殺戮した御坂妹でもわずかながらの表情というものはあった。この女には表情が存在しない。まるで表情をつくることを設定されていないロボットのようである。激情はない。哀しみもない。喜びもなければ感動もない。

当然そこに、慈愛の心など存在しない。

「第一位。私は別に優しいからこの子を引き取ったわけじゃありませんわ。この子に利用する価値があっただけです。長点上機の負の遺産。この子は精神系能力者の強化個体ですわ」

「アクセラレータ一方通行は幼い少女を睨む。彼女はびくびくと怯えるだけだった。ブースター強化個体。脳波に干渉し共鳴させることで特定能力のレベルを上

げられるのではないか。

？体晶？に代わる次世代の能力上昇品と銘打って長点上機学園が中心になり、極秘裏に研究が始まった。

その研究の果てに生まれたのは中途半端な上昇能力しか持たない出来損ない。

脳波をリンクさせるだけなので言葉を使える必要はない。犬や猫では脳波形式が違い過ぎてアウト。猿のような人間の脳に近い動物でも上手いかない。様々な動物で試した結果やはり人間が一番長持ちした。だから生産された強化個体はすべて人型である。

それでも脳波に影響を出すせいで使用した能力者や強化個体自身が次々と倒れたために、危険と判断されて予算がなくなり、研究は終盤で頓挫^{とんざ}。ほとんどの強化個体は処分された。

だから、負の遺産。本来なら処分されるはずだった存在。彼は目を伏せる。第五位はどこまでいっても第五位ということらしい。

「オマエ。そのガキから言語能力奪いやがったな」

逃げ出さないように。自分の下でしか生きられないように。
しかし心理掌握は小さく首を振る。微笑を浮かべたまま。

「そうじゃありませんわ。この子には？恐怖？という感情しか残っていないだけです」

胸糞悪い話だった。肥だめのなかを歩いているような、吐き気を催す邪悪。

一方通行から見ても心理掌握は人間として終わっている。希望も

夢もない、ただ一言？絶望？を背中に掲げて生きている。一方通行
アクセラレータ
とはまったく毛色の違う悪党。

その少女には？恐怖？しか存在しない。なにを見ても怯え、安息を求めて逃げ回る。喩えでなく、この世のすべてを恨んでいる。？恐怖？しか存在しない世界を忌み嫌っている。

少女の安らぎは心理掌握メンタルアウトだけ。彼女だけは裏切らない。それ以外の人は？恐怖？を与える敵。そう思い込んでいる。？恐怖？しかないから言葉を発しない。恐怖すべき対象に話しかける者はいないだろう。言語機能がないのではない。使う場面がないだけだ。

ただひとり心理掌握だけが、少女を癒す。少女は彼女の傍から離れない。動物の本能、遺伝子のレベルで、心理掌握メンタルアウトを主と認め、死ぬその時まで一緒にいると心に決めている。

胸糞悪い話。突き詰めれば、それだけだ。

少女の信じるその主こそが、少女を人間の枠組みから連れ去った張本人なのだ。

一方通行は人にとにかく言える立場ではない。一万人を虐殺してきた。だが、この話に救いがないのはわかっていているつもりだった。

「俺の用件を聞いてくれんのか」

「聞かなくてもいいなら聞きませんけれど」

「断るってんならぶつ殺すだけだ」

「では、聞き入れましょう」

「素直じゃねエか。なんか要求したりするかと思ってたんだがな」

一方通行は教壇から降り、心理掌握メンタルアウトに向かつて歩き出す。
強化個体は怯えて、彼女の背後に隠れた。

「私にも利益があるのですわ。あなたの記憶のなかにあるスキルジャンパー。それを掘り起こすことで、統括理事会に圧力を加える材料が出てくるかもしれません」

「統括理事会？ 圧力なんてかけてどオすンだ」

「たいした理由ではありませんのよ。あなたと妹達シスターズの関係に似ていることが私にもあった。ただ、それだけですわ」

殺してやろうかと思った。一方通行が苛立つ箇所を的確に逆撫でしてくる。
心理掌握メンタルアウトは間違っても善人ではない。一方通行ですら反吐へびが出る

ようなくそつたれたった。

だがスキルジャンパーへの扉が一方通行であるなら、鍵はこの心理掌握メンタルアウトに他ならない。

？恵まれた双子計画？。身に覚えのない名前。だがその計画には一方通行とスキルジャンパーが関与している。

なぜ覚えていないのか。今まで施された実験は名称どころか内容まですべて暗唱できる。その一方通行が？恵まれた双子計画？などという目に留まる名称を忘れるはずがない。

そうなると考えられるのは、記憶の改竄かいざん。誰かがスキルジャンパーの記憶を一方通行から消した。研究の不都合になる。あるいは計画そのものが頓挫とんざした。理由はどうでもいい。とにかく自分の知らない計画があつて、その双子の片割れが好き勝手暴れている現状が問題だった。

自分のなかにスキルジャンパーの記憶がまったくなければ、それはそれでいい。あの紙切れにあつた名称が企画段階の計画であつた

り、どこかの誰かのイタズラならそれでかまわない。その時には特
力研りょけんの知り合いに連絡を取って深く詰問きつもんするだけだ。

大きい期待をしているわけではない。

だが、最初にあつた時から胸騒ぎがしていたのだ。どこかで会つ
たとは思えない言動。そして特力研にあつた自分の知らない計画。
ばらばらだったジグソーパズルがきっちり枠に収まった感じがして、
我慢できなかった。

だから心理掌握メンタルアウトに記憶のサルベージをさせようと思った。ほん
うになにもなければいいのだ。ただ、あつた時に、自分はど
うするのか。

（考えるまでもねエ。この実験をぶつ潰すことは変わらねエだろオ
が）

一方通行アクセラレータはベクトル反射を解除した。心理掌握メンタルアウトの指が自分の額に
触れる。

その感触が、あのレストランで出会ったスキルジャンパーの指の
感触を思い出させる。

『一方通行アクセラレータ。僕と一緒に死んでください』

その言葉の意味を知りたい。あのくそつたれを殺す前に、胸のも
やを取り払いたい。

だから一方通行アクセラレータは目を閉じて、心理掌握メンタルアウトにすべてを委ねた。
ゆた

「・・・心を落ち着けましょう。一度大きく息を吸って、吐いてく
ださいませ」

心理掌握メンタルアウトの声には抑揚がない。だがその分、心を落ち着けるのに
は役立つ。こオいう口調なのも心理掌握メンタルアウトの能力のために便利なんだ

ろオな、と一方通行はなんとなく思った。

彼女ができるのは記憶の読心。記憶の修復が可能かどうかは一方通行は知らない。できなければ直接聞けば済む話だ。この状況で心理掌握がスキルジャンパーの情報を隠す必要性はないのだから。

それから、一方通行の額が温かくなる。彼女の指からなにかが自分の脳内に入り込もうとしているのが、よくわかる。これが心理掌握メンタルアウの能力か、と彼はぼんやりと考えていた。

記憶を読まれるということは、自分の生い立ちを知られるということだ。あまりこの女に知られたくないが、仕方ないなと溜息を吐く。

「雑念が多いですね。集中できないので止めてくださいますか？」

「悪いな。つーかよオ、今エロいこと考えたらどオなのかねエ？」

「そのまま脳波を乱して遠い世界に旅立ってもらいますの」

薄目を開く。彼女はほほ笑んでいた。さっきは無表情だったくせに、と一方通行は舌打ちする。

「相当なロックがかけられている記憶を見つけました。うっかり思い出せるレベルの記憶封鎖ではありませんね、これは」

「・・・それだな。つかなんでそんなことがわかるわけ？」

「わかるものにも、記憶の封印は心理掌握メンタルアウの十八番ですよ」

やはり胡散臭い女だと彼は舌打ちする。心理掌握メンタルアウができるということはスキルジャンパーができてもおかしくはない。ますます疑いが確信に変わっていく。

「では、平常心を。記憶の扉を開き見ますわ」

再び、記憶の読心を始めたようだ。額アクセラレータが温かい。
額に触れる指の感触。不思議と、一方通行の胸に熱いものが湧き
だしてきた。

メンタルアウト
心理掌握の脳裏にあどけない声が響く。
お兄ちゃん、と。

4 (後書き)

場 備忘録：フレンダかわいい
絹旗かわいい
強化個体
第七位初登

5（前書き）

心理掌握による過去幻視ですわ。縦書き形式推奨中ですよ。

ツインエンジェル
？恵まれた双子計画？。

その偉大なる計画に選ばれた二人の子供達。同じ場所に立っていたはずの少年と少女。
地獄の始まりだった。

少年には妹がいた。光に翳^{かざ}すと赤く見える程度の黒髪を持つ、元気な妹だ。

「お兄ちゃん、あれなにに見えるー？」

「んー？ あれはオマエ、雲に決まってるだろ」

「ちがうー、あれは小鳥さんだよ」

真っ青な空を指して、少女は元気に笑う。ただの雲にしか見えな
いなーと、少年はその隣で見上げていた。

少女は少年をお兄ちゃんと呼んだ。しかし、ほんとうの兄妹では
なかった。研究所に連れてこられたよくわからない少女を差し出さ
れ、「君の妹だ」と研究員に言われた。顔も名前も全然違うのにな
ーと思いながら、少年は少女を妹だと思うようにした。研究や実験
では、その方が便利なんだろうと幼心に理解していたのだ。

少女は目が良いことを自慢しがった。それはもううざいくらい
に。

一緒にいると「お兄ちゃんあれが見えるー？」といきなり窓の外を指すなり問い迫ってくる。豆粒くらいのものを指して「あれは猫だよお兄ちゃん！」と誇らしげに言うのだ。いちいち報告しなくてもいいことを報告したり、とにかく落ち着きのない少女だった。こんなの妹じゃないと思いつながら、少年は「ああハイハイ」と受け流してみる。

「お兄ちゃん、僕の話聞いてないでしょー」

そう、妹は自分のことを僕と呼ぶ変な子だった。少年が馬鹿にすると、「べつにいいでしょ！」と叫んで攻撃してくるので、少年も面白がってからかう。それですっかり僕という自称に触れられるのが嫌いになってしまったらしい。今はその話題に見向きもしなくなつた。兄としては寂しい気もするなーと少年は思つたりする。

研究所から外へ出ることはできなかった。二人の暇つぶしは、窓から見える外の景色を見ていろいろと話すことだった。犬や猫が通ると、少女は声を上げて喜ぶ。少年はそんな少女を見つめてほほ笑んだりするのだ。

仲がよいかと言われると、たぶんよかったと思う。少年は少女と一緒に過ごす時間が嫌いではなかった。

予想はついていた。少年と少女は同じ実験を受けることになった。先に受けるのは少女。後に受けるのは少年だ。その順番にどんな意味があるのかは知らない。けれど文句は言わない。少年はずっとそうやって過ごしてきた。

同じ実験と言いながら間隔が数日空くことも多かった。

少年の番がくる。演算処理能力を増強する処置を施すのだと聞かされる。

少年の持つ能力は？ベクトル操作？。通常的能力とは違い膨大な

計算量を必要とするため、演算処理能力を発展させる必要があった。レベル4と呼ばれる者達の演算能力でも、この？ベクトル操作？に当てはめるとレベル3止まりだという計算が出ているらしい。それだけ優秀な能力であり、難易度の高い能力だということだ。

第一の実験は終了した。定期的に脳を刺激することで脳の演算を司る部分を安全に強化していくとの話だった。少年は特に疑問を抱かない。そういう実験法は珍しくないのだ。

少女も同じ実験を受けるなら、それなりに優秀で難易度の高い能力なのだろうと思った。

実験が五回ほど終わった頃に、異変が起き始めていた。

少年は演算能力が上昇していた。実験の狙いがソレなのだから当然と言えば当然だが、問題は少女の方である。

少女の演算能力は、数値に表れるほど低下していた。

同じ実験を繰り返しているはずなのに、だ。少年はおかしいと思って少女を問い詰めた。

しかし話を聞いてもおかしいところはない。実験に適性でもあるのかと思っただが、それならばどうして止めないのかわからない。少年にだけ実験を続ければいいのではないか。そうしないのはなぜか。少年は嫌な予感がしていた。けれどそれは予感で、どう行動することもできなかった。

八回目の実験が終わった。

もう、少年はなにも言葉にできなかった。

少女の演算能力は使い物にならなくなっていた。

能力を発動させるどころか、簡単な物理法則の演算もできなくなっている。

少年と少女は、最初は同じ演算能力があつたはずなのだ。

それなのにどうしてこんなに差が開いているのか？

ほんとうに同じ実験だったのか？

その答えは出ている。少年は事態をよく理解できていない妹を抱きしめて、呻いた。

少年に施すための最終下処理実験だったのか。それとも少女のなかの演算能力の種のようなものを絞り出して少年に受容させたのか。はたまたもつと違うなにかか。

なんでもいい。なんだっていいのだ。わかっていることはひとつだけだ。

少年の演算能力を引き上げるために少女の演算能力が犠牲になった、それだけなのだ。

妹は、悪いことなどなにもしていない。

それなのに、もう能力を使うこともできない。

演算能力がレベル0以下になったからだ。

このままでは少女がどういう扱いになるか、少年にはわかっていない。

廃棄――。

少年は立ち上がる。少女のために。

昨日できていた計算ができなくなっていく少女を救うために。

まるで実験のたびに命を擦り減らしているような少女を救い出すために。

少年は研究所にある器材を破壊し続けた。電流のベクトルを変更しショートさせる。それで足りないなら物理的に叩き潰した。

もう少女を実験に巻き込まないために。ろくでもない実験を受け

るのは自分だけでいい。自分が駄目になって地獄に落ちればいい。
この少女だけは・・・妹だけは、地獄に行かせない。

それも長くは続かなかった。むしろ少年の行動のせいで窮地きゅうちに立たされたのは少女だった。

少年の実験阻止のあたりを受けて、少女の廃棄の日が早められた。さつさと原因を排除するべしという研究所の決定を促すだけだったのだ。

そして、研究所は？ツインエンジェル恵まれた双子計画？の最終プランの実行に移る。

演算能力を失った少女の？パーソナルリアリティ？拡大を図る実験だった。

それが上手くいけば少年に応用する。失敗しても行くあては廃棄だった存在だ、痛くもかゆくもない。

？プロデュース？からパーソナルリアリティに関する研究報告は届いている。人体実験も数多くこなしてきた。あとは適性があるかどうか問題になる。適性があれば脳にある一パーセントに満たないパーソナルリアリティを五パーセントほどに引き上げられる。レベル6への道も開けるし、デュアルスキルパーソナルリアリティの容量のために実現不可能と言われた？多重能力？も可能になるだろう。

学園都市で最高の演算能力を持つ脳に、常人の数倍のパーソナルリアリティが加われば、それは限りなくレベル6に近くなると言えるはずだ。

だから、最終チェックをしなければならぬ。少女の身体を使って。繰り返しされた実験の残りかすである少女を有意義いゝぎに利用して。

少年と酷似した体内データを持つ少女は、適性だろうか？

少年にはわかっていた。

パーソナルリアリティを拡大させる方法は知らないが、それが失敗すればどんな影響を出すのか、わかるだけの知識はあった。

知覚、言語、記憶は間違いなく崩壊するだろう。他にも歩行障害や重大な臓器不全が出る。

目が良いとうつうつしいくらいに自慢していた知覚能力も。

お兄ちゃんや僕という間抜けな言語能力も。

少年と過ごしてきた日々を司る記憶能力も。

実験は、根こそぎ奪い去るのだ――。

成功したところで道はない。少女は結局、廃棄処分されることが決まっているのだから。

「実験を成功させて、研究員の皆に恩返ししたい。だって僕達は学園都市に育てられてきたんだもの・・・」

実験に向かう前に、少女は少年に告げた。

「学園都市で、一番強くなつて。学園都市が望んでる存在になつて。もう僕みたいな存在が生まれないように、強く、強く」

少女は覚悟しているわけではない。己の運命に納得しているわけでもない。その両目からは滴が溢れ出^{あふ}していった。

少年は、ずっと少女のことを愛していた。守りたかった。

でも、力が足りなかった。

だから――強さを求めた。

「学園都市で、最強になつてみせる」

少年は震える声で少女に誓った。二度と自分達のような悲劇が繰

り返されないように。

実験のために生き実験のために死ぬ人間を生まないために。

「お兄ちゃん・・・僕、忘れたくないよう」

少女は救いを求めている。

どうして自分は死ぬかもしれない実験を受けなければいけないのか。

どうして自分は廃棄処分されなければならないのか。
助けて欲しい。救って欲しい。少女は少年に手を差し延べていた。

少年はその手を握ることができなかった。研究所でしか生きられない存在。涙に暮れて見送ることしかできなかった。
無力だった。

最後の実験は、失敗した。

とある器材が暴走し、少女は脳のほとんどをパーソナルリアリティに占拠された。言語を始めとする諸領域がすべて侵されたのだ。目を覚ます可能性は、極めて低いという。目を覚ましたところでもない知覚できないし会話も歩くこともできない。死んでいるのも同然だった。

少年は自分のせいだと思った。研究所の器材を片っ端からショートさせていったのは誰だ。

自分が妹を殺してしまった。

慟哭。少年の心は、粉々に砕けていた。それから少年は、見るに

堪えない姿になってゆく。

最強になる。

少女と交わしたたったひとつの約束を守るために、がむしゃらに足掻く。

どことなくそつたれな実験も受けた。痛みなどあつてないようなものだった。

それでも、時々夢に少女が出てくるのだ。

あの愛らしい顔と声で「お兄ちゃん」と、擦り寄ってくるのだ。夜になると涙が止まらなかった。愛した妹を殺したのは、自分だった。

夢のなかだった。

少女が自分の枕元に立って、優しい目をして自分を見下ろしているのだ。

淡い赤色を燈す髪に触れてやりたかった。その柔らかい頬ほおに触れてやりたかった。

ごめんなと、一言だけ謝りたかった。

「お兄ちゃん」

あの声だった。妙にリアルで、そこにいるのかと錯覚してしまうほど、温もりを感じた。

「ごめんね。お兄ちゃんと一緒に遊んだり、勉強したり、笑ったり、泣いたりしたこと、忘れないから」

俺だって忘れないよ。少年は夢のなかで、涙を流していた。甦よみがえつ

てくれた少女を前にすると、涙を堪えることなどできなかった。

「お兄ちゃんの代わりに、全部覚えてるから。僕を忘れて、ひとりで生きて」

なにを言っているのかわからなかった。けれど、それがとても悲しいことなんだと少年は思った。少女が、泣いていたからだ。眉を寄せて、いつもの元気そうな顔と全然違って。オマエはいつまでも笑ってくれと、言いたかった。そんな悲しそうな顔をしないでくれ、と。

忘れたくない。そう、叫んだ気がする。夢のなかだから曖昧なまま、それでも吼えた。

「お兄ちゃん、大好きだよ」

その声は間抜けなほど震えていた。少女の指が少年の額に触れる。温かくて、ほんとうにそこに妹がいる。優しい指先が心地いい。少年はあの一言を告げるなら今しかないと思った。

「ごめん」

意識が遠退いていく。妹は、ほほ笑んでくれたような気がする。

少年は夢のなかのことをなにも覚えていなかった。妙な爽快感があって、少年は今日も実験を受けに研究所へ向かう。学園都市最高の演算力と？ベクトル操作？の能力を持って。

その時の少年はすでに少女に関することはなにひとつ覚えていなかった。あの忌々しい計画のことすら、覚えていないのだ。

少女が記憶を消去しにきたのだろう。なにを想っていたのかは、わからない。

けれど、それからの少年は少女という枷が外れたにも関わらず、真つ直ぐと力を求めて生き始める。

少女に施された実験は少女の一件で闇に埋もれてしまったらしい。適性がないと判断されたのかもしれない。真相は不明だが、少年に施されることはなかった。

少年は学園都市最強にこだわった。最強のためにはどんな手を使ってもいいと言い放つほどだった。だが、少年は学園都市最強を目指す理由を覚えていない。ただ強くなりたいたいという漠然とした思いだけで、地獄の釜の底を這いずって行く。

少年は思った。自分はそういう人間なのだ。最強を求める醜く憐れな存在なのだと。

それから数年経たないうちに少年は学園都市最強になった。

学園都市最強の能力者の名は？ 一方通行？

少女に誓った約束を、たとえ少女のことを覚えていなくとも、少年は守った。

5（後書き）

備忘録：一方通行が最強を求めた理由 恵まれた双子計画 物語の
核心ですね

6（前書き）

盛り上がって参りましたね。縦書き形式推奨です。

時間にして五分というところか。

まだかまだかと一方通行が腕を組んで待っていた。強化個体は心理掌握の背後ですやすやと眠っているようだ。教室が静かだから寝息が一方通行のところまで届いている。？恐怖？しかないくせに図太いやツだ、と彼は思う。

「まだかよ。なんか見えたかア？」

一方通行は目を開いて正面にいまする心理掌握を見た。

息が止まった。驚愕。彼女は、無言でとめどない涙を流していたのだ。

（はア？ なんですかこの状況は？ 説明不足過ぎて意味不明だぞ
オイ）

一方通行がはてなを頭上に浮かべる。なにも知らない彼にとって心理掌握の涙はなんの状況説明にもなっていない。というかこいつって泣くんだなアとすら思う。彼女もやはり人間ということか。

いったいなにに涙を流しているのかは知らない。それは一方通行が人を殺してきた過去かもしれないし、殺された人が可哀想という涙かもしれない。そんな誰かに対する情けの涙を持ち出されても、今の一方通行はせせら笑うしかない。

欲しいのはスキルジャンパーの情報だ。

「一方通行。今すぐにスキルジャンパーのところに向かってください」

涙を流し続ける心理掌握メンタルアウトの言葉に、また大きなはてなを浮かべる。

「いや、教えるよ。なにが見えたんだ？」

「スキルジャンパーはあなたそのものよ」

ますますわからなくなる。全部話せと睨みつけても心理掌握メンタルアウトは涙を流すだけで答えなかった。

「他人ひとの過去ほじくり返してアワレアワレのお涙流すのは勝手だけだよオ、ソレを隠すってんなら容赦しねエぞ、あア？」

一方通行は横にあつた机を投げ飛ばした。ベクトル操作されたそれは一瞬で教室の壁に激突し、隣の教室まで貫通した。教室のなかはその余波で荒れ果て、眠っていた強化個体ブースターも驚きに目を覚ます。

「オマエの寸劇に付き合ってる暇はねエんだ。喋れ」

ここまで脅されても心理掌握メンタルアウトは答えない。泣いているだけ。
一方通行は額に青筋をびきびきと張り巡らせる。それは包帯を巻いていてもわかるほど広範囲に渡っていた。赤い目の瞳孔は開きつつある。

「ふざけンじゃねエぞ、オイ。スキルジャンパーの過去を掴ンでるなら喋れ！」

泣き顔なんて求めていない。ただあの女の過去を知りたいだけなのだ。

彼女の背に隠れるようにしている強化個体ブースターは、がくがくと震えて

いる。アクセラレータ一方通行の怒声に恐怖したのだろう。

アクセラレータ一方通行にあまり時間はない。隣の部屋まで突き抜けた机だったものは、それはそれは壮絶な爆音を奏でていた。そのうちに騒ぎを聞き付けた警備員アンチスキルや教職員が到着する。ここは名門常盤台中学ときわだい。警備設備は中学校のなかでは最高クラスで、なおかつ今は校外に警備員スキルが集結していたのだ。今すぐにも駆けこんでくる可能性がある。それは、心理掌握メンタルアウトもわかつているはずだった。

「はッ！ そオカそオですか。スキルジャンパーを底かはうッてンだなア？ よオくわかつた。ならオマエから殺してヤンよ！」

アクセラレータ一方通行は笑っていた。教えないならコイツに価値はない。過去を知られた。厄介になると面倒だから殺す。なにもおかしいところはない。

真っ直ぐに向かい、真っ直ぐにこの右の苦手、左の毒手で貧弱な小娘を爆発させる。血管の糸をそのままぶちぶちと引き抜くかのごとく真っ赤な鮮血が飛び散り、ただの肉塊に成り果てるだろう。

一秒もいらぬ。一瞬だ。一瞬で第五位はこの世から消え去る。

「遺言は聞かぬエ！ 後悔ならあの世でしてくれよなア！」

その両手が女の子らしい細い首に向かった。強化個体が耳を塞ぎ、目を固く閉じている。アクセラレータ一方通行はそちらを見ないようにした。メンタルアウト心理掌握は動かない。言葉も発しない。涙の止まらない双眸を、眼前の白い獣に向けていた。

アクセラレータ一方通行はぴたりと動きを止める。もうすぐに首に手が触れるところだったのに。

善良な心が働いたわけではない。思い直したわけでもない。ただ

電池が切れたように動かなくなっていた。

心に土石流のようになだれ込んでくるこの言葉に表せない感情は、
なんだ。

アクセラレータ 一方通行は呼吸ができなかった。もう機能することはないと思っ
ていた涙腺が熱くなる。喉の奥がきゅつと締まった。

気を抜けば、涙を流してしまいそうなのだ。

なんだこれは。アクセラレータ 一方通行は困惑する。メンタルアウト 心理掌握を殺すことにこの
感情を抱いているわけではない。やろうと思えば、今彼女を殺すこ
とはできる。形容不可能な感情に囚われていても彼女を殺すことは
できるだろう。

違うのだ。記憶は蘇っていない。悲哀や懐古、後悔、苦悶、その
他の負の感情が丸ごとセットにされたような言葉にできないものが
胸の底に沈んでいる。亜鉛の塊のように一方通行の身体を蝕むしんでいる。
る。

説明できないから気持ち悪い。メンタルアウト これが心理掌握を殺すことで生ま
れる罪悪感ならば、それでも殺しただろう。殺して、この感情とと
もに一生を生き抜いただろう。アクセラレータ 一方通行はそういう生き方を選んで
いたのだから。

だが、これは説明できない。どこから湧きあがる感情なのかもわ
からない。唐突に湧いた感情にしては生々しい。下り物くだりもののような気
色悪さがある。粘ねっていて吐き気を催しそうな異臭。アクセラレータ 一方通行が思
わず動きを止めるような心の澱よどみなのだ。

アクセラレータ 一方通行は正面に座る少女を見た。涙を流し続ける、学園都市最
メンタルコントローラー
強の精神能力者を。

「私の抱く感情をあなたに移植しましたの」

感情の移植。そういえば十徳ナイフにも喩たとえられる能力者だった
など、舌打ちする。

「ほんとうに知りたいのですか？」

「どオいう意味だ」

「あなたは知るべきではないと思いますの。ですから、私は語ろうとしませんわ」

「オマエが勝手にンなこと決めてンじゃねエ。聞いて良いのか悪いのかは俺が決める」

メンタルアウト

心理掌握は胸に手を当てた。

「あなたに耐えられるとは思えませんの。言っただけですわ。スキルジャンパーはあなたそのものですと」

いかんともしがたい感情が腹の底にある。それがうつとうしく、腹立たしい。その理由を知りたいと思わせないほどの悪臭を放つものだった。

「そりゃ俺の記憶だ！俺が知っちゃいけない理由はないはずだろオが！」

アクセラレータ

叫ぶ。外の騒ぎが激しくなっているのに、一方通行は気付いていない。時間がない。

「スキルジャンパーを知れば、あなたは彼女を殺せなくなる。けれど、彼女が望むのはあなたに殺されることなのですわ」

メンタルアウト

心理掌握の言葉のひとつも理解できない。理解を追いつかせない程度に喋っている。心理掌握は精神能力のプロだ。そういう類の計

算もできるのだろつ。

一方通行は眉を顰めて、アクセラレータひそ得体の知れないものを知った少女を睨みつけた。

「・・・オマエは、なにを知った？」

彼女はほほ笑みを崩さず、軽く横に首を振る。涙はまだ枯れていない。

「少年の絶望と、少女の希望」

二人が笑っていた時は、幻想の世界のようだった。あの実験がすべてを変えた。幻想を地獄に、少年は少女を忘れ、少女は新たな力を得て少年と再会する。

二人は殺し合う。少年は少女を殺したいと望み、少女は少年に殺されることを望みながら。

一方通行は息を飲み込む。アクセラレータ下の階を走る大人達の足音が聞こえていた。アンチスキル警備員だろう。だがそんなことはどうでもいいとばかりに、少女の言葉を待ち望んでいた。

「——とある幻想の、せかい悲しい物語ですわ」

しのめ東雲はうつうつとしていた。

心休まる時がなかったのだ。疲労もたまっていた。ベンチに手足を放り出して、ぐあーっと女の子らしくない豪快な姿勢で休憩している。

第一三学区は幼稚園や小学校が多い。夜遅くになると人の気配がさっぱりなくなるのだ。それだけ東雲は安心して戦うことができるし、こういう風に拳銃をホルダーにセットしていても一堂々と休憩することもできる。

脳の調整はひと月に一度で十分だった。精密機械のメンテナンスというよりも、パソコンのソフトで一気に洗い流す感じに近い。実際冥土帰しの病院にある器材のボタンをひとつ押すだけで、一〇分とかからず調整は終了する。脳に微弱な電流を流すことで機能不全に陥らないようにしているのだ。機械の歯車に油をさす感覚で捉えるとわかりやすいかもしれない。

能力をここまでふんだんに使うことはなかった。脳が疲れていると思ったのは初めてである。脳の疲れは目や肩にくるものだが、違う。重いものがずーんと頭蓋骨のなかに沈んでいる感じ。頭を揺らすとそれがからんころんと音を立てて転がりそうなのだ。こめかみの辺りを指の腹で押しながら、東雲はむーと唸っている。

「これからドーしますかね。普通にお風呂入りたいう」

一度気にするとずっと気になってしまうのが人間の悲しい性である。

誰も見ていないな、と辺りを窺ってから、お風呂お風呂お風呂ーと駄々をこねてみる。手足をばたつかせて、子供のように声をつくった。すぐに止めて、なにしてるんだらうと自分に呆れる。

じゃり、と足音がした。東雲は滝のような汗を流し始める。恐る恐る、後ろを振り返ってみる。

「ハイイ、こんばんわー。あなたがスキルジャンパー？」

イイとこのお嬢様っぽい雰囲気少女は満面の笑みで東雲を迎え

た。

東雲は口を三角形にして、汗を拭うこともせずに小さな声でドーモと返す。

「あの・・・その・・・見ました？」

「んー、なにを？」

その少女は首を傾^{かし}げる。「やった見られてない！」と一瞬ガッツポーズをする東雲だったが、そこにいる少女はいきなりにやりと口を曲げた。

「反抗期迎えたばっかの子供^{ガキ}なら見たけどね」

東雲は地面に膝をついて「見てんじゃねえか！」と心のなかで叫んだ。ほんの出来心だったのです。誰も見ていないと思ったからやったのです。弁明の言葉が浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。結局釈明することはできないだろうと、東雲は自分事ながら理解していた。

黒歴史とはこうやって誕生するのだなーと汗を涙の滴に変えて、東雲は一步大人になる。

「気にする必要はないって。だってここは第一三学区よ？ 小学生がたあくさんいる場所じゃないの」

「・・・それは暗に僕を小学生だと言ってるんですか？」

「あら違ったの？」

高校生くらいと思われる少女は、思いきり見下す視線を東雲に向

けていた。がつくりと膝をついた姿勢の東雲は、顔だけその少女に向けて敵意を剥き出しにする。

ところでさきほどから感じる視線。尻の辺りに誰かがいる。それも複数。

東雲が首を回して尻を凝視する者達を確認した。自分より幼い少女とジャージ姿の少女が二人、腕を組んで考察している。

「超見てくださいよ滝壺さん。たきつぼこの布面積。それでいてポロリはしないという完成度」

「下着つていうか水着？」

「いえいえ、水着より露出激しいですよ。そしてこのお尻を超突き出す雌豹めひょうのポーズ。ズコバコされたいってアピールすることで世の男性どもの心をぐっと掴むわけですね」

「大胆・・・」

他人ひとの戦闘服コスチュームと尻を捕まえてなにを言っているんだ。東雲は慌てて立ち上がり、けしからん二人に向けて人差し指を突き出す。

「僕の趣味だと思わないでください！ これは研究所の人が用意してくれた？どんな服の下にでも着込める軽くて薄くて丈夫な戦闘服コスチューム？なんです！ そのジャージ、頬を赤らめない！」

「なんか超ナプキンのCMみたいなフレーズですね」

「あら、大胆・・・」

「うがー！ なんですかそのノリ！ その返し！ なんでエロ目線

なんですかあなたがたは！」

東雲が大声で叫ぶそばで、絹旗きぬはたと滝壺たきうが汚らわしいものを見るかのような目でひそひそ話をし始める。

次の瞬間、ボバツと不気味な音が静かな公園に響いた。

不健康的な白い光線が顔の横を通過して、ブランコを吹き飛ばす。その断面はどろどろに溶けて、オレンジ色に染まっていた。

「私を無視して下ネタとはイイ度胸ね。三回殺すことに決めました」

東雲は攻撃の主を見た。さきほどのお嬢様らしき少女。華麗に佇むその者は、両腕を広げて胸に飛び込んできなさいといったポーズを取っていた。

しかし、彼女の胸に飛びこんだら最後、カケラも残らない。

「なるほど。あなたがあの第四位でしたか」

東雲は立ち上がり、その不敵に笑っている少女を睨みつける。

「レベル5第四位？原子崩し？・・・！」
マルチタワー

「アハッ！ 強がるんじゃないやねえよ獲物オおお！」

狂笑。
マルチタワー
原子崩し、むぎのしずり麦野沈利の全身から光が迸る。はなそれが三本の光線となつて、東雲に突き進んだ。

特殊な電子線。状況に応じて？粒子？と？波形？の両方の性質を示す電子を、その中間の性質を示す？曖昧なままの電子？として固

定する能力。それが原子崩し。マルチタウナー

真っ白い光線のように見える特殊な電子線は、物体に当たっても？粒子？か？波形？の性質を選ぶことができず、？曖昧なままの電子？としてその場に留まろうとする。質量を持たない（限りなくゼロに近い）電子は疑似的な壁をつくり出し、高速のまま物体に叩きつけられることになる。しかも物体に衝突しても減速することなく金属であろうがなんだろうが貫いてしまうのだ。

わかりやすく言い換えると、原子崩しとはあらゆる物体を貫通し、溶解させるという防御不可能な光線を放つ能力である。

不気味な白光線のために、昼間のように明るくなった公園。光が薄れていく様を麦野は見つめていた。

そこには誰も立っていないはずだった。光線が敵を貫いたはずなのだから。

しかし、少女はそこに佇んでいた。なにも失うことなく、ほくそ笑んで。

「粒波機形高速砲でしたっけ。マルチタウナー原子崩しの能力の正式な分類」

東雲はゆらりと揺れ、急にその左腕をぱつと麦野の方へ向けた。

（まさかツツッ！）

麦野は即座に判断する。？曖昧なままの電子？を自分の正面に広く展開した。白光の壁が生まれ、東雲と麦野を遮断する。

次の瞬間、壁がなにかを受け止めた。光が迸ほとばしって、轟音を響かせる。？曖昧なままの電子？は、その場に留まろうとする性質上、銃弾も電撃もすべて受け止める絶対の壁となる。だがその壁が、自身の放つ不健康な白光に溶けるように、消えていく。

その向こう側に立っていたのは、東雲鏡。スキルジャンパーと呼

ばれる化物である。

「な・め・ん・じゃ・ねエえええええええ！」

麦野が咆哮する。ひとつに集束された白い光線が、ズバツと嫌な音を立てて東雲に突き進んだ。さきほどとは光線の集束度がまるで違う。生身の人間が食らえば、ほんとうに文字通り消え去ってしまう。

だが東雲は動揺していなかった。それどころか身動きひとつ取らない。

集束された光線は東雲に当たる前に跳ね返り、主人である麦野に噛みつこうとしていた。

気付いた麦野はまた壁を展開して、なんとか相殺する。？曖昧なままの電子？はズバアツという大きな音を生み出して、光に消えた。

「あ、うあ・・・」

麦野は声が出なかった。暗闇の向こうにただ立っているだけの少女は、格の違いを見せつけるように、笑っているのだ。

特殊な電子線。？粒子？や？波形？でない？曖昧なままの電子？。すべてを貫く原子崩し。

だからどうした。

あらゆる攻撃にベクトルが存在している時点で、敵うわけがない。

「イッパイ絶望していつてくださいな、第四位さん？」

自分の信念を貫き通すと決心する。

その瞬間、スキルジャンパーは学園都市最強になる。
アクセラレータ

6 (後書き)

備忘録：絹旗ぺろぺろ

7（前書き）

麦野さんマジ超外道。縦書き形式超推奨です。

麦野沈利は建物に身を隠していた。

前線で戦っているのは絹旗最愛で、その能力？オフェンスアーマー 窒素装甲？を利用して近接格闘に打って出ていた。東雲鏡は？しのめがみ 一方通行？のベクトル操作を展開して、馴れてくる子供をあしらうように遊んでいる。両者の間にはそれだけの力の差があった。

（クソ、クソ、クソ！ なんだよあの化物は！バケモン 多重能力デュアルスキルに加えて第一位の能力が使えるなんてもうすでにレベル6じゃねえのかよ！ そんなの聞いてねえっての・・・！）

麦野の原子崩しも呆気なく弾かれた。ベクトルという概念を利用しての限り一方通行の能力には勝てない。？粒子？だろうが？波形？だろうが？曖昧なままの電子？だろうが一方通行はそれにベクトルの概念を植え付けて反射してくる。質量がゼロに近い物質であっても一方通行の能力はそこにベクトルの概念を見出してしまっただ。

学園都市が誇る最高の演算能力を持つ頭脳と一方通行という能力が合わさった時、その人間は核兵器でも殺せない凶悪な化物となる。

（光や音つつー質量がないモンにまで平気でベクトル理論を応用する化物・・・とてもじゃねえが原子崩しは効かないか）

麦野は滝壺の方を睨み、首を振る。それを見た滝壺は肯き、ひとりで戦線を離脱した。

元々ここで必ず討ち取る必要があるわけではなかった。滝壺の？能力追跡？を利用できる状態にしておけばいい。書庫にも登録され

ていないスキルジャンパーのA I M拡散力場の情報はここで得た。
滝壺がいればいつでもスキルジャンパーを追えるということなのだ。

対策を練らなければならない。少なくとも麦野ひとりで勝てる相手ではない。敵はこちらの攻撃をすべて跳ね返してくるのだ。攻撃が通らないのでは、勝ち目などあるはずがない。

攻略のヒント。どこかにあるはずだ。アクセラレータ？一方通行？という最悪の能力を使っているが、ヤツは一方通行ではない。攻略の糸口はそこにあると麦野は睨んでいる。

たとえば、その演算能力。アクセラレータ？一方通行？という能力をレベル5クラスで用いるには膨大な情報量処理する脳が必要になってくる。
はたしてあの女がそれだけの脳を持っているかどうか。

（絹旗が瞬殺されてないところを見ると、使いこなせてないっぽいんだよねえ・・・）

麦野はにやりと笑う。懷から、ペンダントのようなものを取り出した。円筒型の金属には無数の穴が開いていて、首から提げるにしては短いチェーンが付いている。それを握り締め、じっと息を潜める。

絹旗が東雲と格闘を続けていた。オフエンスアーマー室素装甲があるとは言え、ヤツが足で地面を踏みつけるだけで吹っ飛ばされるのだ。その余波で宙に浮いた石ころを軽く手で払うだけで、その石ころは音速を超えて自分の喉元に襲いかかる。こちらが二〇キロ級のアスファルトの塊を投げつけても、涼しい顔で反射される。勝てるわけがない。そもそも勝負をしていい次元の敵ではないのだ。

能力には得手不得手がある。近接戦闘、接近戦が得意な絹旗にとアクセラレータって一方通行のような無敵の盾は相性が悪い。いや、一方通行に対

して相性の良い能力など存在するのだろうか。そう思えるくらい、目の前の敵は強かった。

互いの立ち位置が数度入れ替わる。東雲は反射するまでもないといった感じでひらりと絹旗の攻撃を避けるのだ。それで大きく空振りした絹旗の背後に回り込み、額に翳した左手からバチバチと青白い光を生み、雷撃の槍を放つ。

（？超電磁砲^{レールガン}？の・・・ッ！）

瞬時に練り上げられる一〇億ボルトの雷撃。絹旗の室素装甲^{オフエンスアーモ}は物理攻撃に強いだけで、雷撃まで防げるわけではなかった。

絹旗はその場で踏み止まるうとはせず、勢いよく前転する形で地面を五メートルほど転がり続けた。雷撃をなんとかかわして目の前の桁違いの化物と対峙する。

（勝てない・・・第一位と第三位が合体して誰が勝てるってんですか）

むしろよく生きている、と絹旗は自分を褒めた。攻撃をすれば跳ね返され、距離を取れば音速を超える砲弾が放たれる。物理攻撃が駄目なら天然の雷に匹敵する雷撃を繰り出してくる。

化物め、と絹旗は正面ではほ笑むスキルジャンパーを睨みつけた。絹旗の背後の建物には、麦野が隠れている。

（麦野さんは助けに・・・来てくれるわけありませんよね。孤立無援ってことですかア！）

レベル5と共闘しても勝つという次元には至らない。それでもこのままひとりで戦えば殺される。次の一手で死ぬ可能性もあった。絹旗は能力を振り絞る。

死にたくないなら殺すしかない。

学園都市の闇で生きてきた絹旗の身に沁みた、唯一にして絶対のルール。だから、絹旗は死力を尽くして目の前の敵に挑む。

「見ろよ化物、超本気でぶっ潰すから覚悟しやがれ・・・！」

通常時は体表の数センチしか効果範囲のない窒素装甲オフエンスアーマーが、広がっていく。周りの空気が風となって彼女に向かって吹き込んでいた。東雲はへえと笑う。馬鹿にしたのではない。感嘆の意を表明したのだ。

空気中の七八パーセントを占める窒素を操る？窒素装甲？。急激な窒素の圧縮によって風が巻き起こり、彼女を中心に渦巻いていた。制服が音を立ててはためくなか、絹旗最愛は拳を握り締める。

全力全開。彼女を包むような窒素の壁。圧縮されることによって高温を宿すその装甲を纏いまと、絹旗最愛は渾身の一撃をぶつけるために一歩踏み出した。

生半可な手では対応できない。全身全霊で叩き潰す。東雲が嬉しそうに笑って、その左手を額に翳かざした。学園都市そのものと称された彼女がとっておきに選んだのは、超電磁砲レールガン。

東雲が絹旗にすべての意識を注いだその時、麦野は動いた。

麦野がなにかを投げた。自分の帯電の光で煌めきりいているなにかに、東雲は気付いた。

息を飲む。麦野が動いたのはそれだけではなかった。すでにこちらに向けて両腕を向けているのだ。白く不健康な光が集束されている。

待て。この射線上には絹旗がいる。絹旗は麦野の行動に気付いて

いない。動きを止める気配が微塵もない。というよりも、絹旗は全力を振り絞っている。途中で動きを止められなかった。自分がベクトル反射を使つたとしても、目の前の絹旗は光線に巻き込まれる。東雲の眼に映る、暗闇に燈る^{とも}白熱灯のような輝き。喉の奥がひりついた。

「消えちまいなアあああああああああ！」

麦野の叫び声。その時初めて、絹旗は気付いた。背後を見なくても状況を理解したらしい。あるいは、東雲の瞳に映る麦野の狂乱の笑みを見てしまったのかもしれない。とにかく全力を振り絞って東雲を殺そうと息巻いていた彼女の顔から、表情が失せた。

え、という短い疑問の声。避けようとすることもできない。慣性のままに東雲を目指して突き進む自分の身体。背後から飛んでくるのは鉛の銃弾ではない。すべてを貫く電子の光線だ。

その絹旗の正面にいた東雲は、まともにその絶望の表情を見てしまった。信賴していたはずの仲間に裏切られた事実。それも、全力を尽くそうとした時に。今この瞬間だけは絹旗最愛はただの中学生の少女に戻っていた。殺気が消え、陰の取れた顔をしていたのだ。

東雲は一步踏み出した。光っていたはずの左手は、輝きを失っていた。

その右腕を突き出し、絹旗に向かって躍り出る。

（あ、こ、ないで・・・来るなアあああああ！）

絹旗は心のなかで訴える。後ろから撃たれ前から殴られる。恐かったのだ。全力を削がれた絹旗には東雲にあらがう力など毛ほども

ない。なすすべもなく殺される運命しかない。

引きずられるように、二人は吸い寄せられていく。同時に背後からズバッという絹旗の命を刈り取る音が響く。

「——安心して」

聞き間違いかと思った。優しいメロディを紡ぐ目の前の敵。絹旗と東雲が交錯する。

オフエンスアーマー
室素装甲で固められた絹旗の拳は東雲の脇腹をかすり、骨にヒビが入る嫌な音が響いた。

東雲の右腕は絹旗の身体を避けるようにして、そのまますれ違って二人は立ち位置を変える。絹旗は背後に流れて行く東雲から目が離せなかった。

その東雲の前に現れる五本の白光。そのうちのひとつを、東雲はその右手で弾いた。

絹旗は直感した。自分は、この敵に救われたのだと。

「まだまだまだアああああ！ 油断すんなよド畜生オおおおおおおお！」

麦野の声に、絹旗はびくつと震える。麦野の視線の先に、ソレはあった。

ペンダントのような物体。複数の穴が開いていて不気味な白色を宿しながら発光していた。まさかと絹旗が思うと同時に、それからブバァッというあの絶望の音色が奏でられる。

（原子崩しを拡散させる道具——）
メルトダウンナ

絹旗が東雲に声をかける時間すらなかった。二人はまだ着地でできていないのだ。ペンダントは東雲の足元に転がっている。五本に光線を撃ち分けたのもこの秘密兵器を悟らせないためだった。

小規模に拡散する？曖昧なままの電子？は周りのすべてを蜂の巣にする。ショットガンのように広範囲に細い光線を放ち、それらは速度を維持したまま高速で叩きつけられるため、金属を溶解させ人体をボロ雑巾に変えるだろう。そんな小さな爆弾が東雲の真下で光を集束し、不気味に瞬^{またた}いている。

絹旗は叫んだ。なんと叫んだのかは自分でもよくわからない。なにかを叫んだと思った次の瞬間に、小さな爆弾はあの絶望の音色を奏でて、光を迸^{はとばし}らせていた。

7（後書き）

備忘録：むぎのんはいつも通り 絹旗ぺちよぺちよ

8（前書き）

引き続き東雲VS麦野。縦書き形式推奨です。

自分が地に倒れ伏せていると気付いたのは光が収まってからだつた。着地の衝撃はなく、もっと言えばさきほどの場所でもない。あの原子崩し特製の小型爆弾から少し離れている。

絹旗は即座に思う。スキルジャンパーの座標移動。あのままでは絹旗が原子崩しに巻き込まれると判断した東雲は、彼女を逃がすために座標移動を使った。

なぜ、と絹旗は上体を起こしながら念じる。

誰も死なない結末。ほんとうにそんなものを見ることができると思っているのか。本気でそう思っているのか。このどうしようもない真つ暗闇のなかで、憐れみも弔いも受けられないこの世界で、そんな幻想を抱き続けるのか。

砂に塗れた絹旗はくしゃっと潰れた表情で光の中心に目を向けた。

スキルジャンパーは学園都市最強になれるはずだった。

ベクトル反射という無敵の盾を持つているはずだった。

絹旗最愛はどこかでスキルジャンパーが光線を弾き返し、何食わぬ顔で佇んでいることを望んでいた。いや、絹旗が望むと望むまいとベクトルを操れる彼女はそうあるはずだった。

不健康な白い光は闇夜に吞まれるように薄れていき、その爆心地にいる人影をはっきりさせ始める。

その人影はちゃんと立っていた。蜂の巣になった人間は、立つこともできない。

絹旗は内心ほっとしていた。やはりベクトル反射は厄介だな、とも思い始めていた。自分を救うだけの余裕があるのだ。きっと原子崩しも防いでしまったのだろう。

なにかがおかしい。

絹旗はその人影に気味悪さを感じていた。紛れもなく人だ。人の影なのだ。なのになぜかどうしようもなく不気味に思ってしまう。違和感がある。

気付いたのは、攻撃を仕掛けた麦野が狂喜して笑い出した時だった。

人影には、足りないものがあつた。

脚が、一本しかない。

唐傘お化けのように、人影は一本足でそこに立ち尽くしていた。

「な・・・そんな・・・どうして・・・」

絹旗は絶句した。光は薄れ、麦野の満面の笑みまで見えるほど視界がクリアになった。やはり東雲は左脚の太腿から先を失って、そこに立っていた。器用だと思うほど、背筋を伸ばして立っている。

「勝ったぞ！ なにが多重能力だ、なにがレベル6だ！ 調子に乗るんじゃないっての！ しよせんデメエなんざ相手になんねエんだよオオオオ！」

麦野は腹の底から笑っていた。対する東雲は決して面を上げようとしな。報道陣の前ですべての罪に謝罪する凶悪犯のようにも見ええた。

麦野は正義で東雲は悪。麦野の高笑いはそう決めつけているのだ。

絹旗の目に、熱いものが湧きだしてくる。

この人はたった一瞬だけでも、自分の恩人だった。優しい言葉で助けてくれた。麦野に殺されるところだったのに、身を挺して救っ

てくれたのだ。

麦野がそういう性格なのは知っていた。平気で人を見殺しにするし、逆上すると残虐なところが表に出る。いずれ麦野に背中を撃たれることも？アイテム？として生きる上で避けられないことだろうと思っていた。その最悪の事態はなるだけ避けようと努力はした。

しかしこの土壇場で、麦野は絹旗をきった。絹旗を犠牲にしてもスキルジャンパーを殺すことを優先した。絹旗はスキルジャンパーにこだわるであろう麦野の底を見抜けなかったのだ。

けれど、そんな自分に救いの手を差し延べる存在がいた。そんなイレギュラーを絹旗は考えたことがない。闇に浸っていた自分に考える余裕などなかった。

死にたくないなら殺すしかない。それを信条に生き延びてきた。だが、目の前の敵は、殺しに來た相手を救った。誰も死なない結末を求めて、手を差し延べた。

今、この状況で、自分ははたして笑うべきなのだろうか。宿敵を討ったと言って小躍りしてもいいのか。それとも、泣いてしまっても、いいのだろうか。

よくわからない。けれど、スキルジャンパーの痛ましい姿を見ると、熱いものが溢れ出すのを止められなかった。止めたいとも思わなかった。

絹旗の頬を一筋の滴が伝う。それを見た麦野が、露骨に舌打ちする。

「泣くんじゃねえクソガキ。こんな化物が生きてる方が問題でしょー？ 駆除してやったんだから感謝して欲しいくらいだし。おら、？けんけんぱ？ができなくなった化物なんかさっさと片付けて帰るぞー」

化物。どちらが化物なのだ。絹旗は眉を寄せ、声を押し殺した。それでも嗚咽おえつが溢れてくる。

麦野が勝利を確信したように笑いながら絹旗や東雲のところに歩んでくる。携帯電話を取り出して、どこかへ掛けようという素振りだった。

「フレンドに連絡入れて、遺体処理の手筈調えさせよー。あとは散々コケにしてくれたお礼参りっことでサンドバッグにでも——つて、オイ」

麦野の声が野太くなる。信じられない、という表情をしていた。

「……なんで笑ってやがるんだ、デメエは」

片脚を失った彼女は、ふふと不敵に笑っていたのだ。

絹旗は感じていた。東雲にこびりつく違和感を。

人は片脚を失って、ここまで真っ直ぐと立っていられるのか。

そしてもうひとつ気になっているのは、血。

左脚の付け根から血が一滴も垂れていないのは、？曖昧なままの電子？が傷口を焼き切ってしまったからだろう。だが、太腿から先が失われたのだ。かなりの血液が持つて行かれたことになる。人間の片脚は全体重の十六パーセント前後と言われていて、血液は全体の十五パーセント以上を失うと身体に影響を出し始める。

つまり、片脚を失ってしまえば、たとえ傷口が瞬時に溶接されてそれ以上失血することはなくとも、もう片方の脚で平然と立っていられるような状態ではなくなるということだ。

加えて、単純に痛みと熱で意識が朦朧とするだろうし、あの一瞬で脳内麻薬が多量に分泌されていればそれほど時を置かずして発狂しているだろう。なににせよ、平然と笑ってなどいられないのである。

そう。ほんとうに片脚を失ってれば。

「あア、馬鹿馬鹿しい。なんですかその悪趣味な鬱憤晴らしは？」

笑いを堪えきれない、と言った感じで東雲は脇のホルダーに挿していた拳銃を抜いた。麦野と絹旗は、言葉を発することができなかった。

「ダメダメ。勝利宣言はきっちり殺してからじゃないとダメじゃないですか。ンねっ？」

心底見下した目。侮蔑という感情を体現したかのような表情。目も口もひしゃげた半月型をしている。そんな彼女に銃口を向けられて、麦野は動くことができない。

どうして、こいつは平気なんだ。片脚を失っているんだぞ。

そんな心の声に耳を澄ませ、うんうんと大きく肯いた東雲がその左手に拳銃を構えたまま、失ったはずの左脚に右手を翳した。

その右手がゆっくりと動いたかと思うと、その空間が脚の形をかたどってブレる。次の瞬間には失ったはずの脚が復活した。麦野がひっと喉の奥で声を洩らす。

「あら不思議。なかったはずの左脚が復活しちゃいましたー。さて、なぜでしょう？」

麦野の脳内を様々な情報が駆け巡る。高位の肉体再生系能力か。いや、こんな芸当ができるはずがない。脚を丸ごと即座に修復するなど。わからない。わからない。焦りが汗という形で表に出る。東

雲はそんな麦野を見れてたいそうご満悦だった。

「あれー？ もつと解答者に徹してくださいよう。だからあなたはいつまでも第四位なんです」

その時になつて麦野は己の置かれていた立場を理解した。

片脚を失い戦意喪失したスキルジャンパーを追いつめた。あとはいたぶり殺すだけだと、安堵さえ覚えていた。第二位にも殺せなかったスキルジャンパーを足蹴にできると思つて、傍に寄つてしまつた。

「？ 光学操作？ つて、知ってますか？ 地味なんですけど、使いようによつては強いんですね」

マルチタワー

原子崩しは威力が大きい分、安定させるための溜めが必要になる。なければ使用者である麦野自身をも吹き飛ばす危険がある能力なのだ。原子崩しは本来後方支援に特化した能力。絹旗のように誰かが戦っている時に、援護する形で放つ光線。？ 曖昧なままの電子？ を利用しているので炎撃や電撃と違い空气中に放散することもなく、風に影響される心配がないため、普通の銃よりもよっぽど狙いを定めやすい。狙撃手のような役割が原子崩しにとって最も有効的だった。

マルチタワー

その原子崩しは、銃を構える敵の目の前に突つ立っている。？ 曖昧なままの電子？ の壁を生み出すような時間もない。第三位の超電磁砲と違って瞬時に練り上げられる能力ではないのだ。

肌に粟が立つ。麦野は目の前で見下してくる敵を見据え、乾いた笑いを溢した。

「おめでとございます！ 不正解者にはもれなく鉛玉をプレゼン

ト
「

銃声が静まりかえった夜の第一三学区に響き渡った。

8（後書き）

備忘録：絹旗なでなで

9（前書き）

短いので二話連続投稿です。縦書き形式推奨。

村叢影夜は漆黒に身を包んでいる。背に刃の長い刀を携え、口元を布で隠した。

その様を隣で見つめていた賀古が、ほほ笑んだ。

「頼みましたわ、影夜ちゃん」

村叢は小さく肯く。いよいよ、彼女は動き出す。その時が来たのだ。

賀古は携帯電話の液晶サイズのレーダーを見つめながら、息を吐く。

「たったひとりを殺すために集結しつつあるレベル5達。ひどい話があったものですわ」

「これで、ほんとうにあの子を救えるんですね？」

「どっちにしろ今助けに行かないと、彼女は殺されますわ。彼女は一対一においてのみ最強無敵であるだけで、レベル5が複数となると呆気なく殺されるでしょう？」

東雲しのぶの口から直接聞いた話だ。本人がそう言うのだから、きっとそうなのだろう。

賀古の計画の全貌を、村叢は知らない。疑うこともしなかったが、レベル5が集結する様を見ていると不安になってくる。滝壺たきつぼ理后りこうもいたのだ。？能力追跡？を使われればいつまでも追われるということになる。賀古自身もそれがまずいことだと話していたではないか。

なのに、賀古は自分を動かさなかった。東雲に連絡も入れなかった。このレベル5の集結は避けようと思えば避けられたはずなのだ。

「ソーニャ。いつてきます」

「いつてらっしゃい」

につこりとほほ笑む彼女を後に、窓を開く。そこから、飛びだした。

夜の第一五学区。ネオン街を駆け抜けながら、村叢は思う。

たとえ賀古の計画が今の段階で失敗していたとしても、助けてみせる。

東雲鏡は、村叢影夜の親友だから。

麦野沈利は死を覚悟した。

耳に入る一発の銃声。

その凶弾は寸分の狂いもなく自分のはらわたを食い散らし、命を枯らせるだろう。

麦野は目を閉じることさえできなかった。その拳銃がブローバツク動作を行っている。火花が散り、鉛弾が真っ直ぐと自分に向かってくる。ところまで彼女は見ていた。

死ぬ。この弾を受ければ自分は死ぬ。麦野は生まれて初めて死を意識した。簡単に命を奪える立場であった。超絶な能力者だったのだ。殺すことは意識しても殺されることなど考えたことがなかった。奪う側から奪われる側に追いやられた今の状況を、麦野はまだ信じ

られなかった。

助けてと、呟いた気がする。この銃弾から、この化物から誰か助けてくれ。

傲慢だった。絹旗^{きぬはた}を犠牲にしようとしたのだ。他人を平気で見下すし、見殺しにする。仲間であろうと利用できるものはすべて利用する。狡猾^{こつかつ}で残虐な、どうしようもない人間の屑^{くず}だった。

それでも、そんな屑でどうしようもない彼女に手を差し延べる者がいた。

銃声が闇夜を響く。麦野のすべてを奪い去る、一発の凶弾。

バシイという音。銃弾で貫かれる衝撃はいつまでもやってこない。麦野は、目の前に広がっている光景を呆然と見つめていた。

人のいなくなった夜の公園。辺りはことごとく原子崩^{マルチタウナー}しに溶解され、地面にも痛々しい戦闘の跡が残っている。その公園の真ん中に立っているスキルジャンパーと絹旗最愛。麦野を庇うように目の前に立っている絹旗の姿。麦野は目を見開いたまま、一歩だけ後ずさった。

？ 窒素装甲^{オフエンスアーマー}？。 空気中の窒素を操ることで銃弾をも受け止めることができる能力。

絹旗は、東雲の凶弾から麦野を守った。

「な、んで・・・」

麦野は聞こえるかわからないほど小さい声で尋ねた。絹旗は背を向けたままで、振り返ることをしない。敵はまだ正面にいるからだ。そのあまりにも小さすぎる背中を麦野は見つめていた。スキルジャンパーとともに殺してやると、原子崩^{マルチタウナー}しで撃ち抜こうとした背中だ。それを理解できていないほど、絹旗は白痴^{はくち}ではない。

麦野は、絹旗を殺そうとした。それでも絹旗は麦野に救いの手を

差し延べた。

絹旗が誰も死なない結末を望んだから。

「麦野さん。なんで、とか超くだらねエこと聞いてるんじゃないですよ」

絹旗は背後で呆けている麦野に強い口調で言い放った。

「あなたは私の仲間でしょオが！ 私達は？アイテム？！ 誰ひとり欠けたって私は超許しませんからね！」

絹旗は、物心ついた頃から学園都市の闇を這いずり回ってきた。非人道的な研究に付き合わされたことがある。？プロデューズ？の実験体になったこともある。そうしてやつの思いで手に入れた能力が、この？オフエンスアーマー 窒素装甲？。一方通行の無意識下における能力統制の仕組みを解明しようとし、絹旗はその実験体となった。そのおかげで絹旗の窒素装甲は体表数センチだが自動防御の特性を得る。意識を失ってしようと、脳が機能している限り能力は失われない。

そこまでして、ここにいます。？アイテム？という暗部組織のひとつに身を置いている。

居心地の悪くない？アイテム？を、絹旗は結構気に入っていた。外道で逆上すると手がつけられない化物だけど、普段は気の良いお姉さんをしている麦野沈利。サバ缶とカレーのことはかり口にする歩く危険物所持犯だけど、なんだかんだで仲間のことを気にかけて相談に乗るフレンダ。ぼーっとしている電波女だけど皆を和ませる滝壺理后。そんな？アイテム？が、好きなのだ。

闇を生きてきた自分にとって、恵まれ過ぎた環境だと思っていた。闇で受けてきた仕打ちは決して誇れることではないけれど、ここに

辿り着くためのものだ。絹旗は？アイテム？として行動している今の自分を失いたくない。

誰ひとり欠けたって？アイテム？ではなくなる。絹旗は、もう一度拳を握る。自分を殺そうとする最低最悪な大切な者くそやろうを守るために。

麦野はなにも答えなかった。自分の両手に視線を落とし、震えているだけだった。それがどういう意味を示すのか、絹旗は考えない。今はただ目の前に佇んでいる化物じみた敵を倒す。それだけだ。

「普通に威勢は十分ですが、僕に敵うとまだ本気で思ってるんですか？」

東雲は出会った時の麦野がしていたように、腕を広げて堂々と立っていた。

「僕の扱える能力はひとつや二つではありません。書庫バンクに存在する能力のほとんどを掌握しています。僕は学園都市そのもの。レベル5だろうと、相手にならないのは条理」

事実だった。東雲はすでに多重能力デュアルスキルという枠組みすら超えている。ありとあらゆる能力を自分の力として使役する規格外。どういう理屈で、どんな方法を使ってそれを可能にしているのかはわからない。だが、学園都市に七人しかいないレベル5の能力さえも自分のものにできる彼女を相手にできる者は、この世に存在しない。

そう、この世に存在しないだけである。

「面白え条理があるもんだな。んじゃちょっとその条理を不条理に変えてみるか」

声。聞こえたと思った瞬間に、破裂するような凄まじい轟音が大空で発生し、嵐にも匹敵する暴風が巻き起こって公園にあるすべてを外側へ吹き飛ばした。

東雲だけでなく絹旗や麦野も、同時に空を見上げた。

呼吸ができない。圧巻する存在。絹旗は剋目かつめくして、その存在を見つめていた。

漆黒の闇夜に浮かぶ、天使を想わせる純白の翼。その姿は乾いた血が変色したような深い赤色を燈っていて、月を連想させる金色の髪を振り散らしていた。

？未元物質ダークマター？。この世に存在しない新物質を生み出すことで既存の定理や常識をぶち壊す者。

ぐにやりとした笑みを浮かべ、彼は冷たく言い放つ。

「悪いなあ。こっから先は俺の時間だ。せいぜい愉しんでくれよな」

その腕に抱かれている幼い子供の目が輝き始める。

背にある翼がはためいた瞬間、すべてが消え失せた。

9（後書き）

備忘録：垣根きた！これでかつる！

10（前書き）

激熱な展開！縦書き形式推奨中です！

学園都市は超能力を解明したと声高らかに叫んでいるが、実際そんなことはない。

そもそも超能力とは？バーソナルリアリテイ自分だけの現実？から生み出される常識を覆す力のことである。常識を覆す力の存在は量子力学や『シュレディンガーの猫』の理論で立証されているが、そのおかしなものを再び常識のうちに戻そうというのが無理な話なのだ。学園都市でも七人しかいないレベル5に関しては、もはや「そうなるのだから仕方ない」という論調が通説である。

たとえば第一位の？マルチタウナー一方通行？や第三位の？アクセラレータ超電磁砲？、第四位の？メルトダウン原子崩し？などは比較的物理学の観点から論じやすいが、第二位の？ダークマター未元物質？や第五位の？メンタルアウト心理掌握？を完璧な形で論じるのは難しいのが現状である。

？ダークマター未元物質？は完全にこの世界に存在しない新物質を生み出すという、原理の説明ができない能力であるし、？メンタルアウト心理掌握？は体内電気や体温から相手の内面（心）を読み取り、また相手に影響を与えるのではないかと科学面から研究されているが、根本的な解明には至っていない。

レベル5の研究は難航しているという話だ。どこまでほんとうかは明らかではないが。

その解明困難なレベル5達のなかでもひと際輝いているのが、この第七位である。

そぎいたくんは削板軍覇。根性を語らせたら右に出る者がいない熱血漢である。

「しっかしスキル……スキル……なんとかか。いったいどんなすげえヤツなのかね」

削板は頭をがしがし掻き^{むし}つていた。ビルの屋上で風を受ける。真^まっ白の制服が風に靡^{なび}いてはためいていた。

目指すは第一三学区。さっきの少女はわりとあっさりと教えてくれた。ほんとうか嘘かは、今からたしかめに行くしかない。

その第一三学区の方で、なにか巨大な白いものが浮^うかんでいる。漆黒の町と対照的なそれを削板は目の上に手を翳^{かざ}すようにして、じっと見つめていた。

「ありやなんだ？ 能力者の仕業か？」

スキルなんちゃらかもしれない、と削板は思う。あの白い物体を頼りに行けば会えるだろう。削板が前傾姿勢になり、飛びだす構えを見せる。

刹那、その白い物体が町を攻撃し始めた。音は響いてこないが、間違いなくあらゆるものを吹き飛ばしているだろう。残骸や瓦礫が地上数十メートルまで巻き上がったいた。

「・・・待て。一三学区って児童施設が多いんじゃないか？ かーッ！ 無関係な子供達の楽園で暴れるなんて怪獣かよ！ 根性叩き直してやるしかねえな！ 待ってやがれスキルなんとか！」

削板はそう叫ぶなり、飛びだした。音速の二倍を超える速度で夜空へ飛びだした彼は、弾丸のように一直線に光を放つ交戦区域を目指す。

ビルの屋上には人の足型に削り取られたような跡が残っていた。

すべてが消え失せたと言っている。

耳をつんざく爆音もない。衝撃波というものもないように思えた。ただ、垣根帝督を中心半径三〇メートルほどが消滅している。

公園など跡形もなく消し飛んだ。小規模のクレーターができていて、巨大な怪獣の顎で齧り取られたような傷跡を残していた。

？未元物質？こと垣根帝督。学園都市第二位のレベル5。その腕でお姫様のように抱かれています乗っ取りが、クレーターを見てつまらなさそうに唇を尖らせていた。

「かきね、やりすぎ」

「イーんだよこんぐらい派手にやっても。それにこんな挨拶代わりの一発で死んじまうよーな相手だったらお前なんか連れてこねえっつの」

垣根は辺りを見回して、目を細める。

（ヤツはともかく、第四位とガキの屍体もねえのはどういうことだ？ あの距離で逃げ切れるとは思えねえが）

垣根はおっと、と笑う。背後に浮かんでいるその存在に気付いたからだ。

「どーやら無傷とはいかなかったみてえだな」

東雲は全身から血を流していた。息が上がり、その表情には苦悶が見える。

「あの二人を助けたりするから、そんな傷を負うんだよ、ボケナス」

東雲は左腕が上がらないという感じだった。肩のところからだらんとぶら下げている。その左目も血が入ったのか開いていないし、満身創痍だ。

「けど、俺はもう油断しねえ。全力でテメエを潰す」

？光学操作？クリアコントロールで引けを取った。この姿も偽りのものかもしれない。

だから手を抜かない。垣根は背中にある翼に意識を傾けた。

オーバークロック乗っ取りの目がまた光り出す。ながてんじょうき長点上機学園の負の遺産。

メンタルアウト心理掌握の強化個体よりも後に生みだされた、人の形をした人ではない者。

闇に生まれ闇に消えるはずの存在が、垣根の腕のなかでその能力を揮う。

東雲の目の前に広がる白い翼。それが、どんどんと大きくなっていく。血の気が引いた。

「あの二人を逃がしたのは？座標移動？か？ムーブポイント いや、違うよな。だ

ったらテメエ自身はモロに食らってるはずだ。ムーブポイント座標移動はトラウマ

がどうとかで自身の座標移動ができない。テメエが自分で言ったこ

とだぜ。スキルジャンパー？能力写し？コピーだつてな。テメエが写してるのはその能力者が揮っている力でその能力そのものじゃねえ」

垣根はあの潰れて歪んだ笑みを浮かべる。東雲は唇を噛み締めた。

「そー怒んなつて。俺だつて苦労して得た情報なんだからよ。さっきの一撃を避ける時、レポート一般的な？空間移動？レポートを使つたんだろ？テメエは自分自身を飛ばすためには普通の空間移動じゃないといけな

いと。なら、こうすりゃいい」

東雲は震えていた。失血で震えているのではない。あまりにも想像を超える光景を前に、恐怖しているからだった。

白銀に染まっついていく異物でかたどられた翼は、瞬く間に一〇〇メートルを軽く超える大きさを有していた。

「空間移動の限界距離ってどんくらいだ？」

その声が聞こえた時には、一〇〇メートル超えた常識を無視する物体が横薙ぎに自分を襲ってくる。物体の運動法則を無視したそれは、問答無用で東雲の身体を捉えた。

「空間障壁？を展開した。それでも骨が折れるほどの衝撃を生み出し、東雲が血を吐く。」

すべての物体からの物理的干渉を防ぐはずの空間障壁が突破された。未元物質の力が強まっているのもあるが、なにより東雲が手負いだった。受け切れるだけの風の膜を展開することができなかったのだろう。上空にいた東雲は一キロメートル以上をノーバウンドで弾き飛ばされ、重力と慣性に従って弓なりに落下していく。

かすかに残る力を振り絞って再度風の膜を展開し、地上への激突を避けた。だが、受け身も取れない状態で背中から着地し、肺に残る空気を吐き出す。

座標移動の限界距離は八〇〇メートルを超えるが、一般的な空間移動の限界値は八〇メートル前後だった。つまりあの白銀に煌めく巨大な翼から空間移動能力を用いて逃げることはできない。

座標移動は、垣根が言った通り能力者本人のトラウマが原因で自身の転移が困難であったため、東雲は写しとることができなかった。座標移動で自身の移動が可能なら、移動するのにただの空間移動を連発する必要などないのだ。

全身の骨が砕かれたような痛みが襲ってくる。呼吸をまともにできない東雲は無事な右手で自分の胸を押さえ、能力を発動する。肉トリバース体再生の応用だ。損傷が激しく集中もできない現状では肺の活動不全を正常に戻すくらいのことしかできないが、なにもしないよりはマシだろう。

呼吸を取り戻す。気管に詰まっていた血もすべて吐き出した。左目は見えていないし、左腕も持ちあがらない。左半身は使い物にならないと思った方がよい。

アレはいつたいなんだ。タークマター未元物質の有効射程距離はせいぜい二、三〇メートルのはずだ。どう見ても一〇〇メートルを超えている。まさか秘めたる力を隠し持っていたのか。それならば第七学区の襲撃で見せなかった理由がわからない。

あの白銀の翼だけはベクトル反射が有効ではない。東雲は一方通行イクタという能力を真似るだけであって、新たな解析と応用ができるわけではないのだ。それだけの演算能力が備わっていない。一方通行アクセラレータ本人ならば未元物質の解析を行い、その底を探り、自分の舞台に引きずり出すかもしれない。東雲は違う。彼女はただ真似をするしか芸のない存在。新たななにかを生み出すことはできないのだ。

東雲はなんとか立ち上がり、上空に浮かぶ敵の姿を睨み据える。

（一対一なら負けるはずなんですけどね・・・ツリーダイアグラム樹形図の設計者の演算ミス？ いや・・・）

東雲の右目に映るのは、抱かれた正体不明の子供。昼に戦った時にはいなかった存在だ。

（アレが秘密を握ってそうだけど・・・この状況はマズいな）

垣根は周りの被害などおかまいなしに、その一〇〇メートルの巨大な鞭を振るう。辺りの建物がまとめて消え去った。未元物質ダークマターが濃すぎるのか、もはやこの世に存在しない音を発している。だがそれは人間の耳には聞こえない。そのせいでまるで空間が見えないなにかに齧かじり取られるように吹き飛ぶ。建物が崩れるガラガラという音だけが、その後に響いた。

「レベル6なんかどうでもいい。ただテメエをぶち殺せりや、それでいい」

垣根は二本目の巨大な翼を生み出す。五〇メートルほどだ。それが二本の鞭のようにしなって、東雲を攻撃する。東雲は雄叫びをあげながら能力を展開、大空へ飛びだした。彼女のいたところを白銀の物体が通過し、すべてを消し去った。

東雲は止まらぬ血を拭うこともなく、正面の怪物を見つめていた。

「・・・チツ。なんだよ、テメエ。そんな状態でもまだ被害を抑えようとか考えてんのか」

垣根はつまらなさそうに唾を吐く。東雲の眼光は鋭かった。

「たしかにテメエがいりゃ地上は荒原になっちまうからな」

低い声は、聞く者に絶対の恐怖を与える。

「だがよ、心優しいフリをしたってテメエが巻き込んだのは事実だ。ここにいる時点でテメエが巻き込んだも同然なんだ。それなのにいかにも正義の味方面して敵を救って被害を抑えようだ？ ナメてんじゃねえよ。ナメんじゃねえぞクツソタレがあああああああああああああ！」

垣根帝督の背後にある翼が、ブワツと嫌な音を立てた。彼の唸り声に合わせてどの翼も肥大化していく。一〇〇メートルどころではない。数百メートルに達した六枚の巨大な翼は、それぞれが意思を持ったように蠢き始める。

「なにをする気・・・」

「一般人を巻き込まない。子供を狙わない。被害は抑える。そんなくだらねえもんがこの世の条理って言うなら、俺がぶっ壊す。テメエごと、ぶっ壊す」

東雲は瞬くことができなかった。

六本の大き過ぎる鞭はしなり、東雲とはまったく関係ない場所に向かつて突き進む。児童施設、寮、その他すべての建物をおかまになしに鞭は薙ぎ払っている。

垣根は高らかに笑った。

「不条理を愉しめ、心優しい化物」

惨劇。

夜の第一三学区は人が少ないと言っても、寮やアパートに人はいるのだ。公園はすでに跡形もなく消し飛んでいて、今まさに六枚の翼は東雲に関係なく虐殺を繰り返している。その異物はなんの物音も立てず、すべてを刈り取っていく。

自分のせいで、こんなことに。東雲は口をぱくぱくと開閉したまま、町の最期を見つめていた。

「ねーかきね。これじゃなんにもみえないよ。もつとちかくでみた
い」

「ガキの死体なんて見たってつまんねえよ。今から最高の解体シヨ
ーを見せてやるから待ってろ」

垣根はぐにやりとした笑みを浮かべる。乗っ取りはきやつきやと
笑っていた。

「まずはアシだよー。それからウデ。アタマはさいご。ねじりきつ
てほしいなー。あのブチブチブチっておとがすきー」

「はん。人は昆虫じゃねえんだ。そんな簡単にねじ切れるかよ」

「ふふーん、それがいいといけるんだー。アタマを×××につつ
こむのもみたいなあ」

「筋肉が弛ゆるんでたって無理じゃねえの。どーでもいいや、さつさと
終わらせようぜ」

垣根が言つと乗っ取りは不満いっぱいな表情のまま、目を光らせる。
六本の巨大な白蛇はさらに凶暴さを増し、静かに漂う目の前の
獲物目掛けて、その牙を剥いて襲いかかる。

今の東雲にソレを防ぐ手はない。一方通行は未元物質を完全に跳
ね返すことができないし、空風障壁エアーフロックで和らげたとしても致命傷にな
るのは明白だった。

東雲は迫りくる白銀の邪悪を見つめ、諦念の笑みを浮かべる。

（第二位にやられるなんて・・・まだまだ僕も甘かったか。ごめん
ね、お兄ちゃん・・・）

そして残された右目を閉じる。すべてを終わらせる攻撃が、繰り出される。

ドゴオ！ という物凄い音が鳴り響く。それも東雲のすぐ傍で、だ。

一向に白蛇の牙が身に突き刺さる感覚はない。東雲はおかしいと思ひ、右目を開いた。

その目に映る、真つ白い服。特攻服のようなものを着た男がひとり、東雲の前に立ち塞がっていた。白蛇は殴られたような形で横に逸^そらされていて、垣根が驚愕の表情を浮かべている。

レベル5第七位。しかしその序列は彼が弱いからではない。能力の正体が不明で研究価値が見出せないから、第七位だけなのだ。

東雲が啞然としていると、背後から何者かが現れその肩に手を置いた。華奢で白い女の子のような手だ。

「——引っ込んでろ。オマエを殺すのはこの俺だ」

東雲はその声をよく知っていた。そしてその暗闇をたゆる白い姿も、知っていた。

返事をする前に、東雲は肩に置かれた手でそのまま後方へ飛ばさ

れた。ベクトルを操って押し出す方向に力の向きを集約。彼女は一気に彼方へ消えた。傷は深いようだが、着地は勝手にするだろう、と彼は判断していた。とにかく第二位から引き離す。手段を選んでいる暇はなかった。

垣根はハハハと小さく笑い始める。

「なんだなんだなんだあああああ！ テメエらまとめてボケナス揃いかよおおおおお！」

目の前に立ちはだかる二人のレベル5は、ニヤリと笑っている。

「長点上機の負の遺産なんか持ちだして、根性無し過ぎるだろお前。しかも児童施設ぶっ壊しまくってどこまで人を怒らせりゃ気が済むんだ？ 根性入れ直すしかねえだろ！」

「よオするに自分の実力でアイツを殺せないから外部に頼ってるってことだろ？ そんな腰ぬけに言われてもどオ反応すればいいか困るッての」

学園都市に七人しか存在しないレベル5。そのうちの三人が揃い踏みする。

「しっかし第一位と共闘することになるとはな。お前もなかなか見どころあるぞ」

「黙れ三下。俺がガキどもを守るよオな人間に見えんのかよ。それに今のヤツとオマエじゃレベルが違い過ぎる。長点上機学園もたいしたバケモンをつくりやがった。怪我したくなけりゃ引ッ込んでろ」

「そうしたいのは山々だが、こんな現状見せられてゆっくり眠れる根性無しじゃねえ。あいつの白い翼、強化しても俺の力で弾き飛ばせるぞ。お前はその間にやるべきことをやれよ」

「ふん。勝手に吼えてろ。くるぞ」

第二位の大き過ぎる翼がはためいた。人の耳では聞こえないその爆音。大きな津波が来る前の波の引く音。あるいは火山が噴火する前の地鳴りの音。そういうものに似ている音だろう。

第七位が腹の底から吼えた。全力を込めて右腕を振るう。大き過ぎる翼は弾き飛ばれ、左方に逸れた。強化された未元物質^{ダークマター}を相手に第七位は決して引けを取らない。児童施設を破壊する怪物には決して負けない。第七位はニツと笑っていた。

実験にはこんなイレギュラーは想定されていない。だからこそ第一位は口を裂けんばかりに開き笑っているし、第二位は渋い表情を浮かべていた。

「くそつたれどもめ。テメエらはお呼びじゃねえんだよ。俺が殺したいのはスキルジャンパーだ」

それを聞いた白色をした死神は、にんまりとした笑みを浮かべる。特攻服の男も白い大蛇も眼中にない。今、彼の興味は目の前で敵役をしている雑魚^{雑魚}にしか向いていない。

「あいにくだけどよオ、スキルジャンパーを殺すのはオマエじゃねエ。この一方通行だ」

第一位の一方通行^{アクセラレータ}と第七位の削板軍覇が、第二位の垣根帝督の前

に並び立つ。

10（後書き）

備忘録：レベル5の3人が集結 垣根カッコイ

11（前書き）

第二章完結です。物語はどんどん進んでいきます。
どうか最後までお付き合いください。縦書き形式推奨中です。

早瀬優希は髪をタオルで拭いていた。入浴後のコーヒー牛乳を飲み、ほっと息を吐く。

二一時過ぎ。いつものようにお風呂に入った後、友達のブログを見て回る。そこで初めて東雲の住んでいる寮で事故があったことを知った。ガス爆発かなにかだと言われていて、事故発生時刻は三時過ぎ。自分が佐天という女の子と電話をした一時間ほど後だった。たしかに今日一日中本を読んだり宿題をしたりと外に出なかったが、ニュースはつけっぱなしだった。そんな大きな事故ならニュースで放映するのではないか。まして早瀬が住んでいるのは同じ第七学区である。窓を閉め切っていたからその爆音が聞こえなかったのだろうか。早瀬が住んでいる寮は北端で東雲の寮は南端であるから、単純に距離の問題かもしれない。

ウェブニュースを見て回る。やはりどこにも記載はない。しかし東雲の寮の近くに住んでいる友人のすべてが同時刻に爆音を聞いている。でたらめとも思えなかった。

「どうなってんだ」

早瀬はたしかに嫌な予感を覚えた。とりあえず東雲に大丈夫かと連絡を入れてみるが、通じない。佐天にも電話をかけるが繋がらなかった。事故に巻き込まれたのかと不安になる。

村叢ならなにか状況を理解しているかもしれない。電話をかけてみる。なぜか繋がらない。賀古も同様に通じなかった。

おかしい。全員が全員電話に出ないということがあるのか。まだ夜の九時だ。眠っているとは考えられないし、賀古は眠る前にブログを書く娘だった。それにコメントして早瀬も寝る、というのが毎

日のお決まりだったのだ。

嫌な予感が姿を現しているような気味悪さに襲われる。

電話のコール音。数回を経て、取られる。

「ういはる初春か？ あたいだよ。今大丈夫？」

『早瀬さん？ どうしたんですかこんな時間に』

早瀬はすぐにわかった。初春の息が少し荒い。周囲の音も携帯電話を通じて聞こえてくる。学生寮でのんびりしているとは思えなかった。

「佐天さん、今どうしてるか知ってるかい」

『佐天さんならもう帰ってるんじゃないですか？ 電話繋がらないなら寝てるのかもしれない』

甘ったるい声。たしかにいつもの初春の声だ。だが、違う。早瀬にはわかる。

初春はなにかを隠している。

「一七七支部だな。なにが起こってんだ、初春」

『へ？ 私は今寮に・・・』

「ウソついてんじゃないじゃんよ！ わかってんだよ風紀委員やつてるって！ あたいと話しながらそんなに速くキーボード打たなくちゃいけない理由があるなら教えるよ！ 隠すんじゃないよ初春！」

怒声を発した。息を荒げながら叫んでいた。電話の向こうの初春

は黙っている。

「佐天さんになにかあったんだな？ 鏡^{かがみ}の住んでる寮でガス爆発があったって皆言ってる。けどこのメディアもそれを報道してないじゃんよ。ホントはガス爆発なんかじゃねえんじゃないのか、初春」

『早瀬さん、それは』

「あたいが風紀委員^{ジャッジメント}じゃないから教えてくれないのか。それともレベル0の無能力者だから教えてくれないのか？」

『そんなことは！』

「じゃあ教えてくれよ初春！ 佐天さんは無事なのか！ 鏡にも連絡が取れないんだ！ あのガス爆発でなにがどうなってるのか教えてくれ！ 友達なんだよ！ 友達が傷ついてるかもしれないのに無視なんてできるわけねえじゃんよ！」

早瀬は必死に訴える。電話の向こうで唾を飲む音がした。向こうの周囲も静まりかえっているらしく、無音の世界が早瀬に訪れていた。

しばらくして、初春は震える声で答えた。佐天は病院のベッドで安静にしているという。東雲に関しては、彼女もわからない。

「じゃ、あのガス爆発はなんなんだ。自然発生したなんて言うんじゃないぞ。メディアに規制かける事態だ、普通じゃないのはわかってるじゃん」

『それはちょっと、あ、し、白井^{しらい}さん！』

ブツツという通話中独特のノイズが耳に入る。電話を誰かと代わったようだ。

『もしもし。風紀委員の白井と申す者ですけど、初春の先輩らし
ジャッジメント
いですわね。単刀直入に言いますわ。これ以上首を突っ込まないで
くださいませ』

高圧的なお嬢様口調が向こうから響いてきた。早瀬はいきり立つ。

「なんだよソレ！」

『電話の内容を聞かせてもらってましたの。メディアに気付いたのはさすがですけど、なおさら一般人のあなたは巻きこめませんの』

「友達を想うのに一般人にもあるもんじゃないだろ！」

『黙らっしゃい！』

一転して強い言葉が返ってくる。

『あなたはレベル0の無能力者ですの！ できることなどなにもない！ 大人しくすべてが終わるまで待っていなさいですの。わたくしと初春がすべて解決しますわ』

「レベル・・・0・・・できることはなにも・・・」

早瀬に突き付けられた重すぎる言葉。それは紛れもない事実だった。

運動ができない。能力もない。自分は今からなにをする気だった？

『この件はすべてが終わり次第またお知らせしますわ。その時まで口外なさいませんよう』

「ホントに、大丈夫なんだろうな。なににもかも解決してくれるんだろうな」

『ええ。必ず解決すると、約束しますの』

とても優しい声だった。その言葉を最後に、通話は切れる。早瀬は力を失ったように腕をぶら下げた。

風紀委員に任せた方がいいに決まっている。自分が出しゃばってなにかできるわけではない。むしろ足手まといになる。初春のようにゴールキーパー守護神と呼ばれるほどのコンピュータテクニクがあるわけでもなく、村叢のような能力を持っているわけでもない。運動神経も悪く、自慢できることはなにもないただの女子中学生。

レベル0。

無能力者。

できることなどなにもない。

「ほんとうに、そうなのかな」

早瀬は小さな声で呻くように呟いた。携帯電話を見つめ、彼女はそれを軽く握り締めた。

村叢は動きを止めた。

誰かが大空を飛ばされているのが見えたのだ。東雲のようにも見えたが、いったいなにが起っているのか。未元物質は追いかける様子もないし、理解できない状況に村叢が賀古に電話をかける。

「ソーニヤ！ 鏡の位置は！」

「……第七学区の冥土帰しの病院っばいですわ」
ヘンキャンセラ―

「やっぱり今のは鏡だったのね！ すぐにそちらへ向かいます！」

電話の向こうに気配を感じた。賀古ではない誰かの気配だ。小声でなにかを話し合っているようにも聞こえる。自分と東雲以外に誰が、と村叢は疑問に思う。

「……ソーニヤ。そこに誰がいるんです？」

「あら、急にどうしたのかしら。誰もいませんわよ？」

一心に走り続けていた村叢の足が止まる。耳を疑ったのだ。なぜ、嘘を吐く？

「ソーニヤ。この計画は上手くいくんですよ」

「もちろんです。すべて予定通りに終わるはずですよ」

村叢の目が鋭く尖っていく。

「ソーニヤ。計画の全貌を明らかにしてください」

「まだ駄目ですわ。お膳立てが揃うまでは我慢ですわね」

第一五学区感じていた違和感のようなものが今はつきりと胸のなかに生まれる。

「ソーニャ。計画が成功すればあの子はちゃんと助かるんですよ」

沈黙。電話の向こうで誰かが声を出して笑い出した。賀古ではない誰かだ。

『影夜ちゃん。心配しなくても、あの子は幸せになる。あなたの思い描く幸福とは違うかもしれないけれど』

ブツツと音がする。通話を切ったのだ。それ以上はもう聞かなくていい。今、理解した。

賀古ソーフィヤは東雲鏡を救わない。

最初に自分達に接近してきた時から、そういう陰のある女だった。今回も東雲を救うフリをして抹殺の補助ほうじょに乗り気なのだろう。電話の向こうにいた知らない誰かは、村叢の言葉を嘲笑った。レベル5の誰かかもしれないし、もっと上層部の人間かもしれない。とにかく東雲を救おうとしている誰かではないことは間違いない。

そもそも東雲を救おうと考えているのは村叢と賀古だけのはずなのだ。村叢の知らない誰かと接触している時点で、賀古は黒だ。

賀古は国籍を偽っている。なぜ暗部という学園都市の闇に浸っているのかも謎だ。始めから信用すべきではなかった。

三人でやって来たと思っていたのは自分だけだった。東雲を友達と思っていたのも自分だけだった。これから三人でやっていけると考えていたのも、自分けだった。

村叢は唇を噛みしめて、走り出す。苦い思いを振り払うかのごとく、全力で駆けた。

真っ直ぐと東雲の向かった先を目指す。冥土^{ヘウンキャンセラー}帰しのいる病院へ。

垣根^{かきねていしく}帝督は正面の敵を睨み、悪態を吐いていた。

学園都市二三〇万人の頂点に立つ男と、その七番目に居座る原理不明の男。敵に回すと面倒なヤツランキングで堂々^{ツートップ}を飾るような二人だ。

「かきねー」

「わかつてる」

腕に抱かれている乗っ取り^{オーバークロック}が震えている。目の前の敵が恐いからではない。能力使用限界が迫っているだけだ。

（乗っ取り^{オーバークロック}の力なしとなるとキツイな。一対一ならまだしも、この二人じゃ笑えねえ）

第一位、一方通行^{アクセラレータ}はにんまり笑んで垣根を見据えていた。

「さっさと来やがれ第二位。俺とオマエにや絶望的な差があるってことを教えてやんよ」

「吠えてんじゃねえよ第一位。スキルジャンパーにパクられる能力なんざ俺の敵じゃねえ。テメエのくっだらねー芸当は看破済みだコ

ラ」

「ダークマター未元物質。そんなモンでアイツを破ったとか思ってたのか？ だったら憐れだよなア、オマエ」

「寝言は寝て言え。テメエがいなけりやバラバラに引き裂いてただらうが」

アクセラレータ一方通行はやれやれと額に手を当てる。そぎいた削板が腕を組んで言い放つ。

「ながてんじょうき長点上機学園の負の遺産、ブースター強化個体。発火系、電気系、大気系、精神系、空間移動系、その他さまざまな能力に適応させて生み出された個体。生産個体数は実に五八〇体。その最終完成型として生み出されたのが乗っ取り・・・お前の腕のなかにいるその子供だ」

オーバークロックかきね、と乗っ取りは垣根の服の端を掴んだ。

「詳しいなつて顔してるな？ 仮にもレベル5の俺がなにも知らないと思ってたのか。学園都市の闇の部分は嫌ってほど見せられた。ブースター強化個体達の弱点がなにかもわかっている。特にその乗っ取りの弱点はな」

「メンタルアウト心理掌握も強化個体を一匹持ってたぜ。アイツの場合は恐怖という感情以外を取り去ることで脳にかかる負担をこっそり軽減してたみたいだが・・・ソイツはどオなのかねエ？」

「調整に時間なんてなかったはずだぞ。おまけにダークマター未元物質なんてワケわかんねえもののために力使ってりや消耗も激しいだろ」

「わかってくれたかな、第二位。オマエは乗っ取りなしだと弱エンだよ、三下が」

自分を激昂させようとしているのはわかった。相手になってもいいと思っっている。

しかし、先ほどから乗っ取りの震えが大きくなっている。これ以上は乗っ取りが死ぬかもしれない。スキルジャンパーを殺すために連れてきたのだ。ここで力を使い果たさせることはさせたくない。

乗っ取りを見つめていた垣根は目を閉じて、ギリツと歯を鳴らした。

「かきね・・・だいじょーぶ、あいつらをころそ・・・」

乗っ取りは弱々しい声で言う。大丈夫なわけあるか。垣根は首を振る。

「まだ死ぬんじゃねえぞ。お前を殺すのはもう少し後だ。だから、寝てろ」

乗っ取りを連れて逃げる。スキルジャンパーを確実に殺すために。垣根は冷静な判断を下し、その広がり過ぎた翼ではばたく。人間の耳には聞こえない別世界の爆音を響かせ、垣根は一気に後方へ下がり始める。数百メートルに及ぶ六枚の翼は彼の身体を遥か彼方へ容易に運んだ。

第一位と第七位は呆気に取られているようで、一瞬判断が遅れた。まさか垣根が即行で逃げるとは思わなかったのだろう。

「第一位！」

「動くな！ あの白い翼、厄介なもん散布してやがる！ 勢いに任

せて突っ込めばどオなるかわかんねエぞ！」

削板はぐつと足を止めた。物理法則を無視した末元物質は、迫りくるものを貫こうとするだろう。ベクトルを操って音速を超えようものなら白い壁にぶつかり即死するかもしれない。音速の二倍ならなおさらである。削板も動き出せなかった。

垣根は闇に吸い込まれるように、彼方へ消えた。大空を覆い尽くすようだった白い翼も、闇に溶けていく。

「逃がしちゃったぞ」

「スキルジャンパーだ。ヤツは必ずスキルジャンパーのところに現れる。オマエがこれ以上スキルジャンパーを守りたいと思ってるなら、冥土^{ヘウンキヤンセラ}歸しのいる病院へ向かえ」

「お前は？」

「俺が次にスキルジャンパーと会えるのは、ヤツを殺す時だ。忘れんじゃねエぞ。俺もオマエもヤツもレベル5に認定されてる。レベル6への手がかりなんだよアイツは」

「なら、俺がスキルジャンパーを殺しちまうとか思わねえのか？」

削板が問うと、一方通行は鼻で笑った。^{アクセラレータ}背を向け、背中から四本の竜巻のようなものを発生させた。宙を浮き、どこかへ行こうというのだろう。

「そんなくだらねエ方法を取るヤツはこんなところで第二位に立ち向かってねエよ」

削板を信頼しているとも取れる発言だった。たしかに削板はそんな外道な手を使うつもりがない。レベル6に興味がないといえば嘘になるが、あれだけ手負いの少女を殺したいとは思っていても思っていない。自分はそんな根性無しではないのだ。

「それに、レベル6覚醒への条件はヤツとの交戦だろ。病院で不意打ちなんかしたってレベル6になれるとは思えねエな」

「第二位は強化個体ブースターに助けてもらってる。それで本気でレベル6になれると思ってるのかね」

「さアな。だがヤツの殺意は本物だった。無関係なガキどもを巻き込む時点でわかってたことだな」

削板は視線を落とした。犠牲者はかなりの数になっているだろう。第一三学区は壊滅的なダメージを負っているのだ。

しかし一方通行は低い声で、つまらなさそうに吐き捨てる。
アクセラレータ

「安心しろ。犠牲者はゼロだ。第六位がすべて守りやがった」

削板は言われてはつとずる。背後に誰かが立っている。振り向く必要はなかった。その何者かはゆっくりと一方通行と削板の方に近づいて、姿を現した。
アクセラレータ

「第六位・・・お前、いつからいた？」

「そりゃ、最初からだ」

アクセラレータ

一方通行はケツと言い放ち、漆黒の空へ飛び立った。

第六位は削板の肩に手を置いて、ニツと笑う。

「正義の味方にしちゃ詰めが甘いよナンバーセブン？」

削板の乾いた笑い。

第六位は第一三学区にいる大人と子供すべてをあの六匹の巨大白蛇から守り通したというのか。削板は敵わないな、とひょうひょうとしている第六位を見て項垂れた。

ジャッジメント

風紀委員第一七七支部に三人はいた。

ゴルキーバー

守護神初春飾利がパソコンの前で指を忙しく動かしている横で、

みさか みこと

御坂美琴と白井黒子が腕を組んでいた。

先ほどの電話。早瀬優希という少女の声は全員に聞こえていた。

白井は冷たく突っぱねたが、複雑な心境に駆られていた。

「友達って言ってたわね」

「仕方ありませんの。これ以上誰かを巻き込むなんてできませんの」

御坂はなにも言わなかった。ほんとうなら白井は御坂を巻き込む

ジャッジメント

ことも嫌だった。風紀委員でもないのに能力を行使することは犯罪である。たとえこの町を取り巻く大規模実験だったとしても。

「スキルジャンパーの話は、真実なのでしょうか」

「？パーソナリティブレイン？か・・・そんなものがあり得るとは思えないんだけど、あのお医者さんが教えてくれたことだし」

超能力の源、自分だけの現実。パーソナルリアリティ 東雲鏡という少女は脳の九〇パーセント以上をパーソナルリアリティ分野に占領された。だから常識では考えられない多重能力を可能にしたという。

「研究者でもないのだから脳に詳しくありませんけど、脳の九〇パーセントも特定領域に占領されたらまともに機能しないんじゃないかと思いますの」

「私だってそう思う。だからあのお医者さんも？存在自体が奇蹟？だって言ったんでしょ？」

初春は無言で画面に齧かじりついていた。彼女は町中の封鎖された監視カメラのロックを解除するプログラムを組み上げている。守護神ゴールキーパーと呼ばれるだけあって初春の本領は防衛機能であるが、それだけのものを作り上げるということは突破することも同時に可能だ。初春は時と場合によって一流のデータハッカーになる。

「面白い防衛機能・・・これじゃダメですか」
ファイアーウォール

初春はぶつぶつと呟いている。目はしきりに左右に動いて、指が止まる瞬間は訪れない。

「もう夜も遅い。寮監に殺される前に帰るべきかもね」

「わたくしは風紀委員を言いわけにできますけど、お姉様はそうい
ジャッジメント

きませんの。寂しいかもしれませんが今日はひとりで夜を過ごしてくださいな」

「寂しくなんかいいわよ！」

御坂が白井の頭を殴る。「いたーい」と白井が甲高い声を出した。

「無理しないでね。明日朝一でここに来るわ。初春さんも気張らなくていいからね」

御坂が声をかけ、扉を開いて一七七支部を後にした。

初春は終始反応せず、パソコンに目を向けていた。白井が苦笑して、その傍に淹れたコーヒーを置く。

「お姉様の言う通りですわ。佐天さんが無事だとわかったんですし、焦らなくても大丈夫ですよ」

白井の言葉は届いている。初春の指が止まったのだ。硬直したようにも見える。

しばらく止まっていた初春はふいに下唇を噛み、眉を寄せた。

「白井さんにはアレが無事に見えるんですか」

「初春・・・？」

「レベル0にできることなどないと言ったのは白井さんですよ！」

初春は叫んでいた。怒声にも聞こえるし、なにかを訴えかけているようにも聞こえた。

「そしてレベル0の佐天さんを助けられなかったのは私なんですよ・
・・」

白井はその言葉に反応できない。初春のせいではないと一言伝えることもできないほど、初春の気魄は凄まじかった。

ゴールキーパー
守護神の指が再びキーボードを叩き始める軽い音が一七七支部に響く。

ヘウンキャンセラ―
冥土帰しの病院は第七学区にある。

彼はベッドに臥せる東雲を見つめ、大きな息を吐く。

「君がここまで傷を負うとはね。やったのは第一位かい。それとも、第二位かい」

彼女は答えない。意識がないからだ。病院の駐車場で倒れているところを冥土帰しが発見した。全身に傷を負っていて、特に左腕の損傷が激しいようだった。

意識がない状態でも脳が適切な処理を施していた。脳からすれば生き残る手段を模索したのだろう。彼が発見するまでは血流のベクトルを操作してそれ以上の失血を防ぎ、ベッドに臥せる今では肉体再生を使用している。医療設備とあわせれば三日とかからず全快するはずだ。

ヘウンキャンセラ―
東雲がどうやってここに辿り着いたのか、冥土帰しは知らない。

知らないが、患者だとわかれば見捨てることはしない。彼が医者であるからだ。

「君は一方通行との過去を引きずっている。新たな未来を生きようと望まないんだ。それだけの能力があればいくらでも違う道を選べただろう。それをしなかったのは君のプライドかい。それとも君に恩着せがましい言葉を浴びせる？上？が選ばせなかったのかい」

答えない。静かに眠り続けている。

彼女の脳に取りつけられた大きなヘッドギアのような器具。脳内のパーソナルリアリティが円滑に稼働するよう調整するためのものだ。東雲ひとりのために冥土^{ヘウケンセラ}帰しがひとりで作り上げた。他にも冥土^{ヘウケンセラ}帰しお手製の器具が並んでいて、東雲を救おうと働いている。

彼は、静かに静かに問いかける。

「君はいつまで己を傷つけなければ気が済むんだ。学園都市のために死ぬことが正しいと本気で思ってるのかい」

医者^{ヘウケンセラ}と患者。冥土^{ヘウケンセラ}帰しにはそれだけで十分理由になった。医学だけは科学の町学園都市に縛られない。医療が学園都市に縛られてなにが医者だ。医学と科学は別の道を進む、というのが彼の座右の銘でもある。

「君がほんとうに望んでいることはわかっている。僕は医者だよ。患者の頭の中くらいわからないでどうする」

彼はほほ笑んでいた。そして東雲の頭を撫で、病室を後にする。

長く薄暗い無人の廊下を進みながらカエル面の男は鋭い目をしていた。

「アレイスター。君の狙いはわからないよ。けどね、僕の患者に面白半分で手を加えるのは許さない。君もそんな僕の性格をわかってるだろう？　かつて僕に助けられた君ならね」

彼は部屋に入る。脳の解剖図など様々な資料が収められている資料室だ。電気をつけ、冥土^{ヘンキヤンセラ}帰しは机の上にある紙を乱暴に掴んでみせた。

「これは僕と君の勝負ということだね、アレイスター」

どこかで聞いているであろう学園都市統括理事長、アレイスターに向かって言い放つ。

夜は深まっていく。魔の一夜は静かに終焉した。
物語は、最期の日へ向かって歩を進めていく。

11（後書き）

備忘録：レベル0と初春飾利 第六位本格的に登場 冥土帰しとア
レイスター

0 (前書き)

行間二話目です。縦書き形式推奨中。

ほんとうはこんなことをしたくはなかった。

男が働いていたのは第一〇学区にある特例能力者多重調整技術研究所という施設。大脳生理学を主軸に研究を重ねていたため、脳学研究員のひとりとして特力研に招集された。それ以前はとある大学に勤めていて、講師をやっていたこともある。

大脳生理学研究のなかでも一番注目されていたのはやはり？自分パーソナルリアリティだけの現実？の領域解明である。能力解放時の脳波、シナプス神経などあらゆる脳の働きをリストにまとめ、マッピングできるものはすべてマッピングする。目指すのは完全な？自分パーソナルリアリティだけの現実？領域の解明と応用。研究結果をさらに改良し、能力レベルの発展に貢献させようというものだ。

その過程で大脳生理学だけでなく神経生理学、内分泌生理学など別分野の知識が必要になるため、？自分パーソナルリアリティだけの現実？を研究する機関は限られていた。それ相応の研究要員、研究施設が不可欠なので一般の大学では手が出せなかった。

男は一般大学で教鞭を取りながらその大脳生理学の研鑽を積んでいたため、晴れて特力研に招集され、とある研究チームの一員となった。その研究チームの名は？プロデュース？。

男の他に二〇名以上の研究員が参加しており、ほとんどが脳学研究員である。それも長点上機や霧ヶ丘といった有名校の専属研究員ばかりだった。一般大学の講師よりも、有名中学・高校の研究員の

方が優秀であることは珍しくない。いかんせん、男は肩身が狭い。

？プロデュース？の目的は脳と？パーソナルリアリティ自分だけの現実？の関係解明、そして超能力の応用開発だった。前者はこのチームも目指していることだが、後者はおそらく？プロデュース？が初めて打ち立てた目標だろう。まだ解明されていないのに応用開発を謳うのはなかなかできることではない。

そんな？プロデュース？は学園都市統括理事会の息がかかっている。莫大な予算が下りてきた。おそらく学園都市で最高の設備も与えられた。男は幸福だった。自分のしたい研究が自由にできる喜びを噛み締め、毎日のように研究に没頭した。

家族がいた。妻と娘が二人。三人とも学園都市の外にいる。大きい方は大学を出て就職し、小さい方も高校三年生になっていた。娘は学園都市には入れずに普通の生活をさせてやった。大学講師として内部から見て、学園都市は誇れるような場所ではないと判断したからだ。能力開発は脳に刺激を与え、薬物を投与し、？パーソナルリアリティ自分だけの現実？を得やすいように覚醒を促している。どれだけ身体に問題はないと説明されても、自分の子供にはさせたくない現状があった。脳学研究をしているといういろいろとブラックな話も聞こえてくる。それを研究して飯を食っているくせに、と妻に言われたことを思い出して男はふと苦笑った。

「試験薬三〇六Dを八グラム投与。β―エンドルフィン、エストロゲン値上昇、ドーパミン、インスリン、アルドステロン以下、安定値を維持。被検体の脳波レベルの二段階上昇を確認。能力レベル4オルゲリンに到達と判断。事態良好」

自分はなにをしているんだろう、と男は器材を操作しながら思った。分厚いガラス窓の向こうに寝かされている少女の姿を横目で見て、やるせなくなる。たしか少女は下の娘と同じ高校三年生と聞いた。娘と同じくらいの少女にこんな処置を施している自分が理解できない。

透明な円筒型の器材に寝かされている彼女は、手足を縛られ猿轡をされている。こめかみに何本もの太い管が刺されており、全身からは何百という細い管が伸びていた。

少女は一種の興奮状態を与えられている。試験薬三〇六Dと呼ばれる薬品の素になったのは、？能力体結晶？だ。投与することで能力を暴走させる代物らしいが、どうやって生み出されたのか、どうしてそれが公式に発表されないのか、男は知らない。知っているのはその薬品の効果だけである。

試験薬三〇六Dを投与すると鎮痛効果のあるエンドルフィンが多量に分泌される。β-エンドルフィンなので、今少女は性的快楽と能力暴走を相乗した興奮状態にあるということになる。多幸感が脳を占めていて、能力を暴走させた時にかかる脳への負担を紛らわしているのだ。紛らわせるだけで軽減しているわけではない。少女は今も己を傷つけながら恍惚とした表情で力を揮っていた。

手元にある大脳図が色づいていく。知覚領域を識別し、マッピングしているのだ。続いて記憶領域。言語領域。次々と識別され、色づけられていく。

彼女の能力は？色彩追跡？。対象を識別し触れることなく色をつけることができる能力だ。

？プロデュース？は対象を識別することができる少女に目をつけた。少女は癌細胞を識別し色づけることで実力を示し、実験に強制参加

させられた。男はその場において、見ていたのだ。

次の段階に進む。試験薬三〇六Dの投与量を増やした。少女は声にならない叫び声をあげている。快楽は過ぎれば恐怖となる。少女の反応は凄まじい。動かない手足を必死に動かし、身を振よじらせて逃げ出そうとしている。精神崩壊を起こしていると男は思った。意識を失わないのは身体中に繋がっている管が電気ショックを与え、神経を刺激しているからだ。能力を吐き出させたいがために彼女は人間である権利を剥奪された。猿轡で舌を噛むという万が一の自害の可能性も摘み取る。？プロデュース？は徹底していた。

ついに？自分だけの現実？領域を明らかにした。？プロデュースパーソナルリアリティは目標のひとつを達成したことになる。男にとっての悲願だったが喜ぶ気にはなれなかった。その研究結果に至るまでに、いろいろと間違っていることが多かった。？色彩追跡？の少女は壊れ、用済ヨウゼキみとなつたらしい。

？プロデュース？は次の段階に進む。超能力アクセラレータの応用開発。白羽の矢が立ったのは、レベル5第一位の一方通行。彼の脳波パターン、？自分だけの現実？領域を応用し、無意識下における能力制御を可能にする。そういう具体的な目標が通達された。最初からそのために研究チームが立ちあげられたとも言いたげなほど、研究の移行は速やかに行われた。

男の目的は？自分だけの現実？領域解明だけで、それ以上に関わるつもりがなかった。これ以上ブラックな研究を続けたくない、という思いもあった。？色彩追跡？は娘と同じ年齢の少女だったのだ。
パーソナルリアリティ
カラーマーカー

男は研究チームの離脱を要望したが、却下された。

翌日研究の中心にいる主任研究員に呼び出され、実に平淡な声でこう告げられた。

「君は立派なこちら側の人間なんだ。光の当たる世界に帰れると思わないことだよ」

後悔しても遅い。それを男は理解していなかった。

「君の実力は認めているんだ。わざわざ三流大学から引き抜いたんだから。次、もう一度抜きたいなんて言った時は、どうなるかわかっているね。あまり私の手を煩わせないでくれ」

特力研。地獄の釜の底と呼ばれ、子供達に対する非道残虐な実験が行われ続けた施設。
アンチスキル

なぜその施設が警備員の目をかい潜ることができていたのか。

理由は実に簡単である。

子供達だけでなく、研究員にとっても地獄の釜の底だっただけに過ぎない。

0（後書き）

備忘録：研究から離脱したがっている脳学研究員が存在

1（前書き）

守護神最大の見せ場です。縦書き形式推奨中。

ふつきょう みさか みこと
 払曉。御坂美琴は寮を飛び出した。

寮監に事情を説明すると思いの外すんなり許された。どうにも常盤きわだ台中学から通達があったらしい。レベル5御坂美琴に関してのみ門限その他寮の規則を免除するということだった。ここ数日限定ではあるが、御坂にとってそれはありがたい話だった。

その一方で、疑問も生まれる。なぜ常盤台中学はこの時期にそんな許可を出したのか。もしかして計画に協力しているのではないか。あり得ない話ではなかった。学園都市統括理事会が今回の実験を誘発しているのなら、名門校とはいえ常盤台もその影響にさらされるだろう。マスコミに緘口令を敷ける上層部の圧力に常盤台が屈したとしてもなんらおかしくない。

もちろんその圧力にあらがうだけの力が常盤台にはある。学園都市外部、あるいは世界各国の機関と連携している常盤台ネットワークを使えば十分に反抗できるだろう。そうするだけの価値がないのか、もしくは協力する旨みがあるのか。そこまでは御坂にはわからない。

とにかく、常盤台が関わっていようといなかろうとやるべきことをやるだけだ。

この実験を、食い止める。

ジャッジメント
 風紀委員一七七支部。そこが白井しらいと初春ういはるの所属する部署だった。時刻は午前六時。まだまばらに人がいるだけで、静かで清々しい朝

のなかを御坂は駆け抜けていく。もしノースリーブのシャツに短パンでも履いていれば町行く人の目にはジョギングしている少女に見えるだろう。校則に従って休日でも制服を着用する彼女は、どちらかというと遅刻しそうな女子中学生に見える。

扉を二回ノックし、開けた。風紀委員^{ジャッジメント}の事務所は掌認証の高度で嚴重なロックが元から備えられているが、この一七七支部だけは御坂や佐天^{さてん}でも手を翳すと入室できる。おそらく初春が弄^{もよほ}って調整したのだろう。そんなことまでできるのかと思ったが、彼女は巷^{ちまた}のハッカーの間では守護神と呼ばれ伝説として崇められているらしい。ジャッジメント風紀委員の用意するセキュリティなどあつてないようなものなのかもしれないと、御坂は思う。

失礼しますと告げて入室する。まず目に入っただのはソファで横になつている白井。次にパソコンの前でじつとディスプレイを凝視している初春だった。

「初春さん？　もしかして眠ってないの？」

御坂が心配して声をかける。初春はあまり目立った反応は見せなかった。

横顔を見てわかる。初春は今の今までスキルジャンパーの行方を追っていたのだ。げっそりとした表情をしている。いつもの愛らしい彼女ではない。

「初春さん。ちょっと休んで、ね？　これ以上は」

「御坂さん」

初春が返事をした。びくつと御坂が反応する。

「ついにを見つけました。やっと、捕まえました」

三台のパソコンの画面にはもう御坂でもよくわからないほどの初春特製プログラムスク립トが何十と重ねて表示されており、ウィンドウの数は数え切れない。コンピュータの処理限界に達している。うなほど画面がよくわからないもので埋め尽くされている。

そのなかのひとつを初春は指差した。

「スキルジャンパーが見つかったの？」

御坂はそれを覗き込むように見た。初春はなにも答えない。

息を呑んだ。初春には一言も伝えていないはずだ。それなのになぜ、どうやってこの単語に行き着いた？

？恵まれた双子計画ツインエンジェルに関する概要と実行時における注意点の報告？

そういう書き出しで、そのページは始まっていた。機密端末はリンクS。

学園都市のコンピュータには端末リンクが存在する。携帯電話はリンクD。図書館や一般家庭のコンピュータはリンクCという感じだ。教師や風紀委員ジャッジメントが扱うのはリンクB。研究員などが扱うのはリンクAだ。リンクSというのは統括理事会直属の機密である。

たとえばリンクBの情報をリンクCの端末で引き出すことはできない。情報漏洩を防ぐためでもあり、重要機密の保管を容易にするための計らいである。

風紀委員のパソコンを使っているのだから当然得られる情報はリンクBであるはずだ。リンクA以上の情報はアクセスすることもできない。だが、表示されているのはリンクSの情報。

そこで御坂は初春の異名を思い出す。
守護神。

「御坂さん。私はスキルジャンパーを追っていません。スキルジャンパーの居場所くらい警備員アンチスキルの監視衛星を使えばすぐに割り出せますから。一晩かけて辿り着いたのはその先です」

御坂は心のどこかで初春飾利を甘く見ていた。レベルの低い、白井黒子のオペレーターに過ぎないと軽んじていた。それが間違いだったと今はつきり気付いた。

初春はスキルジャンパーを取り巻くすべてに辿り着いたのだ。

「今現在学園都市で起きているレベル5による抗争。その中心にいるのはスキルジャンパーです。なぜレベル5なのか。なぜスキルジャンパーなのか。ここにすべて記されています。すべてです御坂さん」

震えた。機密ランクSの情報など見たことがない。？絶対能力者進化計画？の情報でもランクAに過ぎなかった。この文面がなにを示しているのか、見るのが恐い。

初春はがっくりと力を失ったように椅子にもたれかかった。疲れが一気に押し寄せてきたのだろう。御坂は肩に手を乗せてやろうとした。

初春の甘ったるいけれど衰弱した声が、御坂に突き刺さる。

「レベル0の人ができることなんて、なにもないんですよ」

初春が画面を見つめたまま呟いている。

「だから御坂さんや白井さんみたいなすごい能力者が力を揮って助けてくれるんですよ」

昨晚の電話。御坂は答えられない。初春も「じゃあ助けてくださいよ、救ってくださいよ」という最低の言葉をぐつと呑み込み、話を変える。

「佐天さんがどうしてスキルジャンパーのところへ、ひとりで行ったと思いますか」

初春の顔は見えない。だが、肩が震えているのはわかった。

「知りたかったらしいんです。なんでも能力を使えるスキルジャンパーがどんなことを思っで暮らしているのかって。なんの能力も使えない無能力者をどんな目で見ているのかって」

御坂は肩に乗せようとした手を力なく下げた。

「スキルアウトに対して御坂さん、なんて言っただか覚えていますか。自分にできることもやろうとしないで現実から逃げているだけの奴が許せない。その時の佐天さん、自分のこと言われてるみたいって言いました」

「初春さん・・・」

「御坂さん。気づいてますか。私達、知らず知らずのうちに佐天さんを見下していたんです」

「・・・ッ、そんなことしてな」

「ほんとうにしていなくて言えるんですか！　ならどうして佐天さんはひとりでスキルジャンパーのところに向かったんですか！」

初春は傷つきやすい少女だった。大切な誰かが傷つくと怒りを鎮められない優しい少女。

「スキルジャンパーのきっかけになったのも、なにか協力できることはないかって佐天さんががんばってくれた結果じゃないですか」

声がまた弱々しくなっていく。

「友達だと思ってるのに、無能力者だから輪に加われない。レベル0だから、足手まといになる。なにかあるたびに佐天さんは自分の無力さを痛感してました。なにか力になれないかと相談してくれました。早瀬さんだって、そう思ったから電話をくれたんですよ。力になりたいって。そんな人達のことを考えたこと、御坂さんにはありますか」

レベル5のひとり。その事実が彼女を高飛車にさせてはいなかったか。無能力者を努力しない奴だと決めつけていなかったか。自分はレベル1からレベル5第三位にまで登りつめた。努力すれば自分のようにレベル5になれるかもしれないのに、その努力を放棄した意気地なしだと見下していなかったか。

「スキルアウトの人間だつて希望を持つて学園都市に来ました。その入り口でレベル0と判定されて、素養がありませんと言われて、性格が曲がらないでいられますか。それでも努力してレベル5になるうと思う人がいますか。皆が皆御坂さんと同じ心を持っているわけじゃありません。絶望するな。努力しろ。がんばらないからお前達はレベル0なんだ。御坂さんは暗にそう言ってるんです」

御坂は言い返さなかった。努力すればレベル1の人間でも七人しかいないレベル5になれるのだ。その実例として自分は存在しているのに、それを他人に押しつけるのが悪いことだと御坂は思わない。努力をすれば伸びるかもしれない。レベル1や2で停滞するとしても、努力する価値はあるはずだ。少なくともスキルアウトのように集団で群れて能力者を逆恨みするよりははるかにマシだと考えている。だから、御坂は初春の言葉を否定しない。

初春は御坂の方を見なかった。力なく肩を落としてパソコンの画面を見つめていた。

「よくレベル3と4の壁は厚いと言われますよね。でも私は思うんです。レベル0と1の間にある壁の方がはるかに厚いんですよ、御坂さん」

御坂は自分の胸中を察されたことに驚いた。初春はぼんやりとした口調で話していた。

「レベル0と1。数字で言えばたった1しか離れていないのに、遠い。努力をしても届かない。なにをどう努力すればいいのかも見えない。能力がないんですよ。努力するためのルールが敷かれていない。そんな人達になにをどう努力しろと言うんですか」

「初春さんそれは」

「御坂さんの始まりはレベル1でした。電撃使いという立派な能力者だったんですよ。スキルアウトの人達とはスタート地点が違います」

そうかもしれないと言いごもった。努力の方向がわからなければ、御坂も大成できなかっただろう。無能力者と診断された者はなにも見えない夜の海に放り出されるようなものなのだ。

「佐天さんは私より物知りです。レベル0でも心が豊かな人なんです。御坂さんはわかってくれますよね」

「・・・うん」

「早瀬さんも佐天さんと同じで心が豊かで、元気いっぱい、仲良くなれてよかったって思える人なんです。レベル0でも、友達なんです」

友達。御坂は静かに拳を握り締めた。

「ここにある情報を使って助けてやるなんて思わないでください。私のがんばりをそんな歪んだ思いで碎かないでください。友達のためなんです。レベル0でも友達なんです。すごすぎる人達のために、レベル0なのにながらばる大事な友達なんです。御坂さん、約束してください」

初春の声は泣いていた。佐天という無能力者の友達のためにがんばったのだ。早瀬という無能力者の友人を安心させるためにがんば

ったのだ。

御坂は初春の言葉を重く受け止める。洩らすことなく受け止める。レベル0だからなんだ。レベル5だからなんだ。ここにいる御坂美琴は初春飾利と佐天涙子の友達だ。早瀬優希という人もなんならついでに友達だ。それ以上考える必要はない。

レベル0のためにレベル5が動くのではない。友達のために御坂美琴は命を懸ける。初春飾利という少女は身を以てそれを御坂に示したのである。

？アイテム？はいつものファミレスの正面にあるコンビニに集まっていた。昼食でもどうぞと言わんばかりのランチテーブルが五つほどあるけっこう大きめのコンビニ。？アイテム？はその一角を堂々と占拠し、各々が好きなことをしていた。まだ正面にあるファミレスは開店していないようである。

怪我はまったくないが服のあちこちが汚れているむぎの麦野ときぬはた絹旗の姿。滝壺たきつぼとフрендаが大丈夫と問いかけるような目で二人を見つめていた。

「とりあえず私が超提案したいのはアレです」

「わーってるわよ。私だってそれくらい冷静なつもり。しっかりと対応策は練らないとね。結局そのためにはこんなチンケなコンビニじゃ駄目な訳よ」

そう言って麦野はフрендаをにやりと見る。「えっ、なんか口調違うね」とフрендаは思った。絹旗と滝壺がついにキャラ潰しに入

ったかと他人事のような目でフレンドを憐れむ。

「よし。そういうわけで我ら？アイテム？はこれから銭湯に行きます」

「はあー？ なに言ってるの麦野！」

フレンドが声を荒げる。コンビニの店員は注意しようと一歩出るがあまりにも異様な四人組を見て息を飲み、静かに退却した。

「ちよつと待つて。結局まだスキルジャンパーの件終わってない訳だよな？」

「ああ？ 文句言うヤツはブチ殺しまーす」

「ちよ！ 話を聞いて！」

「フレンドさん、私達の格好を超見てください。どうですかこの汚れ具合。乙女にこんな汚れた姿で町中を歩けと言うんですか超鬼ですネフレンドさん」

「フレンド、カスすぎんだろ・・・」

「麦野おお！ 私がなにをしたって言うのさ！ 絹旗の説明でなんで私が鬼でカスになるの！ 麦野鬼畜！ 絹旗最低！」

「絹旗最愛なだけに？」

「んー、フレンドさん三〇点というところですね」

「誰も上手く引つ掛けようとか思っ
てない！」

ぎゃあぎゃああと三人が騒ぐ横で、
滝壺はぼんやりとしていた。

「こつちには滝壺がいるんだから焦る必要はないって話だ。スキル
ジャンパーはいつでも追える。だけどヤツが第一位の能力も扱える
って点をなんとかしないとブチ殺せないからね」

麦野の言葉を聞いて、絹旗は少し言葉を詰まらせる。やっぱり麦
野は東雲を殺すのか。第二位の襲撃から身を挺ていして助けてくれたあ
の少女を。

自分達に手を差し延べ空間移動テレポートを行った。未元物質ダークマターが届かない安
全なところまで運んでくれたのだ。

『あなたの全力、なかなか効きました。どうかご無事で』

去り際に絹旗はそう言われた。脇腹をかすめ骨にヒビを入れたあ
の攻撃。全力を出してもあれだけしかダメージを与えられなかった。
それくらい実力差があったのだ。

絹旗はあの戦いで何度死んだかわからない。けれどそのすべてを
生き抜いた。東雲が生かしたからだ。自分を殺そうとした絹旗も麦
野もまとめて救った。

誰も死なない結末を求めて手を差し延べたのだ。

「とゆーわけで銭湯行くぞー銭湯。難しいことはそこで考える。決
まった決まった」

そう言いながら席を立ち、麦野は絹旗の頭にポンと手を乗せる。

「借りは返す。アンタにもヤツにも。それが終わってからヤツをブチ殺す。それで文句ねーだろ」

麦野沈利にほんの少しだけ人の心が宿ったと絹旗は思った。

うん、と肯くと麦野はさっさと歩き出した。フレンダと滝壺もそれに続いて店を出る。

やっぱり？アイテム？っていいなーと、素直に思う絹旗だった。これだから？アイテム？は辞められない。殺されかけたけど、気にしても仕方ない。麦野は会おう前からああいう奴なのだ。

絹旗は席を立つ。小走りで三人の後を追う。銭湯でどんな風にフレンダをからかってやろう。そんなことを思いながら笑みを浮かべて次の一步を踏み出した。

1 (後書き)

備忘録：初春可愛い レベル0のコンプレックス 絹旗もふもふ

2（前書き）

ほんとうの主人公は彼女だと思っています。浜面ポジション？
縦書き形式推奨中じゃん。

早瀬はほとんど眠れなかった。

顔を洗い、歯を磨く。乱れた髪に手を当ててぼんやりと洗面台の鏡を見つめていた。

無能力者にできることはなにもない。

ほんとうにそうなのだろうか。

化粧もほとんどせず、携帯電話と財布だけを持って寮を出た。あてがあるわけではない。ただ家でじっとしているのが我慢できなかったのだ。

昨日よりはまだマシだがクソがつくほど暑い町中を歩きながら携帯電話を開く。東雲しのめからの返信はなし。佐天さてんも村叢むらぐさも賀古かこも、返事をしていなかった。

足は勝手に進む。駅前の電光掲示板に表示される一〇という数字を見て、時刻を理解した。一時間近く歩いていたらしい。

辿り着いたのは第七学区にいくつかある病院のうちのひとつ。ここは東雲の寮から一番近い病院で、絶対に急患をたらい回しにしない上に必ず助けると言われている伝説級の病院である。火のないところに煙は立たないと言う言葉があるが、妊婦や交通事故を起こした者などその他大勢の急患患者がこの病院を評価している。

そんな病院の前で早瀬は立ち尽くしていた。唇を噛んで、一呼吸置いてから自動ドアを通り抜けた。

受付の女性に案内を受ける。佐天もしくは東雲という患者がいなかと尋ねると不思議な表情をされる。たしかにドラマでもないのに「××さん入院してませんか？」というのもおかしい話だ。面倒

な疑いを持たれないために学生証を提示し、早瀬がただの女子中学生であることを証明して事情を説明する。昨晚の大規模ガス爆発で友達が入院しているらしいのだがその病院の名がわからない。

そこまで言うとその女性は肯いて案内してくれた。東雲という少女は入院していないが佐天涙子という少女はいると言われ、早瀬は深々とお辞儀して佐天のもとへ向かう。

廊下を歩いて行く。会っていいのかな。ふとそんなことを思う自分がいた。彼女はマスコミに取り沙汰されない事件に巻き込まれているのだ。一般人で無能力者の自分が会って困らせないだろうか。

「友達だからいいんだよ」

呟いてみる。自分を納得させようと言葉に出してみた。会っていいのかなどと考える自分に嫌気がさす。

ノックして、どうぞという声が聞こえてから扉を開いて中に入った。

緑色の患者服を着てベッドで上半身だけ起こしている佐天涙子が、早瀬の目に映った。

会ったのは初めてではない。名前は知らなかったが何度か初春ついはるの傍にいたのを見たことがあった。佐天の方は初見なのか首を傾げて早瀬を見つめている。

「佐天さん、だろ？ あたいだよ。早瀬。昨日電話くれたじゃん？」

「あ、あなたが早瀬さん？」

佐天はぱつと明るい笑顔を浮かべた。それが早瀬の胸に突き刺さる。

「ここにいるって聞いてお見舞いにきた。これ、お腹が空いたら食べて」

そう言つて道中に購入したフルーツセットを置く。佐天はありがとうございますと頭を下げた。

「昨日電話くれた直後にあんなコト起こって大変だったみたいじゃん。あたいもう嫌な汗出まくったよ。怪我してない？」

目立つた外傷がある様子ではない。だがベッドの上で安静にしているとところを見るとどこかしらに重傷を負っているのだろう。

「怪我は大丈夫みたいです。すぐに退院できるって言われました」

「そう、よかった」

早瀬は心の底から安堵したような声を出す。

「しっかし驚いたじゃん。ガス爆発なんてさ」

「え、ガス爆発？」

早瀬の言葉に目を丸くしたのは佐天だった。その仕草だけで十分だった。

あれはガス爆発などではない。

早瀬はその事実を知ってしまった。眉間に皺を寄せて、佐天の目を真っ直ぐと見つめた。

「佐天さん。昨日なにがあったんだ」

「え、いや、その」

「佐天さんも教えてくれないのか。あたいはそんなに無力なのかな」

早瀬は自分の髪をぐしゃと握り締め、悔しそうに呻く。

「昨日の晩、佐天さんのことを初春に訊いたんだよ。白井^{しらい}って風紀^{フヤク}委員^{ジメン}の人に突っぱねられた」

佐天は視線を落とした。白井ならやりそうなことだと思ったのか
もしれない。早瀬は拳を握り、唇を噛んだ。

「無能力者にできることなんてなにもない、そう言われてね」

佐天の肩がびくつと震えた。

白井は早瀬を巻き込むまいとした。安全を確保するために、部外
者でいられるよう冷たくあしらったのだろう。佐天にはわかる。

けれど。その一言は、早瀬だけでなく佐天をも苦しめると白井は
考えつかなかった。

学園都市は能力者育成の町。レベルが高いほど優秀生徒というこ
とになり、レベル0は論外の落ちこぼれと呼ばれるのだ。スキルア
ウトと呼ばれるレベル0のやさぐれ集団が出来上がるのも、レベル
の低い者を軽視する社会に我慢できないからである。

力がない。役に立たない。風紀委員^{フヤクジメン}になるための書類、その最初
の項目で能力レベルと能力名を記さなければならぬ。レベル1か
ら5の中からチェックを入れるのだ。その欄にはレベル0という選

択肢がない。

能力がなければなにか別の力が必要になる。初春のような守護神ゴールキーパーと呼ばれるほどのハッカーテクニク。あるいは空手や柔道などのわかりやすい実力。能力者の暴走を鎮める学生による自警団体こそが風紀委員なのだ。ジャッジメント

だから早瀬は初春に接近するだけで風紀委員にならない。ジャッジメントただしくは、なれない。

早瀬は怒っているわけではない。寂しいのだ。友達のためになにか力になることはできないのか。いつまでも守ってもらわなければいけないのか。無能力者は能力者に守られ続ける惨めな存在なのか。

「なににもできないなんてあたいは思わない。思いたくない」

早瀬は佐天に言ったのではない。自分自身に対して言い放っていた。

「佐天さん。なにがあつたか教えて欲しい。無能力者は無能力者なりに力になれるんだ。それを初春達に示してやりたい。危ないのはわかってる！でも、なにもしないで待ってるだけなんてできないんだよ！」

佐天は目を伏せていた。危険だった。たぶん命の危機にさらされるほど危険な出来事だ。部屋を一瞬で吹き飛ばすほどのなにかと東雲は戦っている。それを親友の早瀬に伝える危険を、佐天は把握していた。

だが。それでも。佐天は信じたくなつた。

無能力者の力を。

「スキルジャンパー」

そう、佐天は切り出した。啞然とする早瀬に向かって、佐天はありのままを語った。

村叢は冥土帰しの病院にいた。
ヘウンキャンセラー

奥の奥にある関係者以外立ち入り禁止の部屋で、彼女は立ち尽くす。どここの病院にもある政府要人などが入院する時の部屋である。一般人を寄せ付けず、警戒態勢を敷きやすくする構造をしていた。そんなVIP待遇の部屋に村叢は用があった。

狭くも広くもない部屋の真ん中にぽつんとあるひとつのベッド。普通の病室にはないような大層な器具が頭の方に置いてあるが、それ以外はごく自然な病室だった。窓もあって外の光が室内に射し込んでいる。空調は完璧なようで廊下の茹だるような暑さは室内に入ると忘れた。

村叢は立ち尽くしていた。言葉もなくそのベッドの上で眠っている少女を見つめている。じわりと熱いものが胸の底から湧き出してくる。闇で生きる上で押し殺してきたはずのものだ。

感情。

それをなんと呼べばいいのかわからない。怒りとは少し違う。哀しみとも違う。絵具の色を片っ端から混ぜてできたきつい灰色のような感情。黒にもならないその感情をなんと呼べばいいのか、村叢にはわからなかった。

この少女を守るために戦ってきた。時には彼女に救われたこともあった。三人でひとつ。そういう風にこの数年を生き延びてきた。

それでも、その三人のひとりとは隣にいない。ひとりは左腕に得体の知れない四角い箱を取りつけ、静かに眠り続けている。

村叢は目を閉じた。ぎゅっと拳を握った。わなわなと震えて呼吸を荒げ始める。

口を開く。目の前で眠る少女には届かないとわかりながら、岩の切れ間から風が噴き出すように言葉を告げる。

「……私はなにを恨めばいい？ 誰を恨めばいい？」

返事はない。少女は深い眠りにについているのだ。毒を盛られた。それも白馬の王子様が来ようと決して目を覚まさない凶悪な毒を盛られていた。

守ると誓ったはずだ。出会ったあの時に。賀古と二人でこの憐れな存在を守り通すと誓った。

なのに、この有り様。救うために待機していたのに。遅かった。そして少女は傷ついた。

村叢は雑念を捨てた。賀古を恨む。同時に己を恨み呪い尽くす。彼女はすべてに対する憎悪を掲げ、踵きびすを返した。

早瀬は廊下を歩く村叢の姿を見つけた。佐天の病室から出たところ

るだった。

「おい、村叢！」

「は、早瀬？」

彼女はひどく驚いていた。早瀬も驚いていたが村叢の驚きようは異様だった。目を見開いて、なぜここにいと全身で表現していた。冷静沈着な彼女からは想像できないような声と仕草である。

「村叢こそなんでこんなところにいるんだ？ そっちって病室なんかないじゃん。関係者以外立ち入り禁止だぜ？」

「お手洗いを借りていただけよ」

早瀬が村叢の後ろを見てお手洗いのマークを確認し、なるほどと肯く。

「しかしなんで電話入れたのに取らないんだ？ 返事もなかったじゃんよ」

「私も忙しいんです。早瀬こそ夏休みの宿題終わりました？」

「うっ。まだちょっときついなー」

「奇遇ですね私もきついんですよ。なのでこれから自宅で宿題地獄です」

「あ、なら一緒にやろーよ。二人でやればきつとすぐ終わるじゃん！」

「あら、手伝ってくれるんですか？ レベル4に配布される特別製ですけど」

早瀬は一步後ずさる。レベルが高ければ高いほど優等生なのだ。村叢は柵川中学で数少ないレベル4のひとり。成績ランキングなどでは柵川の五本指に入る秀才だった。それに比べて底辺をいく早瀬が助力できるはずもない。村叢はフンと笑って失礼と告げて立ち去ろうとする。

次の瞬間、彼女の足が止まる。聞き逃せない言葉が耳に入ったからだ。

「東雲鏡はスキルジャンパー」

心臓の鳴動。村叢はなるたけ平静を装いそこにいるであろう早瀬を見やった。

彼女は眉を寄せ、険しい表情をしている。

「この奥にいるのは鏡だな」

早瀬は察しが良すぎる。賀古は嗅覚がいいと評価していたが、村叢は驚愕の色を隠せない。なにも失言していないし、なにも知られていないはずだ。なのにどうして早瀬は鏡がスキルジャンパーであることを掴み、さらに奥に眠っていることを悟った？

村叢が声も出ない様を見た早瀬が首を振り、低く答える。

「簡単じゃん。アンタの来た道、お手洗いがたしかにあるけど電気

がついてない。今の時代病院とか大量の電気を食う施設じゃどこも人体感知電灯を使ってる。なのにアンタの使ったはずのお手洗いは電気がついてないんだ。お手洗いなんかじゃ寄ってないんだろ」

村叢が軽く背後を見てもう一度早瀬に視線を戻す。

「アンタは隠した。この奥にあるはずのない病室に立ち寄ったことを隠した。あたいに隠すってことはあたいに関係あることだ。いや、あたいが関わっちゃマズイことじゃんよ。あたいとアンタ、関わっちゃマズイ。そこまで辿り着きや鏡だつてことくらい容易に思いつくじゃん」

「鏡がスキルジャンパーという話は？」

「とある無能力者が教えてくれたんだ」

「無能力者が鏡の秘密に気づいたと言うんですか？ そんなことは・・・」

「ああ。気づいた。気づいちまったんだよ村叢。目の前の無能力者は気づくことができた！」

早瀬が村叢の肩を掴む。力の限り握り締めた。あまりの強さにぎりぎり痛む。村叢は少しだけ表情を崩した。

「教えるじゃんよレベル4。もう隠したって無駄だ。アンタらは何者だ？ 学園都市でなにをしようとしている？」

「あなたには関係のない・・・」

「ッ、関係ないワケあるかアあああああああああ！」

村叢の言葉を遮る叫び。院内を響き渡る悲しい声に、皆の視線が二人の少女に向いた。

「友達が傷ついてんだ！ 友達が傷つけられてんだよ！ なんて関係ないなんて言えるんだよ！ なんであたいにはなにも教えてくれなかったんだよ！ 賀古にも連絡が取れなかった！ 賀古もアンタらの仲間だったってことか？ あたいらは友達じゃなかったのかよ！」

魂の叫び。叫ぶたびに昨晚の電話の内容が脳裏を過ぎる。それを追い払うかのごとく、早瀬は訴え続けた。

「たしかにあたいは無能力者だ！ レベル0だよ！ けどなにかできることはあるはずなんだ！ 力になれることがあるはずなんだよ！ 現にこうしてあんたらに追いついたじゃないか！ 能力者がいなくなつてあんたらと肩を並べたじゃないか！ まだ無能力者だからと無関係なまま帰されるのか！」

村叢は無表情だった。早瀬の言葉だけが院内を響く。二人以外誰もいないような感じさえする。

早瀬は涙を流しそうな表情だった。思いのたけをすべて吐き出しているのだ。

「友達だからって理由で力になりたいと望むのは、そんなにいけないことなのかよオオオオ！」

雄叫びだ。実に悲鳴とよく似ている。届かない想いを可能な限りぶつけていた。目の前にいるレベル4は受け入れてくれるはずだと信じて。友達という魔法の言葉で繋がるかと信じて。

村叢の反応はシンプルだった。首を横に一往復させるだけ。

「レベル0で私達に届いたのは凄いかもしれない。けれどしょせんそれまでです。その先に進むにはレベル0は非力すぎる」

「て、め、え・・・！」

村叢は見下していた。早瀬の祈りを思いきり汚れた靴で踏みにじったのだ。

「言っただけです。無能力者のあなたが風紀委員ジャッジメントになれるのですかと。あなたが怪我でもしたら悲しいですと。どう曲解したのかは知りませんが、はっきり言っておきましょう」

早瀬は正面に佇む友達のはずの少女の姿が、遙か遠くに離れていくのを感じていた。齒が打ち鳴らされ始める。

「なんの能力も持たない足手まといの無能力者が、風紀委員になれるわけがない」

友達だと思っていた。

「足手まといの無能力者でも怪我をすれば悲しみ傷つく人がいる。そういう人を生み出す愚行を私は悲しいと言ったんです」

ナイフみたいに鋭すぎる言葉。それが雨のように降り注いで、早

瀬を貫く。

「無能力者が傷ついて悲しまなければならぬのは、守る側の我々能力者だ。私や鏡や賀古がどんな想いであなたの無茶を見ていたか知っていますか」

視界が滲む。目尻から悔しさが溢れ出す。

「そうやって泣いていいのは無能力者だけです。私達は涙を流すことを赦されない。無能力者という非力なものを守るために、私達は傷つき続けなければならない」

肩にかけていた手がずりりと落ちる。早瀬は寒さに震えるように歯を打ち合わせ、一步、二歩と彼女から離れる。友達だったはずの彼女は侮蔑と嘲笑を自分に向けている。

早瀬は踏み止まった。それ以上足を下げない。無能力者でもやることはあるはずだ。それを佐天や初春達に示してやると決意したのだ。

早瀬は踏み出していた。一心に奥にある部屋を目指す。関係者以外立ち入り禁止の警告を無視し、あるはずのない病室を目指す。無能力者でもやれることはある。絶対になにかあるはずなのだ。村叢が駄目なら東雲でいい。東雲なら友達だと言えば認めてくれる。なんの能力がなくなっても。

四人は親友だったのだから。

部屋を力の限り開く。バリアフリーが意識され、患者に配慮された病室の扉はまったくの無音で開いた。早瀬は開くなり東雲に声をかけようと思った。大きな口を開き、息を吸い込む。

その動作が途中で止まる。吸い込んだ息がどこにいったのかわからなくなる。声になることもなく、肺から再び吐き出されることもない。早瀬は絶句していた。

「・・・鏡なら自分の声が届くと思いましたか？」

入口のところで、早瀬の隣に村叢が並び立つ。冷静な彼女からは想像もできない表情と口調。

「届かせてみなさい。彼女の力になってみなさい。できるものなら」

早瀬はすくと座り込んだ。腰が抜けたのかもしれない。

普通の病室とたいして変わらない広さの部屋。その中央に置かれたたたひとつのベッド。眠っている少女の頭にはヘッドギアのうなごてごてした器具が備えられていて、左腕のところには四角い箱のようなものがくつつき何本もの管を延ばしていた。幼い少女の身体にはなにもかもが不釣り合いな器具だ。

一緒にセブンスミストという呉服店を回り、喫茶店で談笑して、また遊ぼうねと約束した。たった二日前のことだ。

それなのになぜ、彼女はこんな有り様になっている？

「見る。その目に焼き付けろ。レベル0にできることなどなにもない。これ以上首を突っ込めばあなたもこうなる」

「う、あアああ・・・あアああああああ！」

友達。そう思っていたのは自分だけだった。平穏な日なたで生きているのは自分だけだったのだ。早瀬は頭を抱えて泣き喚いた。声

が擦り切れるほど強く、強く。

ようやく騒ぎを聞き付けた数名の病院関係者が取り囲む。カエル面の医者と目が合うと、村叢は小さく頭を下げた。ご迷惑をおかけしましたと言ってその場を立ち去った。

その医者は腰に手を当てて、やれやれと大きな息を吐く。

無能力者の少女は壊れかけていた。

すべてを懸けてレベル0なりに力になるつもりだった。その覚悟も決めた。ただ友達を守るために。友達を大きな闇から守り通すために。

その守るべき友達は静かに横たわっていた。光が射し込む穏やかな風景のなかで、ただ静かに沈黙していたのである。

二人の男に脇を抱えられて立ちあがった早瀬が喉からひり出した声。それを聞いたカエル面の医者は、目尻の皺を深く刻んでいた。

——友達だと思っていたのに。

2 (後書き)

備忘録：レベル0にできることなどないのか？

3（前書き）

隠れ家についての描写がチラホラ。こつこつ背景描写は好きなんです。

縦書き形式推奨中です。

第一六学区。商業学区として栄えるこの地区は学生のアアルバイト区域として知られている。有名なチェーン店から知る人ぞ知るマイナーな店までとにかく多くの商業施設が揃っている。ビルのテナントはほとんどが会社に埋め尽くされ、およそ人が住める場所はない。アルバイトの学生は他学区から足を運ぶのが普通だった。

アルバイトをするのはたいてい学費を賄えない生徒達である。そういう事情を考慮しているのか学園都市側からアルバイト生を奨励する仕組みができていて、企業としてもそれを大いに利用して盛り上がっているというわけだ。

その商業社会の縮図が描かれているような第一六学区にいくつが存在するホテル。需要がないためにあまり大きくはないのだが、そもそもなぜホテルという宿泊施設が商業学区に存在するのか疑問に思う人もいるだろう。

簡単な話である。アルバイトに枕業がある。それだけの話だ。当然警備員アンチスキルの目が光っているが、実力でねじ伏せるには外の企業が蔓延り過ぎていた。藪やぶを突いて蛇が出てくることを学園都市側も警戒して規制を徹底することは難しい現状がある。

そんな闇の学区で身体を売って手っ取り早く金を稼ごうとする女生徒は後を絶たない。学費のためかもしれないしお小遣い稼ぎかもしれない。本来取り締まられるべき売春や臓器提供、死体処理などのどす黒い部分がこの学区には見え隠れしている。噂では金を払えばなんでも用意する万屋よろずやが存在するとも言われていた。

そんなあやしげな地区のホテルの一室に賀古かこはいた。目の前には男が二人いる。

とは言つても淫らなことをしているわけではない。賀古とその男達は仲間だった。そしてこの一室は隠れ家のひとつでもある。

ホテルというのは不思議なもので、隣の部屋に誰が泊まっているか気にすることはまずない。隣人を気にしないのは単純にホテルの壁が厚いからかもしれないし、部屋に食事を運んでくれるなどと言った外に出ずに済むサービスが隣人の存在を消しているのかもしれない。

そしてホテルは普通数日しか滞在しない。一週間以上の滞在を断るホテルもあるだろう。長期滞在になると衛生面の問題も生まれ、消毒殺菌に費用がかさんでくるものだ。

数日しか滞在しないホテルの隣人など誰も気にしない。

そういう発想を逆手に取るのが賀古のような闇の人間達である。

ホテルの一室を客室に見せかけて隠れ家のひとつにする。ホテルのオーナーと手を結べばそんなことも可能になる。警備員も一般客のいるホテルにさほど目をつけない。そういう隠れ家を転々とすれば掴まれることはなくなる。なにか起きた時は電話一本で隠れ家は客室に姿を変えるのだから。

賀古はベッドに腰かけて脚を組んでいた。この場所を村叢むらぐさは知らない。正面にいる椅子に座っている男と窓際で壁にもたれかかっている男の隠れ家なのだ。

「それで、スキルジャンパーというのはいつ殺す？」

黒髪の男が言う。窓際にいる男だ。一重瞼で特徴のない薄い顔をしているその青年は腕を組んだまま不躰ぶしつけに賀古に問いかけた。

「あら。まだ駄目ですわ。しっかりと状況を整理してから仕掛けないと」

「そう悠長なことを言っている場合か？ あんな存在は学園都市に
いられるだけでまずいのだ。早急に始末したいところだが」

黒髪の青年は学生服を着ている。長点上機学園ながてんじょうきのものだ。腕には
風紀委員の腕章が見える。本来座るべき方向とは逆の座り方をして
椅子にもたれかかっている、黒髪をベースに赤いメッシュを何本も
入れる青年はつまらなさそうに揺れ動いていた。

「そーいきり立つんじゃねーのよ。この人に従ってりゃスキルジャ
ンパーは殺せんだからさ」

「しかしだな。もう四日目だ。警備員アンチスキルでも誤魔化せないぞ。風紀委
員ジャッジメも独自に行動を開始しているところがある。スキルジャンパーを
隠蔽いんぺいするのはこれ以上無理だ」

黒髪の言葉尻は焦っていた。対照的にけらけらと笑うのがメッ
シユを入れる青年。賀古は紅茶を嗜みながらそんな二人を見つめてい
た。

「警備員アンチスキルは上層部がなんとかするつしょー。統括理事会のおじい
ちやん達が動いてんだし。問題は風紀委員だ。正義心なんつーよくわ
からんモンで動いてるんだろー」

「ならどうする気だ。風紀委員ジャッジメントが尻尾を掴んで公表でもすれば一大
事になる。我々風紀委員上役が非難の的になるかもしれないんだぞ」

メッシユを入れた青年が首だけを黒髪に向け、にたりと嫌な笑み
を浮かべる。

「そんなのオレにかんけーないし」

「真面目に考える貴様。それでも風紀委員の長か」

「だーかーらー。それはおまえさんに譲るって言ったじゃん。オレってあんまりそーいうのに興味ないのよね」

賀古は目を伏せる。目の前にいる隠れ家を転々としている二人の正体は、風紀委員。それもただの風紀委員ではない。黒髪が中学高校の垣根を超えて風紀委員を統括する風紀委員上役会（通称は上役）の支柱であり、赤いメツシュの青年がその長だと言うのだ。風紀委員長というわけではない。あくまで風紀委員の他校・他学区との便宜を図る上役会の中心というだけで、権限はなにもないに等しい。

上役会で決められた方針を風紀委員が受理する。そうすることで学園都市のなかでまとまった風紀体制を整えるのだ。学舎の園のよう^{まなびや}に方針を受理しない風紀委員もあって、その時はいかなる事態でも他校・他学区の応援はない。学舎の園のように独力でなんとかする力がない場合は受理せざるを得ない。

黒髪はともかく見た目がひょうひょうとしているメツシュの男の方は風紀委員に叱られる側の人間に見える。チャライのはチャライのだが、言動も仕草もどこか真っ直ぐしていない。ひょうひょうとしているという言葉がぴったりの男だった。

「暗部組織に対抗するためにも貴様には長でいてもらわねばならない」

「なんだよそれー」

「いちいちへらへら笑うな。貴様は風紀委員として警備員とも司法連とも密接に関わっているんだ。もっと毅然^{きぜん}とした態度を取れ」

「風紀委員ねー。オレ可愛い子に風紀乱れてますよ、メツて正されたいなー」
ジャッジメント

「馬鹿者！」

怒鳴られてメツシュの青年はナハハと笑い飛ばす。

「まーその話は置いて。オレがやるべきことはスキルジャンパーの抹消なワケよ。オレはレベル6なんつーモンに興味はないし第一位が目標を殺すことに反対しねー。だから協力したワケだし。ただ納得できねーんだよな、賀古ちゃんよ」

「というのは？」

メツシュの青年は自分の左目のすぐ横を指で軽く小突く。

「オレの目はすべてを捕捉する。アンタとスキルジャンパーの過去も」

メツシュの青年の異名は？断罪する者？。

「証拠はいらねー。オレの目が証拠を捉えてんだ。アンタ、スキルジャンパーを第一位に殺させてなにを手に入れる気だ？」

「そこまで万能ではありませんのねえ」

「そーだね。でなきゃ第六位なんつー微妙なラインに収まってないワケ」

第六位の青年は椅子から立ち上がり、賀古に歩み寄る。

「学園都市に不利になるモンはオレが断罪する。レベル6だろーがなんだろーがこの目を以て断罪する。それを忘れんじゃねーぞ」

賀古を見つめる二つの目。賀古は見つめ返し、ええとほほ笑んだ。第六位はその反応をしばらく見つめ、ニカツと満面の笑みを浮かべた。

「あーん賀古ちゃん可愛いなー。彼女にしたいわー」

「あら、第六位の能力者が私を彼女にしてくれますの？」

「うん。オレ賀古ちゃんみたいなふわふわ娘大好きなのよー。ちなみに嫌いなタイプはね、マグロみてーに無反応な女。ロボットかつーのな」

ああ、第五位のことか。賀古は紅茶を啜ってほほ笑む。第五位と第六位は上手い具合に対になっていた。内面を視て操る心理掌握メンタルアウツと外面を視て操る第六位。セットにされることがあるのだが、どうにも第六位は第五位を好いていないらしい。

第六位は机に置いてあった風紀委員の腕章を手に取り、それを握り締めて歩き出す。

「京谷きやうこ。まずは行くべきところへ行くとしよーや」

「行くってどこに行く気だ」

「決まってんじゃん。一七七支部。一番反抗的なところだよん」

第六位と京谷は部屋の扉を開く。残された賀古の方を見て、第六位は不敵に笑んだ。

「オレがこの町のルールだ。それをわかってねーヤツは全員まとめて豚箱行き決定」

レベル5第六位。ジャッジメント風紀委員でありながら警備員や司法連アンチスキル（学園都市司法研究連盟・実質的に学園都市の法務を司る機関）と繋がる学園都市の番人。

第六位の裁量で少年院に入るかどうかが決定すると言われるほどの能力と権限を持つ。

ゆえに彼は？断罪する者？と呼ばれるのである。

ゲームセンターの奥にある関係者用通路。その最も奥にある倉庫かきねていくで垣根帝督は横になっていた。

元々ゲームコインやUFOキャッチャーのぬいぐるみなどを置いておくための場所らしいが、隠れ家のひとつにさせてもらっている。隠れ家といってもソファと小さなテレビがひとつあるだけの粗末なつくりだ。なにが入っているのかも知らないダンボール箱の山がそこら中に放置されている。垣根がいない時はいつも通り倉庫として使用しているのだろう。

垣根はたいして寝心地の良くないソファで仰向けになっていた。身体がソファに沈むくらい脱力している。その傍でぴったりと寄り

添うように小さくなっている乗オーバークロック取り。垣根の手が頭を撫でる。優しく、慈しむように撫でた。

「・・・このままだったらと生きた先になにがあるんだ。ここで死にしまった先になにがあるんだろっな」

乗オーバークロック取りはすーすーと寝息を立てている。垣根は頭を撫で続けた。

「たぶん、なにもない。この先にはなにもない。希望も絶望も幸福も災厄も。なにもない真せかいつ平らな幻想がある。だからお前は遠慮せず死ね。俺もいつか死ぬし、絶対にまた会えるからよ」

「かき、ね・・・」

寝言だった。無垢な表情で眠っている乗オーバークロック取りを見つめる垣根が、優しくほほ笑む。

「生まれ変わったらお前もちゃんとした人間だといいな。平和でないんにもないくそつまらねえ世界だけど、笑って暮らしてる。ま、その世界に俺はいねえだろうがな」

垣根は乗オーバークロック取りの小さな身体を抱きしめる。ふわっと甘い香りがした。

「俺はレベル6になりてえ。そしてすべてをぶち壊してえ。学園都市のなにかもをぶっ潰して、もう二度と再生できねえくらいぶっ潰して、生まれ変わったお前が笑って暮らせる世界をつくってやりてえ」

ゲームセンターの奥。従業員ですら立ち寄ろうとしない仄暗い闇

のなかで、金髪の男が小さな子供を抱いて震えていた。

「なんで生きられねんだよお前・・・バツカじゃねえの」

ブースター強化個体は脳波をリンクさせることで使用者の能力を上昇させる。それだけ両者の脳に負担がかかってしまい、卒倒してしまう。だから生産が中止されたのだ。

ブースターだが乗っ取りだけは違う。強化個体の最終型。使用者にまったくの負担を与えずに能力の向上を可能にした。負担はすべて乗っ取りオーバークロックに向かう。乗っ取りという通称は？相手の脳波を把握、完全に一致させて能力を乗っ取る者？という意味から来ている。強化個体として使えば能力レベルを上昇させることができるし、相手の脳波をハックして行動不能にすることもできる。

ただしその便利すぎる力の代償は、オーバークロック乗っ取り自身の命。

オーバークロック乗っ取り達強化個体は消耗品と分類されていた。消耗品に長い寿命は必要なく、一律七年の生と言われている。人間ではない。培養液のなかで生まれ、育ち、つくられた存在。

オーバークロック乗っ取りは自分達のことを化物と呼んだ。わけがわからないまま生み出され、なにも説明されないまま？檻？に閉じ込められ、誰のこととも知らないまま消費される運命。人の死体を見て喜ぶのは、きっと人間に憧れているからなのだろう。自分がないものを欲する。手に入れないなら視覚として捉える。そうすることで機械に生み出された不安定な肉体を満足させる。

垣根はわかっていた。

オーバークロック乗っ取りに人の心がないわけではない。誰よりも人になりたがっ

ているのだ。

殺して欲しいと言うのも、人でない自分が嫌いだから。許せないから。可哀想だから。

オーバークロック
乗っ取りの頬に滴が落ちる。

外見で言えば五歳か六歳。実際の年齢は知らない。出会った時からその姿で、七年経った今でも同じ容姿を保っていた。それが意味するところを垣根は考えたくない。

そして、運命の七年目。

どうしてこんなどうしようもない存在が生まれてしまったのだろう。

オーバークロック
乗っ取りがまだ出会ったばかりの小さい自分に言い放った「ころして」を、垣根は忘れない。

研究者どもに囲まれて自分に救いを求めたあの表情を一生忘れない。

？檻？の前で垣根は約束した。

『・・・必ず俺が殺してやるからな』

そんな言葉をかけてやりたかったわけではないのに。その時の自分は盲目だった。乗っ取りにかけるべき言葉を持ち得ていなかった。闇に生み出された憐れな存在を前に、自分はただ涙を流すことしかできなかったのだ。

「レベル6になりてえ・・・なりてえなあ・・・」

オーバークロック
乗っ取りの小さく細い指が垣根の服を掴む。それに気付かないほど垣根は無我夢中で乗っ取りを抱きしめ、闇のなかで呻いていた。

仄暗い闇が生み出した存在がお互いを求め合う。行く先になにもないと知りながら。

早瀬はひとり寮までの道を歩いていった。

茹だる暑さが体力を削る。人ごみがうつとうしく感じる。

常盤台中学の学生服。あれは長点上機学園か。エリート学校の生徒がどうしてこんななんでもないような場所をうろついているのだろう。早瀬はいらいらしていた。どうせ自分は落ちこぼれで無能力者だ。常盤台や長点上機のように休日でも制服を着ると言われる名門校に在籍していない。休日でも制服を着ることで生徒は名門校生というステータスを見せつけられる。学校側は宣伝になる。詳細は知らないがどうせそういうからくりがあるのだろう。上手くできたことだ、と早瀬は悪態を吐いて歩いて行く。

できることなどない。

否定したくてたまらなかった。でも、否定できなかった。傷だらけの東雲を見て早瀬はなにも声をかけることができなかったし、力になることすら放棄した。泣き喚いただけだ。

結局自分は無力だった。村叢に言われて始めて気づいた。

風紀委員の白井という女に言われた時はまだ、どこか心の奥底で自分はやればできるんだと思っていた。東雲の痛ましい姿を見てすべてが自分の思い込みだったことに気づいた。気づくことができた。早瀬は口元に手をあてがう。声を押し殺す。

悔しい。

無力な自分が憎い。

なにもできない自分がたまらなく情けない。

歩く速度は速まっていった。ゆっくり歩いていると泣いてしまいそうなのだ。がむしやりに寮までの道を歩んで行く。人の喧騒がいくつもいくつも横切っていった。ハイウェイを疾走する車の車窓から見える景色のように、次から次へと流れていく。

飛行船の^{エキシビジョン}大画面がニュースを取り上げている。ガス爆発のことなど放送しないのだらうと思ひ、早瀬は見つめながらも足を止めなかった。

昨晚第一三学区を運行中の無人バスが計器のトラブルにより事故を起こし炎上した模様。その火災が原因か家屋がいくつかが損傷。幸い近隣に人が住んでおらず犠牲者なし。^{アンチスキル}警備員により第一三学区への立ち入りは制限されますが安全面の問題は今のところありません。

おかしい。早瀬は思わず立ち止まる。

どうして映像を流さない？ 現場の写真一枚くらい出してもおかしくないはずだ。それに最もトラブルの少ない地区で有名だった第一三学区で無人バスが計器トラブルを起こしたということは、能力者の犯行を疑うべきではないか。幼稚園や小学校が揃う児童地区なのだ。学園都市のなかでバスによる事故などは一番起こりにくい場所だと言っている。外部にいる親を心配させないために人的要因の少ない無人バスを利用するほど安全対策は徹底されていた。

早瀬は頭に手を当てる。もしほんとうに無人バスが事故を起こしたとしたら、馬鹿正直にそれを放送するのか。学園都市統括理事会は証拠隠滅に走らないのか。学園都市の神話を信用して親は子供を

預けている。特に幼稚園や小学生の親はその傾向が強い。今ここでこんな事故を放送したら子供を返してくれと訴える親も出てくる。学園都市の風評も悪くなる。そんな事態を統括理事会は見逃すのだろうか。

政治家の汚職と同じだ。できることなら明るみに出したいくない。非難が集中するのはわかっていているからだ。今飛行船が伝えているニュースは政治家が自ら汚職を自白しているようなもの。

そもそも東雲の寮のガス爆発を封じ込められる統括理事会がマスコミより強いのは明らかなのだ。となると、このニュースはそれ以上にとんでもないことを隠蔽するためのもの？

寒いものが背筋を駆け抜ける。早瀬にはそのとんでもないものの正体が見えている。

「・・・スキルジャンパー」

早瀬が愕然として呟いた直後だった。見知らぬ数名の男達が彼女を取り囲む。

「早瀬優希だな」

男のひとりが問うた。逃げ出すことも許されず、彼女は押さえられて、脇に停まっていた車に押し込められそうになる。

早瀬は叫んだ。助けて。誰か助けて。目いっぱい反抗して逃走しようとする。

車から少し離れた場所で早瀬は捕まり、腕を取られ、そのままの勢いで力の限り頬を打たれた。真っ赤に腫れあがる頬を庇うこともできず、彼女はぼろぼろと涙を溢す。男は追撃した。膝を彼女の腹に叩き込む。ぐあ、と鈍い声を出して吐瀉物を撒き散らした。

「大人しくしてくれるかな早瀬優希。大人しくすれば悪いようにはしない」

早瀬は怯えていた。

いったいなにが起こっている？ この状況はなんだ？

視線を辺りにやる。男は学生ではないが若い。他の男達もそのようだ。この人達は誰だ？

意識が遠退く。今意識を失えばどうなるかわからない。強姦では済まないかもしれない、と早瀬は直感していた。彼らは早瀬優希という名を知っているのだから。

早瀬の泳いでいる目線を見ていた男が彼女の顎を片手で押さえ、顔をずいと寄せた。

「なにも知る必要はない。黙ってついてこい」

早瀬は恐怖で頭がおかしくなりそうだった。男の後ろにいる別の男が拳銃をちらつかせているのだ。明らかに一般人ではない。スキルアウトの一味か。警備員アンチスキルかもしれない。あるいはもっと違うなにかかもしれない。早瀬の知らない巨大な組織の一味であることは間違いなかった。

早瀬の目から涙が毀れていた。

レベル0だ。無能力者だ。だから諦めたではないか。もう首を突っ込まないでおうと気持ちに整理をつけたところではないか。それなのになぜこんな目に遭わなければいけない？ どうして女の子を全力で痛めつけるような男達に襲われてしまう？

守ってもらうばかりではないと思っていた。でもそれが無理だと思ひ知らされた。村叢はあんな言い草だったけれど、結局自分を日なたに帰してくれた。東雲も巻き込まないようにと黙り通していた

のだ。自分は日なたで生きていけるはずではなかったのか。

早瀬が泣きだす。それを黙らせるように重い拳が頬を打った。口のなかに広がる血の味。恐怖が一気に早瀬を侵食していく。がたがたと震え、男を見つめた。

「ご、めんな、さ・・・打たない、で」

心の底から恐怖すると、人間は言葉を上手に紡げなくなる。男に担がれるようにして早瀬は無抵抗で運ばれる。

早瀬は揺さぶられながら思う。自分は村叢の言う通り無力だ。村叢ならこんな男達など簡単にあしらうことができるだろう。守ってもらわなければ生きていけない弱い人間だと気づいた。

レベル0。無能力者。できることなどなにもない。

自分は弱い。弱い。弱すぎる。こんなもので友達を救えるものかもっと力が欲しい。なにか逆転できるだけの力を。能力者になりたい。レベル1でもいいから、この男達を打ち倒すだけのなにかが欲しい。

早瀬は祈った。

たとえ今ここですべてを失うとしても。もう守られる存在にいるのは嫌だ。だから力をくれ。誰でもいいからこの男達を打ち破る力を授けてくれ。神でも悪魔でも、誰でもいい。守られる存在ではなく誰かを守る存在になりたい！

なにも、変化は起きない。能力など発揮できる気配もない。

早瀬は無能力者だった。

（恨むよ、神様、閻魔様。あたいの最後のお祈りも、聞き入れちゃくれないんだね・・・守られ続ける存在が一度でも守りたいと願ったら、こんな結末が待ってるって、そう言いたいのかい）

ぼんやりとした視界が滲んでくるのがわかった。涙で滲んでいるのだと理解していた。

涙。逆転の一手がこの涙か。早瀬は嘲った。

こんなもので誰かを救えるものか。

後部座席のシートに早瀬を置こうとしているのか、男が腰を低くする。その瞬間だった。

ドグシャ！ という壮烈な音が響く。男達が用意したワゴンタイプの車が吹っ飛び、五〇メートルほど先の壁に打ちつけられている。男達がざわついたが、早瀬には一瞬のこと過ぎてなにが起こっているのか把握できていなかった。早瀬はゆっくりとそちらの方を見る。

白い特攻服。拳をこちらに突き出しているひとりの男。

「お前ら。もう言葉も出ねえぞ。ちょっとキツメに根性入れ直す」

早瀬はたったひとりの男の背中を見つめていた。

その男は強かった。拳ひとつですべてを吹き飛ばし、男達を叩き伏せた。

数十秒ほどだった。たったそれだけの間で男達は全員倒れ、特攻

服の男だけが悠然と立っていた。振り返り、彼はニツと笑った。旧日本軍のような日章旗を模したシャツを着た彼はへたり込む早瀬の手を取り、立たせてあげる。

「大丈夫だったか。こんな昼間からろくでもねえ奴らがいたもんだ」

不意に早瀬は膝を折って座り込むとする。手を繋いだままの男は慌てて早瀬を抱き寄せた。
ぐっと二人の距離が近くなる。

「だ、大丈夫か？ 病院行った方がいいか？」

「う、ぐ、す、うううう・・・」

「ええっと、ええー。ちょっとお嬢ちゃん？」

突然泣きじゃくる早瀬に対してしどろもどろする特攻服の男。ばつと辺りを見回した。

（マズイ、人だかりがきてる！）

周りに人垣ができている。なんだ痴話喧嘩か、という声が増え始めて男は汗をだらだら流す。

（うーん、うーん、こういう状況は慣れてねえな。くそう）

男は早瀬の腕を引き、軽く持ちあげた。お姫様だつこである。

「しっかり捕まってるよー！」

男は膝を曲げ、跳ね飛んだ。地上からゆうゆうと二〇メートルほど飛んだ彼を早瀬は見つめ、能力者と呟く。大空を舞いながら彼は気持ちの良い笑みを浮かべた。

「おう。削板^{そぎいた}ってんだ。知ってるかもな」

どこかで聞いたことがある。削板はほほ笑んで、ナンバーセブンと付け加えた。

「レベル5の第七位だ。削板軍覇。良かったら覚えてってくれ」

早瀬は言葉を失った。レベル5に会えて感動したのではない。救ってもらって安堵したのでもない。そういうものとは正反対な感情だ。

また自分は能力者に助けられてしまった。

3（後書き）

備忘録：第六位本格的に登場　賀古の立ち振る舞いに注目
今さら路線変更できないので鎌池先生第六位の登場は待ってください
いいい。この作品が完結するまでに第六位出てきたら詰む。これは
鎌池先生と僕との勝負ってわけだね・・・！

4（前書き）

中だるみさせないように文章やストーリーにメリハリをつけたいところ。

縦書き形式推奨です。ちなみに第四章＋終章で完結の予定。予定は未定ですが。

沈黙を貫く少女がとある病室で臥せている。

左腕に取りつけられた四角い箱のような器具は特殊な電磁波で細胞分裂を調整することで、あらかじめ移植されていた細胞の分裂成長を促進し、肉体の欠損を修復する力を強めていた。本人の再生細胞を使っているので副作用もないし拒絶反応もない。臓器でも半分ほど残っていれば健全な増殖細胞の一部を培養、欠損箇所に移植することで数日もあれば臓器を完全再生させる画期的な器具である。

＜ガンキャンセラ＞

つくったのは当然冥土帰しであり、特許を申請しているわけでもないのに模造品がつくられることが今のところない。科学の最先端

＜ガンキャンセラ＞

が集う学園都市でも、こういう原理で冥土帰しが完全再生医療を実現しているのか解明できていないからである。それも縦・横・奥行きが二〇センチ程度のちまつこい器具で完全再生させているのだ。

＜ガンキャンセラ＞

冥土帰しはその器具を誰かに触らせることはしないし、誰かに組み立て図を提供することもない。事実上ここまで高度な再生医療技術は冥土帰しだけが使用可能なのである。

＜ガンキャンセラ＞

少女の脳は正常に機能していた。たび重なる実戦で疲労していたが冥土帰し＜ガンキャンセラ＞の調整が入り、一晚を経て安定したのだ。一〇時間近く経過すると身体を脅かす危機も去り、無意識に行っていた肉体再生も脳が必要ないと判断して停止した。

少女は目を覚まさない。目覚めるには血を失い過ぎた。今少女の体内で血液が精製されている真つ最中で、肉体が起き上がらせようとはしなかった。少女が目覚めたいと願っても身体がそれを許さない。

脳は今なんの能力も使っていない状態である。ベクトル変換による血流操作もしていないし肉体再生も行っていない。フリーになっ

た？パーソナルリアリティブレイン？は起動する。

少女の願望を叶えるため、脳は動かない身体を置いて最大の力を発揮する。

少女は願っていた。深淵のなかで聞いていたのだ。親友達の声を。悲痛な嘆きを。

力になってみせる。今度こそ誰も死なない結末を迎えてみせる。誰も死なせたりはしない。

もう実験で殺されるのは自分だけでいい。沈黙する少女の目尻が弱々しく光った。

かみじょうつみ

上条当麻は自宅でゆったりとテレビを見ていた。インデックスも同じようにテレビを見ている。この修道女にはテレビが珍しいらしく、日がな一日番組を見ていても飽きないそうだ。上条にとってすればそれは非常にありがたい話である。面倒事を起こしてこの暑さのなか新居探しという展開は誰も望んでいない。もちろん上条も望んでいない。

そろそろお昼ご飯の準備を始めるかなーと一時を指す時計の針を見つめながら上条は心のなかで呟く。ご丁寧に昼の一二時にいただきますをする必要もないし、準備といってもあり合わせで炒める程度のことだ。なにより上条がそう考えたのはインデックスの目が料理番組に釘付けになっているからである。涎をじゅるじゅると囁く音が聞こえそうな顔で料理番組を見つめられると、家主として気まずいものがある。そしてその何気ないサインを見逃すと一二時ま

で待てなかったインデックスが噛みついてくる危険もある。

上条はお決まりの「不幸だー！」と叫ばないために事前行動に移る。噛みつかれると痛い。馴れる程度の噛みつきではないのだ。本気で歯型が数日消えない強さで噛みついてくる。もつと甘噛みだったら笑って許せるのになー、などと溜息を吐いて上条は立ち上がる。

「とうま？」

「昼飯でもぼちぼちつくるよ。なにがいいー？」

「ハンバーグ」

「んなもん昼間っからつくれるか！」

上条はテレビ画面を見る。和風おろしハンバーグの映像があった。豆腐でつくるお手軽簡単ハンバーグ、というタイトルだった。インデックスはキラキラと目を光らせて上条を見る。

「インデックス。ハンバーグはな、全然お手軽じゃないんだ。せめて夜にしよう。昼は軽めで勘弁してくれ」

「えー。インデックスはハンバーグが食べたいかも」

話を聞け。上条は項垂れ、キッチンへ向かう。文句を言ってもインデックスは腹が減ればなんでもいいと言い出す。だから上条はあえてスルーした。インデックスもそんな上条のスルーから行動予測を立てたのか、立ち上がって牙を見せつける。

「とうま、またスルーして適当なあり合わせで済ませる気だよね」

「え、なんのことですか」

上条の声は上擦っている。インデックスは大きく口を開き、飛びかかる。「かかか噛まれるー！」と叫び声をあげる上条の後ろで、扉がバンと開いた。

「上条当麻はいるかー！」

つちみかで まいか
土御門舞夏が扉を開いて立っていた。頭にインデックスというオプシオンを乗つけた上条が首を傾げ、その意外な来客を見つめていた。

「兄貴が呼んでるー。すぐに着替えて出かける用意をしとさー」

「土御門が？ でもこれから飯つくらなきゃ」

「私がつくってやるよー。兄貴に頼まれたし断れんよなー」

インデックスの目が光る。

「ハンバーグつくってくれる？」

「材料さえありやつくってやるぞー。あるのかー上条当麻」

ないことはない。けれどそれは逼迫する上条家の冷蔵庫に残る最後の希望だ。インデックスの腹を満たそうとすれば全滅必至である。

「あるんだなー。じゃー手塩によりをかけてつくってやるぞー」

「わーい！ とうまなんていないかも」

インデックスの冷たい視線が上条に向けられる。仮にも家主に向かってその視線は冷た過ぎる。舞夏もにっと笑って、さっさと行けシッシと手を払っていた。

不幸だ。上条は半分涙目で身支度を調べて、寮を飛び出した。

寮を出たところで土御門元春が待っていた。アロハシャツを着てサングラスをかけている彼は上条を見つけるなり「遅いにゃー」と気持ち悪い語尾をつけて話しかけてくる。出会いがしらに上条は腹パンを食らわせておいた。

「つてなにすんだ上やんー！」

「うっせ！ 全部おまえのせいだろ土御門！」

いきなり口論に発展する二人。わけもわからず要らない子扱いされた上条とわけもわからず殴られた土御門の恨み合いは激しさを増す、かと思われたがすんなり土御門が引き下がった。

「まーそれはいいですたい。時に上やん。今この町でなにかが起こつてるのは知ってるかにゃー」

「あー？ なんだよ土御門。えらく真面目な顔してるじゃねーか」

「今朝青髪ピアスの奴から電話がきたんだにゃー。うちの高校の前で人が襲われたらしい」

「なんだって？」

サングラス越しの土御門の目は本気だった。冗談を言っている目ではない。

「人が襲われたって、うちの学校の生徒か？」

「いや、違うみたいだ。襲われたって高校生男子だぞ。でかい刃物でザツクリいった。生きてるのが不思議らしい。校門前で大騒ぎしてる警備員アンチスキルも頭にはてなマーク浮かべてる」

いつの間にか土御門はいつものふざけた口調ではなくなっていた。彼の口調の変化だけでも事態の深刻さがうかがえる。こんなに真面目な彼を上条は初めて見た気がする。

「能力者の仕業か」

上条は低い声で呟く。学園都市では、刃物で斬られると言ってもそれが凶器として残されるきちんとした物とは限らない。風の刃を生み出して鎌鼬かまいたちのように斬り裂くこともできるのだ。

それにスキルアウトという集団を始め能力を使えない者達は経験がなくても相手を殺せる拳銃などに頼りたがる。能力者の仕業だと判断するには十分だった。

土御門は渋い表情のまま上条を見やる。

「襲ったのも襲われたのも、おまけに救ったのも能力者だぜい上やん」

「救った？」

「生きてるのが不思議だと言ったよな。実は臓器に届くまで斬り込

んでいるのに血管だけは繋がってるっていう説明できない現象が起きている。普通なら失血死してるところだぞ。血管だけを繋ぎとめた器用な能力者がいたとしか思えない。襲ったヤツがそんな回りくどい救い方するとは思えないしな」

治療系能力者。噂には聞いていたがそういう存在を上条は見たことがなかった。襲うだけの実力者がいて、その実力者の目をかい潜り負傷者を治療した能力者がいる。

「で、いったい誰が襲われたっていうんだ、土御門」

「現役風紀委員だ」

言葉を失いかけた。学園の風紀を正す対能力犯罪者のエキスパートが殺されかけたというのか。

土御門はサングラスを軽くあげる。

「本来俺や上やん、青髪にや関係ない話なんだけどにやー。うちの学校の前でそんな大それた事件が起こってクラスの皆が不安がってるのが現状だ」

「・・・でも、だからって俺達はどうすんだ？ 落ちこぼれのク^{デル}ラ^{タフ}オースの三バカになにかできんのかよ」

「上やん。今朝のニュースは見たか。一三学区のニュースだ」

「え？ ああ、たしか無人バスが事故って建物がいくつか損傷したって」

「これを見ても同じことが言えるか？」

土御門は携帯電話の画面を上条に見せる。上条は今度こそ絶句した。解像度の低い画面でもはっきりとわかる。建物がバスの事故などではあり得ないほど崩壊している。それもひとつではなく、無数の建物が崩れていた。爆撃された町のようにもある。

「わかるか。マスコミはなにかを隠してるぞ。この襲撃もただの襲撃じゃないはずだ。そして昨日起こった寮のガス爆発。あれがニユースにならなかったこと、知ってたか上やん」

「土御門おまえ・・・」

「俺達はたしかに落ちこぼれた。けどこんな時にじつとしてられないだろう。俺もおまえも守りたいものがあるんだ。なにが起こってるかくらいは知るために行動したってバチは当たらない」

土御門はそう言っただけで自分達がいた寮の窓を見つめた。舞夏とインデックスのことを言っているのだろう。上条は肯く。今ここにある平和を乱されるのを見過ごしてはいけない。

「青髪はクラスの皆を安心させてくれてるらしい。小萌先生含めてな。俺はこれから一三学区に向かってみる。なにか話を聞けたらラッキーだよー」

「俺も心当たりを探してみる」

昨日の少女。病院で出会った佐天さてんという少女に話を聞いてみる。スキルジャンパーというわけのわからない存在にやられたらしい。そのわけのわからない存在が実在しているとすれば、この得体の知れない騒ぎにも通じている可能性が高い。

「上やん」

「なんだ」

「無理だけはするなよ」

「おまえこそな」

土御門と別れ、上条は走り出す。

高校の前で風紀委員が殺されかけた。そのことでクラスの皆は悲しみ、担任である小萌先生は涙を流しているだろう。もう無関係ではなくなった。この町を巻き込む事件に関わってしまった。

だから上条は駆ける。息を切らして駆け抜ける。自分が守るべきものを守るために。

学園都市最強に勝利した最弱が、すべてを終わらせるために。

御坂美琴と白井黒子はソファで向かい合っていた。白井の隣で初春が静かな寝息をたてている。それを横目で見つめる白井が苦悩するような表情で頭に手を当てた。

「わたくしは初春をも傷つけてしまいましたのね」

「黒子は正しいことを言ったまで。真実じゃなくても、巻き込まないために正しいことを言った。私はそんな黒子を責めないよ」

「ありがとうございますの。でも、やっぱり初春は傷ついてしまいました」

白井はわざと冷たくあしらった。レベル0にできることなどなにもないと言つてのけた白井を褒めてやりたいくらいだ。自分ではそこまで非情になりきれなかっただろうと御坂は思った。

あのツンツン頭の青年。レベル5第三位の御坂だけでなく第一位をも倒してしまったレベル0。彼ならきつとこの現状をなんとかできる実力がある。けれど、彼でもないレベル0になにかできると御坂は思えなかった。無敵の盾を持つ第一位の額に傷を負わせるほどの能力者だ。自分でも相手にならないかもしれない。そんな危険な相手にレベル0をぶつけて最悪の結末以外が待っているとは思えない。だから白井は冷酷になった。御坂もそんな白井をそし谤ったりしない。

あの電話での発言は間違っていなかった。白井はなにも間違ったことは言っていない。

それでも傷つけてしまうことは避けられなかった。レベル0達の心をひどく傷つけた。そして初春はそんな白井の発言に反抗するために夜通しがんばった。御坂や白井では辿り着けない核心をその手に掴み、訴えた。

救つてやると思わないでくれ。弱者を守つてやると上から見下さないでくれ。初春は御坂にそう訴えた。御坂はその訴えを聞き入れた。

「レベルが低くたって私より強いヤツなんて腐るほどいるのよ」

御坂は自分を笑う。ツンツン頭の青年がその良い例ではないか。彼は努力を放棄したのかもしれないが、強さを誇示する人間ではな

かった。努力を放棄せず力を誇示するレベル5達とは真逆の人間だった。御坂も力を誇示しなかったと言えば嘘になる。超電磁砲^{レールガン}の力を使ってレベル0達を蹴散らすことも多くあったのだ。話し合いをする気もなかったし、スキルアウトの人間に言葉が届くとも思っていないかった。ツンツン頭はまず言葉から入る。超電磁砲^{レールガン}のような強大な能力がないからだろう。けれど、最初に言葉で相手を諭そうとするのだ。

御坂とは正反対の存在。それがツンツン頭の無能力者。

御坂は無能力者を無能力者と馬鹿にできなくなった。彼のおかげで。

だがそれでも皆が皆あのツンツン頭と同じわけではない。その見極めを失敗すれば悲劇が生まれるだけだ。初春もそう考えているから早瀬^{はやせ}という少女に連絡しないし佐天にも掴んだ情報の内容を教えない。巻き込みたくないと思っているから。

傷つくのは風紀委員である自分達だけで十分だ。初春はそう考えているのだろう。この幼い寝顔からそんな強い言葉が出てくるとは思えないが。

「掴んだ情報。驚きというか、にわかには信じられませんの」

白井が机の上に載っている数十枚のレポート用紙を見つめた。初春が掴んだ情報をプリントアウトしたのだ。ネット回線を経由している以上勘付かれた瞬間に閲覧ができなくなる。ランクSの情報にもなるとネット回線を丸ごと切断してくる可能性があった。そうなる前にプリントアウトし、閲覧不可になる状況を避けたのである。

？恵まれた双子計画^{ツインエンジェル}に関する概要と実行時における注意点の報告？
という見出しで始まるその用紙の束には、恐ろしい内容がいくつも

載っていた。えげつない、と形容するべきか。

まず目に留まったのは一方通行という文字。その下位に垣根^{かきね}や麦^む野^{ぎの}といったレベル5達の名前が連なっていた。そのなかに御坂美琴の名はない。

なぜ載っていないのか。つい数日前に頓挫した？絶対能力者進化計画？で邪魔をしたからかもしれない。しかし自分の名だけ載っていないところを見ると悪意があるとよくわかる。

「お姉様。これは表に出すべきですかしら」

白井が眉唾な情報を見るような目をしている。たしかに信じられない情報ばかりだった。

？色彩追跡？という能力者を使った？プロデュース？による自分^{パーソナルリアリティ}だけの現実領域の解明。そして一方通行への応用、レベル6誕生を目指すも最終段階で挫折。最終実験が失敗に終わったためだ。

？プロデュース？の研究員達は挽回をはかり新たな計画を立ち上げる。一方通行の自分^{パーソナルリアリティ}だけの現実および演算方式を解明することに走り、一方通行^{アクセラレータ}を上げるのではなく他の者を一方通行^{アクセラレータ}クラスにまで引き上げることを目指した。？暗闇の五月計画？と呼ばれたその大規模プロジェクトの末、被検体の数名に自動防御能力を付与することに成功した。その被検体の名が絹旗最愛^{きぬはたさいあい}である。？室素装甲^{オフエンスアーマー}？を操る少女だ。御坂は絹旗と直接会ったことはないが？アイテム？の一員であることは知っている。？絶対能力者進化計画？の道中、御坂は？アイテム？と交戦したのだ。

気分が悪くなってくるような研究報告書である。白井もあまり深く理解したくない、という表情をしていた。御坂も二度読み返したと思わない。

しかしあらかじめ読み通してみると、ひとつのことがわかった？
ツインエンジェル
恵まれた双子計画？は一方通行を主軸に置いた巨大なプランだとい
うことだ。？プロデュース？という研究チームが結成されて自分だ
ルリアリティ
けの現実が解明されるのはその巨大なプランの始まりに過ぎなかつ
た。脳を六つに切り分けるといふ非道実験も巨大なプランの一角だ
つたというわけだ。

だがその最終実験が失敗し？恵まれた双子計画？は崩壊。その研
究員は？暗闇の五月計画？に流れて行く者と？絶対能力者進化計画
？に流れて行く者に別れた。そして？暗闇の五月計画？チームは絹
旗最愛という少女を生み出しただけで一方通行レベルの存在を生み
出すことは叶わずに解散。そのほとんどが？量産型能力者計画？に
失敗した研究員とともに？絶対能力者進化計画？チームに合流し、
計画成功のために従事した。

つまり、あの忌まわしい？絶対能力者進化計画？を生み出したく
そつたれた研究員どもの母体、本筋とも言つべき計画が？恵まれた
双子計画？だということだ。それだけで御坂のはらわたは煮えくり
返りそうになる。

（どの計画でも主軸には一方通行がいた。それなのに今回は私を除
くすべてのレベル5に機会が与えられている。レベル6へ唯一辿り
着ける者が一方通行ではなかったの？）
アクセラレータ

御坂が疑問に思うのには理由がある。御坂は自分の体細胞クロー
ンである妹達の虐殺を黙って見ていることができず、阻止しようと
力を尽くした。その途中で手に入れた？絶対能力者進化計画？の実
験レポート。そこにはたしかに『レベル5のなかで唯一レベル6に
辿り着ける者を一方通行と呼ぶ』と記されていた。そういう前口上
で実験レポートは始まっていたのだ。すべて樹形図の設計者による
予測演算らしい。？恵まれた双子計画？も当然ながら樹形図の設計
ラム
ツインエンジェル
ツリーダイアグラム
ツリーダイアケ

者による演算を基準に実験をまとめていただろう。ならばこの食い違いはなんだ？

御坂がレポート用紙をめくる。眉を寄せて、その文字を睨みつける。

「……絶対能力者覚醒計画？——？ツインエンジェル恵まれた双子計画？から引き継がれた今回の大規模実験の名だ。

（進化ではなく覚醒？　なにか引つかる……）

この実験も主軸に置かれているのはあくまで一方通行アクセラレータのようではあるが、『第三位を除くすべてのレベル5にまだ見ぬレベル6への覚醒が可能である』と明記されている。

そもそも？絶対能力者進化計画？では一方通行アクセラレータが超電磁砲こと御坂美琴を一二八回殺害することで能力の経験値を蓄積し、力を引き上げるといふ演算結果を基に行われた。実戦で能力を用いることたとえば発火能力パイロキネシスの威力を上昇させ、その命中率を上昇させるという？能力上昇？の実証データがあるようだ。？絶対能力者進化計画？はその実証データを基にしているのだろう。

しかし当然御坂美琴は一二八人もいないし、レベル5を一二八人も用意することはできないので研究者達は？量産型能力者計画レディオノイズ？の失敗作である妹達シスターズに注目した。二万体を用意することで同様の結果を導けると樹形図ツリーダイアグラムの設計者は言っただけらしい。

御坂は顎に手をやって、レポート群に視線を落とした。

（ようするにスキルジャンパーひとりで私一二八人分の実力つてことよね……笑えないわよまったく）

スキルジャンパー一体を殺すだけでレベル6に覚醒する。それだ

け激しい交戦を予想し、その経験値も凄まじいものだろうと樹形図ツリーの設計者は予測演算した。超電磁砲レールガン一二八人分の経験値を一手に引き負うだけの人間。

（そんなもの、馬鹿げてる。というかなんでスキルジャンパーがレベル6じゃないのよ。あいつよりんでもない存在があるっていうの？ スキルジャンパーをレベル6と判断しない学園都市側の判断の根拠は？）

御坂も白井も口をきかなかった。黙々と資料に目を通している。

白井は時々パソコンに目をやり、なにかを確認しているようだった。御坂の目がレポートのひとつに留まる。？自分だけの現実？という文字。

カエル面の医者は言った。スキルジャンパーは奇蹟ミラクルの存在だと。

そして？パーソナリティブレイン？とも呼んだ。

『彼女の脳は九〇パーセント以上を自分だけの現実パーソナルリアリティに占領されているね。本来なら言語知覚その他一切のことができなくなるレベルで脳機能が破壊されたんだよ。けど、彼女はなぜかまったく正常な脳機能を保つことができたんだね。僕にも説明できない。奇蹟としか言いようがないんだ』

レポートと照らし合わせるとその話がよくわかる。一般的な脳の自分だけの現実領域はわずか一パーセントにも満たない。無能力者と分類される人達に至っては〇・一パーセントに満たないこともある。一方でスキルジャンパーは器材の暴走により九〇パーセントを自分だけの現実領域に支配されてしまった。正常な脳の機能を丸ごと破壊してしかるべき状態だったのだ。

研究者達はその奇蹟を奇蹟と認めなかったらしい。器材の暴走を暴走と言わず、暴走実験は成功したと手の平を返してまったく同じ器材を用いた実験暴走を複数回実行した。その時犠牲になった子供達は実に三二名。そのうち一〇名は言語機能といった脳機能の一部に異常を遭し、八名がほとんどの脳機能の不全に陥り、残り一四名はすべて脳が死んだ。

そこまで繰り返してようやく研究者達は奇蹟だったと認めた。スキルジャンパーをレポートでは偶然の産物と断言している。ちなみにツリーダイアグラムに樹形図の設計者による演算ではスキルジャンパーのような偶然の産物が生まれる確率は一千万人にひとりだったようだ。実験終了からずいぶん経っていたようで、なぜその時に演算しなかったのかと研究員の間でも揉めたらしい。

揉めたという話はカエル面の医者のものでどこまでほんとうかはわからないが、レポートには研究者数名を危険人物に指定している。以上の者は計画を阻止する可能性があるので警戒するように、との注意書きがされている。

ふと御坂は苦笑いする。その要注意研究員のすぐ横に自分の顔写真と名前が載っているのだ。御坂美琴は実験を阻害する可能性が高い、ということだろう。よくわかってるじゃないと御坂は笑ってしまったのだ。

御坂の隣にも何名か学生の顔が並んでいる。ほとんどが高校生、スキルアウトの一員だ。何気なく流し見していると、ふと見覚えのある制服を見つける。御坂の息が詰まった。

柵川中学校。

顔写真の下には早瀬優希という名前が記されている。

「どついうことよ、これ・・・」

御坂は震えながらレポートの一枚目を開き見る。大きな題字のすぐ下に載っているその名前。

『研究チーム？恵まれた双子計画？担当主任　ツインエンジェル　賀古直毅』

4（後書き）

備忘録：土御門に留意 賀古直毅の存在
やっ　と行間が本編にからんできました。色彩追跡は当然ながら僕の
オリジナル能力です。

5（前書き）

なかだるみさせぬぞー。というわけで第三章五話目です。縦書き形式推奨中。

麦野^{むぎの}が携帯電話の電源ボタンを押した。ふうと息を吐く。

例のファミレスである。いつもの四人組で定位置を陣取っている。

「結局どういう話だった訳なの？」

フレンドが問いかける。

四人は隠れ家で着替えを取ると銭湯に行つてさっぱりした。その後このファミレスに赴き、麦野が知り合いの情報ハッカーに連絡を入れた。この実験の裏を取るためである。かつて？アイテム？に仕事の依頼が来た時に共闘した男で、守銭奴なところはあるがハッカーの腕前は相当なものだ。今回も麦野が謝礼を弾むと言つたら喜んで食いついてきた。金のためなら親だろうが飼い主だろうが敵に回す奴だ。いずれ殺されるだろうと思っていたが、思わぬところで役に立ったと麦野はほくそ笑む。

そして情報ハッカーが仕入れた情報を聞き、通話を終了して今に至る。

「まず樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者の残した研究データについて調べさせた。今回の実験に関する情報がないかとね」

樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者自体はすでに失われている。謎の攻撃で大破したそうだが研究データは他所で管理している。

樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者はあくまで演算のためのスーパーコンピューターで、余計な情報を蓄える場所はない。すべて他所の施設に転送され、さらにその施設から必要な施設へ転送されるものなのだ。そういう管理体制を想定して設計されている。

情報ハッカーは手当たり次第に調べたらしい。麦野は「こいつ死んだな」と素直に思ったが口には出さなかった。今日のうちにも頸と胴がさようならするかもしれないが、それだけ情報ハッカーは重要な情報を手に入れていた。

「絶対能力者進化計画？、？プロデュース？と？暗闇の五月計画？というどこかで聞いたことのある名前と？絶対能力者覚醒計画？という聞いたこともない名前。一番最後のやつが今自分達の置かれている状況だと麦野はすぐに理解した。情報ハッカーに最後の計画の情報だけ話させた。

簡潔にまとめるところだ。？絶対能力者進化計画？が失敗したが、スキルジャンパーは超電磁砲一二八人と同程度の経験値を有するとツリーダイアグラム
樹形図の設計者は過去に演算していた。よって？絶対能力者覚醒計画？と名前を変えて実験を再開させる。なお？絶対能力者進化計画？とは異なりスキルジャンパーにはすべてのレベル5をレベル6へ覚醒させるだけの経験値を期待できるため、今回は一方通行以外のレベル5にも参加させることとする。

ざつと概略を述べるとこんなところだ。麦野は爪を噛む。腑に落ちていないのだ。

「それ、なんかおかしい」

言ったのは滝壺理后たきつぽりこうだった。絹旗きぬはたが力強く肯く。

「超電磁砲一二八人と同程度つてのは超納得できるんですけど、ならなんで？絶対能力者進化計画？の時に他のレベル5を呼ばなかったんでしょね？」

「同程度の経験値とか言いながら前後が矛盾してる訳ね」

フレンダも続く。麦野は頬杖をついた。そこが気になっている。喉に刺さる小骨のような引つかかりだ。

それに進化ではなく覚醒という言い方もきな臭い。まるで自分のなかにあるなにかを開花させるような物言いではないか。経験値という言い方をしているのも自分をゲームのキャラクターに置きかえられているようで、気に食わない。

「違うよ」

やいのやいのと言い合うフレンダと絹旗に向かって滝壺が静かに言い放つ。

「おかしいのはそこじゃない」

麦野が滝壺に視線をやった。彼女の瞳が不気味な色を燈している。

「スキルジャンパーに超電磁砲レールガン一二八人分の経験値なんてない」

誰も声を出せなかった。一〇秒以上経ってから、絹旗が待つてくださいと切り出す。

「スキルジャンパーの実力は超半端ないですよ。一二八人でも足りるかどうか・・・」

「ううん。違うよきぬはた。あの人は超電磁砲レールガン二人でも勝てないくらい弱い」

「そんなまさか」

「私の能力がそう言ってる・・・」

麦野が口到手を当てた。なるほど小さく呟く。

AIM拡散力場。滝壺はそれを感知・特定して追跡できる能力者だった。

滝壺はスキルジャンパーのAIM拡散力場を特定している。そして無意識に放散されるAIM拡散力場は個人の能力レベルによって大きく左右されるところがある。彼女の見立てではそれが超電磁砲^{レベルガン}二人分にも届いていないのだろう。それにレベル5一二八人分の能力を持つ人物ならばAIM拡散力場の影響は学園都市全体を凌駕するはずだ。わざわざ特定する必要はないほど目立っているはずなのだ。幼稚園児に紛れて二メートルを越す大男が佇んでいるようなものがある。

滝壺が言っていることはそれほど外れていない。少なくとも超電磁砲^{レベルガン}一二八人分に勝る経験値があるとは思えない、というのは麦野も同感だった。敵を殺さずに、まして救ったりする甘い性格の持ち主がそんなたいそうな経験値を持っているものか。

「だとすると、この実験の意味は変わってくる」

麦野が言った。三人の視線がレベル5第四位の麦野に集まる。

「レベル5を集めることになにか理由がある。？絶対能力者進化計画？にあつて？絶対能力者覚醒計画？にないもの——それがレベル5全員の参加だ」

麦野は怒っていた。こんなくだらない与太話に付き合わされたの

が不快極まりないのだ。

彼女は誰よりもはやくこの実験のほんとうの意味を理解した。

「私達は全員一方通行の前戯立てだよ。くっだらねーよな、ホントくっだらねー」
アクセラレータ

レベル5達が学園都市を巻き込んでスキルジャンパーを追う。誰もが手段を選ばずに彼女を殺しにかかる。そんななかで臨機応変に振る舞い見事スキルジャンパーを抹殺したその時、一方通行はレベル6に覚醒することができ。レベル5達を嘲笑うように一方通行がスキルジャンパーを殺したその時にレベル6への展望が開かれるということだ。

麦野は髪をわしゃわしゃと掻き乱し、俯いた。
なにも言うことはない。

ただ行動で示させてもらうだけ。

「やるぞ、おまえら。スキルジャンパーを第一位より先に殺す。そしてこのくっだらねー実験をぶっ潰すんだ。なめやがって」

麦野の低い声が恐ろしさを駆り立てる。絹旗がなにか言おうと口を開くが、麦野がバンとテーブルを手で叩く。びくつと絹旗は震えた。

「いいから、黙って従え」

三人はそれ以上口を開くことはなかった。

御坂と白井はソファから立ち上がっていた。扉が勢いよく開かれたからである。

「ハローハロー！ 元気にしてるかなあ超電磁砲と一七七支部の皆さん？」

軽い口調。 厳重なセキュリティロックの掛けられた風紀委員事務所の扉を簡単に開いた。 御坂は目の前の男達を睨みつける。 二人の男の腕には風紀委員の腕章があった。
風紀委員であれば当然セキュリティロックを通り抜けられる。

「第六位！」

「？上役？まで・・・」

白井も奥の黒髪の男を見つけて唇を噛みしめる。 第六位と黒髪はソファの傍にあるテーブルまでずかずかと歩いて行き、レポートの束を手に掴んだ。

「へー。 おもしれーモン手に入れてるじゃん。 けどさー」

第六位はそれを破り捨て、紙吹雪を散らした。

「ダメなんだよねーこういうの。 わからないかな？ お前はお呼びじゃねえんだよ超電磁砲」

ボツと全身に鳥肌が襲いかかる。殺気だ。

黒髪の男が前に出る。腰に挿した鞘から白銀の刀身を抜き放った。

「ジャケット風紀委員上役会の一員であり第一八支部長の京谷きやうこだ。能力レベルは恥ずかしながら3しかない」

京谷は一步步レベル5とレベル4に向かって迫り寄る。その威圧感レベル3のものではなかった。レベルという概念を超えた殺気を内包している。

研ぎ澄まされた真剣のような殺意。京谷は刀を真つ直ぐと構えた。

「……死合……う前に名乗るのは礼儀であらう？」

白井は動く。御坂の手を取り、レポート空間移動したのだ。支部の外に出る。割と大きな道路だ。

「ちよつと黒子！ うついはる初春さんが！」

「奴らの狙いはわたくし達ですわ！ 部屋のなかで戦ったら初春も無事では済みませんの」

「けど……」

部屋のなかには初春が残されている。奴らが初春に危害を加えるかもしれないし、人質にするかもしれない。白井は迷わず空間移動したが御坂は不安で仕方なかった。

少しして二人の男達ジャケットが階段を下りて姿を見せる。黒髪の京谷とメツシュの入った第六位。風紀委員の腕章が目立っていた。

「いきなり逃げるなんてヒドすぎじゃねー」

「狭いところでは戦いにくい。その判断力は評価しよう、白井黒子」

京谷はゆつくりと歩み寄ってくる。刀を見せつけていた。

初春を人質に取っている様子はない。ジャッジメント風紀委員としてそれなりの矜持があるというところだろうか。京谷という男は侍さながらの真つ直ぐさを御坂に見せつけていた。

アンチスキル道路を塞ぐ御坂達の騒ぎを前に人だかりができているが、すぐに警備員が駆けつけ人払いを行っている。その対応ははやすぎて不気味なくらいだった。

「アンチスキル警備員？　なんで人払いなんか・・・」

「わかんねーのかい^{レールガン}超電磁砲。アンチスキル警備員は協力してくれてんのさ。オレ達の喧嘩にな」

喧嘩に協力する。ジャッジメント風紀委員の暴走を^{アンチスキル}警備員が看過しているというのか。ますます意味がわからない。状況を飲み込めなかった御坂が^{ジャッジメント}正面の風紀委員の長に問う。

「第六位！　アンタはなんで私達に喧嘩を吹っ掛ける！」

「あー？　テメエこそなに言ってるかわかってんのかよ」

第六位はニヤリと笑った。

「このオレがルールなんだよ。テメエがルール違反者ってだけだろーが」

相変わらず意味不明な男だ、と御坂は睨みつける。

序列第六位の男。本名はかなり特殊で一見しただけでは読み方すら思いつかなかった。なのでこの超能力者は異名で呼ばれることの方が多い。

？断罪する者？。そのふざけた異名は大言壮語な肩書きではない。

第六位というナンバリングに収まっているのが不思議なほどの厄介な能力者である。

心理掌握といいこの第六位といい低位に収まっているのは自身の持つ殺傷能力が低いからであって、その特殊系能力を極めた力はまともに相対すると御坂でも瞬殺される危険がある。レベル5の序列というものはあてにならない。

冷や汗をかいている御坂の横に白井が並び立ち、金属矢を構える。

金属矢のようになにかを空間移動させることで瞬間的に当てるのが空間移動の戦闘方法である。当てるというよりもその空間を押し

広げて割り込ませるという方が正しいので、やろうと思えば皮膚を傷つけず心臓に直接金属矢を突き刺すことも可能だ。ただ一次元という高度な演算処理を必要とするので躊躇いが入ると能力を使えなくなる。白井が誰かの身体に直接金属矢を打ちこめないのは、どこかで人を傷つけるのを拒絶しているのだろう。白井は正義心がな

いとやっていけない風紀委員のひとりである。

その風紀委員である白井が、同じく風紀委員である二人の上位者と相対する。

「お姉様。お姉様はご存知ないでしょうけど、あの京谷という風紀委員もかなり手強いですよ」

白井が額から汗を流して耳打ちした。御坂はそれがどうしたと帯電し始める。青白い電流の渦が生まれ、白井は慌てて御坂から離れ

た。

エレクトロマスター 電撃使い。発電能力という最も発現しやすい能力のひとつに数えられるその力は、単純ゆえに強力。

エレクトロマスター レベル5の電撃使いは得意げに笑った。電撃を操り、雷撃の槍を京谷に向かって放つ。生身の人間が受ければ致命傷になるような攻撃だった。

しかし雷撃の槍は京谷を感電させる前に消えた。御坂は目を疑う。

「そんな攻撃で私は倒せん」

「お姉様！」

京谷は弾かれるように飛び出す。一瞬呆気にとられた御坂を庇うように白井が間に入り、刀の切っ先を受けた。かすり傷ではあるが鋭利な日本刀は白井の肩を斬り裂いた。ジャッジメント 風紀委員の腕章が血で赤く染まる。

「黒子！」

「大丈夫ですよ！ それより正面を向いてくださいですよ！」

白井の言葉を受け、御坂は正面に向き直る。

能力が効かなかった。まるでツンツン頭の青年のように攻撃を無効化したのだ。

白井を傷つけるような最低男とツンツン頭の青年が同じ能力者だとでも言うのか。そんなことがあるものか。そんなことを認めてたまるか。

エレクトロマスター 御坂は本気になった。本気で京谷を殺す気になってしまった。レベル5の電撃使いの全力。

周辺にある電子機器すべてが異常を来たし、電波障害を誘発し、地面が不自然に抉れていく。

御坂美琴は腕を額の前に掲げた。怒りを自分だけの現実に入力し、己の限界を超える能力に変換する。絶対に許さない。親友を傷つけ、ツンツン頭の青年を騙る目の前の男を御坂美琴は絶対に許さない。青白い帯電渦は龍に姿を変えて身体に纏わりついていった。

消し飛べと叫んで振り放つ。練りに練った一〇億ボルトの雷撃はサンダーバード雷大鳥に姿を変え、耳をつんざく轟音と眩しいほどの閃光を生み出して、レベル3の京谷に向かって突き進む。

すべてが消し飛んだ。背後にいるレベル5第六位も警備員もまとめて吹き飛んだはずなのだ。

御坂は夢かと疑った。なぜ京谷はそこに立っていられる？

京谷は地面を蹴った。啞然とする御坂に一瞬で詰め寄り、刀を構える。白井がお姉様と叫ぶが、御坂は動けなかった。全力だった。本気で殺すつもり雷撃を放ったのだ。

「惜しかったな、貴様がその名の通り超電磁砲レールガンを使っていれば私を殺すことができただろうに」

耳元で囁かれた言葉。御坂の背にのしかかる死の恐怖。寒気ころではない。膝が震えて目の焦点が合わない。刀が自分の身体を両断したのかどうかわからない。ただ視界に映る京谷と名乗る男の目は、殺人鬼のものだった。

「レベル3でもレベル5は殺せるものだぞ、第三位」

御坂の目に赤い飛沫が映った。それが自分の血だと理解した時には、空を仰いでいた。

ホテルの一室で優雅に本を読んでいるのは賀古である。扉がノックされ、どうぞと賀古は穏やかな口調で告げた。入って来たのは黒服の男。

「賀古隊長。第一部隊が目標と接触、逃がしました」

「逃がしました、じゃないでしょう？」

賀古は温和な表情とは打って変わる鋭い目つきを男に向ける。彼はすぐに直立し、九〇度に腰を曲げて謝罪する。

「使えませんねえ。それでも？黒豹部隊？と恐れられる部隊ですか？」

「不測の事態であつたために・・・」

男が言おうとした直後パンと軽い破裂音が響く。次いで、男の悲鳴が部屋のなかにこだました。

硝煙。賀古は躊躇いなく銃の引き金を引いた。口角が釣り上がっている。

「不測の事態で揺らぐ暗部部隊なんて要らないんですよ。おわかり

かしら？ブラックバンサー黒豹部隊？？」

「あが、あ、すみませ・・・」

「それで、誰の介入ですか」

賀古は銃を懷にしまつて普段の温和な表情に戻る。

「だ、第七位です・・・！」

「ナンバーセブンが？」

賀古はうーんと少し考える素振りを見せて、ポンと手を叩く。

「？ブラックバンサー黒豹部隊？の皆さんはそのままナンバーセブンと目標を追い回してください。手段は問いませんわ。目標に危害を加える風を装えばナンバーセブンも苦労するでしょうねえ」

別の黒服の男が現れ、撃たれた男の肩を持った。

「害虫駆除はジャッジメント風紀委員に任せることにしますから」

男達はそれを聞いて退出していった。部屋のなかに残った血痕を見つめ、彼女はくすりと笑う。それから傍にあったノートパソコンを閉じた。

「？鷹の目？の情報漏洩は上手くいきましたねえ。フレнда「セイヴェルンは首尾よく情報を掴んでくれました。あとは皆さんの底力にお任せですか」

警備員用監視衛星には警備員が知らない装置がいくつか搭載されている。そのなかのひとつがA I M拡散力場追跡レーダー？鷹の目？。それを管理するのが学園都市統括理事会であり、現在は賀古がその裁量の一部を託されている。

気象衛星？おりひめ？号？に搭載される予定だったが樹形図の設計者のために搭載余地がなくなったため警備員用監視衛星に密かに搭載されたというわけだ。警備員のなかでも統括理事会と密接な位置にある所轄は使用許可を得ているらしいが、そんな話は聞いたことがない。賀古という闇の組織のリーダーになって初めて使用を許される代物なのだ。

わざと？鷹の目？の情報を漏洩させた。その目的は？アイテム？がスキルジャンパーを進んで殺すような状況をつくりあげること。

賀古はまず麦野沈利個人に重要な部分はすべて隠して伝えた。問いかけてきてもことごとく突っ返した。麦野の性格上この一方的な命令は癪に障る。計画の裏を探ろうとするだろう。その時頼るのが？アイテム？というのも間違いない。？アイテム？のなかでも特に機械操作が得意なのはフレンダ・セイヴェルン。彼女はハッカーではないがいずれ監視衛星レーダーの存在に辿り着く。学園都市暗部組織なら一度は監視衛星の恩恵を受けたことがあるはずだ。暗部組織の活動には？鷹の目？が必要不可欠なのである。

狙い通りフレンダ・セイヴェルンは監視衛星の存在を掴みハッキングをかけてきた。賀古はあえてその瑣末なハッキングを看過する？アイテム？はスキルジャンパーの位置を手に入れると同時に？自分達が監視されている謎の状況？に気づかされる。スキルジャンパーと滝壺理后が接触すること？アイテム？が追跡を可能にしたところで麦野は自分達の置かれる状況に再度疑いを抱く。そこで別の人脈を頼って一流のハッカーを用意する。計画の全貌を明らかにするためだ。賀古はそのハッカーの攻撃も感知していたが見逃した。

明け渡したと言っべきだろう。

？アイテム？は自分達が実験の一部に過ぎないことに気づき始める。麦野は特に怒り心頭だろう。間違いなく実験を阻止する方向に動く。それも一番手っ取り早い方向だ。スキルジャンパーを第一位よりも先に殺す。そういう短絡的な思考で動き出す。

賀古はそれが狙いだった。麦野が動くことで必然的に第一位や第二位は動かざるを得なくなる。そして三竦みの状況で第一位がスキルジャンパーを抹殺することで、第一位はレベル6に覚醒する。それこそがこの計画の当初の狙いだった。賀古直毅が望んだ展開だったと言える。

ただ、イレギュラーがいくつか参入し始めている。

まず第七位が早瀬優希の誘拐を防いだこと。？鷹の目？で動きを観測していたが第七位は音速の二倍で動き回るために把握が遅れた。その一瞬の隙を？黒豹部隊？は衝かれた。賀古も目を見張るような鮮やかな一撃だった。

そして計画外からのハッキング。賀古自作の二重三重に張られたS級セキュリティを突破された。麦野経由でのハッキングにしか警備体制は緩めていなかったはずだ。しかもそれだけ大胆な正攻法を取っているにも関わらず逆探知をかい潜る手際の良さ。賀古が全力で追跡してようやく尻尾を掴んだ。発信元は風紀委員一七七支部。ジャッジメント

第六位達が掃討に向かった場所である。

誰がハッキングしてきたか知らないが、学園都市どこるか世界中を探しても巡り会えないかもしれないレベルのハッカーだった。そのイレギュラーは賀古のプライドを傷つけるに値するものだった。

それでも計画はつつがなく遂行される。賀古のなかで計画は着実に成功に向かっていった。

必ず成功させる。賀古ソーフィヤの企みとは、実はレベル6を生み出すことではない。

なんのために東雲鏡と村叢影夜に接近した？

なんのためにあいつらの仲間として力を揮ってきた？

なんのために柵川中学なんてつまらない場所で暮らしてきた？

「足掻いてみなさいな、影夜ちゃん。少しでも私を楽しませてください。でないと大切な親友が殺されちゃいますよ？」

スリーマンセル

三人でひとつ。そんなことを思ったことはない。自分は常にひとりで戦ってきた。この仄暗い世界で、たったひとりで生き抜いてきた。

すべては賀古先生のために。そして学園都市に鉄槌を。

彼女は窓の外から射す光に目を細め、カーテンを閉め切った。景色は暗がりに溶ける。

5 (後書き)

備忘録：絹旗かわいすぎる
登場
第三位 VS 第六位
黒幕
黒豹部隊初

6（前書き）

第六位の付き人との交戦メインの回です。縦書き形式推奨。

村叢影夜むらむけのよの前に立ちはだかる二人の男女。腕には風紀委員ジャッジメントの腕章がある。

「ジャツジメントだ。風紀委員殺害未遂の疑いで君を捕縛する」

「大人しくなさい。あなたの能力はすべて把握しているわ」

村叢は色のない瞳でその二人を見つめていた。
未遂？ あいつはたしかに殺したはずだが。間一髪で致命傷を避けたのか？

村叢は心底つまらなさそうな表情を浮かべる。じとりとした眼差しで目の前に立ちはだかる男女を睨みつけた。ただの風紀委員ジャッジメントではない。あの腕章は上役会のものだ。上役の人間ということを確認した村叢は、不気味な笑みを浮かべた。

「なんだその目は。光学操作クリアコントロールなど彼女の能力で封じることができるんだぞ！」

「私の能力は能力者による脳への干渉をすべて防ぐことができるわ。あなたが光学操作クリアコントロールしようと私にはすべて見えているんだから！」

村叢はなるほどと肯く。背負った刃の長い刀を抜き放ち、小首を傾げた。

「だからどうしたの？」

二人が反応する前に村叢は一撃を放っていた。男は慌てて一歩後ずさる。村叢の刀は空を斬った。

よし、と男はしたり顔で女に声をかけた。返事がない。不思議に思っ
て振り返る。

女は肩から斜めに真っ直ぐ斬られて血を噴き出していた。袈裟斬り。
袈裟斬

男は言葉を失った。正面にいたはずなのに。ぐらりと揺れる女は即死しているようだった。

「脳に干渉させない能力というのは面白いですが、肝心の肉体は無防備でしたね」

今度は逆方向から声がする。なにが起こっているのか男にはわからなかった。

「クリアコントロール
光学操作を掻き消すというから地力で叩き斬りました。あなたには私の斬撃が空振りしたように見えたでしょうね」

背後からの声。男は叫びながらとつさに炎を身に纏った。全身を炎の壁に守らせたのだ。

「クリアコントロール
光学操作の恐ろしいところは姿を消せるところではありません。別の場所で行っている動作を目の前で行っていると錯覚させるところなんです。そして逆もまた然り」

目の前の少女は八相の構えで刀を静止させている。しかし声は背後からしていた。

姿を隠しても声は隠せまい。男は背後に振り返り炎撃を放とうとした。

背後だけではない。左右にも刀を構えた少女がいる。男は首を回

して周囲を見た。全部で一六人。一六方位を囲まれていた。すべての少女がにいと口の端を上げた。

「……いたいどれが本物でしょう？」

男は悲鳴をあげることできなかった。真っ直ぐと肩から入った刃が自分を断ち斬るまで一秒もなかったのだ。

崩れ落ちる男を見つめ、村叢は歩き出す。そこに残ったのは二つの死体。風紀委員の腕章は自分達の血で真っ赤に染まっていた。

上条当麻^{かみじょう とうま}は病院に辿り着き、佐天涙子^{さてん るいこ}から話を聞いていた。

「その東雲鏡^{しののめがみ}って子がスキルジャンパーなんだな」

「はい。その、お願いがあるんです」

佐天は布団を握り締め、上条に訴える。

「東雲鏡さんを救ってあげてくれませんか」

「救うたって、スキルジャンパーはこの事件の中心にいるだろ」

「だから救ってあげて欲しいんです」

佐天は頑なだった。名前も知らない青年を前に頭を下げている。

「あの人は悪い人じゃない。普通の人に憧れているんです。スキルジャンパーなんて存在にならなくなかったんだと私は思います」

「・・・そうだとしても君を昏倒させたのはスキルジャンパーに間違いないよ」

「救うためだったんだと思います。ガス爆発なんて話が広まっているらしいですけど」

ニユースを始めメディアは規制されている。上条も土御門^{つちみかど}に話を聞いたところだった。

「・・・もしそうなら。君の言う通り心優しい、普通の人間になりたがってる人だとしたら。スキルジャンパーがこんな騒ぎを起こすのはなぜだ？」

上条が解せないのはそこだった。佐天の話を疑うつもりはない。

佐天が嘘を吐いているとは思えないし、被害者なら加害者を罵倒しまくってもおかしくないのに彼女は東雲という少女を擁護し続けている。上条の右手で脳へのあらゆる干渉を打ち消したにも関わらず佐天がそう訴えるということは、それは誰かに操作された意思ではなく自発的に生まれた佐天自身の意思なのだ。

佐天は強く訴えていた。口調が強いのではない。表情や目、声の抑揚でしっかりとした意思表示を行っていた。上条はそれを無下にしない。スキルジャンパーという得体の知れない存在をも彼は受け入れる。そこに難しい理屈はない。佐天がそう訴えるから受け入れるだけだ。

「あの人は、己を傷つけているんじゃないかなって、そう思うんで

す。普通の人と同じように普通の毎日を暮らしていたかった。でもできなかった。その理由はわかりません。けどなにかとてつもないものと争っているんだと思います。私の知らないような巨大なにかと」

抽象的でまとまっていけない言葉。それでもその意味は誰でも掴むことができる言葉。

「だって、普通できませんよ。出会ったばかりの人間を救うなんて傷ひとつつけない状態で守り通すなんて」

「巨大ななにかと争っていた、か」

上条の脳裏を過ぎったのは、御坂美琴。みさか みこと

彼女もまた学園都市の巨大な闇にたつたひとりであらがい、その身をすり減らし、自分の命を絶つことですべてを終わらせようとした。すべてを救おうとした、という言い方では語弊がある。半分の救うべき者はすでに殺されていたからだ。

学園都市最強の化物、一方通行。アクセラレータ 奴に挑む前の御坂の表情はどうだった。今の東雲はそんな御坂と同じなのではないか。なにか上条の知らない学園都市の闇に吞まれ、一方通行アクセラレータのような化物に大切なものを奪われそうになっている。だから東雲はこんな馬鹿げた騒動を起こしているのではないか。

考えるほどそんな気がしてくる。

マスメディアを封殺したのは学園都市、もつと言えば統括理事会だろう。このままでは東雲は闇に葬られる。なにもなかったとマスメディアは料理番組を流し、闇で起こる悲劇を蔑ろにさせられる。御坂美琴の事件を上条が知ったのは彼女が真実を知り、闇にあらが

おうともがき始めてから一〇日近く経った時だった。もしかしたら、いやもしかしなくとも、上条が見て見ぬふりをしていればその真実を誰も知ることができなかった。ただ事故死とされた御坂美琴の死体の前で不幸だったなと手を合わせていたかもしれないのだ。

佐天の話を聞いてなお、見て見ぬふりなんてできない。上条を動かすにはそれで十分だった。

「わかった。東雲は俺が救い出す。任せてくれ」

後先なしに口走っているのではない。それだけの覚悟は決めている。命を懸けても惜しくないと思っていた。命を懸ける代償は目の前にいる少女の笑み。

上条当麻は右手を拳の形に握った。

「待つてろ。東雲が闇に吞まれるってんなら引きずりあげてやる。この右腕でな！」

佐天は言葉もなく、深々と頭を下げた。

意識を暗闇に吞まれていた少女を光の世界に引きずりあげたのは、上条当麻の右腕である。

普通の人になりたいなら、なればいい。どうしてもひとりではその願いが叶えられないというのなら、誰かを頼ればいいのだ。誰も頼れないというなら自分が手伝ってやる。

上条は病室を後にする。握り締めた拳を見つめ、軽く肯いた。廊下を走る主人公の足音ヒールが静まりかえった院内を響き渡る。

御坂はたしかに斬られたはずだ。真っ赤な液体が眼前に散るのが見え、灼けるような熱が肩の辺りからじんわり滲んできたのだ。白井のお姉様という悲鳴も聞こえていた。

ああ、死ぬのか。御坂はぼんやりとそんなことを思った。死ぬことなんてないと、平穏で生きてきた自分はこんな事態に陥ることを想像していなかった。死を前にしても実感が湧かない。ただ意識を手放そうとする自分がいて、自分を殺そうと狂気の目を向ける黒髪の男の顔がある。御坂にはそれ以上なにかを認識することができなかった。

これが死。恐くもないし悲しくもない。静かに最期を迎えるのだ。大切な誰かの悲鳴を聞きながら終わるものなのだろう。御坂は自嘲していた。

（これが死・・・レベル5が聞いて呆れるわね・・・）

もう目覚めることはないのだろうと思い、遠い世界へと意識を逃がそうとした。

けれど、御坂は目を覚ました。時間にして一分も経っていないだろう。

目の前では白井が自分の頭を抱きしめ、涙をいっぱいに溜めている。

「よかったですの、お姉様・・・」

御坂美琴は死んだはずだ。肩から一刀両断された。なのに御坂は生きている。

そこで初めて視界の端に佇む誰かの存在に気づいた。黒髪の男に對するように佇む小柄な少女。髪が光を照り返し、赤く煌めいている。御坂はその謎の人物を見たことがあった。

少女の背に生えているのは八枚の翼。天使のような真っ白な羽で

ある。

「スキル・・・ジャンパー・・・？」

御坂は呻くような声で尋ねた。背を向けたままの彼女の幼い声が返ってくる。

「安心して。あなた達は僕が守ってみせる」

東雲鏡は誰も死なない結末を望んで、戦場に舞い戻った。真っ白な翼を羽ばたかせてホルダーから拳銃を二丁取り出した。目の前の日本刀を構える男と対峙する。

御坂は起き上がろうとする。白井に肩を貸してもらい立ち上がった。

「スキルジャンパー・・・どうして私を助けたの」

東雲はなにも答えない。第六位がこめかみの辺りに指を当て、彼女を睨んでいた。

「私達はあなたを許さないつもりだった。佐天涙子という名前は知っているわよね。あなたが昏倒させた相手。今も病院で安静にするの。忘れたとは言わせないわ」

御坂の刀傷は完治していなかったが、血管は繋がっていて筋肉も神経も修復されていた。満足に動かせる状況ではないが命に別状がある状態ではない。肉体再生の応用なのだろう。

御坂は東雲に治療してもらったのだ。命を救われたということに

なる。

「ひとつだけ答えて。佐天さんを昏倒させたのは傷つけるため？それとも救うため？」

御坂と白井がじつと目の前の小さな彼女に問いかけた。彼女は振り返ることもせず、一歩だけ歩み出る。白い羽が揺れ動く。

「・・・すべてが終われば目覚めるように設定していました」

その答えだけで御坂には理解できた。この少女は実験に殉ずるつもりなのだ。そのために不意に関わってしまった佐天を時間制限外まで眠ってもらうことで救おうとした。

昏倒させる、という方法を取ったのはこれ以上佐天を巻き込まないようにするため。白井が早瀬を除外したのと同じ理由だった。

御坂はその答えが聞きたかった。佐天が加害者を庇ったりするほどおかしくなったと思っていたくなかったし、なにより友達の言葉を信じたかったのだ。

「黒子。まだ動ける？」

「大丈夫ですの。こんなものはかすり傷ですわ」

御坂は白井の手を握り、ほほ笑む。

「手貸して。アンタの力が必要なの」

白井は言葉で答えない。隣に立って正面を見据えるという、ただそれだけの行動で示した。

東雲は横目で二人を見やり、首を傾げる。御坂はニツと笑った。

「守られるだけで納得できるわけじゃない。私達も混ぜてもら
うわよ！」

御坂美琴は決意する。この少女を許すわけではない。大切な友達
を意識不明に導いた奴なのだ。それでも、今この場だけは味方にな
ろう。命を救ってくれた少女のために。巻き込まないために憎まれ
役になつても佐天を昏倒させた不器用な少女のために。

御坂美琴は決意する。電撃を無効化した黒髪とレベル5第六位に
立ち向かつて自分達を救おうとする少女と共に戦い、この実験を否
定することを。

「ハハッ！ 京谷よオ、お前ひとりじゃキツいんじゃないの？」

派手な男がずいとな前に出て黒髪の隣に並び立つ。第六位、断罪す
る者。

「ここでよーやくオレの出番ってワケだ。お前らラッキーだぜ。オ
レと闘り合えるんだからよ」

その両目の色が変わっていく。金銀の燈火。オッドアイになった
第六位は腕を大きく広げる。

「オレの眼は絶対だ。アンタらは何秒持つのかなあ？」

ゾクッ！ と背筋に寒気が走る。東雲は拳銃を構え、迷わず発砲
した。

三発の銃声。撃鉄によって撃ち出された銃弾は真っ直ぐに第六位

へ突き進む。視覚として捉えたとしても、その情報を脳が処理して各器官に指令を傳達する前に銃弾は第六位を貫くだろう。二人の間に一〇メートルも距離がないのだ。しかし第六位は銃口を向けられても臆することがない。ひょうひょうとした振る舞いで前進してくるのだ。

ふと第六位は足で半円を描きながら軽やかに半身になる。それで三発の銃弾は空を裂いた。

東雲はさらに追撃する。銃弾の雨が第六位を指して突き進んでいく。同じような軽い動きですべてをかわした第六位はぐいと口角を釣り上げて、懷からダーツを取り出して投げた。

御坂にはなんの変哲もないダーツに見える。東雲はそれを難なくかわした。

「ッ・・・！」

気づけば東雲の腕に二本、脚に一本のダーツが突き刺さっていた。一本目をかわした東雲の腕に次に放たれたダーツが刺さった。同じようにひるんだ東雲に二本のダーツが突き刺さってしまった。傍から見ている御坂にはどういう状況なのかまったく理解できない。ダーツは普通速度だ。五メートルほどの距離からしても避けられないはずがない。東雲はかわそうとして当たる、という一見間抜けな仕草を繰り返している。

断罪する者。銀色のオッドアイを持つ男はただダーツを投げるだけで他におかしな動きはしていない。黒髪の男は呆れているようにも見えた。

なのになぜ。東雲はどうしてこうも不様に攻撃を受け続けている？

「まったく。こいつの遊び癖にも困ったものだ」

黒髪の京谷が言った。日本刀を構え、御坂と白井に向きなおる。

「手負いだろぅが私は遠慮せん。レベル3なのだからな。手加減などする余裕がないのだ」

薄いが端正と言える日本人らしい顔立ちの男は目を鋭く細め、踏み出す。

「黒子！」

「わかっていきますの！」

御坂はポケットから硬貨を取り出す。ゲームセンター用の硬貨である。その硬貨を電磁力の理論を応用して撃ち出す。それこそが御坂美琴が超電磁砲と呼ばれる所以である。

電撃は効かない。だが超電磁砲ならば奴を倒せるはずだ。そう言ったのは奴自身である。

白井は動く。御坂が超電磁砲を放つ一瞬の隙をつくるために。金属矢を空間移動させ、奴の刀を握る手を刺そうとした。しかし、金属矢が空間転位しない。急な演算ゆえに失敗したのか、と白井は舌打ちして腕を突き出す。

「ならばこれならどうですの！」

白井は御坂の帯電でめくれ上がった地面のブロックに手を触れ、空間転位させる。一瞬の隙をつくれればそれでいい。一瞬の足止めが通用すればそれでいい。白井は敵の進行方向にブロックを空間転位させようとした。動きを一秒でも鈍らせるために。

京谷は全体重を突進に乗せていた。いまさら止まることはできない。御坂と白井まであと数歩。刀を振れば届く距離まで詰め寄ろうとしている。白井は冷静に京谷を観察していた。その上でブロック

による進路妨害が適切だと判断したのだ。

京谷は白井の仕草を見て嘲笑う。

「笑止！ そんなものが通用すると思ったか！」

速度は下がらない。京谷は猪のような速さで御坂に食らいつこうとしている。ブロックはなぜか空間転位しなかった。足元に空間転位させようとしていたのに。――次元の演算も完璧だったはずだ。それなのに空間移動は上手くいかなかった。

京谷の能力。それはレベル3に過ぎないもの。だが本来ならばレベル5にも匹敵する能力を有するはずだった。

彼はとある実験の失敗個体である。

白井は齒噛みした。尊敬する御坂に頼まれたというのに、足止めすらできていないではないか。空間移動がなければ自分は荷物ではないのだろうか。

（・・・それでは初春達に示しがつきませんの）

白井もまた決心する。目の前の低レベルの怪物を食い止めるために、命を懸けることを。

御坂が超電磁砲レールガンを構える前に白井が立ちはだかる。そのツインテールが御坂の目に入った。

「撃ってくださいお姉様！ わたくしごと奴を撃ち抜いてくださいまし！」

「黒子！」

京谷はフツと鼻で笑う。自己犠牲。だが彼の刀はそんなものでは止まらない。白井を一刀両断することは簡単であるし、その白井の姿に隠れて超電磁砲をかわしてもいい。白井が前に立ちはだかったところで死ぬ順番が変わるだけである。京谷を仕留めるには足りない。

「親友を撃ち抜いて私を殺せるか、第三位よ！」

京谷は叫びながら刀を高く振り上げた。御坂が超電磁砲レールガンを放たないと踏んでいるからだ。今の御坂の躊躇する表情を見れば撃てないことは明白だった。だからまずは白井を斬り殺す。その返す刀で御坂の胸を両断すればいい。そこまで考えて京谷は上段に刀を構えた。

御坂は目を疑っていた。撃てない。撃てるはずがない。白井を失ってまで敵を撃ち抜く必要があるのか。自分が殺されることよりも他の誰かが傷つくのは許せなかった。今この硬貨を撃てば間違いない。白井は死ぬ。京谷を殺すためには白井が即死するだけの出力で硬貨を弾き飛ばさなければならないのだ。

撃てない。御坂は腕を下げかける。

「お姉様」

短い言葉だが、とても穏やかな声。目の前にいる白井のものだ。彼女は肩越しに御坂を見つめていた。わたくしはお姉様を信頼していますの、だから遠慮せず撃ってくださいな。そんな心の声が聞こえる。優しい眼差しは御坂の心を動かした。

（撃ち抜くのです学園都市第三位。その名を冠する超電磁砲レールガンで敵を

撃ち抜くんのですの！)

(黒子。ごめん、アンタを一瞬でも疑った私が馬鹿だった。私もアンタを信頼してるから)

お互いの心が通じ合う。硬貨が宙に舞い上がり、重力に従って落下し始める。京谷は信じられないといった表情で目を見開く。上段に構え振り下ろそうとしている刀を止めることはできない。

「「私^{おねえさま}だけの超電磁砲^{レールガン}だあああああああ！」」

硬貨が撃ち出される。超電磁砲^{レールガン}。目の前にいるツインテールの少女に向かって周りのすべてを吹き飛ばしながら数グラムの硬貨は駆ける。初速毎秒一〇三〇メートルを誇る超電磁砲^{レールガン}を受ければ人間の身体など風穴が開くだけでは済まない。問答無用で即死する。

その残虐な能力を親友に向かって撃ち出した。

京谷は見た。白井がニヤリと笑っているのを。その時思い出す。白井黒子の能力は――。

超電磁砲^{レールガン}が炸裂する。壮絶な爆音を生み出し、辺りを吹き飛ばした。後方五〇メートルまでが超電磁砲^{レールガン}の射程範囲である。弾き出された硬貨が空気との摩擦熱ですべて燃え尽きた後にも衝撃波が残り、警備員^{アンチスキル}の護送車を横薙ぎする。

学園都市第三位、超電磁砲^{レールガン}。彼女はたったひとりで軍隊に匹敵するのだ。

煙が晴れたその場所には、誰も立っていなかった。

6 (後書き)

備忘録：第六位の能力 オッドアイ

7（前書き）

更新遅くて申し訳ありませんの第七話。かなり長めです。縦書き形式推奨中。

垣根^{かきね}は街を歩いていて、少しかだけ元気を取り戻した乗っ取り^{オバークロック}に手を引かれながら、人混みのなかを歩んで行く。

第六学区。アミューズメント施設が集まる浮世離れた区画だ。遊園地やスポーツセンター、ボーリング場、カラオケなど学生向けの施設が多い。外からの客にも対応しているらしく遊園地などは学生だけではなく親子連れの姿が目立っている。

垣根は乗っ取り^{オバークロック}と二人で遊園地を訪れていた。乗っ取り^{オバークロック}が行きたいと言ったからである。

「かきねー。あれたべたい」

「さっきフランクフルト食べただろーが」

「でもあまそーだよ？」

「お前は知らねえかもしれないがな、こういうところの食いもんはめちやくちや高えんだぞ」

「かきねー、おなかへったー」

話を聞くと垣根は悪態を吐きつつ財布から千円札を取り出しキラメルポップコーンを購入する。近くにあったベンチに腰かけ、おらよと不躰に差し出すと、乗っ取り^{オバークロック}は目を輝かせて口に放り込み始めた。

「しかしよく食うねえお前も。どこにそんなに入るのやら」

「・・・おなかじゃない？」

「そんなマジな回答期待してねっての」

乗オーバーつ取りの頭をボフボフ叩きながら垣根はほほ笑む。

人の数は多くない。夏休みと考えれば少ないくらいだった。垣根は扇子を扇ぎながら暑さを緩和していた。乗オーバーつ取りは暑さ寒さを感じする能力がないため、扇がなくても文句を言わない。少しだけ乗オーバーつ取りが羨ましいな、と横目で見ながら思ってみる。

親子連れが楽しそうに笑いながら歩いて行く。乗オーバーつ取りと同じくらしいの歳の子が「次は観覧車に乗りたいたい！」などと大声で叫びながら、幸せそうな顔で通り過ぎる。垣根はぼんやりとその光景を眺めていた。

「お前、なんか乗りたいもんとかねえのか。ここ来てから食ってばつかだろ」

乗オーバーつ取りは黙々とポップコーンを頬張りながら過ぎ行く名も知らぬ人達の姿を目で追っていた。乗り物とかアトラクションに興味がないのだらう。そもそもそれがなにかを理解できていないのかもしれない。乗オーバーつ取りは生まれた時から？檻？で暮らしてきた。？檻？せかいが乗オーバーつ取りの世界だった。その世界の外側にあっただっ広い幻想の方が乗オーバーつ取りとしては気になるのだらうと垣根は思う。ぴくとも反応しない乗オーバーつ取りを見つめ、彼は視線を外した。

茹だるような暑さ。垣根の扇子が二人の間で静かに揺れ動く。

なにをやっているんだろうな。垣根は心の中で呟いた。スキルジヤンパーを殺したいはずなのに遊園地でのんびりしている自分がいる。ポップコーンを貪る色気もないガキと一緒にクソ暑いなかを過ごしている。普段の自分ならまず理解できない状況だった。

「あの一、おひとりですか？」

垣根は声のする方を見た。そこそこの化粧をしているそこそこ美人な女が二人、立っている。自分に話しかけているのか、と垣根は気づいて笑みを浮かべた。

「俺になにか用？」

自分でも胡散臭い笑みだと思う。だがこういうにつこりとした笑顔をつくれば人当たりが良くなることは理解していた。特に女なら骨抜きになる。目の前の女達は垣根の笑顔にあてられたようで照れていた。

「ちょっと私達暇なんで、一緒に遊びませんか？」

「ご迷惑だったらいいんですけどー」

垣根はつくりものの笑みを浮かべたまま扇子を扇ぎ続ける。涼しい風がイラついた自分の頭を冷やしてくれるからである。ポップコーンをぼりぼり食べ続ける乗っ取りは垣根の方を見ようとせず、ただ人の流れを眺めていた。だから女達の目には、垣根がひとりでベンチに座っているように見えたのだろう。

ナンパ。逆ナンというやつだ。金髪の似合う整った顔立ちをしている垣根はそういう経験が多い。年上の女から声をかけられること

も多いし、ホストにならないかと話を持ちかけられたことも数え切れないくらいだ。

垣根はどこかの男と違って歩いているだけで騒ぎを起こしてばかりのコミュニケーション力不足男ではない。目立つ容姿なら目立つ容姿らしく穏便に事を終わらせるだけの応用力があった。

だからこの女達も未元物質ダークマターで吹き飛ばすなんて馬鹿な真似はしない。丁重にお断りして帰っていただくだけである。

「ごめんね。俺、彼女と待ち合わせしてるんだ」

「えー。そうなんですかー」

嘘だ。けれどこういう言い方をすればたいの女は諦める。それ以上しつこく迫ってきたらレベル5であることをさらす。最悪手近にあるなにかを吹き飛ばして諦めさせるという手段も取る。それ以上はどうしても相手を傷つけざるを得なくなる。無関係な小物を傷つけることはしたくない。手を下すのは同等以上の敵だけだ。そういう余裕が垣根にはある。

未元物質ダークマターという学園都市でも把握できない能力者は、学園都市に縛られることはない。余裕はそこから生まれているのだろう。

女達は物わかりが良いのか、それだけで退散した。扇子を扇ぐ仕草は一定のリズムを保ち続けている。メトロノームのように規則正しい動きをしていた。

「・・・なんだよ」

「かきねつてもてるんだね」

「モテてるわけじゃねえよ。暇つぶしの道具に選ばれてるだけだ。あんなのでモテてるなんて言う馬鹿はどこにもいねえよ」

「ふーん。それでかのじよはいつやってくるの？」

「さあな。いつだろうな。ここには来ないかもしれないし、来るかもしれない」

垣根は扇子で涼みながら答えた。乗っ取りはポップコーンを手に握み、顔の形が変わるほど口いっぱい頬張る。二人はしばらく言葉を交わさなかった。

静寂を切り裂いたのは乗っ取りの方だった。

「かきねのかのじよ、とうちゃくだー」

うるせえよと垣根は吐き捨てる。その表情はさきほどの笑顔とは対照的に歪んでいた。

茶髪のお嬢様風の女が目を吊り上げ、不敵な笑みを浮かべて佇んでいた。第四位、原子崩し。

御坂の放った超電磁砲はアスファルトをめくりあげ、あらゆる障害物を撃滅した。残響が空に溶ける間、彼女は一言も言葉を発することなく立ち尽くしている。煙が晴れるのを待ち続けた。

御坂は撃った。親友ごと敵を倒すために。撃てと言った親友を信頼していたのだ。普通に反応しても避けられないタイミングで硬貨を放った。そうでなければ黒髪の京谷を倒すことができなかったのだ。

煙が晴れる。御坂の視界に映る誰か。ひとりがそこに倒れ伏している。

カツ、というローファー独特の音が背後でした。御坂は振り返らない。その足音は軽かった。

「お姉様の勝ちですの」

白井黒子。しらい くろこ 穏やかな口調で御坂の隣に並び立つ。目の前で倒れていたのは京谷だった。

御坂は京谷の方を見つめながら、小さな声で呟く。

「違う。私達の勝ちよ、黒子」

白井が頬を赤らめて御坂を見つめる。御坂はそれ以上なにも言わなかった。

白井黒子の能力は学園都市でも五八人しか持っていない？空間移動？。超電磁砲を撃つ前に空間移動した、ただそれだけの話である。テレポ 京谷は二人の言外の信頼にあえなく敗れ去った。

それでも賭けだった。ブロックが空間移動できずに白井ができたのはなぜか、御坂も白井本人も説明できない。白井が空間移動するものとして放った超電磁砲ではなかった。それに白井が覚悟を決めたのも？空間移動ができない場合は京谷とともに心中する可能性があった？からである。テレポ

それには京谷の持つ能力が関係していた。

「あーあー、京谷やられてんじゃねえよ」

そう言ってゆっくりと歩いてくる第六位。倒れる京谷に足を乗せてごろんと転がせる。人形のように京谷は反転するが、かすかに息をしているようだだった。

「ちよつとアンタ！ それでも仲間なの！」

「んー？ 仲間なワケないじゃん」

第六位はニツと笑い足を乗せたまま御坂達の方を見た。

「オレの仲間はオレだけ。オレが信頼できるヤツもオレだけ。世界はオレかオレじゃないかで分かれているのさ。それにコイツはいたら便利だっただけで仲間でもなんでもねーのよ」

第六位は歪んでいる。まともな人間ではなかった。まともであれば仲間を足蹴にしたりすることはないだろう。

レベル5七人は御坂を除いて全員まともではない。どこかが狂っている。第六位もそちら側の人間だったということだ。人を人として見ない。仲間を仲間として見ない。

そうやって孤独であろうとする。孤独であるべきだと思いこんでいる。

レベル5は孤高な存在だった。他人に利用されて生きてきた。だから他人を利用することに頭を働かせるばかりで、親友のような者をつくることはできなかった。仲間は仲間でもそれは仕事上での仲間であって、心を通わせる相手ではない。情を抱くほど別れる時に苦しむことになる。

レベル5と手を組むような奴はなにかしら闇を抱えている。どこかで利用しようと考えている。レベル5の友人というステータスは企業、外交、対人関係などあらゆるカードになるのだ。

派閥をつくってもほんとうに信頼し合えるわけではない。むしろより大きな壁が生まれる。互いが自分を政治の道具に見立てる。感情を寄せるべき場所がない。だから御坂は派閥をつくらず生きてきた。あんな権力の縮図を体現した借り物の関係を続けていれば、頭がおかしくなる。それならいっそ孤独でいた方が、気が楽だ。御坂はひとりで過ごすことが多くなった。

仲間が欲しかった。孤独であることは寂しい。レベル5といっても人間だった。中学生の子供なのだ。孤独に震える夜を過ごすただの少女だった。

そんな御坂の前に白井が現れた。邪な考えのない普通の少女。手を取って一緒に歩んで行こうと言われた。その時世界が一気に広がった気がした。白井のおかげで御坂は孤独を抜けだした。

だから第六位の言い分が気に入らない。仲間を否定して孤独であろうとする昔の自分を見ているようで、力の限り叱ってやりたいのだ。そんな風に縮こまっただけでもなにも得ることはできない。白井に手を引かれたとはいえ、たった一歩だった。一歩踏み出すだけで世界は幻想に変わる。

「仲間ね。いい言葉だ。響きだけは最高の逸品」

京谷は呻いている。意識があるのかはわからなかった。直撃を避けたとはいえ超電磁砲レールガンをまともに受けた。穴が開くことはなかったが身体中の骨が砕かれ息もままならない様子だった。

「けどな。違っただよ超電磁砲レールガン。コイツは誰の仲間でもない。いや違うな。誰もコイツの仲間じゃないのさ。オレの仲間でも、ましてお前の仲間でもない。笑えるだろ」

「な、に？」

「？暗闇の五月計画？だよ」

第六位の声。ぞつとするほど無機質なそれが御坂を貫く。

「京谷は失敗作のひとつだ。きぬはたさいあい絹旗最愛と同じ実験参加者なんだぜ」

第六位は白銀に染まる左目の横に指を置き、指の腹で押すような仕草を見せる。

「レールガン超電磁砲。AIMジャマーって知ってるか？」

御坂はごくりと息を飲む。

AIMジャマー。能力者が無意識に発するAIM拡散力場に干渉し、それを乱反射させることで能力を抑えさせる少年院や重装備警備員チスキルに用いられている技術である。

「京谷はな、学園都市に一〇人といないAIM拡散力場に干渉できる能力者なんだよ。？アイテム？の滝壺理后たきつぼりこうって娘と同じような能力なのさ。なかでもこいつは最優秀素材だった」

白井や東雲までがその話に耳を傾けている。

「AIM拡散力場を意図的に乱す能力。研究者達は？能力攪乱？と呼んでいたがな」

「？能力攪乱？・・・」

「そうだ。それがお前も知ってるAIMジャマーだ」

特殊な電磁波を浴びせることで能力者を弱体化させる。どうやっ

てその特殊な電磁波を生み出すことができたのか。その理論を生み出した研究員がいるのだと御坂は勝手に思っていた。

違う。とあるひとりの少年の稀有な能力が対能力者の切り札を生み出したのである。

「コイツは研究員や警備員に不当な期待をされちまった。なんの変哲もないガキだったくせに。身体検査でレベル0が当たり前。なんの能力者かも最初はわからなかったおちこぼれだったのにな。コイツにとって不幸だったのはそんな能力を持って生まれたことかもしれないねー」

第六位の話に誰もが聞き入っていた。京谷は倒れたまま呻いているだけである。

「世界を救える。君は偉大な人間だ。そういう口車に乗せられたんだろーよ。AIMジャマー開発のために闇を転々とし、頭のなかを弄られまくって最終的に辿り着いたのは？暗闇の五月計画？って話さ」

拳を握り締めるギリギリという音が響く。

「ボロボロだった。京谷はもう嫌だったんだとよ。？暗闇の五月計画？なんてモンに付き合わされるのが嫌だった。計画が頓挫したのも京谷の企みの成果だし、な」

？暗闇の五月計画？とはある少女を最後に計画を凍結させ、職にあぶれた研究員達はこの？絶対能力者覚醒計画？へと流れてきた。京谷はそのとある少女を上手く利用して研究員を始末させ、計画の続行を不可能にした。とある少女の名は黒夜海鳥。

「コイツはその時に嫌なモンをたくさん見たんだろ。闇の汚さつてのを真正面から見ちまった。だから己を犠牲にしても計画を潰した。結果は知つての通り？ 闇の五月計画？ はオジャン。コイツは色々後遺症が残っちまってレベル3になった」

レベル3と言った。ほんとうならばレベル4以上、いやレベル5に達する能力者だったのだろう。？ 能力攪乱？ は対能力者戦では最強と言える能力だ。

第六位がつまらなさそうに息を吐く。

「コイツがなんで風紀委員ジャッジメントなんかしてるか、だいたい理解できんだろ。闇の世界に蔓延る嫌なモンのために身を粉にして働いているワケよ。献身精神というかボランティアというか。ちよつと難しい言葉を使うなら、贖罪いせぐわいってところか」

御坂は京谷に目を向ける。彼は全身から血を流し、全身の骨を砕かれてそこに伏せている。

電撃が通じなかったのはAIM拡散力場に干渉したのだろう。一〇億ボルトまで練った電撃も攪乱されて京谷まで届かなかった。あるいは一〇ボルトまで練ろうとする力そのものに干渉し、攪乱していたのかもしれない。超電磁砲レベルガンならば倒せるというのは、能力干渉を使つても物体の移動を食い止められるわけではないから。一度撃ち出された硬貨には彼有能力攪乱も通用しない、ということなのだろう。

レベル3にランク付けされているということは、使用限界が狭められているということだ。本来通りの実力があれば御坂を完全に戦闘不能にすることもできただろう。

「コイツの仲間なんて誰もいない。ひとりで戦ってきたんだ。誰も手を貸しちゃいけない。これからもコイツはひとりで戦い続けるは

ずだった。お前がこんな風にしなきゃな」

「それは・・・でも、アンタが仲間であれば！」

「コイツがひとりで戦うことはコイツなりの贖罪だ」

第六位は京谷に背を向ける。

「お前らにわかるものか。コイツが背負ってきたものを。日なたで生きるお前らにわかるものか。コイツが見てきたものを。コイツは死ぬことでしか報われない実験台のモルモットなんだぞ」

御坂達の知らない世界を生きてきた。地獄の釜の底で彼らは生き抜いてきた。

「コイツに再び仲間をつくれと言う。三日後には笑ってたヤツが真っ赤なクリームシチューの具材になっちまってるあの悪夢を見ろって言う。なにも知らないくせにふざけんな。それでもまだ幸せが掴めると主張すんならそいつはただの無知だ。少しも物事をわかつちやいねえ」

御坂に向き直り、断罪する者は侮蔑の眼差しを送った。

「今のお前は紛れもない偽善者だぜ、レールガン超電磁砲」

彼の金目銀目が色めく。フオツという嫌な風が吹き込んだ。

「オレが嫌いなのはたった二つ。ひとつはマグロみてえに無反応な

女。そしてもうひとつが綺麗事を並べるクソツタレの偽善者だ」

レベル5第六位の男。前髪の隙間から覗く二つの眼球。オッドアイの不均等さが見る者を不安にさせる。

「自分が正しいと思うなら来いよ偽善者。司法連に仰ぐまでもない。オレが断罪してやる」

能力名は？知覚事象？。
フローレスアイサイト

視覚系能力者の頂点に立つ彼が操るのは？六つの視る力？を有する完璧な瞳。

第六位という順位に収まっているのは、学園都市が彼の能力に価値を見出せないから。

その完全な眼を使えるのは世界でただひとり？原石？と呼ばれる第六位だけである。

賀古かこは移動する車のなかで携帯電話を耳に当てて笑っていた。

「首尾は上々ですわ。第四位を含む？アイテム？は第二位と接触し、スキルジャンパー包囲網を形成しております。村叢むらぐみはこちらが引きつけますのでご心配には及びませんわ」

「……そうか。いよいよ計画は成功するんだな」

「もちろんです。そのために私は戦って参りました。この命に代えても成功させてみますわ」

『ソーニヤ。私は君のような生徒を持つことができて幸せだよ』

電話の向こうの男の声は低く擦れていた。年老いているというよりも疲れ切ったような、そんなしゃがれた声だった。

「お疲れのようですねえ、賀古先生」

『そうだな。もう一〇年は経っているからね。この一〇年間で私は色々なものを見過ぎてきた。そろそろ隠居生活をしたいところだよ』

「なにをおっしゃいますか。先生の力を必要としている機関はいくつもあります。隠居生活なんて七〇を過ぎても無理でしょう。あと三〇年は引っ張りだこでしょうねえ」

『まったくひどい話だ。私だって人間なのにな』

賀古は黒豹部隊ブラックパンサーの車に乗って移動している。村叢が嗅ぎつける前に移動しているのだ。
ブラックパンサー ハウンドドッグ

黒豹部隊は獵犬部隊と違って捕獲任務に特化している。元々豹には獲物を木の上に引きずりあげる習性がある。他の猛禽類や肉食動物に獲物を横取りされないようにするためだ。それがあたかも獲物を捕獲して貯蔵するように見えたため、捕獲専門の部隊をパンサーと呼んだりする。ハウンドドッグ ブラックパンサー
獵犬部隊に対抗するために設置されたので黒豹部隊。活動内容が捕獲全般なのでまず目立たない。ハウンドドッグ ブラックパンサー
模は小さかった。全兵合わせて一五人というところだ。

賀古が黒豹部隊に目をつけたのはその隠密性である。動いてもほ

ほとんど外面に影響を出さないのが黒豹部隊の特徴なのだ。獵犬部隊
ブラックパンサー
ではそうはいかない。騒ぎを抑えながら目的を完遂したたかさを獵犬達は持ち合わせていなかった。

『ソーニヤ。君は歴史的瞬間を見ることが出来る。私と共に歴史の立会人になろう』

「はい。愛しておりますわ、先生」

そう答える賀古の声はなめらかで、艶やかさはあまりない。先生と生徒。そういう枠組みのなかで二人は会話していた。

通話が切れる。賀古は寂しそうに液晶に映される通話時間の文字を眺めていた。

時刻は一五時。そろそろ次の段階だな、と賀古は色の違う携帯電話を手に掴んだ。

「計画のために、もう少しレベル5達にはがんばって頂かないといけませんねえ」

ほくそ笑んで彼女が電話をかけようとした時だった。

車が不意に停止する。運転手と助手席の男が短い会話を繰り返していた。

「どうしました？」

「隊長、それが・・・」

フロントガラスの先を見る。アンチスキル警備員による検問が行われていた。

商業区域である第一六学区から政治区域を兼ねる学園都市の中核区域第一学区に入ろうというところだった。スキルジャンパーの件

で警備員アンチスキルの監視が厳しくなっているのだろう。

「かまいません。連中には通達が出ているはずですよ」

賀古はたいしたことはないと判断した。警備員アンチスキル上層部はこちらに靡なびいているし、隠密行動中であるとはいえ、黒豹部隊ブラックパンサーであることがばれたところで問題はないに等しかった。

車が発進する。検問の誘導に応じてゆっくりと移動し、窓を開いて応対した。

「すみませんね、パス見せてもらえますか？」

軽い口調の女が運転手に尋ねているようだ。賀古は携帯電話を見つめ、検問を抜けてから電話をかけようと閉じる。

目を向ける。声をかけている女と目が合った。胸の大きい美人だがその色香を感じさせないハツラツとした表情をしている。

「んー、そっちのお嬢ちゃんはどうかで見たことがあるんじゃない？」

この口調。賀古は目を細めて見えないように口の中で舌を鳴らす。

「そうですか？ 私は初めてお会いすると思いますけど」

「そうか、なら私の勘違いじゃん。パスは大丈夫みたいですのでお通りください」

警備員アンチスキルの格好をしたその女はほほ笑みゲートを開く。賀古も同じようにほほ笑んで車が発進した。遠くなっていく女の姿を見やり賀古は息を吐く。

実際に面と向かって話したことはない。しかし彼女とは何度か対

面している。

黄泉川愛穂。よみかわ あいほ

ふざけた口調の警備員女だ。アンチスキル

「早瀬の憧れの人とこんなところでお会いするとはねえ」はやせ

ククツと彼女らしくない低い声で笑った。車は第一〇学区を目指して走っていく。

鉄装は汗を流しながら区画整理に励んでいた。眼鏡を整え直しハアと息を吐いてみる。てっそう

鉄装のような教職員の一部は夏休みで学校から解放された今でも警備員に縛られる。アンチスキル学生の安全を確保するための教職員による治安維持部隊、それが警備員。アンチスキル鉄装は特別運動神経が良いわけではなかったが警備員を続けている。アンチスキル

学園都市統括理事会による他国間交渉及び今後の指針決定の会議。そういう名目で非番の警備員までほぼ全員が動員されている。主に第一学区周辺の区画整理の指令が？上？から下ったのだが、どうにもそれだけではない。アンチスキル

鉄装は自分の肩から提げられた慣れない重みを持つ機関銃を見つめていた。その表情には陰りがある。通常はゴム弾や閃光手榴弾とスタングレネードいった犯罪者を傷つけずに捕獲するための装備を支給されるが、今回は実弾が装填されている。そういう時はたいい外部の武装組織との交戦が想定されているものだ。

学生の犯罪を食い止め安全を守る警備員がほんとうの殺し合いをするかもしれない。考えただけで鉄装は気が重くなる。アンチスキル

区画整理と並行して検問所を設けあやしい集団を第一学区に近づけないよう取り繕っている。その現場指揮官である黄泉川が眉を顰ひそ

めていた。

「どうしました？」

「いや、さっきの車両が気になっただけ」

黄泉川は深刻な声色で告げる。鉄装にはよくわからない。

「先ほどの車両ですか。なんでしたら手の空いてる警備員アンチスキルを送ってみますか？ ナンバーは？」

「わからない」

鉄装はおやと思う。黄泉川という女は警備員アンチスキルとして一流なだけでなく洞察力や勘というものも優れていた。当たりをつければ地の底まで追いかけて、必要があれば大型車両でカーチェイスを繰り広げるトンドモ警備員アンチスキルだった。その黄泉川が臭いと思った車両のナンバーを見逃すはずがない。だから鉄装は首を傾げたのである。

「ほんとうにわからなかった。あれは特殊部隊用車両スペシャルフォースじゃん。一見ナンバーに見えるが一般人が覚えたとこでなんの意味もなさない暗号。ボタンひとつで変えられる代物じゃんよ」

「え、ええ？ それって明らかな違法じゃないですか。なんのための車両ナンバー……」

「ここは学生の町学園都市。車両ナンバーなんてのは必要に見えても必要なものじゃん。車両数なんて限られてるしすべて書庫バンクが情報管理しているからな。学園都市の技術力だ、ああいう車でも生産する時になにかしら探知できる小細工が施されているんだろ」

黄泉川がつまらなさそうに答える。学園都市に日本の法律は通用しない。日本国の下にいるがその実は独立国家と変わらないのだ。

「私が気になるのはそこじゃないじゃん。乗ってた女の子だよ」

「スペシャルフォース特殊部隊の車両に、女の子ですか？」

鉄装が不思議に思うのも無理はない。ただの女の子がスペシャルフォース特殊部隊とともに行動する理由がない。なにか異変が起こっているとみなして良かった。

「私はその女の子を知ってる。名前は知らないけどな。なのにアイツは私を否定した」

黄泉川が携帯電話を見つめる。アドレス帳に載る早瀬という名前。そこに指を置く。

「嫌な予感がするじゃん。ここを任せて良いか」

黄泉川は真剣な眼差しで鉄装の方を見た。切羽詰まっているというよりも、今動かなければならないと訴えている目。黄泉川は鉄装の憧れだった。警備員アンチスキルそのもののような勇敢で優しく、なにより生徒思いの女性だった。

警備員アンチスキルは多忙だった。第一級要人を警護するために非番の者まで駆り出されているのだ。持ち場を離れることはあってはならないことだった。始末書だけで済むかどうかかもしれない。

それでも鉄装は言葉を発しない。
ただ固く口を噤つぐんで、うやうやしく敬礼した。

対峙する二人のレベル5。一国の軍隊が出動しても太刀打ちすることはできないだろう。それだけの実力を有した少年と少女が敵意をむき出しにして睨み合っている。

京谷と呼ばれた男は地面に倒れていて、もう息をしていないように御坂には思えた。

（まだ病院に連れて行けば助かるかもしれないのに。第六位・・・
アンタは・・・！）

御坂は怒りを隠しきれない。超電磁砲をまともに受けたとはいえ、京谷は生きているのだ。御坂などにかまわず一目散に逃げ、治療を施すべきではないか。

それなのに第六位はしっかりと相對している。京谷のことなど気に留めていない。

「気に食わないわね、第六位」

「はん。オレが京谷を救わねえことにか？ それとも超電磁砲に敵うとか生意気言ってることにか？」

「両方だ、このやろつ」

御坂は静かに帯電する。第六位も同じくダーツを握り締め、ニイと笑みを浮かべた。

「スキルジャンパーに治療を頼むような人間じゃなかったわね、アンタは」

「よつくわかってんじゃねえか。レベル5様はたかがヤローひとりに執着しねえの。それに」

第六位の声が一瞬詰まる。詰まったように御坂には思えたが、傍で聞いていた白井にはそう感じられなかったかもしれない。それだけわずかな硬直だった。

「京谷は能力者の回復なんざ効かねえ」

御坂はハッと息を飲む。能力攪乱。

？プロデュース？の産物である京谷は無意識下における能力制御を実現している。能力に干渉して異常を来たす能力攪乱は体表から一メートルほどの領域を有していて、御坂の電撃は京谷の領域に侵入した瞬間？超電磁砲？という指令を失った。行き場を探すように全方位に拡散し始める電撃を？他人の能力に干渉する？という能力の特性を京谷は無意識に手なずけ、自分の身体だけを避けるように力を分散させた。

？闇の五月計画？で行われた実験の主軸は？一方通行の人格・演算方式の応用による能力向上？である。絹旗最愛の？オフエンスアーマーの類だ。白井の空間移動攻撃も領域を侵入することはできなかった。ほとんどすべての能力を無効化できる能力とっていい。

だが超電磁砲で弾き出された硬貨のように実体と運動量を持つ物は無効化できない。彼が「超電磁砲なら私を殺せる」と言ったのは、そこだった。

「能力攪乱がなきゃ、頼んだかもしんねえな。でもよ、オレの目にはハッキリと未来が見えてる。京谷は五分も経たないうちに絶命するってな・・・」

沈んでいる声。読心能力がなくとも彼がほんとうに悲しんでいることがわかった。仲間でないと言いながら、京谷に訪れるであろう死に対し悲しんでいる。ひょうひょうとした第六位の中身がうつすらと見え始めた気がした。

京谷が失敗作と判断されたのはなにより応用が利かないからだ。自分の思うように？能力拡散？を使えないのである。絹旗が？オフエン素装甲？を攻撃に使用するようなことができない。あらゆる能力を無効化するとはいえレベル4と判定するには演算力、精神力、能力数値いずれも未熟だった。だから京谷はレベル3と判定され、失敗作と笑われた。

失敗作と判断されたが無意識下でも？能力拡散？を行った。東雲の治癒能力を打ち消すまではいかずとも阻害する程度の能力はあるのだ。自分の思うように能力を使うことができていないので、？能力拡散？の力をシャットダウンすることもできなかった。

病院へ搬送したところで傷は深かった。第六位の瞳は？未来を捉える？。もし助かるならば真っ先に搬送していただろう。けれど第六位はそうしなかった。

六番目の男には見えている。病院へ運ぼうがなにをしようが、京谷がこのまま死んでいく未来。だから、彼は絶望しているのだ。

「第六位」

高く幼い声が響く。それは透き通っていて、優しくて、もし存在すると仮定するならば「天使の声」だと御坂は思った。なんとなく

そう思える綺麗な音色だった。

「絶望するには、まだはやいよ」

そこで初めて少女の背にある翼が一枚足りないことに第六位は気づく。七枚の左右非対称な翼。

彼女の身体が光り輝いている。その場にいる全員が、なにが起こっているのか解せなかった。

「これは・・・？」

「スキル、ジャンパー・・・？」

御坂と白井が啞然として光り輝く少女の姿を凝視していた。第六位が左目のそばを指で押さえ、頬を引き攣らせる。

発光し宙に浮かぶ少女は、天使そのものだった。

「な、んだ、よ・・・なんの能力だ、テメエ・・・！」

「僕は学園都市そのもの・・・学園都市に生きるすべての者に幻想を与える存在」

「意味がわからねえ・・・冗談止せて、おい」

第六位は焦っていた。未来が見えない。少女がなにをしようとしているのか、完璧な目を持つ彼ですらわからなかった。第六位がわからないなら御坂や白井はなおさらである。

しかし、スキルジャンパーには敵意がまるでなかった。むしろ神

々しく、暖かい光を放っている。

絶望するにはまだはやい。その言葉が意味することは、なんだ？
第六位はダーツを握り締めたまま、目の前の天使を睨みつけた。

「――願え、第六位」

声と呼ぶべきもののなかどうかすら、わからなかった。ただ圧巻された。

第六位の脳に直接響くようなその命令。天から降る雷のごとく強烈で、烈日の陽光のごとく堪えがたく、秋雨のごとく淑やか。逆らうことを赦さない。そんなビジョンが第六位の目には映っていた。

「京谷を救いたいと願え、第六位」

今までの穏やかで幼い声とはまるで違う。海鳴りのように遠方から聞こえるようで、それでいて囁きかけられるような印象もある。
第六位は理解しがたい現状に震えていた。

人間のそれを遥かに超越している。存在そのものが天や地に匹敵していた。

彼の脳裏を過ぎるフレーズ。？神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者？――レベル6。

「冗談きついで……ハハ、レベル6つてのは天使かよ、オイ」

第六位の声は上擦っている。それでも他の人間が同じ場面に立たされた時よりも強気なのかもしれないが、あまりにも目の前の存在は圧巻すぎた。ただの人間が対峙できる存在ではないと頭ではなく身体が理解している。それは恐怖と呼ぶべきなのかもしれない。

天使。御坂は数日前のことを思い出した。あれはやはり見間違ひではなかったのだ。スキルジャンパーは本物の天使だった。二人のやりとりに対し口を挟むこともできない御坂と白井は、ただ呆然と目の前の光景の結末を見届けようとしていた。

「願え。京谷を救いたくないのか。絶望したままで終わらせる気か。願え、願え、第六位」

「うっ、
るせんだよ……」

「弱いままなのか、第六位。レベル5となったのはなんのためだ。仲間を救わずにいるのか」

「黙れよ、黙ってくれよ。オレとコイツはそんな関係じゃねえんだよ……」

「京谷を見捨てるのか。救える者を救わないのか。今なら間に合う。願え、願え、願え、第六位！」

「黙れええええええッッ！」

第六位が閉眼した。その表情が崩れていく。顔中の皺を寄せて、

やりきれない表情をしていた。

たしかに仲間だった。何度も一緒に仕事をこなし、一緒に飯を食い、笑い合った。京谷の行動の根底にある贖罪を第六位は知っていた。その上で協力し、時に利用し、利用され、今日まで背を預け合ってきた。

救いたくないわけがない。気が合う仲間だった。性格も素行も真っ直ぐしていない自分を許容し、叱り、支えてくれる唯一無二の仲間だった。京谷の贖罪の意味を知っていれば口に出すことは憚られたが、第六位は彼を見殺しにしたくななどない。

見殺しにしたくないから、今苦しんでいる。救ってくれと願いたいと思っている。

ふわり、と。熱いものが京谷の手に触れる。彼は目を開いて、それを見た。

一枚の真っ白な羽根。スキルジャンパーの翼に生えていた羽根だとすぐに理解した。

「・・・あなたの願いを教えてくださいませんか？」

さきほどの優しい声。穏やかな声だった。羽根を掌に乗せる第六位のそばに寄り、ほほ笑みかける。そっと両手で彼の手に触れ、羽根を握らせた。あなたのものですよといったげに、優しい眼差しで見つめた。

・・・ああ・・・そうか。彼の表情がわずかに綻んだ。

そして眉間に皺を寄せたまま俯いた。次いで、頼む、と声が洩れた。

「・・・コイツを頼む」

短い言葉だった。苦渋の末の決断。たったひとりで戦い続けてきた京谷に手を貸す、ということになる。それは彼の贖罪の精神を汚す。己の信念に従い勝負を挑み、たったひとりでレベル5第三位に善戦し、結果として敗れ去った。その結末を、贖罪を終えようとしている彼の最期を汚すことになるのだ。

死ぬことでしか報われないどうしようもない存在。それが京谷なのだ。

それなのに第六位が、唯一の仲間であつた第六位が京谷を救っていいのか。蘇った彼がどう思う。裏切られたと感ずるのではないか。恨みを抱きはすれど感謝されることなどないのではないか。

第六位は肯けなかった。簡単に救ってくれと言つていいものではなかった。再び贖罪という名の地獄を歩ませることになるのだから「ここで死なせてくれれば良かったのに」と言われることは、容易に想像できた。それくらいに京谷の人生は荒んでいた。クソツタレな毎日だった。

それでも。それでも、彼は願った。仲間を救いたいと願った。

第六位の手を包む両の手が離れた。手の中の羽根が光を強め始め、同時に第六位の身体も発光し出した。

スキルジャンパーの、慈しみを込めたほほ笑み。御坂の目から雫が垂れた。白井も言葉なく、涙をこぼしていた。

「あなたに、幻想きようそうを」

倒れ伏せている京谷の身体も光り始める。手の中の羽根が燃えるような熱を帯び、思わずもう片方の手からダーツを落とした。それでも羽根を手放すことはない。決して放さぬよう、強く握り締めていた。

三人を包む光が強まる。目を灼くような閃光の連続に、御坂と白井は腕で顔を隠した。なにが起こっているのか、もうよくわからない。ただ強烈な光が辺りに広がっている。

スキルジャンパーが第六位の願いを聞き入れ、京谷を救おうとしている。それだけはどれだけ閃光が強まろうと、わかった。

御坂の目からポロポロと雫が垂れている。胸のうちが熱いのだ。死にかけている誰かがいる。その誰かが助かることを願う誰かがいる。そして救おうとする誰かがいる。

そんな光景が、強烈な光雨のなかであっても、しっかりと彩られている。それほど感動しているわけではない。ただ熱いものを我慢することができなかった。白井も同じ気持ちで、光に吞まれる三人を見つめていた。

スキルジャンパー！

学園都市そのものと称された彼女がもたらすもの。
それは、幻想。

7（後書き）

備忘録：知覚事象 スキルジャンパーの八枚の翼 幻想

8（前書き）

お待たせしました。第三章8話です。第三章はこれで完結となります。

予定では第四章＋終章の構成なのでもう少しだけ続きますが、クライマックスに向けて突き進んでいきます。しつこいですが縦書き形式推奨中です。

削板軍覇は早瀬そぎいたぐせという少女を連れて逃げ回っていた。

普段着の男が横から不意打ちしてきたり、暗部としか思えないような男はフェイクだったりと巧妙な手口で追い詰めてくる。今も三人の男に追われているところだった。

削板は早瀬の手を引きながら路地裏を進んでいく。

（あいつらなんだ？ 獵犬部隊ハウンドドッグにしてはいやらしい動きばつかしてきやがるぞ）

彼らが？ 黒豹部隊ブラックパンサー？と呼ばれることを削板は知らない。黒豹は闇のなかでも陰の分野で動くものだった。さすがの削板でも黒豹部隊ブラックパンサーまでは認知していなかった。

銃声。その破裂音と同時に早瀬の腕を強く引つ張る。彼女の身体が宙に浮き、削板に吸い込まれるように抱きついた。流れるような動作で凶弾から彼女を庇う。

削板の身体に当たる前に弾丸は砕け散った。破片が背にぶつかるだけで貫通しない。

「痛ってえな、拳で来い拳で。根性無しどもめ」

削板はぺっと唾を吐き、再び駆け出す。路地裏は一本道になっていた。曲がりくねった袋小路。出口を探しながら削板は走り続けた。

（人混みに出ればあいつらも発砲したりしないだろうしな。出るのが先決だ）

とは思ってもなかなか出口が見当たらない。粗大ゴミが積み重なっていて通れないところもある。完全ロボット管理とはいえ、路地裏にまで清掃ロボットが来ることはまずない。ゴミが多すぎて故障の原因になるし、なによりコストがかかる。そういう事情を見越して粗大ゴミなどを捨てに来る不届き者も多い。

削板が苛立ちを隠せずに走り続けていた時だった。

「おかしいよ」

言ったのはお姫様抱っこされている早瀬である。「なにが？」と息を荒げながら尋ねる削板の方を見ることもせず、彼女は額に手を当てて唸り始めた。

「路地裏っていったってここは第七学区じゃん。学生寮が多くてスクールバスの路線が張り巡らされてる。これだけ走って道路にぶつからない方がおかしい」

削板は背後の足音が増えるのを感じた。数発の銃声が響くが、削板を倒すには足りない。

「・・・そうか、まずい！ あたい達は誘導されてる！」

「なんだとオオオ！」

銃声と重なる削板の声。早瀬が怯えた様子で耳を防いでいた。

「なんで誘導されてるなんてわかるんだ！」

「そ、粗大ゴミでバリケードがつくられてたじゃん！ 道路に突き当たらないって時点でおかしいのに。誘導は間違いない」

「くそ。まんまと罠に嵌まったつてのかよ！」

曲がり角。相変わらず一本道である。削板は全速力で角を曲がった。

光が射し込んでいる。道路だ。すぐそこに道路が見えている。

「出口、か？」

「待つて！ 誰がいる！」

バンという重量のある音。銃声だ。先ほどの男達の銃よりも口径が大きいのだろうか。銃声は普通のものとは違った。

削板が片膝をつく。口から血を吐き出した。早瀬の悲鳴が響き渡る。

出口を塞ぐようにして立っている男。早瀬を誘拐しようとしていたブラックバンサー黒豹部隊の隊長だ。

「私の背後が見えるかな、第七位？」

得意げに笑う男の背後にある車。通路の脇に停められたその車には、ごちゃごちゃした機械が乗せられていた。スピーカーのようにも見える。甲高い音が発せられていた。

削板は傷だけに呻いているわけではなかった。その音に苦しんでいる。早瀬にはなにも影響のない甲高い音。男はにやりと笑った。

「これはキャパシティダウンだよ第七位。別名は能力者封じ」

早瀬はそんなものを聞いたことがなかった。一般人はまず目にかかることがない代物である。呻き続ける削板を見て、能力者を封じ込める特殊な音波を流すものだと思えば理解した。

キャパシティダウンはAIMジャマーと同じように能力者を封じる力を持っている。AIMジャマーが能力者自身のAIM拡散力場を乱反射させるのに比べ、このキャパシティダウンは音響を用いて脳に直接影響を与え、能力を制限させる機械である。内からの制御と外からの制御という違いはあるが、結果的に能力者を封じるという点では変わらない。

男は怪訝そうに眉を寄せ、思い出したように嘲笑う。

「そうか。早瀬優希は無能力者だったな。通りでキャパシティダウンが効かないはずだ」

無能力者。早瀬の鼓動が高鳴る。

「良かったではないか。無能力者であるからこそキャパシティダウンに苦しめられることもない。その第七位のように、レベル5と称されたところでこの装置の前では赤子同然だ」

男は気味の悪い笑みを浮かべたまま二人に歩み寄って、早瀬の手を取って強く振り投げた。予想していなかった早瀬はなすすべもなく大人の男性の力に振り回され、肩から壁に叩きつけられる。ミシミシという嫌な音が響いた。

「ああ、あ、ああああ」

「無能力者の方がよっぽどマシだ。こんなレベル5よりはよっぽどな！」

痛みに目を瞑^{つむ}っていた早瀬の耳に打撃音が響く。目を開いて音の方を見た。うずくまっている削板を足蹴にしている男の姿があった。「計画の邪魔してるんじゃないやねぞこのガキが！ レベル5だから殺されないとも思ってるのか？ ？上？はお前の力などあてにしないんだオラ！」

メキ、という骨が折れるような音が聞こえる。グシャ、という音は血の溢れる肉塊を叩いている音のようだった。早瀬は目に涙を浮かべて後ずさる。

スプラッタ映画のワンシーン。映画と違うのは生々しい血の臭いが鼻についているのと、襲われているのが自分の恩人ということ。

早瀬は背後の壁に寄りかかり、震える足で逃げようともがいていた。こんなのおかしい。早瀬が思うのはそれだけだ。それ以上は脳の処理限界を超えている。今彼女が考えているのは一刻も早くこの場を去ること。昨日まで普通の中学生だった。今日からいきなり映画の主人公になれと言う方が無理なのだ。

映画ならば早瀬に力が備わって感動の逆転劇を見せただろう。だがこれは現実である。神や悪魔に祈っても能力は与えられなかった。大切な友達を救いたいと願った早瀬を嘲笑うかのごとく目の前の男が現れ、早瀬を殴打し、削板をめった打ちにしている。

足が竦^{すく}んで動けない。壁がなければ立っていることもできない早瀬はされるがままの削板を見つめていた。

息が荒くなる。助けたいと思った。でも無能力者だから助けられない。レベル0にできることなどない。無性に泣きたい気持ちに駆られた。それでも泣かない。今泣いてしまえば村叢^{むらぐみ}の言葉通りになつてしまうからだ。

早瀬はぎゅっと目を閉じた。動くこともできない情けない自分を恨んだ。

そんな時、声がした。地面に這いつくばるレベル5のものだ。

「逃げ、ろ。俺に構、うな・・・逃げの根性、だぞ」

早瀬はハッとして声の主を見る。彼は血塗れの顔でほぼ笑んでいた。

「なんだと、調子に乗るなよガキ！ 正義の主人公^{ヒーロー}気取りか！」

男の攻撃は強まる。男の足が削板の腹部を踏みつけた時、グハッと血を吐いた。内臓をやられたのかもしれない。

早瀬はどうしようもないほど震えたまま自分の身体を見た。壁に身体を預けているものの、その姿勢は逃げ出したくてたまらないと言っている。削板はそんな自分を見て「自分に構わず逃げろ」と言ったのか。

掌を見つめる。自分の血で汚れている。頬は殴られ、壁に叩きつけられた衝撃で肩も痛めている。だが目の前で倒れている恩人よりも傷は浅かった。

逃げようとしていたのか。身を挺^{てい}して救ってくれた恩人を捨てて逃げるのか。早瀬は己に問う。

無能力者だからなんの役にも立たないままでいいのか。

早瀬は剋目する。腹の底から唸りをあげた。震える身体など無視して獣のごとく駆け出した。

「ハッ、なにをするかと思えば逃げるのか。やはり無能力者だな」

男は笑った。削板は意識があるのかないのか、ぐったりした様子でそこに倒れている。

なにも考えない。ただ走れ。本能の赴くままに走れ。不様な姿で走れ。

その先にこそ、己のなすべきことがある。

「・・・まさか！ オイ、早瀬優希を確保しろ！」

男の言葉に反応して車の傍から別の男が出てくる。そう、早瀬が駆けつけた先にあるのはキャパシティダウンを積んだ車である。

もうひとりの男が横を通り抜けようとした早瀬の腕を掴み、羽交い締めにした。彼女は大人の男性の力で完全に抑え込まれても諦めない。両手両足を使って抵抗する。肩が痛む。唇が自分の歯で切れて血が出ていた。

「くそ、暴れるな、この！」

男はそのまま首を絞める。落とそうとしたのだ。

「が、はっ、ひゅ・・・」

早瀬の舌が酸素を求めて外へ這い出る。涙が勝手に溢れ出してくる。喉が無理やり絞られて、ぐえつという人間らしくない声が漏れる。

それでも彼女は諦めない。

「む、の……くしゃ、でもっ……」

懸命にあがく。誰かを守るためにあらい続ける。

「でき、る、がら……っ」

薄れゆく意識。涙で滲んで見えない視界。道路の明かりがぼんやりとしてきた。

手を延ばしていた。もう少しで届くところにあるのに。キャパシテイダウンの効かない無能力者がレベル5を救ってみせる。もう逃げない。守ってもらっただけの弱い存在じゃない。

大切な誰かを救う存在になりたい。

（もう少し……もう少しなのに……）

悔しくてたまらない。結局力が足りないから守れずに終わってしまうのか。白井や村叢の言葉を否定することはできないのか。

ひゅーという呼吸のかすかな音が弱まっていく。もう駄目だ。視界がブラックアウトする。

その瞬間だった。

目の前のキャパシティダウンを搭載した車両が勢いよく吹き飛んだ。首を絞めていた男の気が逸^それて腕が緩み、辛うじて早瀬は意識を取り戻す。

車両は別の車両に追突されたようだった。それも相当な速度を出していたらしい。時速一〇〇キロは出ていたのではないかと思う轟音だった。

ぐしゃぐしゃに潰れた二台の車両。その追突した車に記された？
アンチスキル
警備員？の文字。

運転席から降りてくる女性を早瀬は知っていた。長い髪でスタイルの良い身体からは大人の色香が醸し出されている。

「やあ、子供達を虐めて楽しそうじゃん？」

よみかわ あいほ
黄泉川愛穂。早瀬が心の底から慕う警備員の女教師だった。

アンチスキル
「警備員だと？ 通達は出ているはずだろう！ なにをしているのかわかっているのか！」

「優希に連絡入れても繋がらないからもしやと思って調べてみれば、こんな奴らが動き回っていたとはね。警備員のザル警備と言われても仕方ないじゃん」
アンチスキル

黄泉川は静かな口調で、自嘲気味にそう呟く。早瀬の位置は知り合いに無理を言って、監視衛星の力を頼らせてもらった。もう始末書では済まないだろう。

だが、そんなことは彼女にとってどうでも良いことだった。彼女の目に映っているのは、早瀬優希や削板軍霸という子供が傷つけら

れているという現状だけ。

「お前からこそわかってんじゃない？ これは一番やつちやいけないことじゃない！」

彼女は珍しく額に青筋を浮かべて怒っていた。黄泉川は子供が傷つくのが許せない人間だった。子供が誰かを傷つけるのも誰かに傷つけられるのも嫌いな、心優しい教師だった。

隊長と思われる男はチツと舌打ちする。そして大口径の銃を黄泉川に向けた。邪魔者を排除する、という極めて合理的な判断を下したのだろ。早瀬が声を出す前に動いていた。隊長の男は声が出なかった。足首を誰かに掴まれていたからである。

「根性根性根性オオオオオオ！」

削板軍覇。ぴくりとも動かなかった第七位が男の足首を掴んで不敵に笑っていた。

「しまったキャパシティダウンが破壊——」

「ごちゃごちゃうるせえええええ！ 空の彼方まで吹っ飛べやあああああ！」

削板は立ち上がる動作から片足を踏み込み、力任せに男を放り投げる。壮絶な音がして、音速に近い速度で男は大空を突き進んでい

った。

ぎゃっという短い悲鳴とともに残りのひとりが黄泉川に組み伏せられる。首を絞めおとされ、意識を失った男を縛り上げて鉄柱にくくりつけた。大の男を相手にしても黄泉川は引けを取らない。とくに、子供を痛めつけるような大人には負けないのだ。

腰を抜かして座り込んでいる早瀬に対して黄泉川が優しい笑みを浮かべて手を差し延べる。削板も男前に笑い親指をぐっと立てた。

「お前すげーな。根性あるぜ。俺も負けてられねえと思ったから立ち上がった。たいした根性やろうだぞお前。いや、根性女の方が正しいのか？」

血だらけで彼はケラケラと笑う。黄泉川が黙り込んだ早瀬を抱き締め、頭を撫でる。

「よくがんばったじゃん。立派だよ、優希」

二人の言葉を聞いて、早瀬はついに涙を流す。最初は漣、次第に強く、強く。

彼女は温かさに包まれながら、弱々しい声で尋ねる。

「レベル0にもできることって、あるんでしょうか？」

黄泉川と削板が顔を合わせ、困ったようにほほ笑みを交わした。

それから黄泉川はもう一度彼女を抱き締め直す。

「あるよ。レベル0にしかできないこともあるじゃん。優希はたっ
た今それを成し遂げたんだ」

号泣。だがそれは悲しいからではない。

自分にもできることはあるのだと悟った早瀬は、嬉しかったのだ。

優しい眼差しを送る二人を前に、彼女はいつまでも子供のような
泣き声をあげていた。

8 (後書き)

備忘録：レベル0 早瀬優希 キャパシティダウン

0（前書き）

遅ればせながら行間三話目でございます。縦書き形式推奨。

くるくるの髪を弄りながら少女は椅子に座っていた。

ロシア連邦のアムール州で彼女は暮らしている。アムールは南に中国の黒竜江省、北にサハ共和国を臨むロシア連邦南東部の地域で暮らしているのはほとんどがロシア人だった。

少女は名をソーフィヤと言う。語源は智慧を意味する *sophia*。その語源に違わぬ聡明なところがソーフィヤにはあった。ロシアではおなじみの愛称はソーニャ。たとえばエカテリーナをカーテヤと呼ぶように欧米だけでなくロシア国内でも愛称が用いられている。

祖父は日本人だった。ソーフィヤは祖父のことが大好きで、慣れない日本語を自然と習得していった。顔立ちもロシア人ではなく、しかし日本人にしては整い過ぎている感じである。その東洋人に特徴的な黒ずんだ瞳がソーフィヤの地元では珍しいらしく、彼女がクラスの人気者である秘訣のひとつだった。

北に隣接するサハ共和国。巨大なロシア連邦という国家を構成するひとつである。実はソビエト連邦が解体され、ロシア連邦として各国が協力体制を敷くまでのわずかな間に、さまざまな闇取引が行われた。軍事・外交・経済・宗教など国際情勢に関わる取引のなかに含まれていたのは？超能力開発権？である。

超能力の開発に成功したのは日本のなかにある学園都市という独立国家だけだ。アメリカ合衆国もイギリスもフランスも開発に失敗し、莫大な費用を無駄にしたようである。それで表面上では世界の超能力開発権は日本（厳密には学園都市）だけが牛耳る形に流れて

いくはずだった。

多額の費用と人員を摩耗してもまだ諦めない国家が二つ存在していた。

日本と同じ第二次世界大戦の敗戦国ドイツとこのロシア連邦である。

ドイツは医学・心理学を始めとする人体学研究の雄に恥じぬ技術力を有し、人体学では日本に引けを取っていなかった。だからこの期に及んでも超能力研究を止めようとしなかった。しかし学園都市レベルの科学技術が存在しないために成功の兆しすら見えていないのが現状である。

一方でロシア連邦は共産主義を掲げてアメリカ合衆国を筆頭とする世界のすべてに対抗しようとしていた。アメリカが早々に超能力開発を諦めたからと言ってロシアは諦めるわけにはいかない。核開発で後手に回っている苦い経験がロシアの人間にはあった。

ロシアに秀でた科学力はない。人体学も停滞を見せている。とても超能力開発を続行できる状態ではなかった。

その悪化するロシア情勢を打ち払う提案を持ち出したのがサハ共和国である。彼らの要求は実に単純明快で、ロシア連邦を構成する一大国家として主導権を渡せというものだ。その見返りに支払うものが超能力開発のヒント。

学園都市の学者に？原石？と呼ばれている少女である。

アムール州は軍事基地が多く存在している。南部で中国と隣接する以上国防の必要があるからだ。ソフィヤの祖父は軍人だった。現役時代はアムール州のロシア軍をまとめる役だったらしい。ロシアに帰化したのかどうかは知らないが、誰も祖父を日本人扱いしな

かった。祖父はロシア語を流暢に話したし、紅茶を飲む作法までソーフィヤに教えていたのだ。

アムール州は学校が少ない。ソーフィヤが通っていたのも汚れたぼろっちい学校だ。オンボロ学校のわりに珍しい日本語の授業があり、賀古という名の教師がいた。ソーフィヤは日本語が得意ということで賀古とともに親しくなり、学校にいる間は一緒に過ごすことも多かった。

賀古は日本語の先生だけでなく、偉いお医者さんでもあった。時々不思議な実験に付き合わされた。紙を見せてじつと動くなと指示されたり、ピリピリと電気を流されたりしたが、実験の後にはいつも決まって紅茶の美味しいお洒落なカフェに招いてくれたので、嫌いではなかった。

サハ共和国の軍人がアムール州に姿を見せるようになっていた。祖父と揉めたらしいが、詳しいことは幼いソーフィヤにはわからなかった。

数日後、祖父は死んだ。拳銃の暴発だと軍部から通達があった。

ソーフィヤは賀古のもとに身を寄せるようになる。すでに家族は軍に身柄を拘束されていた。軍に嵌められたと気づいた時にはすべてが遅かった。

賀古はソーフィヤを連れてロシアを逃亡する。中国に亡命し、それから日本へ。

ソーフィヤは賀古と名乗り、学園都市に身を隠した。そこで畜生にも劣る二人の少女と出会う。

？原石？と呼ばれた少女は学園都市に亡命し、恩人である賀古のために暗躍し始める……。

0（後書き）

備忘録：原石の価値

地名とかは覚えなくていいです。そういう感じかと片隅に覚えておいてください。

1（前書き）

お待たせしました第四章のはじまりです。縦書き形式推奨。
第六位の能力について説明すべきかどうか悩みましたがここで説明
しないと一生説明しないなと感じたので書きました。なるほどなあ
と流してくださいませ。

アクセラレータ

一方通行の携帯電話に一通のメールが届けられる。送り主の不明なそれを彼はためらうことなく開いた。こういうメールはたいてい？上？からのものだ。

ちなみに今の学園都市ではメール形式でのウイルス散布のような行為は時代遅れである。電子機器に直接電氣的介入ができる能力者が腐るほどいるし、なにより携帯電話やパソコンにデフォルトで搭載された防衛機能がメールについている？触れたら危険かもしれないもの？を勝手に判断し削除してくれる。なのでもしセーフィング機能が皆無の個人サイトなどのURLを直に添付したメールを送ると、そのURL部分だけごっそり削れてしまうといった不具合もあったりする。今の学生は柔軟でそういう不具合にも順応しているので、町に出ても不満は聞こえないだろうが。

メールで送られてきたのはとある資料の一部。スキルジャンパーの力の正体である。

？パーソナルリアリティブレイン？。

アクセラレータ

一方通行は？上？からスキルジャンパーに関する情報が送られたことにまず疑問を抱く。そして次に声なく憤る。

？上？の連中は今も高みの見物と洒落込んでいるらしい。ひとりの少女を殺すために軍隊に匹敵する人間兵器が何人も駆り出されているというのに。

学園都市の闇はどうしようもないクズで溢れかえってやがる。

胸糞悪い。一方通行は再び携帯電話を弄り始める。

？上？はおそらく「さっさとスキルジャンパーを始末しろ」という意味でこの情報を送ったのだろう。だからスキルジャンパーの情報を開示した。それならば一方通行は反抗したくなる。

最初は実験を阻止することが目的だった。そして第五位の言葉の意味はわからないままだった。結果的に彼は殺すべき敵を生かした。殺すと言いながら救ったのだ。傍から見れば矛盾しているだろう。？上？が痺れをきらすのも無理はない。

だが、だからといって？上？の思い通りになる必要などどこにもない。

アクセラレータ

一方通行はニヤと笑った。廃止されたとはいえ特力研のデータベースがこの町のどこにあったか彼は知っている。調べに行くか、と肩を軽く鳴らした。

もしスキルジャンパーが生き残ったら？上？はたいそう齒噛みして悔しがるのだろう。そういう愉快なものを見るのも一興かもしれない、と一方通行は考えていた。

アクセラレータ

殺すために与えられた情報で生かすことを考え始める。？上？に対する些細な反抗であり、天の邪鬼的発想から生まれたものにすぎない。

しかし彼は密かに、そして静かに、成長を始めていた。

第六位は第一三学区を歩いていた。昨夜第二位によって崩壊させられた町である。

赤いメツシュが光を照り返している。トボトボと歩く彼の背中丸まっていた。瓦礫が撤去されていない道なき道を進みながら、第六位の瞳はすべてを見通していた。

なぜここに戻ってきたのかはわからない。足が勝手に動いたと言うべきなのかもしれないし、荒れたこの学区なら人もいなくて静かだと脳が判断したのかもしれない。とにかく第一三学区は静寂に包まれていた。

京谷は一命を取り留めた。スキルジャンパーが救ったのだ。今はとある病院の一室で安静にしているだろう。意識はまだ戻っていないと聞いた。

じやり、という砂地を踏む音が背後から聞こえる。

首だけで振り返る。金髪を逆立てアロハシャツを着込む男が立っていた。サングラスが太陽の光を跳ね返していつそう目立っていた。

「やっと来たかにやー。遅いぜ第六位」

「誰だよ、お前」

第六位は低血圧者の寝起きのような声で応える。サングラスの男はへつと笑う。

「土御門だ。^{つちみかど}まあ俺が何者だったかまわない。話の本筋はそこじゃないからな」

土御門はゆつくりと歩み寄ってくる。それを肩越しに見た第六位は息を吐き、再び歩み始める。互いに距離を縮めることも離すこともない。同じ速度で歩いて行く。

「便利な目だな。？未来を見る力？があるんだっ たか」

「ああ。一〇〇年先が見えるわけでもねーがな」

「だが、この場所で起こる惨劇を知っていたお前はあらかじめ住民を逃がしておいた。その風紀委員の長としての権限を活用してな」
ジャッジメント

第六位はもう一度首を回して後ろをついてくる土御門の方を見やる。なにを言いたいんだコイツ、といった疑わしい目を向ける。

「？知覚事象？、その完璧な目を持つ者は？六つの見る目？を有する」
フローレスアイサイト

土御門は確認するように続けた。二人は爆撃された町並みを過ぎて行く。警備員の目をかいくぐることなど闇を生きる彼らにとつては造作もないことである。
アンチスキル

「ひとつ、そこにある物を見る目」

そこに存在する物体を認識する力であり順序の法則を無視して対象を視ることができる力。固法美偉が持つ？透視能力？と同じだ。
このり みい クレアボーイアンス
ようするに透視して隠された物を見ることができ、また逆に透明な物を視覚的に認識できる能力である。

「二つ、そこにある色を見る目」

そこに存在する物体の色を認識する力であり順序の法則を無視して対象の色を視ることが出来る力。^{カラーマーカー}？色彩追跡？という少女はこの系統の能力者だった。対象を色付けするという能力も第六位は有しているが、その対象に直接手を触れる必要がある。^{カラーマーカー}色彩追跡の少女のように視覚として捉えるだけでその対象を色づけることはできないので、？プロデュース？に招致されることはなかった。

「三つ、そこにある空間を見る目」

そこに存在する空間を認識する力であり己の視野を操る力。三六〇度ではなく前後左右上下すべてを把握する広角視野のなかでも最高クラスの能力。その限界距離は自身を中心に半径四八キロである。

「四つ、そこにある真偽を見る目」

そこに提示された真偽を認識する力であり客観的事実に基づいて判断されるためいかなる心理操作もいかなる偽装能力も通用しない力。これは第六位しか有していない特異すぎる能力で原理は不明。ただし相手の心理を読み取るわけではない。誘導尋問形式で応用することは可能。客観的証拠を並べた上でその真偽を見極め？断罪する者？は決を下す。

「五つ、そこにある善悪を視る目」

そこに提示された存在や概念の善悪を判断する力であり人やその物の性質を見る力。世界の常識や現行する法律の概念に縛られることなく極めて客観的に性質を見抜くことができる能力。学園都市には同様の能力者が数名存在するが、ほとんどがレベル1の扱いを受けている。善悪を視る能力は主観と客観の区別が難しく、第六位クラスの使用手でないと意味の薄い能力である。それ自体は大した能力ではないが、相手を傷つけずその本質を見抜く力は司法や風紀の立场上、重宝されている。

「そして・・・六つ、そこにある時を視る目」

現在・過去・未来を見る力。原理は第六位いわく「時計の針を見て今何時かを理解すること」と似ているらしいが、まったく説明されていない彼だけの能力。実現不可能と噂されていた未来予知を手に入れた最強の視覚系能力者。それこそ第六位が第六位たる所以だった。

「複数の視覚系能力者は希少なんじゃないや」

「そーだな。学園都市に何千という能力者のなかでも、有名なのは固法くらいじゃねーの。他にも数人知ってるが、実戦で使えるレベルじゃねーからな」

クレアポイアンス
固法の透視能力は眼球に頼らず視覚情報を得る能力ということ

千里眼と透視の二つを操っていた。透視単体、千里眼単体の能力者は多いが、その同時が可能な能力者は稀有である。

そう考えると第六位はとんでもない能力者ということになる。二つどころか六つの視覚系能力を操っているのだ。おまけに六つのうちの二つは第六位にしか発現できていない能力である。

フロレスアイサイト
？知覚事象？。未来予知という幻想じみた能力が第六位をレベル5の器から溢れ出させようとしていた。心理掌握と同じく知覚事象は特殊系能力者の頂点に立つ逸材である。

「稀有な能力者だからレベル5になれたと。お前は第七位と同じで？原石？って話だったか」

「話だったってなんだよ。オレは？原石？ってヤツなのよ」

「でもにやー。おかしいぜよ、第六位。俺の鼻は誤魔化せねーぜい」

「うぜえ口調だな。なにが言いたい？」

第六位はもう振り返らない。土御門の声を聞くまでは立ち止まることもしなかった。

「その目、霊装だろう」

ピキッと第六位の左目が嫌な音を立てる。目を見開く第六位は足を止め、ゆっくりと振り返った。その表情は歪んでいる。

「へえ。学園都市に霊装を知っているヤツがいたとはな。どうしてオレの目が霊装だと思った？」

「もともと学園都市には薄い魔術の気配がしていた。だが魔術師じゃない。魔術師にしては上手く隠れすぎているからな。それにそこまで隠られる魔術師が時々魔術を香らせるのはおかしいだろう。だから俺と俺の仲間は霊装だと判断した。それも？歩く教会？のよくな自動発動している霊装ではなく使用することで絶大な力を発揮する霊装だな」

「仲間だあ？ お前、学園都市の住人じゃねーのかよ」

第六位は片眉をつり上げる。土御門は肩を竦めてニツと笑う。

「俺が何者なのかはどうでもいいさ。ところでその霊装の正体は？ カオマニー？ だな？」

「そこまで掴んでるとは。魔術サイドの人間ってのは間違いねーみたいだ」

タイ王国の霊装のひとつ？ カオマニー？。カオマニーとは現在でもタイ王室で飼われている希少なオッドアイ（左右の目の色が異なる）の白毛猫のことであるが、？ダイヤモンドの瞳？と称されたそのオッドアイは魔術的な能力が多分に秘められている。霊装として濫造されたという噂もあるが現存する物はほとんどなく、骨董品のような扱いを受けていた。

とはいえ？ カオマニー？ は魔術能力を増長させる能力を有してはいるが、それ自体が特殊な能力を持っているわけではない。たとえば霊装の代表とも言えるイギリス王室に伝わるカーテナ＝オリジナ

ルという霊装は次元を切断することができる。

「お前は魔術師なのか？ 魔術師がレベル5になりすましているのか？ もしそうなら所属する宗教学派と団体を述べる」

「落ち着けよ。オレは真面目に学生やってるんだぜ。カリキュラム受けてるのに霊装なんざ使って魔術を発動させたらオレは文字通り木端微塵になっちまう」

土御門は唸る。魔術とは本来なんの才能もない者が生み出した呪いに近い儀式だった。学園都市で超能力を発現させている者はレベル1であろうとなにかしら才能があると言える。才能がある者が才能のない者が使うべき儀式を行ってしまうと、その呪いが自身に跳ね返り身体を食いちぎるだろう。

土御門は魔術師だったが学園都市に潜入してカリキュラムを受けた結果、レベル0の肉体再生が発現してしまった。魔術を使えば全身から血を噴き出して死ぬ身体になっている。

だから第六位の話を否定できない。霊装とはいえ魔術要素を含んだものをレベル5が使ったりすればどうなるか、想像できない土御門ではない。

不意に第六位はニヤリと笑った。

「俺は無神論者だよ。どこの宗教にも属してねーし、魔術師でもねー。けど、この霊装は本物だぜ。タイ王室から失われた真の？ カオマニー？ だ」

土御門は息を飲んだ。それはある意味でカーテナ「オリジナルに

匹敵し得る霊装ではないか。タイ王国を象る霊装のひとつをなんの関係もない日本人が使役していると言うのか。

「副作用はないのか」

「今のところないな。オレが弱った時、コイツがどう反応するかは知らねーが」

「タイ王国はお前を追わないのか？」

「？カオマニー？は濫造されたんだよ。どれが本物なのか王家の間でもわからないって話だ。濫造品とはいえタイ国内ではそれに力を発揮するんだろ。それで満足しちまつてるってのが真相だとオレは思っぜ」

「お前の？カオマニー？が本物だと言うなら、お前がタイ王国に赴けばどうなる？」

「俺が王室に連なるってことになるんじゃないの？ ゴメン、興味ねーわ」

土御門には理解が追いつかなかった。スケールが違いすぎる。ひとつの国家を歪ませるだけの霊装をただの学生が有している。どうやって手に入れたのか、どうして魔術に食い殺されないのか不思議でならなかった。

疑問に頭を抱える土御門を見つめ、それから第六位は自分の掌に目を落とす。

「オレはもう科学サイドなのか魔術サイドなのか、人間なのか化物なのか、それすらわからなくなっちまつてる。そーいう身体になっ

ちまつてるんだよ。？カオマニー？の副作用もない。むしろオレが？カオマニー？の一部になつてゐる感じがするんだ」

「霊装の一部に？」

「力を使い続けば、いずれそういうことになつてもおかしくないだろ。だってコイツは王室の霊装なんだぜ？」

そう言つて左目の横の辺りを指で叩く。

「それでも、オレはコイツを使い続ける。守りたいモンがあるからだ。お前とお前の仲間がこの目を奪いに来るつて言うなら、正面から堂々と立ち向かつてやる。オレが断罪してやるよ」

第六位は背を向けた。丸まつた背中を見て、土御門はオイと声をかける。

「ひとつだけ教える。お前が守りたいものは、なんだ？」

彼は振り返らない。廃れきつた第一三学区を歩んで行く。

「オレが守りてえのは、この町の幻想だよ」

小さくなつていく彼の背を見つめ、土御門は頭を掻いた。

1 (後書き)

備忘録：一方通行 知覚事象 色彩追跡

2（前書き）

更新が遅く申し訳ありません。クオリティだけは下げないよう尽力いたします。

オリジナルキャラの指針が決定する重要な回です。縦書き形式推奨！

第七学区にある？学園まなびやの園？。常盤台ときわだい中学校をはじめとする五つのお嬢様学校によって形成される共用区であり、その実は能力開発研究協力用地でもある。長点ながてん上機学園じょうきなどが大学の研究機関と協力しているのと同じように常盤台はお嬢様学校の連合を築きあげていた。どの学校も能力開発に先んじようと必死なわけだ。

村叢むらくさは学舎の園にある中世ヨーロッパを思わせる石畳の道路の脇にあるベンチに腰かけていた。お嬢様学校の集合地区なだけあって歩いている女生徒の制服は清楚で明るい色が多い。対して村叢は漆黒に身を包んでいて、肌の露出度も低い。さながら映画のなかから飛び出してきた忍者のように見える。くノ一ではなく真正正銘の忍者。忍者と唯一違うのは潜伏に不向きな長い刀を背に携えているところであろうか。

『その格好でよく騒がれませんね』

「それが私の能力です。？光学操作クリアコントロール？を使えば身を隠すなどたやすいこと」

電話で会話しているわけではない。脳内で直接会話している。村叢と話している相手は学舎の園に鎮座しているレベル5のひとり、心理掌握メンタルアウト。まだ陽が出ているため、直接会うことははばかれた。村叢の能力があれば心理掌握メンタルアウトごと姿を消すことは簡単だが、接触しているところを部外者に見られても面倒である。心理掌握メンタルアウトは精神感レバース能力者でなくとも脳内での会話を可能にする。よほどのことでない限り念波を飛ばし合う方が安全なのだ。

『しかし仲間割れとは。ずいぶんとスキルジャンパーは嫌われているようですね』

「私の落ち度です。奴の肚の底を読めなかった私の責任。そのケジメはつけるつもり」

『そのために賀古^{かこ}の居場所を教えろ、と言つのですね』

メンタルアウト
心理掌握の声には抑揚がない。テキストを朗読するナビゲート音声にも聞こえる。

『私の情報網であなたに協力するメリットは？』

「この実験の崩壊」

『それはあなたが得をする話だけで、私にはなんの得もありませんの』

「実験が崩壊してなおかつ東雲鏡^{しのめかがみ}が生き延びる。そういう結末を見せてあげますよ。それにあなたが必死に集めたスキルジャンパーの情報。彼女が生きている方が利用価値はありそうですけど」

『・・・なるほど。情報の価値を維持するために協力しろ、と言うわけですか』

メンタルアウト
心理掌握の平淡な声。耳を傾ける、というよりは脳に直接訴えかけてくるので村叢はじつと手のなかの写真を眺めていた。村叢と東雲、賀古の三人が写った思い出の品。

クシャ、と軽い音を立ててそれは潰れた。

「もう後戻りはできない。ここで決着をつけるしかないんです。友達を傷つけてまで選んだ道なんですよ。だから協力しなさい、第五位」

彼女の声がほんの少し変わった。笑ったのかな、と村叢は思う。

『第一〇学区。閉鎖された第八研究所に彼女はいます』

「ありがとうございます。この礼はいずれ必ず」

村叢は立ち上がる。

メンタルアウト

心理掌握の能力を使えば人のなかにある？声なき真実？を掴むことができる。警備員や暗部組織を構成する誰かひとりに心理ハッキングをかければ、その組織の全体図を把握することも可能だ。実際にはその人物が認識している組織に対する情報は間違っていることが多いため、できるだけ階級の高い人物にハッキングをかけた方がいいのだが。

今回も似たような手段を使ったのだろう。警備員を伝つて監視衛

アンチスキル

星担当者を特定し、その精神を乗っ取って情報を得たのかもしれない。そこまでの遠隔操作が可能なのかわからないが、事実彼女は居場所を掴んでいた。

村叢は歩き始める。賀古を消して実験を終わらせる。思い出もすべて消し去るしかないのだ。

御坂は白井の傷を診せるために冥土帰しの病院を訪れていた。

「傷は浅いね。この傷をつけた相手も相当な腕前だね。日本刀の良さを活かしている。細胞が潰れていないんだ。傷の治りもずつとはやいと思うよ。」

カエル面の医師は笑顔で告げた。白井は包帯を巻かれながら「ありがとうございます」と返す。京谷という男は医師が感心するほどの剣術を持っていたということらしい。

スキルジャンパーこと東雲とははぐれた。光がおさまった時には姿がなかったのだ。疲弊しきった第六位を見つけ、共に一命を取り留めた京谷を連れて病院を訪れた。京谷が無事にベッドに寝かされると、第六位は忽然と姿を消してしまった。

初春と佐天が心配そうに白井の方を見ている。

「私、全然気づかなくて・・・」

「初春さんはあんなにがんばったじゃない。起きないほど眠っててもおかしくないわよ」

「そうですわよ初春。結果的にわたくしはこうして笑っていますの。あなたが悔やむことはありませんの」

初春は俯いたままだった。死闘が繰り広げられている間熟睡していたのだからその気持ちはわからなくもない。

カエル面の医師は御坂の方を指で差した。

「君のその傷。誰かに治療されているね」

「スキルジャンパーに」

「なんだって？」

ヘンキャンセラ―
冥土帰しは眉を顰めて詰問する。

「今スキルジャンパーと言ったかい？」

「はい。背から八枚の翼を生やしたスキルジャンパーが現れて私を治療しました」

「八枚の、翼・・・？」

ヘンキャンセラ―
冥土帰しは唸る。そして御坂だけに付いて来て欲しいと言った。

「君達は少し待っていてくれ」

御坂は彼の後を追って部屋を出る。白井と初春が首を傾げて見つめ合った。

佐天涙子は立ち上がっていた。白井と初春が「佐天さん！」と口を揃えるが、佐天は止まらない。まっすぐに出口を目指して歩いて行く。

「御坂さんだけを呼んだんですよ、佐天さん」

「大人しく待っているべきではありませんの？」

佐天は扉に手をかけて動きを止める。

スキルジャンパー。

最初に御坂達とスキルジャンパーを結びつけたのは自分だ。後悔がある。なにか力になりたいと思う気持ちもある。早瀬にスキルジャンパーのことを教えたのも、きつとなにかの役に立ってくれるはずだと信じているからである。

自分は黙ったままでいいのか。御坂と白井が傷つき、初春も危険にさらされた。そんな非日常のなかでひとり平穏に身を委ねていいのか。

なにかやれることはあるはずだ。レベル0の少女でも。

「知りたい。知ってみたいんだ。御坂さんや白井さん、初春がなにと戦っているのか。私は知りたい。そして同じ場所に立ちたい。レベル0でも、ただの中学生でも」

白井が息を飲む。早瀬に浴びせた言葉を想起したのだ。初春は唇を噛みしめる。

「でも！ それで佐天さんが傷ついたら私は！ 私達はどう思うか！」

「ごめん初春。けど、それは私も同じなんだよ」

初春の表情が固まる。

そうだ。彼女はそんなことすら忘れていた。

佐天が傷つけば初春が悲しむように、初春が傷つけば佐天は悲しむのだ。

「……恐くありませんの？」

「恐いですよ。けど私が眠っている間、白井さんはずっとこの恐怖と戦ってきたんでしょ？」

白井もそれ以上なにも言わなかった。止めるつもりもないようだ。佐天が止まるに値する言葉を持ち合わせていないのだろう。「無能力者だから」という言葉を引き合いに出しても今の佐天は止まらない。確固たる意志をその背に掲げている。

「初春。私、言ったよね。初春の傍にいろつて。じゃあ傍にいさせてよ。そして一緒に戦わせて」

「佐天、さん・・・」

「止められても私はやるよ。首を突っ込むよ。それで傷ついたとしても、なにもしないまま初春達と別の世界を生きるよりよっぽどマシなの」

扉を開く。初春達と同じ場所で戦うために無能力者・佐天涙子は一歩踏み出す。

カエル面の医師は通路の奥に進んで行く。言葉は交わさない。今からなにを見せられるのか恐ろしくもあり、同時に慣れない風景に胸が高鳴っていた。薄暗い通路の奥には資料室、ベッドや車椅子などを安置する倉庫のような部屋が並んでいる。この辺りには病室がないため見舞客が訪れることはない。

静寂のなかを二つの足音が響き渡る。

その片方が音を止めた。冥土^{ヘウンキヤンセラ}帰しはゆっくりと扉を開く。無音で

開く扉の先に広がる光景に御坂は思わず目を丸くした。

平凡な病室。カーテンが靡く清楚な感じの部屋。キラキラと夕焼けの朱色が射し込んでいる。

ベッドがひとつある。そこに眠らされている少女。小学生のような出で立ちの彼女は固く目を閉じて臥せている。夕焼けの朱色をそのまま取り込んだような、燃え盛る色の髪。小柄な身体には似合わないごてごてしたヘッドギアのような器具。左腕に取りつけられた四角い箱。無数の管が彼女に突き刺さっている。枕のそばにある機械には様々な数値や波形が映し出されているが、それがなにを示しているのか御坂には理解できない。

スキルジャンパーと呼んでいたもの。人と呼んでいいのかわからなかった。五体満足でたしかに人の形をしているのだが、どこか人と呼ばせない風貌をしていた。禍々しい器具がそう思わせるのか。そんな器具なしでは存命できない彼女を憐れむ御坂が、そう思ってしまうだけなのか。

「君を救ったのはほんとうにこの娘かい？」

はいと即答できなかった。穏やかな表情でもなく、苦痛に歪んでいるわけでもない無機質な寝顔。そんな彼女を見ても生きているのか死んでいるのか判断できない。動く気配がまるでないのだ。それは電池を入れ忘れた玩具のように。

「東雲君は、まだ目覚めることはないだろうね。少なくともあと二日は眠り続ける必要がある」

「こんな風にしたのは、第一位ですか？」

「それは僕にもわからない。昨晚うちの近くで倒れていたんだね。一度も起き上がっていないと思うよ。目覚めればその機械が知らせてくれるはずだからね」

体内データを処理する機械は正常に動いている。途中で動作を停止していれば報せがくるはずであるし、体内データという微細でデリケートな情報を処理する機械は一度でも異常を感知すればエラーを吐き出すだろう。医療器具をすべてAIに託すのは冥土帰し（ヘンキャンセラー）のプライドが許さないらしく、オールAI化が普通の病院が増えているなか、未だに彼の病院では一級機械の扱いは人間が行っている。

「君を救ったというスキルジャンパーは、ほんとうにスキルジャンパーだったのかい？」

滑稽な質問だった。けれど今の御坂にはそれを笑う気力もない。目の前で恩人は眠り続けているのだ。仮にも超電磁砲（レールガン）一二八体に匹敵する能力があると謳われたスキルジャンパーが。

「どうして私にこの有り様を見せたんですか」

「協力して欲しいからだね」

「協力？」

「スキルジャンパーを救うために」

音が失せた気がした。光が広がった気がした。心に去来する巨大ななにか。御坂の身体は間違いない震えていた。

「この実験を挫き、もう誰も傷つけず、スキルジャンパーを救う気はあるかい？」

考えるまでもない。その最高の未来を、見たい。

友達のために。なにより自分のために。

御坂は力強く肯く。

「良かった。この実験のタイムリミットは今晚だ。日付をまたげば実験は凍結する」

「なぜですか？」

「統括理事会はこの実験に積極的ではないということだね。いわば研究者の暴走と言うべきだ。統括理事会としては別の狙いがある。この実験が日をずらして持ちこまればその狙いが失敗する可能性が浮かび上がる」

「別の狙い？」

「そこまではわからない。見当はついているけどね。今は実験が明日までだという事実の方だけ覚えておいて欲しい」

統括理事会の狙い。あるとすればそれは幻想殺しこと上条当麻イマジンブレイカー かみじょうてつまにある。
つちみかど もとはる

土御門元春が上条当麻を自然な形でこの抗争に巻き込んだ。もともと実験の刻限が今晚午前0時であることを鑑みれば、統括理事会としても土御門を罰することは難しい。統括理事会側も実験の延長を想定しているわけではなかった。土御門は上手くやったということだ。

上条当麻が関わったまま八月二七日に実験がずれ込めば嬉しくない事態が統括理事会、さらに言えば理事長アレイスターに起こる。アレイスターが上条に気をやっていたことを冥土帰しは知っていた。外にも多くの患者が入院しているからね」

「守る、というのはレベル5達からですか？」

「レベル5だけじゃないかもしれない」

その言葉が意味するところを、御坂は理解していた。第六位を始めとする風紀委員^{ジャッジメント}。第四位を始めとする？アイテム？。組織立った攻撃があってもおかしくはない。

「やってくれるかい、超電磁砲^{レベルガン}」

困難な道だ。場合によっては第一位と戦うことになるだろう。それでも超電磁砲^{レベルガン}は迷わない。己の力を大切な友達のために。そして恩人のために使うと決めたのだから。

「守ってみせます。そのために私は学園都市に7人しかいないレベル5のひとりに登り詰めたんです」

誰かのために戦う。

その思いがあれば人はどんな苦難も乗り越えられる。どんな強敵とも渡りあえる。

人は皆、主人公の素質をもって生まれてきたのだ。

佐天涙子は叫び声をあげそうになった。

扉の隙間から見えたのは自分よりも遙かに酷い状態で眠り続けている東雲だった。自分を庇ってあれだけの大怪我を負ったのかもしれない、と佐天は瞬時に思った。後悔に似た黒いドロドロしたものが胃のなかを這いずり回った。吐き気を催してしまった。

視界が涙で滲んでくる。声を押し殺した。御坂達には気づかれたくないのだ。こっそり後をつけてきた。そこで見たのは認めたくないような惨状だった。

東雲は傷ついて目を覚まさないでいる。自分のせいだ、と佐天は頭を抱えた。

自分があの時訪ねなければ、もっと違う未来が待っていただろう。その事実だけで佐天を悶絶させるのに十分だった。

「守ってみせます。そのために私は学園都市に7人しかいないレベル5のひとりに登り詰めたんです」

苦悶の表情を浮かべる佐天の耳に入った御坂の言葉。面をあげて隙間から覗く。

御坂の目に力が漲っていた。大切な者のために命を懸ける主人公ヒーローの顔だ。勇気を与える優しい強さ。今の御坂は優しい強さに溢れていた。

佐天はぎゅっと自分の身体を抱きしめる。震える膝も、次第に弱まっていた。

ヒロインのままでいたくない。力のある者に戦わせ、守られ続ける存在でありたくない。

佐天は思う。無能力者でも主人公ヒーローになることはできるはずだと。

佐天は思う。無能力者でも誰かを守っていいはずだと。

佐天は思う。上条と早瀬が戦おうとしている今、自分が立ち止ま
ってはいけないと。

「主人公^{ヒロイン}になりたい。不様で惨めで弱いけど、決して屈しない主人^{ヒロ}
公に」

レベル0だった。この学園都市で否定されて生きてきた。けれど
その評価に屈してはいけない。

レベル0にもやれることはある。あると信じるしかない。ないと
思いこんだ時、人はヒロインであるしかなくなる。あると信じた者
だけが主人公^{ヒロイン}となる。

佐天は信じた。目の前の主人公^{ヒロイン}に負けたくなかったから。

レベル0が守られる存在でしかないと言っなら、その言葉を否定
して生きてやる。

彼女は信じている。無能力者の底力を――。

主人公^{ヒロイン}の軽い足音が廊下を響き渡った。

学園都市が生んだ最高の能力者・一方通行は第三学区のビジネス
ホテルを訪れていた。

学園都市の外交地区というだけあって目に映る看板のほとんどに

日本語、英語、中国語、フランス語などの多言語が記されていた。ブロンドの髪の女が秘書を連れて歩き、警備員の姿がチラホラと見えるこの場所は学園都市のなかでも相当異色アクセラレータが強い。

その珍しい風景が多い第三学区でも一方通行は目立っていた。キヤンバスに絵具の白で塗りたくったような白髪に、その隙間から覗く赤い瞳。邪悪を滲み出させたと言わんばかりの黒いシャツに、それでも良いかもしれない。死神と違ふところと言えば、その右手に持っているものが鎌ではなく携帯電話であるところくらいだ。

一方通行は携帯電話の液晶を睨みながら不意にニヤリと笑う。そこに映し出されているのは中年の男性とそのプロフィール。

（ハッキングをかけて正解だったなア。D端末でもプロフィールぐれエならなんとかなるもんだ。しかしまア、これがなんのヒントになるのか知らねエが）

バチンと勢いよく携帯電話を閉じて乱暴にポケットに突っ込んだ。それから足を上げ、そのまま真っ直ぐに地面を踏みつける。力のベクトルを変え、一方通行は弾丸のごとく移動を始めた。

彼が捜しているのはとある脳学研究員である。

削板軍覇そぎいたぐんぱは応急手当の真っ最中である。手当をしているのは早瀬優希ゆきという無能力者の少女。その傍らには警備員である黄泉川愛穂アンチスキル　よみかわ　あいほという教師が佇んでいた。

早瀬に包帯を巻かれながら彼は目を閉じて辺りの気配に耳を澄ませていた。

「奴らが暗部組織つてのは理解するじゃん。けどなんで優希が狙われるんだ？」

「今起きている実験と関係しているんじゃないのか？ 詳しいことは知らん」

「実験つてなんだ？」

知らないのも無理はないか、と削板は自分の掌を見つめながら息を吐く。

全身の骨が軋むような痛みがある。例の男に散々痛めつけられたのだ。それは応急手当で全快するような怪我ではない。

「根性無しでろくでもない実験が起こってる。概要は簡単だ。スキルジャンパーこと東雲鏡をレベル5の誰かが殺せばその誰かはレベル6に覚醒できる」

包帯を巻いていた早瀬の手が止まる。目を見開いて、息を忘れていた。黄泉川も一瞬反応できなかったらしく、少ししてからちよつと待てと口を挿^はんだ。

「なんでスキルジャンパーを殺したらレベル6になれるじゃん？それにそんなことを統括理事会や司法連が認めるわけが——」

「その統括理事会の息がかかった実験だ。マスメディアを規制され

るクラスの大規模実験なんだよ。今まで何度もこういった実験は行われている。あり得ないとか口が裂けても言うな。お前ら警備員アンチスキルがしっかり生徒のために働いていれば避けられた闇実験ばかりだった」

削板の言葉は重かった。黄泉川の口元が歪む。

「・・・たしかに何度か不自然な招集、区画整理に起用されたことがある。今回みたいにな。それらが君の言う闇実験だったってことじゃん？」

「全部とは言わないが、ほとんどがそうだろ」

黄泉川は拳を握り締める。その拳を横にあつた壁に叩きつけた。
ミシ、という嫌な音が響く。

苦悶に苛まれる彼女の表情は、痛いからではない。悔しいのだ。
学生を守るために組織された警備員アンチスキルが学生を苦しめる闇を増長させていたと言う。

「今回もそういう実験が行われているって話じゃん。黙って見てられないじゃんよ」

黄泉川は左耳から繋がっていた無線器具を取り外し、それを懷に収めて腕を組んだ。それでも警備員アンチスキルから招集命令が出ても対応できない。今黄泉川は警備員から断絶された。

削板は拳を開いたり閉じたりする。調子は良くない。痛みは根性でどうにかなるとしても、単純な怪我のせいで力が上手く入らないのだ。レベル5同士の抗争となると芳しくない状況だった。

「そついや名前を聞いてなかったな。俺は削板軍霸だ。レベル5第七位。ナンバーセブンなんて呼ばれてる」

「黄泉川愛穂。その早瀬優希とは仲良くさせてもらってるじゃん」

「そうか。じゃあなおさらいいな。黄泉川、早瀬を頼んでもいいかな？」

早瀬がビクツと震えて削板の方を見やる。彼はほほ笑んでいた。

「ここが分水嶺。お前は黄泉川と一緒に陽の当たるところで生きる。闇に浸るのは俺みたいなどうしようもない存在だけで十分だ」

目の前の少女の唇が動いている。言葉を紡ごうとしているのだが、なにを言っているかわからないという様だった。壁にもたれかかっていた削板は壁に手についてなんとか起き上がろうとする。黄泉川が手を貸そうとすると、彼は空いている方の手で制した。

「黄泉川。早瀬。今日のことではできれば墓まで持って行け。間違っても告発しようとするな。消されるぞ」

「君・・・」

「久々に根性のある面白いヤツと会った気がするぞ。俺ががんばる価値があるってもんだ」

削板は立ち上がる。そのもたれかかっていた壁が血で真っ赤になっているのを見て、早瀬は目を潤ませる。鉄の臭いとその衝撃的な映像に吐き気を催しているのだろうか。

「削板。ほんとうにひとりで行く気じゃん？」

「さっきのヤツらが再び早瀬を襲わないとは限らない。警備員で保護するのにもズイ。黄泉川が信頼できるヤツのところで匿ってやつて欲しい。闇の人間は光が苦手だ。だから俺はお前に託してる。早瀬になにかあつたらタダじゃ済ませねえぞ」

黄泉川はまだなにか言いたげだったが、震えて焦点の合わない目をしている早瀬を見つけると言いごもった。静かに力なく、何度か首を上下させる。

「俺は行く。気に食わないからだ。俺の行動理由はそれだけだ！」

削板は早瀬と黄泉川に向かって腕を突き出し、二カツと笑った。

おつ、と彼は片方の眉を上げる。早瀬はどうしたらいいのかわからない、行かないでくれと訴えるような表情をしていた。幼さの香る顔だ。削板はやれやれと苦笑いする。

「そんな顔をするな！ 根性出せばきつと大丈夫だぞ！ 皆笑って皆ハッピー！ 俺がそういう結末をお前に見せてやる！ 俺に根性を与えてくれたお前がそんな顔をしないでくれ！」

削板の拳が早瀬の眼前に突き出される。血塗れの拳だ。

自分を守るために、自分を光の世界に帰すために削板軍覇は己を顧みることせず、孤独に戦い続ける。彼は笑っているはずなのに、その姿はどこか切なげで陰を帯びていた。

早瀬の喉がごくりと鳴る。自分はこういう人物をどこかで見たこ

とがなかったか。

脳裏に蘇えたのは、美しい黒髪。下級生からは大和撫子と称される柵川中学が誇る大能力者。

「・・・村叢」

そうだった。村叢影夜という少女は自分を守るために暴言を吐いた。東雲という唯一無二の親友が起き上がれない状態になっても、誰にも頼らず孤独に身を置くことを選んだ。

早瀬が友達でないから相談しなかったのではない。

早瀬を巻き込みたくなかったから突き放したのだ。

削板の姿が村叢と重なって、それが確信に変わった。早瀬はもう嗚咽を止めることはできなかった。そして、彼女は今も孤独で戦い続けている。

早瀬のすすり泣く声は短かった。次に面を上げた時には、彼女の目には今までにない力強さが見えていた。

普通の少女ならその拳を手に取り、武運を祈っただろう。あるいは行かないでくれと泣きついたかもしれない。その傷だらけの拳を見て泣きじゃくる子もいるはずだ。

早瀬は違う。すべてを受け入れ、前に進むと決めた彼女は、もう守られるだけの存在ではなくなった。

拳が打ち合わされる。ひとつは武骨なレベル5の拳。もうひとつは白く華奢なレベル0の拳。

「もう誰もひとりにしない。あたかもついていく」

一瞬、彼女がなにを言っているのかわからなかった。足がすくんで怯えていたのに、それが打って変わって強い口調になっている。わけがわからない。

削板は呆気にとられていたが、すぐに「お前ッ！」と叫んだ。それはつまり光に帰る道を放棄すると言っているようなものだ。削板のがんばりを無駄にする行為と言っている。

だから彼は声を荒げた。

対して彼女は涼しい顔をしてそこに立っていた。背をピンと伸ばして、真っ直ぐと見つめ返す。

「ここが分水嶺って言ったよな？」

削板は突き出した腕を下げることはできなかった。早瀬の目が、とても綺麗だったから。

「分水嶺はとくに過ぎているんだよ軍覇。あたいと軍覇が会った時に。いや、違うな。もっと前じゃん。病院で鏡と会った時、でもないか」

早瀬の髪が風で靡く。片手で髪を耳にかけながら、彼女の唇は言葉紡ぐ。

「あたいがすべてを知っちゃった時に、分水嶺を越えたのさ」

削板はどこかで早瀬を見下していた。レベル0の少女に過ぎない
と思い込んでいた。レベル5を前にしても怖気ない。その艶やかな
表情と思わず抱きしめたくなくなるような色っぽい声色に、削板だけで
なく黄泉川まで驚きを隠せないようだった。

先ほどまでの彼女とはなにかが違う。しかしそのなにかを誰も説
明できない。

「根性出そう、軍覇。皆が笑って皆がハッピーになれる結末を一緒
につくらせて欲しい。もう待っているのは嫌なんだ。手伝わせて欲
しい」

「わかってるのか。今以上に危険が待ってるんだぞ」

「あたいの友達がその危険の中心にいる。それだけで理由になるは
ずじゃん。あたいも気に食わないからこの事件を止めに行く。止め
られても行く。軍覇の後について行く！」

打ち合わされている拳から伝わる緩やかな振動。彼女は震えてい
た。

「友達を守りたい。あたいを光に帰そうとした友達や軍覇のために
戦いたい。レベル0にだってやれることはあるはずなんだよ。それ
を証明したいんだ。だから手伝わせて、軍覇・・・」

口では強い言葉を告げても、やはり恐いのだろう。先ほどまでは
言葉に出すこともできなかったのだ。平穏な毎日を過ごしていた中
学生からすぐに消えるような恐怖でないことは、削板にもわかって

いる。

本来なら、削板は突っ返すべきだったのだ。早瀬の身の安全を確保するためには白井や村叢のように冷酷無情に突き離すべきだった。だが、削板はしなかった。ほほ笑んで、震える彼女の拳を掌で包み込む。震えを鎮めてやろうという優しい温かさに、早瀬の手がピクツと反応する。

「俺がお前を守ってやる。この命に懸けても、守り抜いてやる。だからついて来い、優希」

名前。削板の声が胸に浸み入って、じんわりとしたものを溢れさせる。ほのかな温かさが胸から脳天に向かって登ってくる。

まず首筋が火照り、頬が熱くなり、視界が滲み始める。それが脳天に辿り着いた時、早瀬は傷だらけの彼に抱きしめられていた。

「俺が根性無しになった時は、お前の根性を分けてくれ」

黄泉川の前でも恥ずかしさはまるでなかった。ただ幻想の色がそこかしこで煌めいて、早瀬は泣き笑いするしかないのである。

腕を背に回して、互いを感じるように強く抱きしめ合う。いつ死ぬかわからない現状で、二人は互いに今生きている喜びを分かち合い、そして共に戦う意志を共有した。

もう守られるだけの存在ではない。無能力者ひとりでは非力なら、誰かと手を繋いで戦えばいい。無能力者にしかできないことはきつとある。それを決めるのは白井黒子や村叢影夜といった能力者達で

はない。学園都市でもない。早瀬優希という名の無能力者だけである。

早瀬優希は削板軍覇に身を預け、削板軍覇は早瀬優希に心を預けた。

そして黄泉川の手配した車に乗り込んで、三人は物語の結末へと向かって突き進む。

第一〇学区。研究施設が軒を連ねる学園都市の闇が蔓延る因縁の場所へ。

大切な者のために、分水嶺を越えて二人はあらい続ける。

2 (後書き)

備忘録：主人公

3（前書き）

お待たせしました第三話です！忙しくて書きための分が尽きそうですが夏の間に完結させるつもりなので、どうかよろしく願いします！縦書き形式推奨です！

御坂美琴^{みさか みこと}は病院の屋上で立ち尽くしていた。

夕焼け。今まさに山の向こうに沈もうとしている真っ赤な太陽。圧倒的な力をその身に受けながら、御坂は物思いに耽っていた。実験を止めたい。その一心でスキルジャンパーを追って来た。今もその思いはある。妹達^{シスターズ}が虐殺されるような悪夢は食い止めなければならぬ。ツンツン頭の青年に助けられた時に、御坂はそう確信した。

白井^{しらい}が傷つき、初春^{ういはる}や佐天^{さてん}も危険にさらされた。スキルジャンパー本人にやられたわけではなく、スキルジャンパーを知られたくない？上？からの攻撃だった。レベル5第六位という強敵を遣わしてまで実験の阻止を恐れた。それはある意味で第三位超電磁砲^{レベルガン}の力を評価しているのかもしれない。

ほんとうなら白井や佐天は傷つかずに済んだ。御坂に巻き込まれてしまったただけなのだ。

(・・・ホント馬鹿だな、私)

友達を守るために力を揮った初春。その友達を巻き込んだ張本人は御坂に他ならない。

悔恨の思い。御坂は暮れなずむ町を見つめて、小さく息を吐く。少ししてがらにもないことね、と自分を軽く叱咤してみる。

(上条当麻^{かみじょう とうま}。アンタは今どこでなにをしているの？ やっぱこの実験を食い止めようと走り回ってるのかな)

あの青年が隣に立っていてくれたら。

御坂は胸の前でぎゅっと手を握り、遠方を見つめ続けた。

とあるツンツン頭の不幸な青年は立ち止まっていた。

病院を飛び出してはや六時間。あてもなく町中を走りまわっていた上条当麻だが、やはり土御門^{つちみかど}に会った方がいいと思って電話をかけ、華麗にスルーされていた。土御門は電話に応答する気配がなく、上条はどうにもしようがない現状があった。それでも佐天と約束したため、立ち止まるわけにはいかない。夏の日中にマラソンした上条の全身からは汗が噴き出し、体力もまるで残っていないかった。

そんな上条の前に現れた少女。黒く長い髪で、白いコートのフード部分を頭に引っ掛けて袖を通していない彼女の姿は、その自らを締めつけるような黒革と锚でできたパンクな衣装がなければ愛らしく見えただろう。目元にアイシャドーでも入れているのかと思ったが、どうやら天然ものの隈のようだ。率直な感想とすれば、不気味。闇夜に佇む日本人形の不気味さを醸し出していた。その一方で脇に抱えるイルカのビニール人形がその感想を打ち消している。とにかく異様な少女だった。

長い黒髪の耳元だけが色を抜かれて金色なのは、お洒落なのだろうかと上条は唸る。綺麗な黒髪がもったいないような気がするのだ。

そんな些細な疑問を浮かべる上条の耳に、ボンツという嫌な音が響く。

少女の手に生み出されている透明な槍。

「ッ！ 能力者！ まさか風紀委員襲撃のッ！」
ジャッジメント

「いや、それは違うんだけど。んー、まー、どうでもいいや。消える」

透明な槍が真っ直ぐに上条を目指す。思わず右腕を翳した。
キーンと音が響いて、槍は消え失せた。

「オイ。どうなってるんだ？ 私の窒素爆槍が不発だったとか有り得ねえ」
ボンバーランス

「知るかよ！ つか窒素爆槍？
ボンバーランス なんつー物騒な名前なんだ！ なんで俺を狙う？」

「なるほど。通りで私が起用されたわけだ。一筋縄じゃない獲物ってことか」

「答えてねええええ！」

上条の叫びもおかまいなしに、再び少女は透明な槍を掌から射出した。二本の透明な槍が上条に突き進む。一本を右手で打ち消したが、もう一本が上条の身体を逸れ、爆発を起こした。服が裂け、わずかながら血が溢れ出す。

「お、まえ！」

「こういう方法なら通用するんだな。厄介なのはその右手か」

少女は目を見開いて笑っていた。掌から透明な槍が生み出されるたびに頭から引つ掛けただけの白いコートはバタバタとはためいていた。

（空気中の窒素を操って槍の形にしてんのか・・・？）

上条は昨日出会った少女のことを思い出す。
きめはたさいあい オフエンスアーマー
絹旗最愛。窒素装甲という能力を有したレベル4だ。

上条の考えていることが当たっているなら、この少女も絹旗と同じくレベル4相当の能力者ということだ。

（どうする？ こんな遠距離からバンバン槍出されちゃいずれ当たっちゃう。しかも爆発するっぽいし、あんなもん至近距離で爆発されたら下手すりゃ死ぬぞ！）

血の気が引いていく。襲われた理由が不明であるし、逃げる方法も思いつかない。今背を向ければ槍に貫かれて死んでしまうだろう。右手を前に翳す体勢を変えることはできない。

もしただ単にこの少女が娯楽目的で自分を襲っているのだとしたら、一番性質が悪い。なぜなら少女のなかに敗北条件が想定されていないからである。少女の攻撃が止むのは上条を殺した時か、飽きた時だけなのだ。

少女はなおも笑い続けている。日本人形が夜な夜な不気味に笑うとしたら、こういう感じなのだろう。

「研究者どももなにを考えているのかと思ったけど、意外と面白いことになりそうだな。いいね、こういう邪悪は。学園都市は真っ黒なんだよ。それを光で生きようとする間抜けどもに知らしめてやるうか」

「研究者？ お前はなにを言ってるんだ」

「ありゃん？ お前なにも知らないの？ なにも知らないのに抹殺依頼が出てたの？」

少女はハアと重く息を吐く。

「なんだよなんだよ。つまらねえな。私は一般人を攻撃してるってわけか？ 別に人を殺すのは好きだけどさあ、こういう想定外の殺しはノーサンキュー。帰ったらあいつ八つ裂き決定」

上条の肌に粟が立っていた。顕現する邪悪。不気味な気配の正体が見えていた。

後ずさるうとする上条に向かって、少女はニタアと笑いかける。

面白い玩具でも手に入れたかのように。

「教えてやろうか上条。この実験がどういうもんで、今なにが起きているのか」

「ごくりと唾を飲む音。上条は右手の指の隙間から見える少女を、これでもかと睨んだ。

「絶望した人間を殺すのも、思った以上に楽しいし」

くろよるつみどり
黒夜海鳥。？暗闇の五月計画？の被験者であり、その計画を凍結に追い込んだ張本人。
アクセラレータ

一方通行の攻撃性を植え付けられた少女が、両手を上条当麻に突き出した。

？原石？。学園都市とは異なる場所で、自然に成立した能力開発に長じた環境で生活した結果、超能力を発現してしまった子供達のとだ。賀古かこもそのひとりである。

そもそも？原石？はテレビ局の特集や安い雑誌のなかでしか取り沙汰されない存在だった。超能力者と呼ばれる胡散臭い存在に過ぎなかった。？原石？などと大層な名前で呼ばれ始めたのは、学園都市が超能力開発を成功させた頃からである。

？原石？は学園都市を恨んでいる。己だけの特別な力を一般化したからではない。自分達の存在を明るみに出し、取引価値のあるものだと思わせたからだ。

賀古は携帯電話の液晶サイズのモニターを見つめていた。
アンチスキル

警備員の監視衛星に秘密裏に取りつけられた？鷹の目？によるAIM拡散力場の追跡。モニターに映し出される点が絶えず移動を続けている。

ほとんどの人物は東雲が眠る病院の存在する第七学区に集結アグセラレータしていて、一方通行だけは第三学区に向かっているようだった。他にもはぐれて行動している点がある。

村叢影夜むらくさかげよ。彼女は単身で賀古のいる第一〇学区に向かっている。それが賀古の狙いだと村叢は気づいていないだろう。

メンタルアウト
（心理掌握も私の策のうちです。それをあのいけ好かない女が理解しているかは知りませんけど）

イチゴジャムを口に放り込んで、紅茶を啜る。第一〇学区にある研究所のひとつに賀古はいた。特例能力者多重調整技術研究所と呼ばれる廃れた建物だ。隠れ家ではない。足元を照らす以外の電気は送っていないし、もし隠れ家として機能させるだけの電気や設備を機動させればたちまち警備員アンチスキルの目に留まるだろう。

賀古が特力研にいる理由は、特にない。この実験の結末を見届ける場所としてこの場所を選んだだけだ。あえて言うなら悲劇を生み出したそのハジマリの場所でオワリを見届けたくなった。

もちろん意味はある。基本的に第一〇学区は人が少ない。人が少なければ警備員アンチスキルなどの監視も緩くなる。村叢と決着をつけるにはちよいどいいのだ。

賀古ソーフィヤはまだ一四歳の少女である。しかしこの計画を実行に移させたのは賀古の策があつたからであり、いまなお彼女の練られた計画の上で事態は進行している。

彼女の狙いは村叢影夜を東雲鏡から切り離すこと。

そのために心理掌握や知覚事象メンタルアウト フローレスアイサイトを利用し、レベル5達をかき乱してきた。結果、第一位と第三位、第七位は手を組み、それに対抗するために第二位と第四位含め？アイテム？が結託した。そこまで賀古は予測していた。

レベル5達の抗争。それこそが賀古の狙いで、計画の達成に必要なのだ。

（レベル5達の存在なんてものは、この時のためにあつたのですわ。学園都市なんてものは消えてなくなればいい）

賀古は学園都市の住人ではない。ロシアから逃げてきた？原石？のひとりである。

学園都市ないしは超能力というものには、恨みしかない。
今の彼女を動かす原動力。それは逆襲である。

（レベル5なんてものは排除させていただきますわ。皆殺しの結末を私は望んでいますもの）

意味のない殺戮。意味のない絶望。意味のない反逆。

そういうものがたまらなくゾクゾクする人間もいる。精神疾患と判断されるかもしれない。そんなことは彼女のような人間にとってどうでもいい。

彼女を満たすのは、世に満ちる悪意に身を委ね、一体化するその時だけである。

（さあ、あがきなさい村叢影夜。東雲鏡を救うために。学園都市を守るために）

賀古ソーフィヤの逆襲。レベル5達の抗争は、彼女ひとりによって引き起こされたものである。

土御門元春は車から降り、第三学区に足をつく。

外交学区であるこの場所はビジネスホテルが立ち並び、学園都市と海外の機関を繋ぐ役割の人間が滞在していることが多い。現役CIAの人間であったり、軍人であったり、あるいは中国のマフィア

要人など、ただ者でない者が蔓延っているのがこの第三学区だった。とあるビジネスホテルの前で立ち止まり、土御門はサングラスを指で押し上げる。

「あとは賀古直毅を始末できりゃ、冥土帰しの要求も必要悪の教会ヘヴンキャンセラーの条件もクリア。ハッピーエンドなんだけどにゃー」
ネセサリウス

土御門は懷から拳銃を抜き放ち、呆れたように溜息を吐いた。

「さすがに、賀古先生は用意周到だぜい」

パワードスーツ 駆動鎧。人型のパワードスーツ 駆動鎧が一体、ビジネスホテルの前で仁王立ちしていた。

土御門が発砲するより先に、そのパワードスーツ 駆動鎧は右腕に装備された機関銃から弾をばらまき始めた。

上条当麻に対峙する黑夜海鳥は、知っていることをすべて話した。すべて話さなければ話の整合性が取れないというのもあるが、なにより彼女の狙いは上条の絶望である。彼女もまた意味のない殺戮や意味のない絶望にゾクゾクする人間のひとりだった。

上条は耳を疑った。が、すぐにそれをありのままに受け入れた。これは大規模な実験だということ。そして御坂妹達を虐殺した実験と同等かそれ以上の非道実験であること。

東雲鏡が目標で、他のレベルらすべてが奔走していること。

それだけわかれば十分だった。

「ありゃん？ 思ったより絶望しないな」

「絶望なんかしちゃいられねえだろ」

「なんだよ、威勢がいいじゃないか。正義の主人公^{ヒーロー}ってつもりか？」

上条はその右手を握り締め、拳を彼女に向かって突き出す。

「正義の主人公^{ヒーロー}なんかじゃねえよ。ただの弱つちい一般人だ。今お前に聞かされるまでなにも知らなかった部外者のひとりだよ。けど、俺は立ち止まらない。正義の主人公^{ヒーロー}じゃなきゃこの馬鹿げた実験を止められねえってんなら、正義の主人公^{ヒーロー}になってやる」

ゾワリ、と黑夜の背筋を駆け抜ける悪寒。一拍遅れて震えがきた。

（なんだ？ 私が恐怖している？ 第一位の攻撃性がコイツとの戦闘を拒否しているのか？）

黑夜はイルカのビニール人形を使おうか悩んだ。中に内蔵されているのは大量の義手。^{ボンバーランス}窒素爆槍は掌からしか生み出せないため、その弱点を克服するには掌を増やせばいいのだ。数百を超える義手を用意すれば、^{ボンバーランス}窒素爆槍の出力は文字通り桁違いになる。

間違ってもレベル0相手に使うものではない。このイルカのビニール人形のとっておきはレベル5達との交戦を想定したものだ。レベル4でレベル5を圧倒するための秘密兵器である。

（冷静になれ。武者震いだ。こんなやつにとっておきを見せる必要はない）

黒夜は必死に自分の震えを抑えようとする。こんな感覚は久しぶりだった。被検体として初めて一方通行に出会った時以来だったか。上条はゆつくりと歩み出す。レベル4を圧倒するレベル0の構図が完成する。

「恐怖なんてあの場所に捨ててきたはずだろ。震えんじゃねえよ」

声に出していた。迫る上条を前にその呟きは霧散する。黒夜は脇に抱えたイルカの人形を横目で見やり、使うか使わないか判断しかねる自分に焦った。

その一瞬の迷い。上条がすぐそこに迫り、黒夜がひっと短い悲鳴をあげる。

違うのだ。ただのレベル0に恐怖しているのではない。もっと根底にあるなにかが黒夜の恐怖心を駆り立てている。一方通行の攻撃性を植え付けられた彼女は、一方通行と同じようによくわからない脅威に対する免疫が著しく欠如している。

理論的に言えばこの男が自分に勝てる可能性は皆無なのだ。そうであるはずなのに、そのことはこのツンツン頭の男もわかっているはずなのに、恐れも怯えもなく真っ直ぐ歩いてくるこの男が恐くならない。

数百の義手を展開すればレベル5だろうと勝てる自信がある。義手を展開しなくともレベル0に負けることなどあり得ないだろう。

それなのに。イルカの人形を使うか使わないかという二択を選ばせないほどに。

上条当麻は黒夜海鳥を恐怖させていた。

「お前はどっちだ」

無抵抗な少女を殴ることなどしない。ただ顔を寄せて上条はニヤと笑う。黒夜は膝を折ってそこにへたり込んだ。

恐怖しているのかどうか、黒夜は判断できない。なぜ膝を折って屈しているのかも理解できない。どうして上条から目を逸らせないのかもわからない。最初見た時はただのレベル0と見下していたではないか。その特異な右腕を見ても殺せると判断したではないか。頭と心と体が分離している感覚。あえて言うなら一方通行が恐怖していた。

「お前は正義の味方か？ それともただの悪役なのか？ 答えてみやがれ」

黒夜は地面に手をつき、呆然として上条を見つめていた。

（動け！ 動けッてんだ私の身体！ なんでびびってやがる？ なんで殺せねェんだよオ！）

心のなかの叫びが表に出ることはない。上条がその横を通り抜けて歩いていく姿を目で追うことしかできなかった。

黒夜の敗因は一方通行の攻撃性を植え付けられたこと。一方通行アクセラレータの防護性を植え付けられた絹旗ならば膝を折って屈することはなかっただろう。得体の知れないなにかに対する免疫が、その性質上、絹旗よりも黒夜がずっと劣っていたのだ。

一方通行の凶暴性を植え付けられたとはいえ、彼女が上条に屈したのは当然である。黒夜はまだ？ 上？ から知らされていないかった。

最強無敵と謳われた一方通行アクセラレータをその右腕一本で打ち倒したのが、

この上条当麻であることを。

3 (後書き)

備忘録：原石 第二位とアイテムの結託 黒夜初登場

4（前書き）

長すぎてすいません。飲みものでも飲みながら読んでくださいませ。
舞台は病院と特力研！早瀬と佐天、二人の無能力者の少女が苦難の
末選んだ道とは？そして親友であった村叢と賀古がついに激突する
！物語も佳境を迎える最終決戦のはじまり！縦書き形式推奨中！

太陽は落ちた。学園都市に闇が広がっていく。

くるくるの髪を弄りながら、彼女は携帯電話の液晶サイズのモニターを傍の机に置く。少し広めの部屋だ。奥に小部屋があつて、その小部屋を観測するためのごちゃごちゃとした機械がそこかしこにある。

彼女の目は愉悦に浸り半月型に歪んでいた。

「レベル5殺し合いの始まりです。観客席への予約券はお持ちですかお客様？」
バーティ
チケット

入口に立つ少女。忍者のような黒い服装に身を包む彼女はギリギリと歯を擦っていた。顔中の皺を寄せて、敵意を剥き出しにしている。

「ソーニャ・・・あなたはなにを企んでいる？」

「先生の企みと私の企みは似て非なるもの。けどまあ、先生の企み優先ですかねえ。先生の企みはご存知の通りレベル6の誕生」

賀古はぐにやりと歪んだ笑みを浮かべる。

「私は学園都市が憎い。その学園都市を支えるあなた達暗部組織も憎い。憎しみはさらなる憎しみを呼び、撃鉄を起こし引き金を引か

せることを肯定しますわ。私は憎しみに動いています。あなた達と出会う前から。そしてこれからも」

村叢は背中の長刀を抜き放つ。白身の刀身が銀色の光を返して静止した。

「私の逆襲。レベル5同士が本気で殺し合えば学園都市の機能は停止します。昨日の第一三学区どころの騒ぎで済まなくなる。そして彼らが主戦場を選んだのは最も学生の多い第七学区。学生の町は学生の喪失によって機能性を削られる。そうならば外部勢力は動きやすくなる」

血の気が引く。事態を理解した村叢は唇を噛みしめた。

「外部勢力を呼び込む気だったのか、お前は！」

「どうでしょうね？ ま、あわよくばレベル5が共倒れになれば、というところですけど」

賀古は計画通りですと言わんばかりの笑みを浮かべる。

「私は能力者が大嫌いなんですよ。頭を弄って薬を投与されてやつとの思いで能力を得る。能力を得た者は、今度は能力のない者を侮蔑する。能力のない者は能力者を恨み、攻撃する。憎しみの連鎖は止まらない。学園都市は大規模な実験場だ。憎しみと悲しみしか生まない畜生どもの集まり」

今までの彼女からは想像もできない、ニタアという嫌な笑みを浮かべる。

「最初から能力のあった？原石？の私からすればはなはだ滑稽な町なんですよねえ」

村叢の目付きが鋭くなる。それは学園都市への侮蔑であり、同時に学園都市のために戦ってきた自分や東雲に対する侮蔑でもある。親友を貶されて黙っているほど村叢はできた人間ではない。刀の柄を握る手に力がこもる。

「言っただけです影夜ちゃん。？心配しなくても、あの子は幸せになる。あなたの思い描く幸福とは違うかもしれないけれど？と。その言葉に嘘はありませんわ」

賀古はぐにやあと表情を歪めた。この世の憎悪をその顔に張りつけたような、不気味で不安になる笑み。

「学園都市と心中するのが実験の果てに生み出されたスキルジャンパーの幸福でしょう？」

ぼつぼつと鳥肌が浮き出る。村叢は固く目を閉じた。怒りを鎮める。冷静になれ。震え出す身体を制御するのに必死になった。

「学園都市のために、というのが鏡ちゃんの口癖でしたねえ。今思えば出すだけでも笑えます。あーおかしい」

「・・・黙れ」

「あれれー？　もしかして怒っているんですか？　いつもの無機質な顔はどうしたんです？　男に抱かれても無表情な影夜ちゃんでも怒ることってあるんですね」

「黙れと、言ってるでしょう」

「影夜ちゃんは鏡ちゃんのことが好きだったのかにやー？　女同士で乳繰り合ってるのが好きなんですか、変態ですねえ。前から思ってたこと、言ってもいいですか？」

声がクリアに聞こえた。耳ではなく脳に直接響くような声だ。彼女の声ではないような感じもした。津波が押し寄せる前に波が引くように、怒りが一瞬鎮まった。

「心の底からキモチワルイんだよおまえら」

ブチンと頭のなかのなにかが切れた。次の瞬間には一歩踏み出していた。

「ソーニャあああああああああああああああああ！」

殺す。ためらいはもうない。この刀で一撃のもとに斬り殺す。

親友だと思っていた。だがそれは幻想だった。

村叢は涙を流していた。悲しいからではない。悔しいのだ。ただ悔しかった。自分がもっと上手くやっていたらこんな結末にはならなかったはずだ。東雲を傷つけずに済んだはずだ。自分の力不足だった。

村叢はまだどこかで賀古を斬り捨てる罪悪感を抱いていた。自分

が上手く振る舞えば、目の前の女を諸悪の根源にせずに済んだかもしれないのだ。そう思えるくらい村叢はまともな人間だった。

だが、それが間違いだと気づいたのは、刀が彼女の目の前で砕け散った時だった。

「なんの抵抗もなく斬られてあげると思いましたか？」

ゾツとした。砂鉄を原料とする玉鋼で幾重にも渡って叩きあげられた日本刀が簡単に砕けることなど、単純な金属のぶつかり合いでは起きない。

「能力ッ！」

「残念、能力ではありませんわ」

賀古は懷から真つ青なシルクの手拭いを取り出し、広げて見せる。暗闇で気づかなかった。何本もの極細の糸が水平に伸びている。

「合成系・・・？」

「それも外れ。頭に血が上り過ぎですわねえ、よく見なさいな」

賀古は目を左右に振る。村叢も釣られて左右を確認した。小さな機械が一本の糸を吐き出し、もう片方の機械でその糸を受けている。これは糸ではない。極細のレーザー光線。

「ここは特力研。必要があれば子供の頭蓋骨を断ち切り脳を摘出し

た地獄の釜の底。そういう時には精確な外科技術が必要になる。たとえばミクロ単位のアームがあれば細胞を殺すことなく摘出できる。たとえば極細の糸のようなレーザー光線があればメスや外科ノコギリで人体をこじ開ける必要もなくなる」

機械の側面に並ぶ文字は小さくて読み取れないが、賀古の言う通り外科用手術具なのは間違いなかった。

「ピンポイント・レーザー。ここには同じような外道機械が多数存在しています」

幾重にも重ねたレーザーで刀を少しずつ焼き切ったというのか。だが、いくら進んだ技術とはいえ、たかが手術機械が日本刀を両断できる火力を有するとは思えない。

答えはすぐに出た。よく糸の壁を見れば、賀古に最も近い糸は光沢を出しているのだ。たしか各ビルの耐震設計のひとつとして落下物や瓦礫を受け止める合成系の技術がある。防弾繊維を応用したと聞いているが、この合成系も同じく防弾繊維を応用した特殊なものなのだろう。また合成系を肉眼で捉えられないほど小刻みに振動させることで鋼すら断ち切ってしまうような特殊技術も、学園都市工学には存在する。劣化したとはいえ日本刀と真っ向から対抗できる糸。技術が進歩すればこんなことも可能になる。

「さあ、武器はなくなっちゃいました。次はどうします、影夜ちゃん？」

得意げに笑う目の前の少女に、村叢は目を伏せた。

刀が折れた。だが、それだけだ。心は折れていない。

村叢は折れた刀の刃の部分を握り締める。掌が切れても、血が溢

れ出しても、放さない。

賀古の表情が曇っていく。なにをする気だ、という顔をしている。

村叢は自らの刃で手を傷つけながら、笑っていたのだ。

第七学区も完全に闇に沈んだ。屋上で佇んでいた御坂美琴^{みさか みこと}は閉じていた目を開き、柵に足をかけてそのまま屋上から飛び降りた。

ピリピリと体表を駆け抜ける電流。彼女が一〇億ボルトの電撃の槍を放つまで一秒を要さない。狙いさえ定めればコンマ三秒で攻撃に転じられる。

病院から飛び降りた少女ははたらく制服を押さえることもせず、磁力を利用して近くにあったポールに両足で張りついた。眼下を見下ろし、そこにいる人物と目を合わせる。

ドバツという不気味な音が閑静な学区に響き渡る。

ポールの上から半分がドロドロに溶けてオレンジ色に光っていた。御坂は空中に飛び出していた。そのまま着地して、攻撃の主と対峙する。

「いきなりご挨拶じゃない、第四位」

「アンタには用ないんだけど。とっとと消えてくんないかなあ第三位！」

またズバツと音が響く。不健康な白い光線が一本伸びて、次第に闇に溶けていった。

メルトダウンナー

原子崩し。学園都市二三〇万人のなかで四番目に序列される実力者。

「お前とはあの時以来だったよな？　ちょうどいい。ここで決着つけようじゃねえか」

御坂と麦野は一度？絶対能力者進化計画？で交戦経験があった。その時は御坂の勝利で終わったが、撃退しただけで麦野を完璧に打ち負かしたわけではない。だからこそ麦野は御坂相手に怖じることなくその両腕を差し向ける。

ズバアツと？曖昧なままの電子？がすべてを貫通し、溶解させていく。御坂は時に磁力を利用し、器用にかわしていた。

メルトダウンナー

（原子崩しは直線運動しかない。よく見極めればどうってことない！）

メルトダウンナー

不安定な電子を固定して目標物に直接叩きつける原子崩しは直線運動しかもたらさない。途中で軌道を変えたり弧を描くような攻撃はできないのだ。御坂は一度の交戦経験からだいたいことは把握していた。

麦野は腕を払う。三本の不健康な白光線が吐き出される。

「ワンパターンなのよッ！」

メルトダウンナー

それと同時に御坂は電撃を練り上げる。額の前に手を翳し、一〇億ボルトの雷撃の槍を生み出した。横に飛び退き原子崩しをかわすと同時に雷撃の槍を放とうと構える。

「フレンジアッ！」

麦野の怒声。その時嫌な気配が自分の右側から感じた。

なにか黒い物体が視界の端に映っている。確認する暇はない。今まさに白い光が自分を貫こうとしているのだ。

フレンドとも面識があった。爆薬を使う少女だったはず。となれば視界の端に映る黒い物体は爆弾。

御坂は額に翳した右手をそのまま右側にある爆弾に向けて放った。接近される前に誘爆させるしかない。足元で爆発されれば致命傷で済まなくなる。麦野を刺すことはできなくなるが、また改めて電撃を練り直せばいい。今はとにかく不意打ちの爆弾を処理することが先決だ。

黒い物体に電撃が伸びると同時に御坂は皮一枚で原子崩しメルトダウナーをかわす。ブバァッと嫌な音が耳のすぐ横を通過し、御坂の頬を冷や汗が流れる。

だが攻勢に移る隙などなかった。黒い物体は爆発しないのだ。爆煙に紛れようとも考えていた御坂はおかしいと右側を睨みつける。フレンドの得意げな表情があった。

爆弾に見せかけたゴム玩具。絶縁体でできたそれは御坂の攻撃を一回休みにした。

（ゴムの黒色だったの・・・そんな遊び気分で私を抜けるとでもッ！）

御坂は正面に目を返す。原子崩しメルトダウナーが充填されているのだろうと思っていた。原子崩しメルトダウナーは一発一発に数秒の溜めが必要になる。威力が大きい分、使い勝手が悪いのだ。

しかし麦野は不健康な白い光を纏っていなかった。裂けんばかりに口を曲げているだけである。

「絹旗あ、出番だぞ」

今度は左に気配を感じた。御坂は大きく屈んだ。ブオンと拳が空振りする大きな音が頭上で聞こえて、ブルツと身震いする。一瞬遅れていれば頭を砕かれていた。

一二、三歳の少女は勢いに任せて御坂の上を通過する。その時に頭上を見上げる御坂と目が合つて、ニヤリと笑っていた。

一回転して地面を転がり、そのまま地面を蹴って絹旗は突っ込んでくる。

（はやッ・・・！）

立ち上がったばかりの御坂目掛けて空中を突進してくる絹旗。御坂は全身に帯電しようと電流の渦を生み出す。

「ッ、なんで！」

電流が生じない。バツと目だけで辺りを見回す。さきほどのゴム玩具が散乱している。御坂を中心として絶縁体が散らばっているのだ。

自身を巻き込まないよう帯電するのには細心の注意と環境の把握が必要になる。たとえば予想外の絶縁体や伝導体が混じっていれば電流は乱れてしまう。本人はあくまで自らを巻き込まないよう演算して帯電しているのだから、その演算にミスがあれば脳が本能的に規制をかける。今御坂が帯電できないのは演算ミスを指摘された脳が能力を制御しているからだった。

フレンダの下処理は成功した。たった一度だけの足止め。それでもその一度で十分だった。

「はあああああああああ！」

絹旗の拳が御坂を狙う。御坂はチツと舌打ちした。かわすしかな

い。動きが大きいため威力は高そうだが、その動きは読めた。

（あのツンツン頭のパンチより全然恐くないわよッ！）

御坂が身体を傾けようとした次の瞬間、それが足元に転がってくる。麦野の方から投げられたそれは、どう見ても手榴弾だった。

「嘘でしょ・・・？」

目を疑った。今ここには御坂だけでなく絹旗もいるのだ。麦野はそれをわかっていて手榴弾を投げてきたのか。

仲間ごと御坂を消そうと言うのか。

（まだよ！ 第三位の電撃は瞬間的に練り上げられるんだから！）

コンマ三秒で攻勢に転じることができる最強の電撃使い、それが御坂美琴である。
エレクトロマスター

手榴弾は構造上外部からの衝撃で爆発が止まることはない。一度撃鉄が雷管を叩けば数秒後には爆裂するのだ。外からの電流で止められるものではなかった。

だから御坂が狙うのは手榴弾本体ではない。地面。一〇億ボルトを誇る電撃を直接地面に叩きつければ手榴弾もろとも吹き飛ばす。御坂に向かってくる手榴弾の爆風もゼロにはならないにしろその威力を殺される。

今取れる最善の手。御坂は地面に電撃を叩きつけた。ギャリリと轟音が生まれ、手榴弾が地面と一緒に向こう側へ吹き飛ばされる。それとほぼ同じ時に絹旗の拳が繰り出された。御坂はなんとかかわしたが、そのまま流れるように繰り出された膝をまともに胴に受けた。連続攻撃をかわす余裕が御坂にはなかった。

「ッがああ、ゲボツ、ゴホツ・・・！」

女の子には似つかわしくない苦しみの声。アバラ骨が折れていないのが奇蹟だった。内臓が直接揺らされた感覚。御坂は膝について思いきり嘔吐した。

そして気づく。手榴弾の爆発が起こらない。いや、爆発はしたのだ。だが火薬を使った普通の手榴弾とは系統の違う兵器だったことに、彼女はようやく気がついた。

バアツと白黄の光が眼前に広がって、御坂の目は機能しなくなった。耳にもキンと残響が残っている。爆風が生じないそれは多少吹き飛ばされたところで問題なく力を発揮する。

スタングレネード 閃光手榴弾。閃光と爆音で一時的な失明、難聴を敵に与える非殺人兵器。

（ヤバイ。これ、死ぬ。殺される・・・）

御坂は震えていた。今彼女が置かれている現状は絶望的である。まず目が見えないこと。次に音が聞こえないこと。敵がどこにいるかもわからず、攻撃をかわせない状況にあること。

そして恐らく御坂の傍に佇んでいる絹旗と、マルチタウナー原子崩しを発射しようとしている麦野の存在。御坂は攻撃も防御もできない状態に立たされている。

御坂は直感する。このままでは殺される。だがどう動けばいいのかわからない。膝が震え出し、それを止めることも彼女にはできなかった。

スタングレネード 閃光手榴弾の一番恐ろしいところは視覚と聴覚を奪い、その者の判断能力に著しい損害を与えることである。五感のほとんどを支配する視覚と聴覚を失うと、人は錯乱する。

絹旗は膝を折って震えている御坂の襟首を掴み、思い切り地面に叩きつけた。グシャ、と鈍い音がして御坂の鼻と口から血が噴き出

す。

その様を見た麦野はニヤリと笑って、御坂の傍に寄った。

「いいザマだなあ第三位。キレイなお顔が台無しじゃねえか」

そして焦点の合っていない御坂の顔を思いきりヒールの踵で踏み
にじる。ゴキ、と骨が折れる音が響いた。御坂の頬骨が砕けた音だ。

「あつははははは！ ブザマだなあおい。イイコト考えた。整形し
てやるよ第三位。治療費はそうだな、テメエの悲鳴で」

御坂にはなにも聞こえていない。ただ見えない攻撃に怯えるだけ
だ。口が動いている。パクパクと動いているが難聴状態のため、言
葉を声にできていないようである。

その口の動きを見つめて麦野はほくそ笑む。

「もしかして？ 助けて？ とかほざいてるんじゃないやねえだろうな第三位。
みつともねえからやめろよそういうの。レベル5の品が下がっちゃ
うだろオがよ。わかってんのかオラ」

御坂の顔を蹴った。首だけがぐるんと回って、盛大に血を吐く。
幸運にも頸椎は外れなかったが、その苦痛は御坂に獣の悲鳴をあげ
させるほどのものだった。麦野はギャハハと笑い声をあげる。絹旗
とフレンドはじっとそのやり取りを見つめていた。

麦野はさらに面白いものに気づく。御坂の股間が湿っているのだ。
腿が濡れてハイソックスに染みをつくっている。膝の震えは止まっ
ておらず、胸元を掴んでグイと引き寄せるとガチガチと歯を打ち鳴
らす御坂の顔がそこに現れた。麦野は顔を寄せて嘲る。

「おもらしてんじゃねえよ。イイオムツ紹介してやるつか？ ええ学園都市第三位さんよオオオオ！」

麦野はそう叫びながら御坂を地面に叩き落とし、ヒールで肩を刺して地面に縫いつけた。右手を御坂に向け、原子崩し^{マルチタウナー}を溜め始める。

「なにが第三位だ。ここでお別れだ、おもらしちゃん？」

不健康な白い光が集束していく。御坂を貫く電子の光。

戻りつつある視覚と聴覚。その不穏な白をぼんやりと見つめる御坂。この苦痛から解放されるなら。楽になれるなら。ひと思いに撃つてくれ。

指先から力が抜けていく感覚に、御坂は目を閉じようとする。

「諦めないでください御坂さあああああああああああああああああああああん！」

よく知っている声。失おうとしていた意識が一瞬でクリアになる。次いでピー、ピー、という防犯ブザーの音が辺りに響いているのに気づいた。麦野達はすでにわかっていたようで、その声の主を睨みつけている。音は駐車場の方から聞こえた。車上荒らしを警戒し

た車の防犯ブザーを、声の主が故意的に鳴らしたのだろう。

霞んでいる視界。それでも懸命に御坂は声のする方を見た。

そこに立っているのは。そこで御坂のためにレベル5に立ち向かう人物は。

麦野が溜息混じりに「誰アンタ？」とドスのきいた低い声で尋ねる。愉しい遊びを邪魔されて不機嫌なのだろう。

黒髪を靡かせる少女。その手に握られているのは大きな消火器だ。

「御坂さんの、友達ですッ！」

佐天涙子。無能力者の少女がたったひとりで暗部組織？アイテム？に立ち向かう。

「友達ねえ？ 部外者が死にくるんじゃないよ。ひねり潰すぞ」

「部外者じゃない！ 私は御坂さんの友達だ！」

「・・・頭おかしいの、コイツ？」

麦野は呆れて御坂から手を離れた。彼女は佐天がレベル0だとうことを知らない。戦意のないレベル5より敵意のある未知人物^{アンノウン}の方を警戒するのは当然である。

それが狙いだった。佐天の目的はただひとつ。第四位の注意を自分に向けること。そのために防犯ブザーを鳴らし、消火器という？いかにも戦いの意志が見受けられる武器？を手に持って立ち塞がっ

ただ。勝てるなどと本気で思っていない。

レベル0にできることは、相手を倒すことではない。友達を守ることだけだ。

「来なよレベル5。あたしの一撃はアンタの目論見を倒してみせるんだから！」

麦野の額に青筋が浮かぶ。彼女の攻撃目標はレベル5からレベル0へと移行した。

強大な力の差。大人と赤子以上の差がある。レベル5とは軍隊に匹敵する能力者なのだ。

だが、佐天は怯えない。真っ直ぐと睨み返し、友達のために命を懸ける。

大切な者を守るために立ち向かう。その時非力なレベル0は主人^ロ公になれるのだ。

一方通行は暗室で椅子に座っていた。差し出されたコーヒーマシン^{アクセラレータ}は冷め始めている。

その学園都市第一位の魔物の前にいる中年の男性は、絶えず眉間に皺を寄せていた。険しい表情をしているのではなく、皺が寄ってしまつて戻らないようだ。若い頃から苦労してきたのだらうと一方通行^{アクセラレータ}はなんとなく思った。

男は特力研の元研究員のひとり。だが一方通行の脳を直接弄り回した者ではない。彼が関わったのは残虐非道な実験を数多く行った？プロデュース？である。

「私の過去は語った。懺悔になるとも思わないがね。さて、君が望むことはなんだ」

「オマエの命、とでも言うと思ったか？」

「言われても仕方のないことをしてきたと思っっている」

低く渋い声だった。その目は優しさと慈悲に満ちている。一方通行^{イタ}が知っているような狂気の研究員どもとは根本が違う人間だった。その男が特力研で一年以上勤務していたという事実が信じられないくらいだ。

特力研が警備員^{アンチスキル}に制圧される前に彼は職を追われている。？上？に反抗しすぎた結果らしい。幸か不幸か、そのせいで司法に裁かれることは免れていた。なにしろ特力研は学園都市の闇で、詳細なデータはなにも残っていなかったのだ。この男が？プロデュース？のメンバーであつたことも公式な記録には一切残っていない。

「俺がここに来たのは元研究員の無職野郎を殺すためじゃねエ。オマエが研究してたのは大脳生理学なんだろう？」

「たしかに私が研究していたのは大脳生理学だ。専攻は？自分だけ^{バーソナ}の現実領域？だが^{ルリアリティ}」

「そだ。俺はソイツを調べている。単刀直入に訊く。？自分だけ^{バーソナ}の現実領域？ってのを狭めることは可能か？」

男はその言葉の意味を理解できない。アクセラレータ一方通行はいいやと付け加えた。

「オマエならできるはずだ。その女を救ったオマエなら。できねエとは言わせねエぞ」

部屋にいるのは二人ではない。アクセラレータ一方通行と男以外にもうひとり、言葉話さない女カラーマーカーの存在。

かつてその人は？色彩追跡？と呼ばれ、実験の果てに壊された憐れな少女だった。

車椅子に座ったままぼんやりと虚空を見つめるその女性の姿を見やり、男は視線を地に落とす。

「機材さえ揃っていれば、不可能ではない」

アクセラレータ一方通行の問いに、男は静かな口調で答えた。

「イイ返事だ。だが足りねエな。不可能じゃなくて可能って答える。私がやってみせますって答えてみせろ」

「無責任な発言はできないな。私はそれでも研究員だった。矜持くらいはある」

「その矜持がどれだけのガキどもを傷つけたか、わかってンのか」

彼は押し黙った。車椅子の女性は軽く首を傾げ、「あー」と言葉でない声を洩らしている。今の彼女にはそれがなにかを理解することとはできない。目の前で会話する二人の姿を網膜に捉えても、それ

が意味するところを脳で整理できないのだ。

彼女は、男が傷つけてきた子供達のひとりだった。

「俺はスキルジャンパーの実験をぶっ潰す。ヤツが死ぬことで実験が終了するなら、俺はあえてそれに反逆する。レベル6なんざ関係ねエ。？上？の連中が歯噛みして悔しがる様を見たい」

「反逆。わかっているのか。そうすれば君は闇をも敵に回すことになるんだぞ」

「望むところだ。こんなクソツタレな闇が味方である現状に不満なンだよ。オマエも協力しろ。スキルジャンパーの？自分だけの現実領域？を狭めて実験の前提を覆すぞ」

アクセラレータ
一方通行の不敵な笑みを見つめていた男は、不意に低い声で言葉を紡ぎ始める。

「こっするしか、なかったんだ」

車椅子の女性の傍に座って、その頭を撫でる。「あー」と彼女は喜んでいようだった。

「？体晶？の容量超過でこの子の脳は壊れてしまった。荒療治で？パーソナルリアリティ自分だけの現実領域？を削り取らなければ？体晶？の悪影響が脳を侵食していただろう」

男は手を合わせ、それを額に当てた。彼の表情が見えなくなる。その姿勢はまるで神に赦しを乞っているようだった。

「だが、それまでだった。？体晶？の暴走で失われた部分は元に戻らない。その上実験の繰り返しで培われた精神的負担を取り除くことはできなかった。記憶がなくなっても、身体が覚えていたんだ」

記憶がなくなっても。そのフリーズに、一方通行は思わず眉を顰^{ひそ}める。

神に懺悔する男の声が辛さや苦しみを伴っていく。どうしようもない後悔の念があるからだ。

「私の研究は子供達を苦しめるだけだったのだ。学園都市の闇を押し広げるだけだった。もうこの知識を使うことはないと思っていた。お願いだ。私を再び闇の世界に呼び戻さないでくれ」

車椅子の女性の双眸^{そうぼう}が、隣に座る男に向けられた。年齢の割に老けきっていて、白髪の混じった彼の背は小さく丸まっていた。

一方通行は一度男から目を外し、暗い部屋のなかに置いた。簡素な部屋でなにもない。移動を繰り返しているのは闇から逃げるためだろうか。ここも隠れ家のひとつなのかもしれない。

再び視線を男に戻す。憔悴していると一方通行にもわかるほど彼は痩せていた。

この男も憐れなものだ。闇の研究チームに招集され、非人道的な実験を繰り返し、己の研究がそのまま学園都市の闇を広げていった。心が壊れ、家族とは縁を切り、孤独な身で壊れかけた女とともにこの町を転々としている。

一番憐れなのは、彼の遺した偉大な研究がまだ学園都市の闇で応用され、さらなる犠牲を増やし続けていることだった。

彼は懺悔したがった。苦しみから解放されたかった。神に祈るくらいしかもはや方法がなかったのだ。

だが、一方通行は許さない。アクセラレータ 間接的にも自分達を闇に繋ぎとめたこの男を。神にすぎることと赦されようとする事など、決して認めない。

彼は核心を突く言葉を発していた。

「苦しめるだけじゃなかっただろオが。オマエの研究は」

意味をきちんと汲み取れない。男はゆっくりと面をあげた。暗闇に潜む白い影。燈る赤色の瞳が自分に向いている。

「その女を救うこともできただろ。悲觀的になって全部の選択肢を潰してンじゃねエよ。まだやれることがあるはずだろオに」

「やれる、こと?」

「まだオマエのなかに残ってるか? 研究員としての矜持ってヤツがよ」

アクセラレータ

一方通行はニイと笑っていた。それに恐怖はまるで感じない。むしろ温かくて優しさすら感じるような、そんな笑みだった。

学園都市最強は最も残虐非道な人間兵器だと言われている。けれど、ほんとうにそうなのだろうか。少なくとも今ここで見せている笑みには、そんな邪悪はまるでない。

彼は学園都市の闇という邪悪に対する邪悪を培い続けてきた。それは時に学園都市という世界で最も残虐であり、非道であった。だ

が同時に言葉にできない優しさのようなものも抱き続けてきたのではないか。たとえば路傍に咲く花を愛でる心かもしれない。あるいは捨て犬にパンの切れ端をやることかもしれない。そういう闇に生きる者では決して抱かない何気ない優しさが、彼にはあったのではないか。

だから彼は御坂美琴と協力して研究所に忍び込み、殺すべきスキルジャンパーを救う真似を見せたのではないか。

男は見つめていた。不敵で優しい笑みを浮かべる少年を。

「まだ自分の研究で誰かの命を救う気はあるか？」

車椅子の女性の手が男に触れる。息を飲んだ。彼女の目から滴が落ちていたのだ。

言葉はもう理解できないはずだ。だが彼女は優しさを理解できるちゃんとした人間だった。男が命を懸けて自分を守り通し、今も面倒を見続けてくれている。その優しさを理解していた。

今少年が発する優しさを、彼女は理解できる。言葉や表情には出さない、その温かくて優しい思いを、彼女は誰よりも見抜いていたのだ。だから涙が溢れ出している。

男の目にも涙が滲んでくる。かつて自分が苦しめた少女の手を握り締め、何度も肯いた。己の罪を懺悔した彼は、己のなすべきことをなすと誓った。

村叢は己の血で刃を染めた。それでいいと思っていた。

「ソーニャあああああああああ」

咆哮。それは雄叫びであり、一方で慟哭でもあった。
憎しみを断つ。東雲鏡を取り囲む負の連鎖を断ち切る。それはソーフィヤという諸悪の根源であり、村叢という少女そのものを断ち切るということに他ならなかった。

玉碎。村叢が狙っているのは賀古ソーフィヤとの心中。

「馬鹿正直に來たって私を討ち取れませんか！」

対する賀古はニヤと笑って手に握っていたスイッチを入れる。途端に賀古の背後から強烈な光が発生し、村叢の視力を奪おうとする。しかし。村叢影夜は止まらない。

（こいつ・・・っ）

賀古の衣服を躊躇なく斬り裂く刃は、彼女自身の血で真っ赤に光っている。

「お前の狙いはなんだ！　なぜ私を騙してまで鏡を殺す！」

「知れたこと！　彼女がスキルジャンパーであるから！」

「スキルジャンパーだからなんだって言うんだ！　彼女はスキルジ

ヤンパーである前に東雲鏡じゃないかあああああああ」

連撃。一度肘を引き、突きの構えを見せる。賀古はチィと舌打ちした。

「己を顧みないその愚行がどれだけ人を傷つけてきたか！　まだわからないんですか！」

賀古は椅子から飛びあがり、後方に引いた。今の村叢は視力があ
るのかどうかあやしい。いや、自身の能力？クリアコントロール光学操作？で網膜に入る
光量を調整したから無事なのだろう。彼女の鋭い視線はたしかに
賀古に向けられていた。

「学園都市の闇はすべてを飲み込む。先生はそれを断ち切ろうと言
うのですわ。あなたにはわかるはず。学園都市はレベル6を要求し
ている。逆を言えばレベル6が誕生しない限り闇を広げ続けるだけ
だと」

賀古は罨を敷きつめていた。ボタンを押すたびに壁からクロスボ
ウの矢が吐き出され、あるいは指向性に優れた異臭爆弾が村叢を襲
ったりする。それでも村叢は止まらない。真っ直ぐに賀古を狙い、
刃を繰り出す。そのたびに掌から垂れる血が宙を舞った。

「闇がすべてを飲み込む前に、東雲鏡は犠牲にならなければならな
い！　己の存在を懸けて世界に贖罪する必要があるのですわ！」

学園都市という町そのものが超能力開発の闇に覆われてしまえば、
世界に散らばる原石に与える影響は計り知れない。今、ここで、学
園都市はその使命を全うすべきなのだ。

レベル6を生み出す。そのために誕生したのが学園都市であるな

ら、ここで学園都市は滅びるべきだった。最終目標であるレベル6を誕生させ、その意義を失えば、学園都市は滅びるしなくなる。それが原石達にとって最良の未来。

非道な実験はこの？恵まれた双子計画？で終息するはずなのだ。

「それは間違っている！ 彼女が贖罪しなければならぬ理由はなにひとつない！」

村叢が刃を繰り出し、賀古の髪の一部を切り裂いた。ハラハラと舞う髪を賀古は睨みつける。

逡巡はない。一步村叢が踏み出し賀古を両断しようとする。あと一步で斬れるというところで刃が止まった。賀古が懷から取り出した拳銃の銃身で受け止めたからである。

「ならばこの闇の後始末は誰が取ると言うのです？ あなたが取るんですか影夜ちゃん？」

罅迫り合いになる二人が至近距離で互いを見つめ合い、呪い合う。

「私達だよ。私とお前が死んで鏡は生き残る。そうすることが私とお前の贖罪だ」

「随分と血生臭いエゴですねえ。死ぬならひとりで死んでくださいな」

賀古は空いている手で懷から取り出した小型ケースを開き、なかにある錠剤を口に含んだ。

まさか。村叢が言葉を発する前に賀古から光が迸る。彼女を中心に半径五メートルほどが業火に包まれた。

炎の渦のなかで彼女は狂気の笑みを浮かべている。

「スキルジャンパーが死んでレベル6が誕生する！　そして学園都市の闇を根絶する！」

天然の発火能力者。賀古ソーフィヤは原石のひとりである。

「それこそが先生の望み！　そのためなら私は悪魔にも魂を売りましょう！　さあ泣け！　喚け！　絶望しろ学園都市！　ハハハはハはハアーツ！」

炎風に吹き飛ばされた。村叢は全身にやけどを負って倒れていた。業火のなかに佇む賀古を睨み、馬鹿な真似を、と呟く。

賀古は？　体晶？　を使った。元々レベル1か2の判定しかされていない能力者だったのだ。原石とはいえ発火能力を基にしている以上レベルを誤魔化すことは難しい。

村叢を振り払う。そのためだけに彼女は？　体晶？　を使ったのだ。それを使えばどうなるかわかっていながら。

「へえ。まだ立ち上がりますか。元気ですねぇ影夜ちゃん？」

やけどは全身に渡っている。一瞬だったため傷は浅いが、全身を貫くような痛みが襲っているのはたしかだった。

それでも村叢は立ち上がる。己の手を傷つけながら刃をもう一度握り締めて。

「今、誰を恨めばいいのかわかった。お前だ、賀古ソーフィヤ」

村叢はギラギラと目を光らせて歩んで行く。賀古も狂笑を浮かべたまま対峙した。

「恨んで恨んで恨み尽くす。それが村叢影夜の信条でしたねえ。私は憎しみ続けました。その意味でああなたの信条はわからなくもない・・」

「お前は気づいていない。学園都市の闇を憎んでいるくせに、自身学園都市の闇そのものになっていることに気づいていないんだ」

「私が、学園都市の闇だと？」

「闇を憎むなら私とともに鏡を救うべきだった。結局お前は闇のなかで悲観し、嘆き、得意げな顔をして誤魔化すことしかできなかった闇の忌み児に過ぎない」

村叢の言葉が正しいかどうかなど、もはや賀古にとっても村叢自身にとっても、どうでもいい。重要なのは二人が敵として対峙している現状だった。

それでもなお。彼女は言葉を紡ぎ続ける。

「学園都市の闇でしか生きられない存在。それは鏡じゃない。ほんとうに闇でしか生きられないのは私やお前のようなどうしようもない人間だよ。光の当たる場所が恐くて、闇で恨み続けることしかできない憐れな存在。だから私はお前を恨む。殺す。闇は闇に帰るべ

きなんだ、ソーニャ」

闇でしか生きられない存在。それを聞いた賀古はニタアと嫌な笑みを浮かべる。

「面白い。ならばどうぞ私を恨みなさい。その恨みを私が憎しみに変えて学園都市に解き放ってやりますわ。闇が学園都市に降り懸かるその時になって後悔しても遅いでしょうけどねえ！ アハッ、アハハハハハ！」

賀古は腕を振った。炎が意思を持った生き物のような動きで伸びていく。ゆっくり歩いていた村叢をあつという間に呑み込んだ。得意げに笑っていた賀古の真横から、彼女の声がした。

「忘れたのか。東雲鏡は学園都市そのもので、彼女が守ろうとしているものがなんなのか」

喉の奥がひりつく。彼女の能力？クリアコントロール光学操作？を一瞬でも警戒しなかった自分を悔いた。賀古は唸りをあげながら全身から発火する。炎風で村叢を吹き飛ばそうとしたのだ。

周りのものもまとめて吹き飛ばす炎風。今の賀古はレベル4以上の発火能力者パイロキネシストになっていた。

ゴロゴロと地面を転がって壁に叩きつけられる村叢の姿を見て、賀古はハハッと笑う。

「東雲鏡は優しすぎた。甘すぎたんですよ。だから？上？に踊らされ、その最期をも命令される憐れで醜い学園都市の闇そのもの。誰

も死なない結末を迎えたいなんて、甘すぎるんだ！」

頭が割れそうなほどの痛みが押し寄せる。もう？体晶？の反動がきたのか。

「ここですべての憎しみを断たなければならない！ 甘っちょろい幻想で救えるものなんてなにもないんだ！ それをわかっていたから先生は実験を繰り返した！ 悪魔が望むものを用意しようとした！ 先生がなにを思っただけで子供達を巻き込んでいたか、お前らにわかってたまるかああああああああああああああああああああああああああああああ！」

非難。中傷。闇であるから法的に裁かれないだけで、賀古ソーフィヤの愛する先生は常に攻撃の的にされてきた。命を狙われることも多々あった。人間でない研究者とも評された。

賀古ソーフィヤだけは知っている。先生は心優しい人だということ。学園都市の闇に終焉をもたらすために闇に身を委ねてきたことを。犠牲になった子供達のために涙を流し続けていたことを。

血と硝煙の臭いだけが香るあの場所から連れ出してくれたのは先生だった。自分のために涙を流してくれたのも先生だった。

賀古は痛む頭を手で押さえながら、奥に歩んで行く。ふらふらとした足取りで、時々壁に手をついて歩いていった。

物音。賀古は恐る恐る背後を見やる。

「村叢、影夜・・・っ！」

村叢は立ち上がっていた。刃を杖代わりにして賀古を睨んでいる。

（どうして立ち上げられる？ 全身が焼けただれているんだぞ・・・っ！）

彼女は自分に向かって進んでくる。ゾンビかなにかではないか、と賀古は思った。炎の風を巻き起こすだけの力が今の賀古にはない。たとえ炎風を起こしても再び村叢は立ち上がるのではないか、と思った。

クリアコントロール
光学操作を使われれば殺されるかもしれない。賀古は唇を噛みしめる。

（まだダメ・・・まだ死んじゃいけない・・・使っしかない）

賀古は奥にある機械に触れた。？体晶？の反動で震える指をなんとか操り、機械に命を吹き込む。機械の両側に備えられたスピーカーから甲高い音が鳴り響いた。

「ぐっ、これ、は・・・」

「キャパシティダウンだよ影夜ちゃん。能力者封じのとおておき」

「う、あ、ぐ・・・それならソーニャだって・・・」

「私は」

賀古が少しだけ寂しい表情を見せる。

「私はキャパシティダウンを受け付けられない身体なんだよ」

言っている意味を把握できない。そんな村叢の怪訝な表情を見て、賀古はくるくるの前髪を上げて額を見せつけた。

そこにあつた小型の器具。

「先生に色々と改造してもらった。原石であることを悟られないためにね。キャパシティダウンみたいな能力者封じに囚われないようにって鼓膜から渦巻管までなにもかも機械に頼ってるんだよ。意外でしょ？」

聴覚はすべてサイボーグ化されているという。キャパシティダウンが音を使って脳に影響を与えるものである以上、その音を遮断すればキャパシティダウンは機能しないということになる。

賀古は拳銃を握り締め、倒れ伏せている村叢に向かって銃口を突き付ける。

「私が学園都市を憎む理由がわかるはず。すべてを憎む理由がわかるはず」

村叢の目には、賀古が涙を流しているように見えた。だがそれはオイルかもしれない。樹脂が溶けだしたものかもしれない。彼女がどこまで身体を改造されているか、村叢は知らなかった。

「学園都市は私からなにもかも奪い去った。祖父も、家族も、この身体だって。そんな世界を、どうして愛せるって言うの？ なぜあも純真無垢でいられるの？ 答えてよ、親友」

村叢は息を飲む。彼女もまた東雲鏡という少女に惹かれていたのかもしれない。

学園都市の闇で生まれ、闇で生き続けた存在が、普通の少女と同じように笑い、同じように泣き、過酷な実験命令を下されてもなお笑って肯く。そういう純粹さは村叢にはなかった。賀古にもなかったのだろう。だから東雲のもとに二人は集まった。どこかで惹かれていたから。

賀古は下唇を噛みしめたままトリガーを引き絞る。

「私は絶望しか知らなかった。学園都市を愛すことは、できなかった」

村叢に向かって弾丸を発射する。そうすれば賀古の言葉は事実になるだろう。闇のなかで絶望しか知らず、かつての仲間をその手で殺す。学園都市に対する憎しみは増長し、ほんとうの意味で賀古は学園都市の敵となるだろう。

たとえあの両目から流れ出るなにかがオイルであったとしても。

それは賀古ソーフィヤの涙なのだ。村叢は思った。

『普通に、絶望するにはまだはいよいよソーニャ』

声が響いた。村叢だけでなく賀古も目を見開いて辺りを見回した。今のはたしかに東雲の声だった。

「ど、どこにいるの鏡ちゃん！ いや、キャパシティダウンが作動しているこの場所で・・・」

『僕はあなたの傍にいる。いつでも、あなたと一緒にいるよ』

「どういう……どういう意味よそれはっ！」

賀古は瞳を潤ませたまま叫ぶ。村叢はキャパシティダウンのせいで起き上がることもできない。

東雲の言葉の意味。絶望するにはまだはやいのだ。

ドオン！ という建物の外で響く轟音。次いで真っ赤な警報装置がやかましく鳴り始める。

「侵入者？」

賀古が渋い表情で入口の方を見つめる。複数の足音が響いて、部屋のすぐ前まで迫ってきた。バンと強く開けられた扉の向こうにいたのは警備員アンチスキルの女と真っ白の特攻服を着た男。

「ナンバーセブンっ！」

「力が入らねえと思ったらまたキャパシティダウンか。けどこの警報アラートでちょっと軽減されてるぞ」

削板はしっかりと自分の両足で立っていた。キャパシティダウンが本来の力を有していれば削板は立つこともままならないはずなのだ。

「優希の言う通り警備叩き起こしたかいがあったじゃん！」

脇に抱えたセミオートライフルで照準を合わせ、キャパシティダ
ウンを狙い撃とうとする黄泉川。しかし放たれた銃弾はキャパシテ
イダウンに当たる前に碎け散った。

「特殊防弾繊維か！」

「とっておきだ。そう簡単に壊されてたまるかよ」

ニヤリと笑う賀古が、一転して表情を変える。

削板と黄泉川の背後から歩んでくる少女の姿が目に残ったのだ。

「アンタだったんだね、賀古」

早瀬はやせ優希。ある意味で賀古が最も恐れていた人物。恐れていたか
らこそ要注意人物に載せたし、？黒豹部隊ブラックパンサー？に鹵獲ろかくを命じたりした。
東雲と村叢がともに行動している以上、四人組のなかでも早瀬と
賀古は常に一緒に行動する仲だった。

薄々勘付いていたのだ。早瀬が持つその類稀なる嗅覚に。レベル
0であることをバネに実力以上の成果を出す彼女の素質に。

今この場所に現れたことがなによりの証拠だった。

計画の首謀者。

レベル4やレベル5の能力者。

アンチスキル
警備員という組織の一員。

皆がこの終末の場に集まる資格のある者ばかりだった。

そのなかで堂々と佇んでいるレベル0。

場違いな彼女は、ゆっくりと歩み続ける。恐怖や戸惑いを感じさ

せることもなく、立ち向かってくる。

「優希ちゃん。よくここまで辿り着きましたと褒めてあげたいところだけど、あいにくそんな余裕はない。それ以上近寄れば撃つ」

銃口を無力な村叢から早瀬に向けた。攻撃目標をレベル4からレベル0へ。

しかし、引き金は引けない。賀古は動揺していた。早瀬の顔には覇気が見える。爽快とした雰囲気すら感じ取れるのだ。

「なぜ、そんな風に笑っている？ 絶望しろよ早瀬優希。レベル0らしく震えあがれ」

「その口調。それが本来のアンタなんだね。けど、今はなぜかすんなり受け入れられる」

彼女の言葉に恐れは感じられない。むしろ清々しいものさえ見えていた。

「・・・レベル0らしく？ なんだよそれ。アンタなにか勘違いしてるじゃん？」

嬉しそうな笑み。それでいて強^{した}かな笑み。見ている者に希望を与える主人公^{ヒーロー}の笑みがそこにある。

「レベル0にできることはやっぱりあるんだよ」

ひっと喉の奥で声を洩らす。早瀬は自信に満ちた表情で賀古に歩み寄っていた。

援護しようとする黄泉川を手で制する削板。それを受けて黄泉川は倒れている村叢に近寄った。

キャパシティダウンが鳴り響くなか、レベル0を見守るレベル5とレベル4、そして警備員^{アンチスキル}。彼らもまた信じているのだ。

無能力者の底力を。早瀬優希が持つほんとうの力というものを。

「ずっと考えてた。レベル0のあたいにできることはなにかって。ここに来てやっとわかったよ。やっぱりあたいは馬鹿だし一生レベル0止まりだと思う。けど、できることはあった」

早瀬はほんとうに嬉しそうな顔をしていた。やるべきことを見つけた幸福を噛みしめていた。早瀬は拳を握り、賀古に向かって突き出す。

「レベル0にできることは友達^{アタ}を止めることだ」

キャパシティダウンの甲高い音のなかでも、彼女の声は透き通っ

ていた。削板や黄泉川がニツと笑った。その背中を押すような眼差しで非力なレベル0を見つめていた。

村叢は早瀬の後ろ姿を見つめていた。

あの時、レベル0にできることなどないと言いつつ放った。闇の世界に巻き込まないように、傷つけるとしても突き放そうとしたのだ。

それでも彼女はこの場所に立っている。殺されそうだった自分を救った。そして自分を殺すことで学園都市の呪縛に囚われるところだった賀古をも、救ったのだ。

友達。ほんとうにその言葉のためだけに彼女は闇の世界に舞い戻った。友達を守るために。そして友達を止めるために。

早瀬優希は覚醒した。ただのレベル0から、主人公^{ヒーロー}へと覚醒したのだ。

4（後書き）

備忘録：ぜんぶ覚えておいてください！

作者的には激熱回です。佐天とオリキャラの早瀬を対比しながら、無能力者が主人公になる場面とか書いてて血液沸騰します。戦闘シーンもたくさん書いて幸せ。

でも地味に一番熱いのは行間が本編に絡んだ瞬間ですね。最初の最初からこの構成を狙っていたので嬉しい限りです。一方通行さんマジグツジョブ！

5（前書き）

お待たせしました！相変わらずの亀更新ですいません。
初春飾利最大の見せ場になると思います。以前も書いたような気がするけど気のせいですね？ 縦書き形式推奨中です。

麦野は目の前の未知人物^{アンノウ}に意識を傾けた。原子崩しの不健康な白い光が集束している。佐天に気づいた絹旗が声を荒げた。

「あの女は超無能力者ですよ！」

「ああ？ 超無能力者ってどっちよ」

「レベル0。スキルジャンパーと第二位が交戦した時巻き込まれた女です」

「へー。じゃあこいつも関係者ってことか。いいね、遊んであげる」

「ちょっと、麦野さん！」

絹旗の声を無視して麦野は原子崩し^{メルトダウン}を放とうとする。彼女にとって佐天が無能力者だろうがなんだろうがかまわなかった。一度攻撃目標になったからには死ぬまで見逃さない。麦野はゲームでも雑魚キャラはすべて倒さないと気が済まない人間なのだ。

御坂を後回しにしたからにはきちんと殺す。弁当を食べる時に迷い箸するのは行儀が悪い、という感覚だった。迷い箸と殺人を同じレベルで考えるのが第四位の超能力者である。

「一発で死ぬなんてやめろよオ！」

ブバアツと原子崩し^{メルトダウン}の波が突き進む。佐天は手に持った七キ口もない消火器を頭上に持ち上げ、力の限り放り投げた。原子崩し^{メルトダウン}は消

火器ごときを遮蔽物とみなさず、一瞬で溶解させて後方にいる佐天を射抜こうとする。

ブシャアアアと白灰色の粉塵が広がる。消火器のなかの消火粉が容器から漏れたのだ。一瞬だが麦野と佐天を遮断する形になる。視界が悪くなったのを見て麦野は舌打ちした。今考えれば消火器の使い道は目くらましくらいだったか、と冷静に考え直してみる。意外と佐天が頭を使っていたのだなあというのに感心してみた。

「んで、なんで逃げないのお前」

麦野が疑問に思うのも当然で、目くらましをしたからには逃げてしかるべきではないか。ところが佐天はそこに立ってこちらを睨んでいるのである。

逃げられなかったのではない。恐怖で足が竦んだわけでもない。佐天涙子は自らの意志で逃げなかった。逃げる必要がなかったからである。

「まったく。冷や冷やさせてくださいますわね」

予想外のところから声がした。背後。もつと言えば御坂の方からだ。

麦野は原子崩しを充填しながら振り返る。姿を確認すればそのまま放ってやる気だった。

振り返った先にいたのは御坂の肩を持つ少女。腕には生意気な腕章が見えている。

「ジャッジメントですの。悪いですけどお姉様は返していただき

ますの」

白井黒子。麦野はビキビキと青筋を浮かべて原子崩しメルトダウンを放つ。三本の光線が白井に向かって伸びていく。

フツと姿を消したかと思うと、今度は佐天のところから「危ないですね」という白井の声が聞こえた。麦野の憤りが加速していく。

「テレポーター空間移動かテメエ」

「よくもお姉様をこんな風にしてくれましたの。三対一とは卑怯だと思いませんか？」

「ほざけ。テメエひとりではなにができる？　しょせんたかがレベル4なんだからオがよオオオ！」

ズバアツと麦野から再び光線が発射される。白井は呆れたように息を吐き、佐天に片手で触れた。また空間移動テレポートで消え、原子崩しメウトダウンが虚しく空を切る。

「馬鹿のひとつ覚えですわね。お姉様の電撃の槍ならともかく溜めの遅い原子崩しなど当たる気がしませんの」

「なるほど、吠えるじゃないか空間移動テレポーター・・・そんなに苦しんで死にたいならそうしてやんよ」

麦野を激昂させて冷静な判断を失わせることは容易だった。傍にいた絹旗やフレンダの方が呆れているほど麦野は頭に血が上っていた。

「それと」

白井は右腕にピンで留めた風紀委員の腕章を突き出し、男前に笑う。

「わたくしひとりではないんですの」

なに、と麦野が言う前にその不吉な音が闇夜を響く。バラバラバラというその独特な音を聞いて、麦野の血の気が引いていった。

「オイオイ、こりやどうなってる・・・？　なんで？　六枚羽？　がここにいるんだッ！」

HS AFH 11、通称？　六枚羽？　と呼ばれる学園都市最新鋭の無人攻撃ヘリ。そのAH 64アパッチにも似たフォルムをした？　六枚羽？　は、その名前の由来ともなった六枚の羽それぞれに関節を持ち、その羽に備えられた機銃やミサイルを六方向同時に展開することが可能である。一般的なヘリに見られる回転式翼の他にも二基のロケットエンジンを積んでいて、最大速度はマッハ二・五を誇る化物兵器。一機つくるのに二五〇億円かかると言われるが、それに相応しい機動性と攻撃性を有していた。

その？　六枚羽？　がまさに麦野達？　アイテム？　に機銃の照準を向けている。麦野にはそれが解せない。？　六枚羽？　が個人をターゲットにすることはまずない。駆動鎧の暴走や大型重機の駆逐が？　六枚羽？　の担当するところであり、生身の人間を狙えば蜂の巣では済まないほどの高火力を有していた。生身の人間を駆逐するために使用したとなれば、警備員の倫理問題に発展する事態なのだ。

しかし、機銃は明らかに自分に向けられている。AIを積んだ無

人へりは麦野達をミンチにする気だった。麦野の頬を尋常でない量の汗が流れる。

「くそがああああああああああああああああああああああああああああああ！」

屋上でノートパソコン二台を巧みに扱う初春飾利が、その叫び声を聞いていた。

「六枚羽？を統制するのは第二三学区の制空権保全管理センターであるがそれは格納庫の役割をしているだけで、AI搭載の無人ヘリの特性上命令さえ下されればいつでも発進できる体制が整えられていた。パイロットがいちいち操作することもなく、オペレーターがいるわけでもない。メンテナンスもすべて機械が処理する？六枚羽？は、最終的な指令を警備員アンチスキルの監視衛星から受けている。監視衛星からの航空情報を受け取って発進し、目標を速やかに駆逐するという効率化を図った結果、監視衛星に指令の決定権を握らせればいいという判断が？上？で下された。

初春は守護神である。監視衛星を統括する施設にハッキングをかけ、監視衛星に情報を送り、？六枚羽？に出動要請を出した。監視衛星を統括する施設にハッキングするのは一瞬だった。？恵まれた双子計画？に関して調べた時のように長時間ハッキング状態を維持する必要はない。その一瞬にあらかじめ用意しておいた情報ソースを挿し込むだけだ。たぶんハッキングにかかった時間は五秒ほどだろう。そういうわずかな隙間はノイズのひとつと判断され、たいがい不問になる。そして監視衛星に送られた情報が跳ね返って？六枚羽？に伝えられるのも一瞬である。

そもそも？六枚羽？が無人ヘリの形式を取っている狙いは、精密

な射撃と操作で速やかに機械的に敵を殲滅することであるが、同時に？いつでも緊急発進できる学園都市の守護者？というコンセプトが組み込まれているのだ。たとえ警備員が？六枚羽？の出動に気づいても町のどこかで異変が起きているんだなと感じるだけで、すぐさま停止させようとはしない。監視衛星を媒介している以上、生身の警備員よりも？六枚羽？のサーチ能力の方がはるかに優れているのだ。

その学園都市の守護者を守護神が扱う。初春が？六枚羽？を機動させるまでに要した時間はわずか二分三〇秒。その？六枚羽？がこの場所に辿り着くまでに要した時間は八分。警備員どころか他の誰にも、なにが起こったかわからないだろう。

初春も白井も、佐天が車の警報を鳴らしたから気づくことができた。佐天がいなければスキルジャンパーに気づくことができなかったのと同じように、その音がなければ御坂は死んでいただろう。佐天が動かなければ、初春は行動することすらできなかった。

だから、初春はもう佐天を部外者にしない。

「佐天さん。私も、佐天さんと共に戦います・・・！」

守護神の指がエンターを押す。それは万が一警備員が？六枚羽？の異変に気づいて緊急停止命令を下そうとした時の保険である。

第二三学区にある？六枚羽？管理塔にクラッキングを仕掛けた。一時的にだが情報の伝達に齟齬を生む初春特製ウイルスを送り込んだのである。？六枚羽？に指令を出すまでは潜伏しているよう設定してある。解除方法を管理員やAIが解読するまでの足止めにはなるだろう。

守護神。スーパーハッカー初春飾利の本気。屋上から見えるその特徴的な？六枚羽？から鉛玉が雨のように発射される音を、彼女はその傍で聞いていた。

暗い廊下を歩くひとりの男。その腕に抱えられた年端もいかないう少年（あるいは、少女か）の目は不敵に光っている。コツコツと、靴の音がこだました。

垣根帝督。レベル5第二位の少年が、その瞳を金色に染め、とある病室を目指して歩いていた。ここは第七学区にある病院。スキルジャンパーが安置されている場所である。

麦野沈利は首尾よく働いている。？アイテム？を利用し、超電磁砲こと御坂美琴の足止めを行うと同時に、病院内への警戒を解かせているのだ。陽動と言ってもいい。

あの高慢ちきで気難しい麦野が、ただでさえ順位が上でムカついている垣根帝督に協力しているのは、目的が合致しているからだ。垣根はスキルジャンパーをその手で殺めたい。麦野は第一位よりも先に誰かがスキルジャンパーを殺し、実験の目論見を挫きたい。麦野と御坂が犬猿の仲となると、麦野と垣根が手を組むのは必然であつた。

そして肝心の一方通行は第七学区にはおらず、生意気に反抗してきた削板軍覇も別のターゲットに夢中らしい。今、自分を止める者は誰もいないのである。

垣根は外の騒ぎに耳を澄ませながら、得意げに歩みを進めていった。

「かきね」

「落ち着けよ。ミンチはすぐそこだ」

「かきね、かきね」

「たまにや、紳士的に殺すつてのもありかな？ おねんねしてる人形相手に解剖つてのものな」

腕のなかの存在——乗オーバー取クロックりがしきりに名を呼ぶ。垣根は意に介さないといった感じで無視していた。しかし、いよいよ乗オーバー取クロックりが騒がしくなってきたので、目をそちらに向けてみる。

「かきね。あのおんな、だれ？」

乗オーバー取クロックりの息が荒くなる。目を鋭く細めた垣根が、チツと露骨に舌打ちした。

「忘れてたぜ。そういや、おまえもいたんだつたな」

廊下の先にいたのは、いかにもお嬢様といった感じの女。制服を着用しているのは、学校が義務化しているからである。青白いほど透き通った肌と長い黒髪が、見る者をぞつとさせた。

「ごきげんよう。残念ながら、ここで行き止まりですわ」

常盤台中学校、レベル5第五位の能力者。人は彼女のことを、心メンタル掌握と呼び畏れる。

麦野沈利は原子崩しを上空に放った。不気味な音を立てる光線が伸びていくが、？六枚羽？は意思を持った生き物のように巧みにかわし、鉛玉を発射する。原子崩しの壁を展開してなんとか防ぐが、それもいつ突破されるかわからない。向こうは最先端の技術を搭載した殺戮兵器で、こちらは生身の人間なのだ。絹旗はフレンドを庇うようにして逃げていた。

一気に劣勢に立たされる？アイテム？。麦野が額に青筋を浮かべながら、目の前の生意気な？六枚羽？を睨みつけていた。

「ナメんじゃねエエエ！ 消えろオオオ！」

五本の原子崩しメルトダウンを放つ。だがそれも器用にかわされて、その特徴的な？六枚羽？が揺れ動く。迫撃がくる。直感した麦野は腕を振って障壁を展開した。壁が完成すると同時に鳴り響く銃撃の轟音。

「クソツ、AIが生意気なんだよ・・・ッ！」

麦野沈利が攻撃対象に設定されている。原子崩しメルトダウンという攻撃の特性も麦野の性格も、AIは把握しているだろう。緻密な計算の上で？六枚羽？の行動指針は定められているのだ。その？六枚羽？を正面から打ち破るのはレベル5といえど難しい。敵は自分の攻略法を網羅している凶悪兵器だった。

「絹旗あ！ コソコソ隠れまわってんじゃねえよ！」

「超無茶言わないでもらえますか！ こっちはフレンドさんもいるんですよ！」

麦野が睨みつける先に、フレンドを庇い続ける絹旗の小さな背があった。まず最優先すべきは？六枚羽？の撃墜である。それが結果的にフレンドの身を守り、劣勢を覆すのだ。それなのに絹旗はフレンドを庇うだけで攻勢に出ようとしないう。少しでも攻勢に出るとフレンドが危険な目に遭うからだろ。そういう絹旗の甘っちょろいところに麦野は憤る、が、今文句を言っても仕方がない。麦野は大きな舌打ちをしてから目を？六枚羽？に戻した。

依然として不気味に上下する殺戮兵器。無人であるがゆえに良心というものは存在せず、ただ機械的に、無機質的に、無感情に敵を駆逐しようとしている。人間のパイロットが操縦しているなら攻撃の手を緩めたかもしれない。原子崩しで貫くことができたかもしれない。マルチタウナー

だが、ダダダダダという鼓膜を食い破る迫撃の雨が降り注ぐ。それは無情に、そして冷徹に。

学園都市が生み出した化物が上空を漂いながら、レベル5の顎を食いちぎろうとしているのだ。

（あのナメた機械をブチ殺すには、陽動がいる。絹旗が動けりゃ話もはやいつてのに・・・）

麦野は懐から例のペンダントのような形状をした原子崩しを拡散させる兵器を取り出し、目の前の？六枚羽？に意識を傾けた。マルチタウナー

ぞわり、と。冷たい汗が頬を伝った。

カツ、という軽いローファの音が響いたのだ。それも、すぐ後ろからである。

「敵はひとりではありませんのよ?」

迫撃の雨は続いている。それでもその声は驚くほど鮮明に聞きと
ることができた。

テレポート
空間移動。今にも首に手をかけそうな距離で、白井黒子はほくそ
笑んでいた。

「わかってんのかよ。今、私に手を出せばテメエも蜂の巣になるん
だぞ」

「心配ご無用。あなたを捕縛した瞬間に、初春が制御をかけますの」

「ハッ！ レベル4がこの私を捕縛だあ？ 寝言は寝て言えってん
だ！」

強気に言い放ったはずの麦野だったが、声はどこか上擦っていた。

「たしかに、レベル4ではあなたに敵わないかもしれませんが。です
が・・・」

白井が一度目を伏せ、再び開いた。そこには、たしかな笑みがあ
る。自信に満ちた、清々しい笑みだ。

「ですが、わたくしは、信じておりますの」

もう、声が出なかった。倒したはずの敵が、しっかりと立ち上が

つていたのだ。

あの少女は。佐天に肩を持たれてはいるが、しっかりと自分の脚で立ち上がっているあの憎い敵は。

学園都市二三〇万の第三位、レールガン超電磁砲。

麦野の首に宛がわれる金属の矢。白井黒子の右肩で陽光を返し煌めく、ジャッジメント風紀委員の腕章。

「さあ、ジャッジメントのお時間ですの。観念なさい、マルチタウナー原子崩し」

絹旗の「麦野さん！」と叫ぶ声が、ダダダというやかましい掃射音に掻き消される。

御坂美琴は立ち上がった。あれだけ打ちのめされても。あれだけ心を挫かれても。それでも立ち上がり、麦野沈利を前に睨み続けている。闘志は尽きていない。

それが麦野には理解できなかった。御坂美琴という人物のすべてが理解の範疇から溢れてしまったと言うべきか。そして、たまらなく腹が立った。

マルチタウナー原子崩しの壁は解いていない。空からの強襲があるからである。だが、麦野の意識はすでにそちらに向いていなかった。？六枚羽？を敵ではなく、まるで寄ってくるハエのような程度にしか思っていないという感じで、御坂や白井の方に向き直った。

「まだ抵抗するつもりですか？」

白井の声が小さくなる。この状況で麦野がまだ諦めないことに驚いたのがひとつ。そしてその身体がぶるぶると震えているのがひとつ。白井は金属の矢を突き付けて、警戒心を解かずに麦野のアクションを待った。

次の瞬間だった。麦野沈利の身体が、爆発した。

凄まじい轟音。人間の耳では捉えられないような、不気味な音だった。聞いた者の背筋を撫で上げるような低音で、それでいて残響が耳から離れない。その爆音と同時に光が迸^{はは}つた。視界を眩ませるのではなく、直接網膜を焼き切るような強烈な光である。

すぐ傍にいた白井は、なんとか空間移動^{テレポート}していた。嫌な予感を覚え、事前に座標を決定していたのだ。御坂達も間一髪で事なきを得ていた。一歩間違えば難聴・失明の危険がある攻撃だった。

御坂達は驚愕していた。その異様な攻撃に驚いたのではない。さきほども縦横無尽に空を飛びまわっていた？六枚羽？が、制御を失っていた。よく見れば、駆動部分にでかかと空洞ができている。必死にAIが機体をコントロールしようとするが、その努力も虚しく、少し離れた場所にある公園に墜落した。数秒を経てから、衝撃波を撒き散らして大爆発を起こす。

「・・・く、ははっ」

光の中心に立っていた人物。目を剥いて舌を突き出した女。
学園都市二三〇万の第四位、メルトダウン原子崩し。

「ぎやははははは！　なんだよ、笑わせやがって！　あんなオモチャが私を止めることなんてできやしねえんだよおおお！　そう

だ、ちつとばつか力を解放してやりや、あんなオモチャ相手に後手に回ることにはなかったんだ。テメエらみてえなクズの集まりにも、手を煩わされることはなかったんだよねえ！」

そう叫ぶ狂気の女の服は、ボロボロに破けていた。ところどころから血が滲んでいるようでもある。

「超電磁砲？ レールガン 空間移動？ テレポーター ハッ！ そんな小細工に頼らなきゃならねえテメエらなんか相手じゃねえ。そうさ、そうだったじゃないか。第三位ごとき瞬殺できるんだよお私なら！」

光が集束している。再びあの技を使う気なのか。御坂は佐天を突き放し、震えている麦野の前に立ちほだかる。

「なんのつもりだ第三位？」

「・・・決着をつけようと思ってね」

御坂は低い声で、静かに告げた。麦野の額に青筋が走る。

「気に入らねえな。テメエのそういうところが本気でムカつくんだ。塵に消えろ、第三位」

麦野の殺意は本物だった。理性というリミッターを外したのである。その殺意はあの一方向通行や未元物質でも比肩できないほど、強まっていた。

御坂は怖じない。彼女は、主人公であるから。ヒーロー
すつと、右腕を麦野に向け、拳を握り締める。

「アンタがまだスキルジャンパーを狙って、この病院を攻撃するって言うんなら、私が食い止める。スキルジャンパーを殺すことでレベル6になれるってまだ本気で思ってるなら、そのふざけた幻想をぶち壊すわ」

佐天は呆然としていた。御坂は目の前で、自分を庇うように立っていた。

それは、御坂がずっと見つめてきた人の背中。ツンツン頭の青年と同じく、御坂は主人公なのだ。

「・・・上等だ。上等だこのくそがあああ！ 消し飛ばえええええええええええ！」

麦野沈利のとおておき。眼前が、不健康な白い光に包まれた。

自身を中心に原子崩しの爆発を起こす。厳密に言うとは拡散させているのだが、あまりにも範囲が広すぎるため、爆発にしか見えない。それゆえ制御が難しく、針の穴を通すような精度はない。しかしその精度が必要ないほどの、広範囲攻撃だった。

強烈な光が町を彩る。爆音が空へ溶けていく。白井も佐天も、屋上で事態を見守っていた初春も、手を出すことができなかった。レベル5同士の殺し合いは、他の誰にも邪魔することはできない。そういうものだった。

光が晴れていく。三人は息を飲んで、結果を見定めた。

人影は、二つ。そのうちのひとつは倒れていた。

「お姉様！」

白井が叫びを上げる。倒れていたのは御坂だった。麦野はしっかりと地に足を着いて、御坂の方を見つめていた。

その表情はどこか寂しくて、どこか悲しそうだった。

白井が空間移動テレポートを使い、すぐに倒れている御坂のそばに寄った。佐天もまた急いで御坂のもとへ走り寄る。

「死んでるよ、そいつ」

麦野はつまらなさそうに、息を吐いた。白井がキツと睨み返すが、身体を揺さぶっても御坂は起き上がろうとしなかった。意識はなく、死んだように倒れている。

「嘘・・・そんな、お姉様・・・」

「み、さか、さん・・・」

悪夢の音色。二人の声がどんどん絶望に変わっていく。

麦野は軽く空を見上げた。真っ暗な世界が広がっている。星の瞬きも見られない、学園都市。その町で暮らす者達の序列第三位と第四位が激突し、第四位が勝利した。それは念願だったはずだ。レベル5は順位に縛られないことを証明した。いけ好かない女を抹殺できた。

それなのに、それなのに、どうしてだろう。

「なんで、立ち上がった、第三位」

麦野は見えてしまった。対峙する第三位が、麦野の攻撃を食らう前に、崩れ落ちてしまったのを。

防御もなしに原子崩しマルチタウナーを受けた。即死。御坂の身体が五体満足なのが奇蹟なくらいだ。

「こんな結末で納得できんのか、テメエ、ふざけんな」

嬉しくなかった。第三位に勝利したはずなのに、少しも嬉しくなかったのだ。

麦野沈利は当惑していた。レベル6になるために始めた戦いだっただ。それなのに、勝利という現状を迎えてひどく面白くないと感じている。そんな自分に気づいて、迷っていた。

静寂。麦野は御坂に擦り寄り泣きじゃくる白井を見つめ、溜息を洩らした。それから、病院へ向かって歩み出そうとする。スキルジャンパーを抹殺するという目的を果たすためだ。
しかし。

（・・・チツ。脚が思ったように動かない。暴走はデメリットだらけだからな）

麦野の衣服はほとんど吹き飛んでいた。四肢が吹き飛んでいないのが幸いである。自身を中心に原子崩しを暴走させる行為は、まさに自殺行為で、以前一度だけ試したことがあったが下半身すべてを持って行かれるところだった。今回は七割で力をセーブしたため、

本当の暴走状態になることはなかった。全力で暴走させれば、おそらく第三位レベルなら瞬殺できるのだろう。もしかしたら第二位にも通用するかもしれないという技だった。

それゆえに、反動は大きい。麦野はすでにボロボロだった。動くことも難しい。それだけしなければ？六枚羽？の追撃を躲すことはできなかっただろうし、白井に追い込まれて敗れていただろう。

敗れるくらいなら自滅覚悟で戦う。それが麦野の信条でもあった。

麦野は歩いて行く。ゆっくりとした足取りで、病院へ。

ジャリ。

自分の足音ではない誰かの足音が、目の前から聞こえた。麦野は正面の誰かを睨み据える。

「・・・ハッ、またテメエか」

佐天涙子。無能力者の少女が、麦野の進路に立ちはだかった。大きく両手を広げ、通せんぼをしている。

「止まってください」

「ああ、誰に言ってる？ 消し炭になりたいのか、DMちゃん？」

「止まって。もう、止まってよ！」

佐天の声は大きいけれど、弱々しかった。まるで自分を思いやるかのような言葉に、麦野は首を傾げる。

「もう、ボロボロじゃない・・・どうしてそこまで戦おうとするの

？ どうしてそんなになってまで、誰かを傷つけようとするの？」

「どけよ、クソガキ」

「私にはわかる。あなたはもう原子崩しマルチタウナーを放てない。それくらい弱
つてゐるって、わかるから」

「・・・へえ。原子崩しマルチタウナーを使えないならレベル0でもレベル5を止
められるってか？ 面白えじゃねえか、試してみる！ ぎやははは
はは！」

麦野はぐにやりと歪んだ笑みを浮かべ、拳を握り、力の限り佐天
の顔面を殴りつけた。

ベシヤ、と鈍い音が辺りに響く。

絶句していたのは、殴った麦野の方だった。

佐天は倒れなかった。顔面を殴られても、じつとそこで踏ん張つ
て耐えていた。麦野の拳がゆっくりと離れ、糸を引く。佐天の鼻と
口から、血が滲み出した。

「——ほら、止まったよ」

ポツと、全身が総毛立つ。麦野は恐怖していた。無能力者の少女
に異様な恐怖心を抱いていた。

「う、あ、あああああああ！」

もう一度、今度は体重も乗せて全力で殴りかかる。再び鈍い音が響くが、佐天は倒れなかった。同じように、そこで耐えていた。

「・・・なんだよ、テメエ。なんなんだよ」

麦野の表情が崩れていく。痣をつくり、顔面を腫らしてもなお、佐天は倒れなかったのだ。

今まで出会ったことのない敵だった。無能力者のくせに、レベル5に立ち向かい、今もこうして歩みを進ませないでいる。原子崩しマルチタウナーが使えれば瞬殺できる相手なのに、と麦野は泣きそうになっていた。麦野はぎゅっと拳を握り、固く目を閉じて、叫んだ。

「・・・どけて、言ってんだろおがよおおおおお！」

パチイン。

爽快な音が夜の学園都市に響いた。

頬がジンジンと痛む。麦野は啞然としていた。少ししてから、自分が平手打ちされたのだと気づく。

佐天涙子はボコボコに腫れた顔で、泣いていた。いや、泣いているのかどうかもわからない顔だった。ただ、怒りのこもった平手打ちなのはたしかだった。

麦野は膝をついた。たった一発の平手打ちで、脚の力を失ったのだ。そのまま倒れ込もうとする自分の身体を必死に制し、両膝をついたところでこらえた。

麦野は正面の敵に視線を向ける。よくも平手打ちしやがったな、と噛みつくとした。

だが、その気は一瞬で失せた。佐天涙子という少女は、膝をついた自分を見下ろすようなことは決してせず、同じように膝について向き合っていたのだ。

なんだこの女は。麦野には理解できなかった。この女がなにを考えているのかも。これからなにをしようとしているのかも。

「レベル0がレベル5を止めることなんて、やっぱりできないよ」

ボコボコに腫れた不細工な顔でも、佐天が笑っているのがわかった。

麦野の視界に映る、とある少女のあどけない笑み。

「それでも、手は差し伸べられるから。困ったり、傷ついたりして人に、手を差し伸べることだけは、できるから」

麦野が目を見開く。佐天涙子が両手を開き、ゆっくりと自分を抱擁したのだ。温かさが全身に伝わってくる。振り解く力は、今の麦野にはなかった。それだけ弱っていると、その時になって初めて麦野は気づいた。

なぜ、自分は抱擁されたのか。なぜ、この女は自分を抱擁したのか。殺し合った敵だったはずだ。御坂を殺した仇だったはずだ。麦野の理解からかけ離れていることが多すぎる。

だが、麦野はまどろみ始めていた。佐天涙子に抱かれることで、能力を暴走させた反動が加速する。両膝について踏ん張っていた麦野の身体が、ゆっくりと倒れ始めた。佐天に身体を預けるようにして、もたれかかっていく。

「・・・なに、もんだ、おまえ・・・」

ぼんやりとくぐもった麦野の声が響く。佐天はその肩を、頭を抱いて、目を閉じる。

「――友達」

友達。最初に立ちはだかった時に聞いた言葉だった。麦野沈利は少し、ほんの少しだけ、笑った。その笑みがどこから来ているのか、麦野自身わかっていなかった。わかつうともしなかった。

ただ、眠りに堕ちていく。殺すはずだった無能力者の腕のなかで。

麦野沈利の左手から、ペンダント状の兵器が毀れ落ちる。それは地に当たりキンと鳴き声を発した後、沈黙した。

5 (後書き)

備忘録：すべて！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949s/>

とある幻想の能力写し(スキルジャンパー)

2011年8月25日22時42分発行